

戦う守られるべき存在
達

tubukko

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

2020年。

私達が知っている地球ではないところでは、子供たちが戦っていた。

彼らはそれぞれが大切なものを奪われ、それでも生きようとしていた。

※場面は地球ですが歴史上の人物はともかく、現代の人物は一切出てきません。

目次

放浪者

壊れた日常

知ってるが知らない世界

判明

敵

道中

集落

群れ

呼び方

強敵襲来

発見

再確認

172 159 144 123 105 89 69 49 32 17 1

絶対強者

帰還

再会

無反応

変質者

大切な繋がり

初任務

才能

人だかり

3姉妹！

子供想い

人為強化

雑魚か強敵か

357 345 332 316 300 284 268 252 237 220 202 189

糸口	535
待つ人、行く人	519
事実は闇に	501
恐怖再来	488
辛いこの世	474
お世話になります	458
玉響の安心	442
対峙	429
それぞれの仕事	415
応援要請	401
現・最強	
変わった休息	386
驚異	370

人対人	688
不安	676
押し寄せる悲しみ	665
1人	647
他を想う	635
ムリゲー	621
逃走と追跡	608
最強く内く	
新たな悪魔	592
異変	578
開戦	564
始まりの前	551
最凶く外く	

廃船	各々	幸運	妹の努力	決意	終息	一瞬	予兆	意外な発見	覚悟
831	819	804	791	777	765	749	736	719	701

放浪者

壊れた日常

今から約70年前、第二次世界大戦も収まり世界が活性化し始めたころ、それはきましました。

日本に隕石が降ってきた。

決して大きいものではなく、地球に落ちてきた時には直径2 m前後しかありません。それにはある細菌がついていました。

これはすぐに世界全体へ、どういう経路を使ったのか不明だが広まります。

しかし、それは地球人にとってはどうでもよかったです。

なぜならそれは人間に恩恵をもたらしたから。

その存在に気付いたのは隕石が降ってきたから2年後。

きっかけは人間の身体能力が突然飛躍的に例外なく伸び始めたからです。

その時はまだ整いきっていない、研究機関を使いようやくその菌を見つけることができました。

その菌は人の発展を促進させたのです。

その菌を使ったおかげで発見してからたった2年の間に車、冷蔵庫、電車、携帯電話などができました。

人間の身体能力向上だけでなく、技術の向上。

その菌はまさに万能で「アクリス菌」と名付けられました。

やがてアクリス菌はアクリス細胞となり人の体にはアクリス菌はなくなり、アクリス細胞のみが存在するようになった。

だけど1975年、それは起きた。

ユーラシア大陸の各地に謎の生物が発見されたのです。

大きさは日本の動物園で見かけるようなサイやパンダと同じくらい。

形はアリに似ていたのですが、集団行動をするわけではない。

その生物たちは人を見ると見境なく襲い、次々に集落や町をつぶしていきました。

人は急いでそいつらを駆除しようと軍隊等で対抗。

やっとの思いで1匹倒したのですが、その構成要素にはアクリス細胞が関わっていません。

そんな時、大陸につき1匹、熊のような形をしたそいつらが現れました。

体の大きさは高さだけで50m。

人はあらゆる軍事力を投資しましたが、そいつらには全く効かずどんどん人が死にま

した。

世界の人口が10億人にまで減ったその頃、人はついにそいつらに対抗するすべを見つけた。

それらの名前は――

子供達『――ロスト・チルドレン!』

聞いている子供たちが大きな声で声をそろえる。

「そう」

子A「お姉ちゃんもそうなんでしょ?」

「こつちのお兄さんだってそうよ」

子B「そいつらって『オウステム』だよね?」

「うん。今出てきたアリや熊のことは『オウステム』。言いくいから私達は小さい『オス』と呼んでるわ」

子C「オス?」

「犬の雄、雌みたいじゃなくて『オス』のスは音を下げの。雄雌は上げるでしょ?」

子B「オス!オス!」

子A「違うよ!オス、だよ」

子C「キャハハハハ！」

子供たちが発音について言い合っている。

男「みんな元気だよな」

女「ホントね……。昔はこれが普通だったんだよね」

男「昔だけじゃない。これからはきつとこうなっていくさ」

女「：そうだね。そのために私達がいるんだよね」

子A「おねーちゃん！お話の続きして！」

女「うん、いいよ。じゃあ、ロスト・チルドレンか——」

突如警報が鳴る。

2人はいち早く立ち上がり指輪を押す。

画面が広がり一人の男性が映し出される。

男「司令！」

司『地域Aの平原にオスが出現した。タイプ、大きさともに不明だ。すぐに向かえ』

男「了解しました」

画面が消えると女はすぐに準備にとりかかる。

男も準備しようとしたとき、服をつかまれる。

子供がいた。

「嬉々《きき》…」

女の子である。

「正兄、行くの？」

「当たり前だろ、これが俺の仕事だ」

「寂しいよ。一緒にいて…」

「正影《まさかげ》！早くしろ！」

女が呼びかける。

「帰ってきたら遊んでやるから、なっ？」

「…本当に帰ってきてくれる？」

「当たり前だろ。俺が今までこのことで嘘ついたことがあるか？」

「ない…」

「兄ちゃんを信じろ。俺は絶対に帰ってくる。だから、そうだなあ…。コーヒー、帰つたらすぐ飲めるよう準備して待っていてくれるか？」

「…うん！」

「よしよし」

頭をなでる。

「でも、正兄、コーヒーでいいの？」

「…」

「コーヒー苦いって前言ってなかったっけ？」

「…ココアでお願いします」

「分かった」

「おい、早くしろ！」

正影は立ち上がり荷物を持った。

「じゃ、行ってくる」

「いつてらっしゃーい！」

嬉々《キキ》は手を思いつきり振り兄を見送った。

それからしばらくの間、会うことができなくなるということも知らずに。

「細工はできてるか？」

「問題ありません。空間圧縮砲《エア・バグズ》は正しく機能します」

ある武器庫で2人は話をしている。

「使ったが最後、暴走してすべて消し飛ばす」

「間違いないかと……」

「そうなれば……、こちらに戦況が傾く」

「久しぶりに祝いの準備でもしますか？」

「ああ。高い肉でも買って準備してろ。私はもう少しやることがある」

「分かりました」

「……ハア。あれは面倒そうだなあ」

「尋常じゃない大きさよね。蚊のくせに」

正影達2人は指定された地点に到着し、索敵していたところ「オス」を発見した。

オウステム

別名、オス。

アクリス細胞により形成されており、敵として認識される大きさは小さいものでは2

m、大きいものでは100m以上である。

地球上の生物を真似ているのか必ずと言っていいほど型が存在する。

発生源は不明だが、水中、陸上、空中どこにでも出現することができる。

既存の銃や、核兵器でも攻撃は可能だが致命傷を与えるには時間がかかる。

先程、司令に連絡して応援を待っている状態だ。

「待つてるつてのも暇なんだよなあ」

「別にいいじゃない。どういうわけかロスト・チルドレンが日本に集まってたんだからあいつぐらい簡単に終わらせられるわよ」

「全員、つまり8人いるんだろ？じゃあ、俺寝てても大丈夫じゃね？」

「日本背負ってるんだから少しはシヤキツとしなさいよ」

「俺、プロト・チルドレンになりたかった…」

ロスト・チルドレン

日本では「失われたはずの子供達」と呼ばれている。

初めて50m級のオウSTEMが現れたとき、死んだはずの子供たちの中から細胞を採取し、作り出されたクローンのことである。

アクリス菌にも適合率があり、その適合率が高かった子供達のクローンで、アクリス菌を体に保有できる者。

身体能力が普通よりも高く、それぞれ決まった武器がある。

プロト・チルドレン

正式名称はプロテクターズ・オブ・チルドレン

(英語は面倒なので省きます)

ロスト・チルドレンの細胞を組み合わせてできたいわば2期生である。

ロストチルドレンよりも身体能力は低く、数も多い。

一般人も志願すれば20歳以下ならばこれになれる。

どこかが特化していたりしていなかったりと差はあるが、専用の武器はない。

「何言っただって、意味ないわよ。あきらめなさい」

なにか大きな銃を取り出す女。

「なんだ、それ？」

「空間圧縮砲《エア・バグズ》ですって。威力すごいらしいからこれ使えば私は自分の武

器を取り出さなくて済むのよ」

「いいな。俺にくれよ」

「嫌よ。だいたいあなたの武器は銃じゃないでしょ」

「そこはうまく…ね」

「うまく使えたとしても嫌。これは私の」

「ハア。なんで俺たち子供が戦わなくちゃいけないんだよ…」

「適合率の問題よ。文句はアクリス菌に言えば？」

彼らは15歳。

なぜそんな子供が戦場にいるのか？

それは大人には戦う力がないからだ。

この菌に感染し、細胞が体に定着したとき人は25歳以上なら体の成長がそこで止まる。

25歳以下なら25歳で止まる。

そして25歳以上の人と以下の人では身体能力の上り具合が違うのだ。

25歳以上でも十分すごいのだが、オウシステムと戦うには足りない。

だから子供たちに戦わせるのだ。

人権団体が何か言っていたが、最終的にはそれしか手段がないとわかり黙ってしまった。

「私は必要とされてるって感じがして好きだけど」

「お前はポジティブだな。俺は妹が幸せならそれでいい。んで妹を幸せにするには一緒にいないといけない」

「ロリコンね」

「性的な意味じゃないから違うだろ」

「マザコンは性的な意味じゃなくても使うと思っただけど?」

「…それを言われると否定できないな」

「まあ、気持ちは分からなくもないわよ?なにせあなたの唯一の血のつながった家族だもんね。兄弟ほしければ研究機関にOK出せばいいのに」

「いじられるのはごめんだ。次増えるときはちゃんとしたやり方で増やす」

「それは楽しみね。ビデオカメラ設置しておかないと」

さつきプロトチルドレンはロストチルドレンの細胞からできた的のことを言ったが、実はその数は少なく、大半は志願者で形成されている。

クローンで増やせばいいのだが、同じ人が何人も出てくるのはさすがにやめということになった。

ロストチルドレンも然りだが、実は彼らは2度と作り直せない。

理由は不明だが、クローンを1人作ったとたん、元の細胞が死滅した。クローンから再び作ろうとしたが保存しようとするたんびに死滅する。

まるで意志でもあるかのように。

「なら、お前を相手にしたらどうなる?」

「わ、私?!私でいいなら…、まあ」

「…?カメラは設置するのかって話だぞ?」

「か、カメラ？そりや、もちろん設置するわよ！」

「マジか!? お前すごい度胸だな？」

「え、ええ？あれ？（何を言っていたか分かってない）」

「何焦ってたんだ…ん？」

指輪が震える。

携帯のバイブ機能をイメージしてもらえればそれがいい。

「はい。こちら正影」

『そちらにすでにロストチルドレンが配置完了した。お前らが始め次第、攻撃を始める
そうだ。好きなようにやれ』

「分かりました」

女のほうに向きなおる。

「行くぞ、結衣《ゆい》」

「分かったわよ、正影」

2人が戦場に出る。

結衣はエア・バグズを持ちながら、そして正影は手に力を集中させる。
するとその手に刀が握られる。

日本刀といっても間違いないだろう。

「思ったよりこれ重いわ。それにエネルギーもためる必要があるのね…。正、悪いけどこの大砲片手に俊敏な動きは無理よ」

「俺たちで接近戦はやるからとどめは頼む」

「分かったわ」

20mほど離れたところで結衣は止まり、正影はオスに向かって飛んだ。

蚊のお尻のほうに一太刀入れる。

初めてそこでオスは気づき、リヨウに攻撃を始める。

オスは血を吸うであろう長細い口から液体を出した。

「蚊にそんな機能はないぞー」

そんなことを言うがリヨウは焦らない。

よけるにはあまりに時間がある。

それに、他にも仲間がいるから。

液体を出した蚊が突然地面にたたきつけられる。

米A「日本のロストチルドレンはこんなやつ相手に武器を使っているのか？」

米B「こんな弱いやつ素手で十分！」

米C「でもあれがいわゆる武士道ってやつじゃない？」

外国のロスだ。(ロストチルドレンはこれ以降、ロスと書きます)

6人総集合である。

「どんな奴にも油断しないのが俺の中の決まりなんだよ」

露A 「…正論だな」

露B 「でもこんな雑魚相手だよ？なんで私達が駆り出されたんだ…か！」

1人が蚊の頭に腕を突っ込む。

蚊は暴れだすが他が抑える。

数秒後、蚊は動かなくなった。

米C 「はい、終了。やっぱり雑魚だったな」

米A 「なんで私達本当に駆り出されたのかしら？」

米B 「日本には荷が重かったんじゃないやね？もう一人は遠くで待機してるし」

「あいつは今日初めて渡された武器を仕方なく使わされてるんだ。別に弱いわけじゃない」
「い」

中A 「帰っていいですか？」

露A 「同感だ。帰るぞ…ん？」

全員の指輪が鳴る。

「司令。たった今オスの駆除が終わり——」

『かまえろ、正影！そちらにもものすごい数のオスの反応があるぞ！』

「えっ?」

突如、地面が盛り上がったかと思うとたくさんのオスが飛び出る。

「マジかよ!?!」

すでに周りは交戦状態に入っている。

周りに見えるのは無数のカブトムシ型のオス。

「結衣!」

大きさは3, 4 mと対して大きくはない。

だが数が多い。

すぐに結衣を助けに戻る。

「結衣、それは捨てろ!今は普通の武器のほうがいい!」

「でも、今エネルギーが溜まるわ。そうすればこいつらぐらい……!」

「おい、日本支部!」

米代表が割って入る。

米C「その武器はどのくらいの威力なんだ?範囲は?」

結衣「範囲は不明、威力はさっきの蚊を即死させられるレベルよ!名前はエア・バグズ」

米C「圧縮するあの武器か!?ならそれを使おう。結構な範囲を一気に攻撃できるはず

だ！聞いてたな、お前ら！」

米A「今行くわ！露と中にも知らせた！」

結衣「あと十秒で行けま…えっ？」

突然エア・バグズにヒビが入る。

そこから光が漏れ始める。

結衣「ちよつ、これは!？」

結衣が異変を告げる前にエア・バグズが爆発する。

ものすごい突風が起きるがみんなは何が起こったか分からない。

正「結衣！」

訳が分からないが結衣を探そうと必死に耐えながらあたりを見渡す。

突如目の前にオスが飛ばされてきた。

「しまっ…い！」

対処に遅れ頭にもものすごい衝撃が走る。

そのまま正影は気を失ってしまった。

知ってるが知らない世界

正影は寝ている。

いや、倒れているのほう为正しい。

周りにはオウSTEMの気配はなく、どこか建物の中だ。

「う……」

ようやく起きる。

まだ頭が痛い何が起きたのかはすっかり覚えている。

「結……衣、大丈夫か？」

周りに向かって声をかけるが返事はない。

「(ハハ)は、どこだ？」

頭の痛みが抜けていきようやく視界もはつきりする。

周りにはそこにいた人たちがいかに急いでいたのかがわかるような光景が広がっている。

所々で倒れた椅子や机、書類はそこらじゅうに散乱しており、死体はないが血痕はある。

電気は通っていないらしく、どこも電気はついていない。

「そうだ、指輪！」

指輪で状況を確認しようとする、が、できなかった。

大きな衝撃が加えられたのかヒビが入り使い物にはなりそうにない。

とりあえず、外に出て状況を確認することにした。

階段を探すのも面倒なので窓をたたき割る。

埃をかぶって外が見えなかったのが見えるようになる。

昼なのか外は明るく、よく見えた。

周りに見えたのは高層ビルの山。

ほとんどがボロボロになっており、中には倒壊しているものも多数見える。

時間がたっているのか、ちらほらと雑草が生えている。

「……はっ？」

見覚えがない場所だった。

少なくとも最後の記憶にある地域Aの周辺にはこんな場所はなかった。

あるとすれば日本の首都になるはずだった地域。

首都の名前は大了した問題ではなかったので覚えていない。

窓から飛び降り地面に降りる。

30mくらいあったのだがロスから見れば大した距離ではない。

しばらく道なりに沿って歩き回る…が全く記憶にない場所だった。

ほとんどが高層ビルに埋め尽くされており、同じ場所を回っているのではないかと思えてくるほどだ。

ただ、ひとつ変に思うには人の気配が全くないこと。

ビルには大きな穴が開いていたり、死体まで発見できた。

おそらくオウシステムの襲撃にあったのは間違いないだろう。

だが、こんな都市が襲撃にあったのにロスである自分に報告が上がっていない。

「いったいどうなってるんだ…？」

わからないことが多すぎる。

しかし、頼みの指輪は壊れてしまっているしそれ以外だと身に着けている服に作り出せる刀しか手持ちにはない。

これで情報を集めろというのは無理があるだろう。

「電気でも作り出せればな…」

パソコンはそこらじゅうにあった。

インターネットにはつなげなくてもパソコンが起動すれば少しは情報が入る。

だが電気が通っておらず、パソコンは使えそうにない。

と、腹の音が響く。

「…腹減ったな」

と呟くと、神様の恩恵か目の前にイノシシが現れる。

ロスである正影にとっては敵ではなく、今では食べ物でしかない。

「…」

刀を作り出し、一瞬で近づき逃げる間も与えずとどめを刺し、食べ物を手に入れた。

~~~~~

「…うん、イノシシ肉も悪くはないな」

手に入れた肉を丸焼きにして食べる。

火や調味料はそこらのスープーからかっばらってきた。

どういいうわけか数がかかり減っていたが。

できればスーパーの食べ物を食べたかったがすべてハエがたかるほど腐っていたし、

缶詰はひとつ残らずなくなっていた。

このイノシシも焼いたがおそらく生焼の部分もある。

だがそれはアクリス菌や細胞によって強化された体にとってはどうということはない

い。

いいにおいがそこら中に広がり、食欲がわく。

「これなら1頭丸々…、いやそれは無理か。後で干しておくか」

誰か返事してくれるんじゃないかと思いきや、返事は帰ってこない。

まるで自分以外の人類がすべていなくなってしまったかのようだ。

地球滅亡とはこのことを言うのだろう。

「…」

結衣や妹のことを考える。

結衣はあの後どうなったのか。

自分と同じ状況に陥った場合はおそらく彼女のほうが生存確率は高い。

妹のことを考える。

おそらく帰って来るといったのに、時間が経っているのだろう。

1日か、はたまた3日目か？

ココアを入れて待つてはるはずの妹のことを思うと胸が痛む。

早く帰って安心させねばと思う。

(待つてろ…。すぐに帰るからな)

と、その時音がした。

何か動く音だ。

たいていの相手なら素手で十分だがオウステムとなれば武器が必要になる。

すぐに刀が作り出せるよう、構える。

音がしたほうから何かが見れる。

それは

人間だった。

「子供……？」

年は定かではないが7、8歳くらいだろうか。

ぼろぼろの服を着ていて何日も風呂に入っていないのは明白だ。

「……」

黙ったまんま、正影を見続ける。

表情を確認するには遠く、感情が分からない。

子供が警戒しながら歩いてきた。

警戒してると言ったのは、顔が見えるようになったとき目が敵対視しているのが明白

だったからだ。

でも、子供は近寄ってくる。

まるで磁石にでも吸い寄せられるかのように。

やがて、正影との距離が5mとなりそこで止まった。

何が目的なのか正影にはわからない。

が、人に会えたことはうれしい。

情報を聞き出そうとする。

「あの…」

「ぐうううううううううう（腹の音）」

子供がなぜ近づいてきたのかわかった。

おながか鳴ったにもかかわらず、子供は表情を変えず警戒している。

が、目はチラチラとイノシシの肉に行っている。

肉は上げてもいいのだが情報がほしい。

「君、このお肉がほしいの？」

「…」

「じゃあ、交換でどう？僕は情報がほしいんだけど。ここについて」

「…」

まったく答ええない。

ここまでくると言葉が通じていないのか？と怖くなるがここは日本だ（先程スーパーで日本語をたくさん見たし、書類の文字も看板も日本語だった）。

郷に行ったら郷に従えという言葉があるように従ってもらうしかない。

英語ならできないこともないが片言なのであまり使いたくない。

「駄目…かな？」

「…」

依然黙ったまんま。

それならばこちらにも考えがあるぞ？

「そうか、じゃあ残念だけどこれは上げられないね」

その言葉にかすかに反応したのが分かった。

日本語が通じるとみて間違いないようだ。

残ったイノシシの肉を持ち上げ移動を開始する。

すると案の定子供もついてきた。

「…」

黙ったまんまだ。

おなかが減ってるのならば言えばいいのと思うが今はそんな甘やかしてはいられない

い。

ちよつと残酷だが目の前で食べることにした。

立ち止まり、焼いた肉を取り出し、味付けをしておいしくいただく（あくまで非常食なのでそこを踏まえておいしいと言っている）。

「あゝ、おいしいなあ！」

「…。ぐうううう（腹の音）」

再び腹の音が聞こえる。

だが黙ったまんま。

強情な子供だ。

「これなら全部食べれちやいそうだなあ…」

「…！そんな…」

「やつとしゃべったね？」

「あつ…」

身元が調べられたくないのかやってしまったという顔をしている。

声だけで身元が分かるなんてことはないと思うのだが。

「これ、食べたいんでしょ？」

「…（うなずく）」

「なら少しくらい俺の質問に答えてくれよ。俺はこの状況を知りたいんだよ」

「先に…お肉くれたら」

「ほらっ」

手に持ったら警戒したが、近づいて取った。

そのまますごいスピードで食べ始める。

「もつと…」

「まだ食べるのか。まあいくらでもくれてやるからまず俺の質問に答えてくれ」

「…分かったわ。話して」

食べ物をもたらえたからか、腹が多少膨れたからか、少しピリピリした感じが抜けていく。

「まず、ここはどこだ？」

「ここは…今は『荒廃した人の楽園』と呼ばれてる」

「荒廃した、人の楽園？」

「荒廃は見たまんま、人の楽園はもともとこの場所はこの国の中で最も進んでいて守りも堅い、オウステムが攻め込んでくるなんてありえない場所だったから」

「攻め込まれた…？」

「知らないわけないでしょ。あなたのその服、古いタイプだけど政府の制服でしょ。そ



れを着ている人が知らないはずなんてない」

必死に記憶をたどる。

が、全く記憶にはない。

この子供の言う通り、こんなデカイ都市が攻め込まれてロスである自分に何も情報がないなんておかしい。

「…今日は？」

「えっ？」

「今日は何日だ？」

「6月、25日だけど」

彼が司令に呼び出され、地点Aに行ったのは8月3日。

さつきまで1，2日しか経ってないと思っていたが、この子が言っていることが正しければ10カ月は寝ていたことになる。

いくらアクリス細胞によって強化された体とはいえ、そんな長い期間食べ物を少しも食べなければ死んでしまうのは当然だ。

「今年年だ？」

「…知らない」

「ふざけたこと言っていると肉は上げないぞ」

「ほ、本当なの！私達は生まれてからずっとここで生活してきたからカレンダーなんて意味を持たなかったし…」

「私達？他にもいるのか？」

「あつ…」

「答えろ。でないといこれは…」

「私一人でこの世界は生き残れない。レアさんと、お友達と一緒に住んでるの」

レアさん、おそらく保護者的な存在と見ていいだろう。

それならその人に会うのが情報を手に入れるには一番手っ取り早いはず。

「ならその人に会わせろ」

「私達の家までくるっていうの？それはダメ、みんなそう言ってるから」

「ならこの肉の話は無しだな」

「そんな…！話が違うじゃない！」

「子ども相手に俺も胸糞悪いが俺も必死だ。俺はある戦闘で意識を失って気づけば知らない場所。少しでも情報がほしいんだ。何ならそのレアとかいう人をここに連れてくるでも構わない」

「それは、無理。レア先生は忙しいから外に出ている暇はないの」

「ならお前のところの家に案内してもらおうしかないな」

「でも…」

「見たところかなり腹が減ってるようだな？」

肌には子供なのにつやがほとんどなく、痩せている。

おそらくアクリス細胞が体になれば動くことはできないだろう。

「お前が案内してくれればこの肉すべてやる。状況によつてはお前らの助けになる。お前らの邪魔になるようなことはしない」

「…」

「頼む」

「…とりあえず、近くまで案内する。その後は、みんなの意見を聞くわ。まずついてきてもらえろ？」

「分かった。ならきつと行こう」

「その前に…」

肉を見る女の子。

よほど腹が減っているのか焼いた肉は袋の中で見えていないはずなのに、生肉を見てよだれを垂らしている。

「はいはい。ほら、案内してくれるお礼だ」

肉を差し出すと、笑顔で取りに来た。

警戒心は微塵も見えない。

笑顔でおいしそうに食べる。

「もう警戒しなくていいのか？」

「してないことも、ないわよ。でもあなたはさつき確かにお肉をくれたし少しは信じられるから」

「安い信頼だな」

「ここにお金っていう概念はないの。物々交換が主流。そしてお肉はとても高級な食材なの。それを形はどうであれくれたなら誰でも少しは信頼するわ」

「そうか、ところでお前名前は？」

「私は穂香《ほのか》っていうよ。お兄さんは？」

「正影だ」

「よろしくね。じゃあ行きましょ」

2、3歩、歩いたところで穂香が何か思い出したかのように止まる。

「正影さん、さつき言ってたよね？今何年かって」

「言っただな」

「今の年は知らないけど、少なくとも2023年は過ぎてるよ」

「…えっ？」

「ここがこうなっちゃったのは2023年だってレアさん言ってたもん」  
信じられない言葉に困惑する。

正影が生きていた時代は2020年。

そしてここがオウステムに攻め込まれたのが2023年。

最低でも3年、寝ていたということになる。

なんの科学技術の助けもなしに。

普通なら不可能だ。

「…いったい何が起こってるんだ？」

「正影さーん！何やってるんですか？早く行きますよ？」

正影は意味が分からないこの世界を穂香の後に続き歩き続けた。

## 判明

「ここで待ってて。みんなに確認してくる」

「分かった。が、その前にこれ持ってけ」

イノシシの肉を差し出す。

3つほど、焼いたものだ。

「…」

「初めに言っておくがこれはおまえの分じゃない」

「え〜…」

「十分食べたろ。これは子供にでもくれてやれ。そうすれば少しは警戒心が解けるんだ

ろ？」

「正影さん、策士だね」

「誰でも分かることだ。ほら、さっさと行ってこい」

少女は走ってその場を後にする。

今、正影は少女の家の近辺であるであろう場所に来ている（確実ではない）。

周りは相変わらず荒廃した建物ばかり。

こんな場所に本当に家を構えることができるのかと正直信用していない。オウステムの気配もなく本当に静かだ。

少女が家に確認を取っているであろう間に考える。

正影が生きていた時代は2020年。

しかし今は少なくとも2023年以降。

いや、2023年にここを襲撃されたのならもつと経っている。

これはつまり…、

「タイムスリップ?」

ありえないとは思いながらもその考えに何度も至る。

情報がないからというのものもあるがこれで合っているのだろうと思う。

しかし、おかしい。

正影はロスト・チルドレンの1人。

政府のかなり深層部にいる存在だ。

なのにそれらしきものができたなんて聞いたこともない。

「正影さん」

と、穂香が戻ってきた。

「入れてもいいって」

「物分かりがよくていい子供達だな」

「お肉があつたからよ。あれ見たせいでみんな眼の色変えた」

「イノシシには感謝しなくちやな」

「こつちよ。みんな待つてる（イノシシ肉を）」

一つの建物に入っていく。

目の前の建物だ。

「…目の前ならここからさつきも入れればよかつただろ？」

「人は近くにあるものには案外目がいかないもの。レアさんに教わつたの」

「ごもつともだな。俺も情報ついでに教鞭でも受けるかな」

「いいかもね。レアさん、物知りだから」

建物の中はそこらのと何ら変わらない。

急いで逃げたと思われる痕跡が残っている。

正影は一つ疑問があつた。

ここに住んでいる人たちが全員、逃げ出してしまふほどの敵が来た。

その時、ロスがいたのかどうかは不明だが少なくともプロトチルドレンはいたはず。

撃退できたのか、あるいはオスがいなくなるのを待ったのかも不明だが建物が残りすぎた。



巨大なオスが来たと考えるのが妥当なのだがそれならば建物がボロボロになっていてもおかしくない。

なのに建物は倒壊しているものもあるが、ほとんどがガラスが割れてるくらい傷ですんでいる（中にはぽっかりとくり抜いたかのような穴がある建物もある）。

（いったいどんなオスが出たんだ？ 今までは大きさと強さが比例してきたけど…）

考えながら建物の中を進む。

拠点は正影の予想に反して地下だった。

「地下じゃオウステムが出たとき危ないんじゃないのか？」

「上のほうだと建物に体当たりでもされたら倒れちゃうよ。地下でもがれきの山に出口が埋もれたらおしまいだけどね」

「ならなんで…？」

「…さつきは会わなかったけどここに住んでるのは私たちだけじゃないの」

「なに？」

「ここにはオウステムの襲撃から逃げ遅れた人だけじゃなくて、社会から見捨てられた人や、犯罪者なんかもあるの。そんな人たちが私たち弱い存在を見たらどう思うと思う？」

「？」

「…」

「売られたり、食料をとられたり、殺されたり。もつとひどければ玩具として扱われて死ぬの」

「…なんで政府は何も手を打たない？」

「詳しいことはレアさんから聞いて。到着よ」

重そうな鉄の扉が不快音をたてながら開く。

「ようこそ、マイホームへ」

中は畳、20畳くらいの広さがある部屋が一つあるだけだった。

トイレも流しも部屋は区切られていない（水道は流れてないので結局使えない）。家具といえるようなものは奥にあるテーブルが一つ。

あと無造作に布団が並べられている。

その近くに子供4人と車いすに乗った大人が一人。

警戒しているのか近づいてこない。

「…警戒心は解いてくれたんじゃないのか？」

「さすがに完璧には無理よ。むしろ家に上げてくれただけありがたく思いなさい」

「そうか、やっぱりこれ残しておいて正解だったな」

再び焼いた肉を取り出す。

「…まだあったの？」

「これくらいは食べられる。途中でお前が来てなかったら全部食ってた」  
奥にいた子供たちが反応する。

さつきは3つしか渡していないから、分けたならば少なかつただろうし塊で食べたのなら1人は食べれてない。

「…」

「…」

反応するだけで近づいてこない。

「…これは俺が近づいていいのか？」

「攻撃してくるかもよ？」

「ならお前が説得しろ。肉はくれてやるから」

「信用してないのよ、みんな」

「お前だけが簡単だったのか…」

「空腹には勝てないのよ。みんな」

と、1人が走ってきた。

正影の前までくると攻撃するわけでもなくただ、肉を見ている。

「ほら、どうぞ」

差し出すと礼儀正しく、奪い取るような形ではなくもらうような形をとる。

と、その場でガツガツと食べ始める。

後ろで我慢していた子供たちも耐え切れず正影に駆け寄り、肉をもらう。

「なんだ、いい子たちじゃないか」

「なんで悪い子だと思ってたの？」

「お前の警戒心と、態度を見てちよつとな」

「…まあいいけど。で、あれがレアさんよ」

奥で子供たちの母親らしき女の人がほほえみながら車いすに座っている。

「…分かった。ありがとな」

まだ焼いていない大部分の肉を穂香に渡す。

「まだ話してないのにいいの？」

「あの人は話してくれる。なんとなくわかった」

「そう？ならいいけど」

「大切にしろよ。干しておくのが一番だからな」

「分かってるよ」

それを言うと、穂香はテーブルに向かって行った。

正影はレアの前まで来た。

「あなたが、正影さん？」

「はい。レアさん、でいいんですね？」

「ええ。私がレア。この子たちの保護者です」

外見は欧米の人…だろう。

あまり見ない金髪に青い目。

やつれてはいるがきれいな人だった。

「貴重な食料を下さりありがとうございます」

「いえ、交換条件でしたから感謝なんて必要ありません」

「情報…でしたよね？おかしなことを言う人です」

「自分でもそう思います。が、本当に何も分からなくて…」

「私を知ってることならすべて話します。大したことは知りませんが」

「いえ、市民が知ってる範囲で十分です。とりあえず、今は何年ですか？」

一番知りたいことを聞く。

が、同時に知りたくないこともある。

別に知ったからといって死ぬわけでもない。

だが、時代が飛ぶというのは恐ろしいことだ。

「…ほんとに聞きたいんですか？」

「あたりまえだ。あなたが信じているかわからないが俺は本当に知らない。この時代に

ついて。まず、何年たったか聞く必要がある」

「…これを」

腕時計を見せられる。

「こんな旧式な時計…。よく持ってますね」

「太陽電池が内蔵されてるんです。おかげでここまで長い間稼働しています。で、ここを」

指さされたところを見る。

そこには『2031, 6, 25』と記されている。

「これは…間違っていないのか？」

「たぶん。2017年から使ってたから、ずっと身に着けて。間違っていないと思う」

「…」

まだ10年しか経っていないなかったただけマシだろうか？

いや、もともと飛ぶだけでもかなりおかしい。

「10年…か」

「質問は以上ですか？」

「なわけないだろ。少し考えてただけだ」

「時間はあまり残されていません。質問するなら早めのほうがいいですよ」

「どこか行く予定でもあるのか？」

「ええ、おそらく。近いうちに遠いところに行くと思います」

「おそらく？」

「予定が決まってるじゃないんです。ただ近いうちにということだけしか」

「そうですか。ならお邪魔にならないように早いうちに聞きます」

それからここがこうなった理由について詳しく聞いた。

聞いた情報を整理する。

まず2020年、正影が参加したロスが全員参加した作戦でロスが全滅。

詳しく言うと4名死亡、4名行方不明になった。

世界の主戦力であったロスの全滅により、プロトチルドレンはロスが戦うはずのオスとも戦うことになる。

死人が増えたため、研究に経費が注がれる。

そんな中、2023年人型のオウシステムが出現。

既存のオウシステムは強さと大きさが比例していたのでプロト（プロトチルドレンをこ  
れ以降プロトと書きます）でも勝てると思ひ、普通に戦う。

しかし、異常なまでの強さにプロトを50名失う。

核を落とすという案も上がったが、人がそこから避難した後、人型のオウシステムは消

滅。

それ以来、不定期にこの周辺に現れるのでここに帰ってくる人はいなくなつた。

「逃げた人はどこへ？」

「地下よ。ある建物を中心として地下都市を作つてるの。もちろん、地上にも町はあるけど」

「他の国に逃げるってことはしなかつたのか？」

「他の国にも時間は違えど人型のオウシステムが出現したの。全部大都市にね。初めて襲われたのは日本だったからある程度対策はしていたの。おかげで一部の人は助かつた」

「一部？」

「この子たちみたいに逃げ遅れた人はオウシステムに対抗する手段を持たない。政府の間だつたなら知ってるでしょ？政府の拠点までは200キロ以上あるの。間違いなく殺されるわ」

確かに、訓練を受けていない10歳ぐらいの子供達では最弱のオウシステムを相手にしても勝つことはできない。

それでここにいます。

「でも先程場所を移すつて」

「ええ。それで一つお願いがあるのですが…」



「？」

「あの子たちを…引き取っていただけじゃないでしょうか？」

考えもしなかった質問に意味が理解できない。

「…え？」

「聞こえなかったはずはないでしょう。あの子たちの仲介者《メディアアートル》になってほしいと言ってるんです」

「何を言ってる…、ていうかメディア…なんだ？」

「説明していませんでしたね。メディアアートル、2028年にできた新しい戦い方です」  
「新しい戦い方？」

「研究機関に経費を回したおかげで分かったことが一つあるんです」

「一つだけか」

「アクリス細胞にはタイプAとBがあるということですよ」

「？どういう意味だ」

「アクリス細胞を持つている人には必ずタイプがあるそうです。2種類。これは繋げる  
ことができるそうです」

「繋げるっ？」

「はい。詳しいことはわかりませんが、AとBの人を繋げることで身体能力の向上がで

きるそうです。ただ、タイプAは極端に少ないらしいですが」

「なら俺とあいつらが違うとは決まってるじゃないですか。それに確認する方法だつて…」

「あの子たちはBと分かっています。確かめ方はいろいろありますが今はぶっつけ本番のみです」

…なんかやる方向に話が進んでる？

「…申し訳ないですがそれはお受けできません。あの子たちはあなたが育てるべきです」

「あなたはおそらく政府の拠点に向かうのでしょうか？」

「はい、そのつもりです」

「あの子たちに…、いい生活を送ってほしいんです。ここはあまりに危険すぎる」

「ならメディアアツールにならなくなったって連れていけますよ」

「あなたは知らないからそんなことが言えるんです…」

レアが一枚の紙を取り出す。

地図だ。

「私たちが今いるのがここです」

一つの間所を指さす。

「政府の拠点はここ。つまり最短ならここを一直線に行けばいいのですが…」  
「何か問題が?」

「直径10キロにもわたる穴ができています」

「穴?」

「人型のオウステムが残した傷です。底はギリギリ見えますが落ちればあなたでもおそらく助からない」

「…大したもんだな」

「だからこれを迂回しなければなりません。ですが一つ問題があります」

「それは?」

「(トト)」

「一つのところから円状に指を回す。」

「だいたいこのあたりを通ると必ず、オウステムが出現します」

「必ず?」

「例外はありません。必ずです」

「あいつらは不定期にいろいろな場所に出現するんじゃないのか?」

「そのはずなんだけど、ここは必ずなの」

「…強さは?」

「大きさをだいたい40m級。強さは見た目通りだけど数もいる」  
「…」

その条件となると確かに突破は難しい。

1人で逃げるだけならいくらでもできる自信はある。

だが、子供5人と車いすの大人1人。

1人も死なせずにやるのは難しい。

「難しいでしょ？だからあの子たちをあなたのメディアツールにしてほしいの。そうすればあなたも、あの子たちも強くなる。どのくらいかは未知数だけどそれでも可能性はあがるわ」

「あんたがなっちゃんだめなのか？」

「私はタイプB。なりたくてもなれないの。それに私になってもあの子たちの危険を増やすだけ」

「なぜ？」

「タイプAはメリットしかないけどBにはデメリットがあるの」

「デメリット？」

「つながってるAが死ぬとBも死ぬ」

「なっ!？」

「Bが死んでもAは死なない。だけど逆はダメなの。だから私はあなたに賭けたいの。あなたはきつとA。そのはずだから」

「極端に少ないんだろ、Aは。ならそうしてそこまで俺がAといえる？」

「占いに出てたから」

テーブルを指さす。

テーブルにはカードが置いてあった。

「タロットカード？」

「私はあれが得意なの」

「俺はそういうのは信じない。それにあの子たちがそれによって助かったとしても後が大変だ。俺はあの子たちにそんな思いはさせたくない」

「…いったいどういう——」

突然地響きがする。

「こんなにも早いなんて…!」

まるで来るのが分かっていたのかのようなセリフ。

しかし、正影にそれを確認する時間はない。

子供たちがレアに駆け寄る。

「レアさん、怖いよ」

「大丈夫、あなたたちは死なないわ。占いが言っただけだから」  
「本当？」

「私の占いを信じなさい。だから安心——」

真上で大きな音がしたのが分かる。

と、天井にヒビが入り始めた。

正「ここはやばいぞ！早く出るぞ」

鉄の扉を開け、全員が脱出する。

外に出て音の正体が判明する。

「こんな時に……！」

30m級のオスがいた。

## 敵

目の前にいる30m級のオス。

「型は…サイか？」

30m級のサイ。

もともとのサイの特性を生かしているのか体当たり。

おそらく正影一人でもこれくらいなら問題ないだろう。

早ければ1分、長くても3分あれば簡単に倒せる。

だが今は守らなければならぬ非戦闘員が6人。

しかも1人は車いすに乗った大人。

気にして戦うとなるとかなり厳しい。

「お前ら！今すぐここを離れろ！」

「なっ、無理です！こんな大きな相手を一人でなんて！早くこの子たちの仲介者《メデイ

アートル》になってください！」

「俺がAだとは決まってるんだろ、それに問題ない。俺一人ならあいつは簡単に倒せる。

だがお前らがいると邪魔だ」

「何言ってるんですか！プロトであの大きさの相手を、しかも1人でなんて無理です。勝てるわけ…」

「だから、問題ないと言っているんだ」

正影が刀を作り出す。

子供達にはただ武器を取り出したようにしか見えなかったがレアには分かった。

さつきまで建物に体当たりをしていたオスが正影達に、ターゲットを変更する。

「それは…！」

「もう一度言うぞ。ここから離れろ。できる限り。もしかしたらもう会うことはないかもしれないが今回のことはありがとうな」

「待っ…」

正影がレアの言葉を聞き終わる前にオスに向かって走り出した。

残された子供たちは…

「…ロスト・チルドレン」

「何を言ってるの、レアさん。あそこは正影さんに任せて早く逃げよう？」

「…」

「レアさん！」

「はっ、ええ。分かったわ、行きましょう。穂香、押してくれる？」



「もちろん！」

レアたちはその場を後にした。

「行つたか？」

相手の攻撃を自分に集中させながらレアたちが移動したのを確認した正影。

この状況でなら簡単に殺せる。

「始めるか……」

オウステムとはアクリス細胞の集合体。

そして基本細胞とは核が存在する。

もちろんアクリス細胞にも核は存在する。

が、オウステムを形成したアクリス細胞の場合、1つ1つの細胞にある核のほかに大きな核が存在する。

人でいうところの脳や心臓と考えればいい。

これを壊すことができればオウステムは死ぬ。

しかし、この核は個体によって場所が変わってくるので探すのが難しい。

だから基本として、大きなオウステムを相手にする場合もう一つの殺す方法で殺す。

それは、ひたすら攻撃を与え続けるということ。

これも個体によって変わってくるが、攻撃を続ければいつかは力尽きる。

「おおおおおおつ！」

サイ型のオスに対して容赦ない攻撃を加える。

斬って斬って斬って斬って斬って斬りまくる。

建物を使い、うまく飛び跳ね、後ろに回り相手の攻撃を許さない。

(これなら余裕か…?)

しかし、攻撃されてばかりではオスも黙っていない。

突然オスが思いつきり飛び跳ねる。

距離は軽く50mは上に飛ぶ。

「サイにそんな跳躍力あったのか!？」

とりあえず全速力で建物の上に乗っかる。

サイが地面に降りてくると同時にどんな力が地面に働くか想像がつかないからだ。

あれだけの巨体で重さもかなりなはず。

被害はひどいはず。

飛び上がっていたサイが落ちてくる。

「ようし、お前の奥の手? うまく受け流してやるよ」

サイが地面に落ちる。

本来なら落ちてきたオスだっただけでは済まないだろう。

地面がすごい勢いで盛り上がる。

地面が波打つているというのはまさにこのことだろう。

コンクリートでできた地面にヒビが入り建物が崩れていく。

「これはすごい」

どのくらいレアたちが離れたのかわからないがあのままここに残っていれば命はなかっただろう。

正影が乗っていた建物も崩れ始める。

だが、正影は悠々と建物を飛び移り危険を回避する。

オスの体はこの跳躍力に対応しているのかこれに対しての傷はなかった。

揺れが収まり始めると正影は再びオスに攻撃を始める。

「鈍重なデカ物に負けるわけないだろ」

プロトとロスには大きな力の差がある。

腕力、跳躍力、視力、聴力などどれをとってもよほどのことがない限り負けることはない。

しかし、そんな弱いと思われるプロトだが実は40m級くらいのオスなら勝てないこ

ともないはずなのだ。

ならなぜ勝つのが難しいのか。

理由は武器が使えないからだ。

ロスのみが使える武器はオウシステムに対して恐ろしい殺傷能力を誇る。

これのおかげで長期戦になることなく倒すことができる。

プロトが負ける理由は長期戦に持ち込まれ（もちろん身体能力が低いのも否定できない）疲れ切ったところを一撃で殺されるからだ。

つまり集中力が、体力が続けば理論上なら勝つことができるのだ（死人を出すことな  
く）。

「オツ…オオオオオオオオオオオオオオ！」

「黙れ」

雄たけびを上げるオスに対して辛辣な言葉を浴びせ攻撃を続ける。

本当に突進馬鹿なのか（さっき跳んだけど）ただ回ることしかできない。

だんだん動きが鈍くなり始める。

痛みを感じるのかは2020年では分かっていたが、細胞が死んでいるのだ。

鈍るのも当然だろう。

（あと1分くらいか…）

攻撃を始めて5分。

ものすごい跳躍力によって時間をとられてしまった。

とそこに斬りかかった瞬間、硬いものの感触がする。

もしやと思い、おもいつきり力を込めその肉を剥ぎ落とす。

と、青色の結晶のようなものがあらわになる。

核だ。

思わず笑みがこぼれる。

「ラツキーだな。しかし、こんな表面の近くにあるとは」

危機を感じ取ったのかオスがおもいつきり突進を始める。

建物なんて一切おかまいない無しだ。

「成長したな。恐怖心か？」

2020年の頃は逃げるなんて行動をとるオスは見たことがなかった。

プロトが全滅し、逃げられることはあったがその場合、傷が回復していることが多く

面倒になる。

正影がすぐに追いつく。

降り注ぐ建物の破片なんてお構いなしだ。

「死ね」

正影が刀を核に突き刺す。

オウステムがバランスを崩し横倒れになりながらしばらく突き進む。

80mほど倒れながら進みやがて止まった。

「つたく、手間かけさせやがって…」

刀を引き抜き、しまった（消したのほうか正しいのか）。

「…」

今回の敵は比較的楽なほうだった。

大きさに比例して強さが大きくなるといったが、もちろん相性もある。

例えば以前戦った蚊の形をしたオスは正影から見ると面倒な相手だ。

飛んでいるうえに口から変な液体まで出してきた。

さらにあの時は荒野で戦っていた。

何度も跳ばなければならないので時間がかかる。

今回のサイ型のオスは地上しか走らない（跳んだけど）上に、周りに建物があつた。

上下左右自由に動けたので攻撃の機会も多く余裕だった。

「…そういうえば、レアさん達、大丈夫だったかな？」

分かれる直前には、もう会わないかも的なことを言っていたがいざとなると心配である。

少し、探してみようかなと思いいレア達が逃げた方向へ戻り始めた。

~~~~~

10分ほど探した。

だが、見つからない。

それならそれでいいかもしれないと思っていた。

見つからない、つまりそれは死んでいないということだ。

もし、会うことがあればまた子守をお願いされるかもしれないし死体が見つからないのならばそれでもいいと思っていた。

が、ここで一つ問題が発生する。

「……(ハ)ど(ハ)？」

自分のいる場所が分からない。

つまり政府がいるであろう場所に行く、行き方が分からないということ。

「……レアさー……んーんー！」

大きな声でおもいきり叫んでみる。

が、返事は帰ってこない。

手掛かりはない。

やみくもにでも探すしかない、探そうとしたその時ひび割れている地面の上に赤い物体が乗っかっているのが見えた。

「これは…」

肉だった。

何の肉かまでは分からないがおそらくイノシシの肉。

穂香がやったものだと思った。

と、同時に疑問が浮かぶ。

あれほど貴重といていた肉をちぎって置いて行っ

あまりにおかしい。

正影は落ちてしている肉を辿っていく。

ケチっているのか小さい。

正影の歩行速度が自然と早くなる。

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

やがてある建物の前についた。

建物の中に逃げたのかと安どの表情を浮かべる。

しかし、中に入ると人力車のようなものが見分かる（人が乗るところはかなり大き

い)。

こんな立派なものがそこら辺に置いてあるはずがない。
つまりこれは誰かの所有物。

「…」

再び嫌な予感がする。

幸いその建物は地下がなく、上に続く階段のみ。

足音を立てず、しかしできる限り早く上っていく。

「いやあ!!」

3階にたどり着いたあたりで声がした。

叫び声。

上に上る。

5階から声がしていた。

悲鳴と知らない男たちの声が聞こえる。

物陰に隠れながら様子を見た。

正影の目が大きく見開かれる。

そこにあつたのは、血と死体。

さつきまで動いていた、走っていた、そのはずの子供たちの死体。

「騒ぐなよ、うるせえ」

「そうそう、俺たちがこれから飼ってやるっていうんだからむしろ喜べよ」

「ふざけないで変態！」

「変態っていわれたなあ、お前w」

「いいんだよ、俺はロリコンなのは自負してるからよ」

5, 6人相手に生きているのは子供2人とレア。

全員女の子だ。

「なんで…こんなこと」

「なんでって、そりやここには男しかいないし」

「そんな理由で…許されるわけじゃないでしょう！」

「いいんだよ。ここに法律はねえ。弱肉強食の世界だ。力あるやつが生き残る、牛耳る、支配する」

「だからお前らは黙って俺たちの言うこと聞いてればいいんだよ！」

「…！あなたたち！」

「安心しろよ、お前も後でかわいがってやる。だから今は黙ってろよ。俺も子ども相手は初めてなんだから——」

「そうか、なら俺がここの支配者だな」

正影が一番近くにいいた、男の首を切り落とす。

「えっ?」

「何?」

突然現れた敵の存在に一瞬戸惑う男たち。

「て、てめえ! なにもものだあああ!」

「正影だ」

鉄パイプで殴りかかってきた敵のパイプごと首を切り落とす。

戦闘訓練も受けていない、ましてプロトなど正影の敵ではない。

「正影さん!」

「なっ! 嘘だろ!」

「クソガキがあ!」

「なめんな!」

「馬鹿! お前ら!」

2人が同時にかかってくる。

手には何も持っていない。

これにも再び同じ応酬を与える。

一瞬のうちに首が2つとも体から離れる。

「…あと2人か？」

「ヒッ、ひいひい！」

「おい！待て！」

1人が逃げ出す。

特に追いかけることはしない。

「あとは、お前だけか？」

「くそっ！」

残った一人が子供をつかむ。

「動くな！こいつを殺すぞ！」

「…ゲスが」

「黙れ、その刀を地面に置け！」

黙って従う。

この状況では助けるのは不可能だ。

だが、あと5歩近づくことができれば…！

「いいぞ…。そのままだ」

歩いてくる。

あと、3、2、1…。

「あああああああ！」

突如後ろから声があった。

後ろを向く前に激痛が走る。

背中にナイフが刺さっている。

「なっ……！」

「へっ、思った通りだ。逃げたと思ったのか？ 甘いんだよ！ で、どうするこいつ？」

「決まってるんだろ、殺す！」

「はいよー！」

ナイフが再び正影に襲い掛かる。

が、ナイフ一つきで動けなくなるほど正影は甘くなかった。

襲ってきたナイフをよけると首に掴みかかる。

「えっ？」

「…」

無言で首を潰した。

しかしそれは、再び面倒な状況を呼ぶ。

生き残った相手が正影を見て一層恐怖を感じ取り、後ろに下がる。

「あ、あああ…。お、お前！ その、刀で自害しろ！ でないところいつが……！」

接近戦で絶対勝てないとわかり、自害を要求し始めた。

後ろに下がってしまっただけのため正影が子供を助けられる確率が下がる。

(ど、どうする? こいつはもう近寄つてこない。殺すことは簡単だがそれだとあの子が……)

手が残されていない。

おそらくあいつは生き残りたいはず。

そしてあの子を手放せば死ぬというのも分かっている。

だからそう簡単には殺さない。

だが、人質は女の子。

いつ何が起こるかわからない。

「早くしろ……こいつを殺すぞー」

「くそ……」

賭けに出ようと悩んでいた時、子供が動いた。

怖かったはず、夢があつたはず、生きたかつたはず、それなのに――

――彼女は自らナイフに刺さりにいった。

「え？」

男には何が起きたかわからない。

子供が自ら刺さりにいった？

そんなことが起きるなんてありえない。

だが、目の前でそれは起きている。

「あ、ああ、あああああー！」

人質を失った男に手はない。

「た、頼——」

首が切り落とされる。

~~~~~

「なんで、こんな……」

「……」

最後に自ら刺さりにいった女の子は即死だった。

しかし、死んだはずのその顔は微笑んでいた。

「ゴフツ……！」

突然、レアが血を吐く。

「レアさん!？」

「なんだ!」

量が尋常じゃない。

「…そろそろ限界ね」

「限界ってどういうことだ!？」

「言ったでしょ? 近いうちに遠いところに旅立つって」

「まさか…!」

「タロットカードに出てたのよ。限界が近いって。でも、子供たちのことは、何も出てなかった、はずなのに…」

再びせき込み血を吐く。

「レアさん!」

「穂香…。私はもうだめ。だから、その人と、ね?」

「嫌だ!レアさんも一緒だよ!」

「無理よ…。私の言うこと、聞いてちょうだい。これが最後だから」

「最後なんて言わないで!みんな死んじやっただよ!？」

「その人、正影さんがいるじゃない…」

「なんていう病気だ!?!できる限りの対処なら…!」



首を振るレア。

「私のは、解明されてない、新種なの。アクリス細胞が、蝕まれるっていう…」

「な、なんだって?」

「この時計をもらった年に知らされたの。10年以上も生きただけ上出来ね…」

正影に顔を向ける。

「お願い。この子を、穂香を連れて行って。あなたなら、できる」

「…」

「初対面でこんなこと言うのはおかしいのは、分かった。でも、今日、あなたは現れた。

これはきつと、運命。だから…」

「…分かった」

「ありがとう」

穂香のほうを向く。

「穂香…、ごめんね?」

「謝るなら、生きてよ!死なないで!1人にしないで!」

「1人じゃないわよ。いるじゃない、正影さんが」

「でも…!」

「大丈夫。あなたは子供たちのおねえちゃん的な存在だった。だからきつと…」

「…レアさん？」

死なんてそんなものだ。

死の間際にすべてを話きるなんて普通は無理。

レアはもう二度と動かない。

「レアさん、レアさん。冗談やめてよ…」

穂香の目に涙が溢れ始める。

「う…、まだ、何も恩返しできてないよ。まだ、何も返してないよ」

この世界でただ一人親のような存在だったレアの死。

正影には穂香の気持ちは計り知れなかった。

「うわあああああああああー！」

死体が溢れるビルの一室で、穂香はレアの亡骸の上で泣き続けた。

文字通り涙が枯れるまで。

## 道中

「穂香！」

「分かってるー！」

穂香が銃をオスに向ける。

相手は3 mと小柄のオス。

型はトカゲ。

穂香は両手に銃を持ち撃ち続ける。

相手は3 mほどなので十分な攻撃力を誇る。

と、舌を伸ばし穂香の腕に巻き付く。

そのまま引き寄せて食べようとする。

「加勢してやろうか？」

「これくらいで、大丈夫！」

掴まれている腕に持っている銃で舌に銃弾を浴びせる。

8、9発撃ったところで舌がちぎれる。

今度はちぎれた舌から謎の液体が飛び出る。

「きゃあー！」

拳銃に当たり銃口がドロツシた液体によってふさがれる。

「なっ、なによ……この液体！」

粘着性があり剥がれない。

その間にオスが近づいてくる。

しかし、穂香は焦らない。

持っていた拳銃が使えなくなったのならどうすればいいのか？

答えは簡単。

新しい拳銃を出せばいい。

使っていた拳銃を消すと、新しい拳銃を取り出す。

シヨットガンだ。

跳びかかってきたオスに2、3発お見舞いする。

撃たれた衝撃で軌道がずれ穂香の横にばたりと倒れる。

穂香はそこにさらに銃弾を撃ち込む。

5、6発撃ち込んだところでオスは動かなくなった。

~~~~~

「ん……」

「ど、どうっ？」

「駄目だな。核がボロボロだ」

死んだオスから核を取り出し、確認する。

シヨットガンにより攻撃したため核にもわずかだが当たってしまった。

「ごめんなさい……」

「まあ、いいさ。だんだん感覚は分かってきただろ？それだけで上出来だ。核の採取なんてそのついででいいしな」

オウステムには以前も言ったが核が存在する。

そしてその核は貴重な研究材料だ。

生きたままで核の取り出しを行うのは無理だが、きれいな状態で取り出すのは可能だ。

それは、価値が高く3m級でも無傷ならば5万〜10万で取引される。

核はよほどのことがない限りとりだした者の所有物になるのだ。

「さて、日も暮れてきたし……今日のキャンプはここでいいか？」

「うん、私はいいよ」

「なら準備だ。テントを張るぞ」

リュックからテントのセットを取り出し準備をする。

これらのセットは都市を出る前にいろいろな店を回りそろえてきた。

都会になる予定があったというだけあって物は簡単にそろった。

「よいしょっと」

「正影さん、実年齢は？」

「15歳だ」

「うっそ？絶対40ぐらいいつてるでしょ。アクリス細胞で成長とまってるからって詐欺は良くないよ？」

「マジだよ。ただ本来なら26歳のはずなんだけどな」

「以前いつてた妹さんは？」

「あいつは20年の時5歳だったから…16か？」

「つまり今はお姉ちゃん？」

「そうなるな…。変な感じだ」

「でもきつと、妹のようにしたってくれるよ。…できた！」

テントが完成する。

「よし、食料はあるし、燃える木もある。今日はこのまま休んでもいいだろ」

「わーい！ちなみにご飯は？」

「缶詰と干し肉、後は栄養補助食品、どれがいい？」

「…カレー！」

「そんな選択肢はない」

「だって…、ずつとそればかりだよ？」

「無理言うな。これしかないんだから。でも政府の建物に着けばなんでも食べられるぞ」

「本当？」

「本当だ。だから今はこれで我慢だ」

「はあい」

2人で政府の拠点に向かって歩き始めて1週間が過ぎていた。

他についてきている人は誰もいない。

|||||

くレアが死んだあとく

「穂香…」

かける言葉が見つからなかった。

正影にとつて家族と呼べるのは妹のみ。

母や父はクローンで生まれたような正影にとつてはいないも同然だった。

だから気持ちが悪くならなかった。

ただ、悲しいということしか。

「…正影さん」

不意に穂香が正影に話しかける。

「なんだ？」

「…火種になるようなもの、持ってますか？」

「あ、ああ。マツチくらいなら」

先ほどスーパードライのようなところから持ち出してきた。

「ここに、放っておくことは、出来ません。みんな、大切な、家族だから…」

「…分かった。お前は家族を。俺はごみを捨ててくる」

「お願いします」

5分ほどかけて男たちの死体を窓から投げ出す。

落ちて再びひどい姿となる。

穂香の家族は一行に並べられた。

「…いいのか？」

「ここに、置いておいても、腐ってひどい姿に。あるいは、カラスの、えさに、なつてしまいます。そんなの嫌です」

「そうか…」

正影はレアの持っていたカバンをとる。

中には地図とメモ帳、タロットカードが入っていた。

「これは、貰っていいか？」

「…うん。使ってくれたほうが、レアさんも喜ぶ」

「お前はいいのか？形見とか」

「あると、私は引きずり続けてしまいそうだから…」

マッチに火をつける。

「火をつけても、それくらいじゃ消えるかもだぞ？」

「でも、どうすれば…」

「ほら」

1つのタンクを持ち出す。

灯油が入っていた。

「これは…？」

「二階に置いてあった。灯油ってやつだ。何も無いより火が付きやすくなる。匂いが少しきついが仕方あるまい」

「ありがとう」

死んだ5人に灯油をすべてかけた。

マッチに火をつける。

迷わず、マッチを5人に投げた。

すぐに火が広がる。

そして悪臭も。

しかし、穂香にとってそんなのはどうでもよかった。

「…」

ただ火を見つめる。

「穂香、俺は先に下に行ってる。レアにはお前を連れてつてくれと言われたが、お前はど
う思ってる?」

「…」

「来たくなければ来なくても構わない。そこからは好きに生きろ、お前の人生だ。だが、
もし俺と来たいというのなら、1時間だ。1時間だけ下で待っててやる。それまでに来
なかつたら俺は1人で行く」

「…」

「先に行ってるからな」

正影は1人下に降りた。

一時間、下で立ちながら待つ。

何度も言うが彼に穂香の気持ちは分からない。

今まで仲間が目の前で死んだことは何度かあった。

だが、不思議と泣くことができなかつた。

悲しいという気持ちはある。

だが、涙は出てこない。

周りには「強いね」や「薄情者」と言われたがどちらなのかは自分にも分からなかつた。

でも、なんとなく思っていた。

自分は「薄情者」なのだ。

仲間が死にそうで助けられるのならもちろん助ける。

だが、正影はそういう一面を持っていると同時にすぐに仲間を切り捨てたりもする。

絶対に助けられない、もう死んでる、それが分かつた瞬間、そいつを切り捨てるのだ。

効率的で戦闘している人から見ればもちろん合っている。

だが、その死にそんな人の家族、友達、恋人から見れば酷い人にしか見えない。

そんな世界で彼はそういう立場で生きてきたのだ。

58分後、穂香が下に降りてきた。

「…もういいのか?」

「うん」

「で、どうする? ついてくるか?」

「お願いします」

頭を下げる。

「よし、ならさつきと行こう。早く、ゆっくりしたいしな」

「あの…」

「なんだ?」

「どうして、待っててくれたの?」

「1時間待っていったら?」

「今私が下りてきたとき、だいたい57、8分経ってた。普通、もう1時間たつたと思っ
てどっかいてる」

「ああ、それか。そうだな、お前がついてくるみたいだしやっぱりお前が持つべきだな」
「?」

正影があるものを穂香に渡す。

「これは…!」

レアの腕時計だった。

「これがあつたからな。きっかり一時間なんて余裕」

「そう…」

「で、これは今からお前のものだ」

「え？」

驚きの顔を正影に見せる。

「どうした？嬉しいだろ？」

「…これがあると、私レアさんたちのこと引きずっちゃう」

「…」

「毎日、毎日、おもいだして、忘れることもできずに…」

「いいんじゃないか？」

「へ？」

「お前は忘れようとしていたのか、みんなのことを？」

「そうしないと、私、毎日泣いちゃうから…」

「泣きたきや泣け」

「…」

「誰が泣くなつて言ったんだよ？泣きたいときは泣かなきゃ体に悪いぞ？」

「でも…」

「思い出は大事だ。確かに過去のことなんて大抵は意味を持たない。でもお前は意味を持たないからって忘れるのか？」

「…」

「引きずりたきや引きずれ。引きずってたら周りに迷惑が、これからが考えられないかもなんて考えるな。どんなに悩んだって結局なるようになる。それに…」

「？」

「思い出はいいものみたいだぞ？ 足かせになんてならねえよ。俺には思い出といえるほど長い間の記憶はないから分からないけどな」

「どういうこと？」

「俺はある人のクローンだ。その人は8歳で死んだ。だから俺は8歳の体から人生がスタートした」

「そんな…」

「知識等は科学技術で初めから埋め込まれていた。だから支障はなかった。だけど、いい思い出がないんだ。生まれてすぐ戦闘訓練漬けの日々だったからな」

「…」

「だから俺は知らない。思い出がどのくらいすごいものなのか。だが他の普通の仲間はみんな言ってたよ。嫌な思い出もあるけどいい思い出は生きる糧になってるって」

穂香が持っていた腕時計を強く握る。

「だから、なっ? 忘れるなんて言うな。引きずってもいいから持ち続ける」

「…うん」

穂香が持っていた腕時計を腕に着ける。

レアの長さに調整してあったせいかな、ぶかぶかだ。

調整をしてちようどよくする。

「よし、じゃ、行くか」

「うん。でもどこに?」

「政府の建物にな。そこに行けば妹にも会えるだろうし」

「なら、長い距離歩くよね? テントとか置いてあった店知ってるよ?」

「そうか、なら案内してくれ。常に屋根がないところで野宿はつらいからな。あともう

「っ」

「?」

「その…、やっぱ他人への迷惑だけは少し考えてくれ」

「…正影さん、かつこ悪い」

「うっ!」

飯も食べ終わり、寝る態勢に入っていた。

「ちゃんと暖かくして寝ろよ？」

「風邪なんてひかないよ」

「いくら体が強くなってるからってひくときはひく。それが今だと困るからな。薬なんてないし」

「風邪は寝て治すものでしょ？薬なんてあるの？」

「いい意気込みだ。それならひきそうにないな。じゃ、電気消すぞ？」
懐中電灯を消しテント内が真っ暗になる。

と、2、3分くらいすると穂香が正影をつついてきた。

「どうした？」

「あの、正影さん。そっちの寝袋に入っていない？」

穂香は9歳だそうだ。

今までにぎやかだったのに突然投げ出された静かな世界。
怖いのも無理はない。

「ああ。いいぞ」

暗い中、正影の寝袋に入ってきた。

「えへへ。暖かいね」

「2人で寝てるんだからな」

「近いからって変なことしないでよ?」

「そんな趣味はないから安心しろ。ほら明日も早い。早く寝ろ」

「うん。おやすみ、正影さん…」

すぐに寝息を立てた。

真つ暗なのだが、近くに来れば顔くらいは見る事ができる。

子供らしい、かわいい寝顔だ。

(こんな子が、オスと戦って、命を懸けてるんだよなあ…)

|||||
||| 出発の準備中 |||

テント等をそろえた頃、正影は1つのことを思い出した。

「そういえばレアに仲介者《メディアートル》になつてくれとか言われてたな」

「聞いたことあるよ。私、強くなれるの?」

「そんなこと言ってたな。でもどうやるんだか…」

「レアさん、メモ帳みたいなの見て言ってたよ?」

鞆を探すとそれらしきものがあつた。

「これか…」

ペラペラとめくってみる。

想つたより最初のページにそれらしきことが書いてあつた。
いくつかやり方が書いてある。

1、特定の薬品を使用し性交を行う

「これはない。つていうか薬品つて何?」

2、ツールによる媒介を利用した細胞交換

「…意味不明」

3、血液の交換

「これは…、いけるか?」

4、だ?に??薬??換

「読めないな…。まあ仕方ないか。出来るのは…血液の交換だな」

「それ、痛いのか?」

「血、出さなきゃいけないから痛いだろうな」

「え〜…」

「でもまあ、生きるためだ。お前を守つてるといつか失敗しそうで怖い。逆にお前の力

が上がるなら俺としてはありがたい」

「…は〜い。で、どうするの?」

「これで少し切る」

持ってきたサバイバルナイフを取り出す。

「よりによつて痛そう…」

「仕方ないだろ。これしかないんだから。ほら、腕出せ」

なんだかんだ言いながら腕を出す穂香。

ナイフを少し突き立てると簡単に血が出た。

「これを交換…、つて俺はどうやってこれを取り入れればいいんだ?」

「舐めれば?」

「…それしかないか」

ナイフから落ちた一滴を舐める。

特に変化は感じない。

「…よくわかんねえな? まあ、まだお前が貰つてないもんな。ほら」

ナイフには穂香の血がついていたので爪で皮膚を切り指に血をつける。

「血つておいしくないよね…」

「これくらい味はしない。早く舐めろ」

穂香が指にかぶりつく。

舐めればいいのに根元までしつかりと。

「おい、そんなしなくても…」

すぐに口が離れる。

「まず…い…」

「そうか、で、どうだ？何か変わったか？」

「…わかんない」

え…、駄目だった？

「そうか…。身体能力はどうなってる？」

「って言われても…。これ、殴ってみればわかるかな？」

「そうだな。そこらの建物殴ってみろ。以前のお前じゃちよつとしたヒビが限界――」

穂香が殴った瞬間ベキン！と音がしてそこがへこむ。

「…」

おおふ…。

すげー変わってんじゃない。

「すごい！正影さん、見た？」

「ああ。これは想像以上だな。これなら俺も多少は楽になるはずだ」
「これでお荷物には——」

と近くの建物内で商品が落ちる音がした。

「——だれ!?!」

穂香が手に銃を作り出す。

「…(驚き)」

正影には物音よりも、ロスにしかできないはずのことをやってのけた穂香のほうに注意がいつていた。

「…マジで想像以上だ」

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

正影はテントの中で30分ほど穂香が寝た後も考えていた。

彼女は普通はできないことをやってのけた。

自分が体がある程度いじくりまわされるのは覚悟していた。

だが、彼女も同じくなるだろう。

最悪自分以上かもしれない。

(俺が…、守るしかないか)

研究機関の奴は女子供お構いなく、体を解剖し、実験し、結果を求める。

ある意味そのおかげで今が保っているのだろう。

最悪の結果である、人類滅亡が免れたのはそのおかげだ。

だが、正影は納得できない。

この時点で彼は「薄情者」なんかではないのだがそれに気づくことはなかった。
穂香の頭をなでる。

「絶対、守ってやるからな…」

守るべき存在が増えた瞬間だった。

集落

「正影さん！早く早く〜」

「そんな急がなくなつたつてあれは動かないぞ？」

「でも集落だよ？人だよ？楽しみ！」

正影と穂香が都市を出て10日目、2人はある集落を見つけていた。

決して裕福には見えない。

3匹の子豚の話に出てきたわらの家らしきものがたくさん見える。

地図にそんな印はなかったので、おそらく都市崩壊後に出来たのだろう。

「しかし、まあよくこんなところで集落が成り立ってるな」

「戦闘要員がいるんじゃない？」

「おそらくな。じゃなければここを保ち続けるのは不可能だろうしな」

今までの話では10m以上の敵がよく出てきていたが、実はこれらは数が少ない。

普通は5，6mのものが多く、大きくても10m程度が普通だ。

この程度ならプロトでも対処できるのだ。

「着いたよ正影さん！」

「…丁寧に集落の周りには柵か…」

「襲撃から守るためでしょ？」

「オスには意味ねえよ。一瞬で突き破られるぞ？」

「それでも安心はするんじゃない？」

「…ないよりはましなのかもな」

政府の拠点に向かうルートからは外れないのだが少し時間のロスだ。

だが、穂香の嬉しそうな顔を見るとダメとは言えなかった。

しかし、彼らがここを見つけたのは偶然だった。

もともと一直線で地図を頼りに歩いていたので途中で道が塞がれていた。

回り道をするもなかなか進めず、いろいろなところを歩き回っていたらここを見つけたのだ。

中に入ってもよいものかと考えていると一人、人が歩いてきた。

「あの…あなたたちは？」

「すみません、俺たちはあるところを目指してるんですけどその途中でこの集落を見つけてまして」

「中に入れてもらえない？」

「…ちよつと待っててください」

そう言うのと集落の中に戻っていった。

「なんですぐに入れてもらえないのかな？」

「そりゃ俺たちは招かれざらる客みたいなものだからな」

「何も悪いことしないのに？」

「そんなのあつちから見たつてわからないさ。むしろあつちから見れば俺たちをこの集落に入れたつてデメリットだらけだ」

「デメリット？」

「俺たちがここで飯をごちそうになるかもしれない。そうなれば食料が減る。俺たちがここに泊まることになるかもしれない。そうなればこの人の土地に入れることになつて見張りだつたり場所だつたりをとる。メリットがあるか？」

「正影さんがいる限りはこの集落はオウSTEMの襲撃を防げるよ？」

「ここにはおそらくプロトがいる。俺の手助けは必要ないだろうよ」

ちやうど説明が終わつたところでさっきの人が戻つてきた。

老人を連れている。

まさに「ザ・長老」だろう。

「こんにちは。ワシは見ての通り長老という。名前は忘れてしまったよ」

「初めまして。俺は正影。この子は穂香といいます」

「よろしく、と言いたいところなのだが…その、すまん。初めに言っておく、ここに入れることはできない」

ある意味予想通りの答えだった。

だが、穂香は納得がいかないようだ。

「なんで？ 私たちなにも悪いことしないよ？」

「お嬢ちゃんの言うことを信じたいのはやまやまなんじゃが…」

「他の人が嫌がつてるんですね？」

黙って長老はうなずく。

やるせない顔をしていた。

「ワシは泊めるくらい、いいと思うんじやが」

「いや、気にしないでください。当然の反応です。突然来た見知らぬ人なんて私がここ

の人だったらおそろく入れません」

「すまんの…」

「ですが、そこを何とかできないでしょうか？ この子、今まで家族以外の人と、俺を除いて接してきたことがないんです。別に飯や、家を貸し出してくれなんて言いません。寝る時も集落の外で寝ますし駄目でしょうか？」

入れたくない気持ちは分かるが穂香は入りたがっている。

可能性は低いが少しは粘ってみる。

「しかしのう……」

「何やってんだよ、長老！」

奥のほうから新しく人がやってきた。

丈夫な体つきをした男性だ。

「押火《おしび》……」

「さつき決めただろ。よそ者は入れないって」

「しかし、この人たちはただ中を見てみたいだけのようじゃ。食事も寝どこも必要ない

と言っておる」

その言葉に怪訝な顔をする押火。

今どきここまで観光に来るもの好きなんていない。

それなのにただ見たいだけ。

怪しすぎる理由だ。

「お前ら、何者だ？」

「俺は正影、この子は穂香。この子がこの中を見てみたいと言ってな。出来れば泊めて

ほしいが、無理には言わない。だがせめて中を少し見せてはもらえないだろうか？」

「……坊主」

「私は坊主じゃない」

「なんでこの中を見たいんだ？泊めてほしいのが目的ならまだしも見るだけでもいい？意味不明だ」

「私、今まで一緒にいたの家族だけだから。正影さんと知り合ったのもつい最近。だから人が多い所を少しでも見せてほしくて…」

穂香の言葉を聞いて少し心が動いたのか考える。

いつの時代でも子供の純粋な発言は強い力を持つのだ。

「…分かった。1つ条件を飲めば中に泊めてやる」

「本当か？見るだけじゃなく泊めてもらえるのか？」

「ああ。条件は食料だ」

「食料…。悪いが魚釣りのスキルはないぞ？」

「魚じゃない。肉がほしい」

どうやらここでも肉は貴重な食品のようだ。

しかし、オスを撃退できるほどの戦力があるのに肉を取りに行くことができないのはおかしい。

「ここにオウステムは来るのか？」

「当たり前だ。この地域に安全な場所なんてない。だけどこつちにはプロトがいるから

な」

「ならなんで肉が不足する？プロトが一人いれば簡単に見つけた動物を仕留められるだろ？」

「…保険だ」

「？」

「もしそいつがここを離れている間にオウSTEMが来たらどうする？俺ぐらいならある程度は抵抗できるかもしれないが女子供や長老みたいな人は即死だ。だからあいつはここを離れちやいけねえんだ」

「でもそれで栄養不足になったら元も子もないんじゃ」

「俺に言うな。これは村の決定だからな。俺は反対したが駄目だった。だからあんたたちにお願している」

正影にとってこの条件は無料と何ら変わらない。

「分かった。その条件で手を打とう。どのくらいあればいい？」

「ここら辺にいるのはイノシシ、鹿、犬、牛だ。イノシシか鹿なら2頭。犬なら3頭。牛なら1頭でいい」

「多いのはどれだ？」

「牛以外は20分も探せば見つけれられる。だがどれも人を見つけると襲うか逃げるかす

るからな」

「分かった。1時間ほどで戻ると思う。行くぞ、穂香」

「はい！」

2人が肉を探しに行った。

「…よく妥協してくれたの」

「別に違う。俺はただ、こっちのほうが俺達のためになると思ったから行動をとっただけだ」

「そうか…。ありがとうよ」

「礼は後にしてくれ。あいつらが肉をもつてこれなきや入れる気はないんだからよ」

20分探せば見つかるとは言ったが普通、動物対丸腰の人間では人間に勝ち目はない。

アクリス細胞は人だけだけでなく、動物にもついているからだ。

つまり身体能力の差は少しも縮まっていないのだ。

しかし、その心配は杞憂だったと押火はすぐ知ることになる。

~~~~~

「…」

「…すいん」

長老の付き添いであろう人は思わず呟いた。

正影たちは1時間後、しつかり集落の前に戻ってきた。  
結構な量の肉を持ち上げて。

イノシシ2頭、鹿1頭、犬1頭に牛1頭だ。

「これで、入れてもらえるか？」

「…これで俺が何か言ったらおかしいだろ」

「やったー！じゃ、お邪魔しまーす！」

そう言う穂香は走って集落の中に入っていった。

柵があつたしおそらく大丈夫だろうと思いつけておく。

「あんた、本当に何者だよ？ たった1人でこの量」

「俺だけじゃないぞ。あいつだつて鹿を1頭仕留めたんだから」

「…お前らのような人材がいればこの集落も安泰なんだがな」

と、さつきはなかつたはずのバスケットを正影が持っていることに気づく。

「なんだ、それは？」

「ああ。さつき見つけた」

中をあけると子供の犬が3匹ほど入っていた。

「俺が仕留めた犬がこの子たちの親だったらしいんだ。だからな……」

「そうか。とりあえず上がってくれ。さつきも会っただろうが長老が待っている」

「そうさせてもらおうよ」

「こつちだ」

押火の後についていく。

集落の中は本で見た縄文時代を彷彿させた。

人の服はボロボロではあるが現代風で、違和感はないのだが家がほとんどわらの家。

いくつか木の家もあったがコンクリートはなかった。

「ここだ。長老、旅人を連れてきたぜ」

「入ってくれ」

長老というだけあって木の家に住んでいるようだ。

中は家具などはほとんどなく、特徴がないが木の家はここではかなりいい方。

文句なんてないのだろう。

だが、1つだけ不自然なことがあった。

それは……

「よく来たな。そこにかけてくれ」

ソファアがあることだ。



どう考えても置き場所を間違ってる。

「失礼します」

座ると久しぶりに優しい感触がした。

もうここから離れたくない。

「まず、お礼からじゃ。見たところかなりの食料をとつてきてくれたそうじゃの?」

「いや、あれくらいはどうってことない」

「肉はワシたちから見れば貴重な食材じゃ。さつきまで反対しておった者たちも今では君たちを歓迎している。本当にありがとう」

「お礼をしたのはこちらだ。中を見せてくれるだけでなく、泊めてもらえるなんて」

「ワシたちに出来るのはこれくらいだからのう。好きなだけゆっくりしていつてほしい」

「俺としてはここに残つてほしいけどな」

さつきまでとは態度が180度変わった押火を見て苦笑する。

「悪いがここに残るわけにはいかない。おそらく泊まるのは今日だけだ」

「何か急いでいるのか?」

「妹を探しているんだ。場所は分かっているからそこへ向かっている」

「それは残念じゃの。だが、まあ今日だってまだ時間はたっぷりある。ゆっくりして

いってくれ」

「ありがとう。そうさせてもらおう」

「那倉《なくら》、正影さんを部屋に案内しなさい」

「分かりました」

長老の付き添いの人が立ち上がり正影を部屋へ案内する。

「こちらです」

「分かりました。では長老。失礼します」

「ゆつくりしていってくれ」

案内された家は木の家だった。

数少ないはずの木の家なので一度、わらでもいいと言ったが「それではしめしがつかない」と言われ受け入れることにした。

中に入るとちゃんとした部屋あった。

家具はベットしかなかつたがそのベットにはふかふかのシーツが敷かれている。

十分だ。

「はあ~~~~」

このまま寝てしまいたい気もするが、せつかくここに入ったのだ。

見て回るべきだろう。

それに、拾ってきたはいいが育てられない犬も何とかしなければならぬ。  
穂香を探しに行くため、家を出た。

~~~~~

穂香を探しながらこの集落を見て、正影はすごいと思つていた。

自給自足の生活とはまさにこう言うことだろう。

米や野菜を畑で作り、電気は発電機で出来る限り使用しない方向で使う。

土地が少ないのが少し欠点かもしれないが、しっかり機能している。

プロトらしき人には出会つてないが、他の一般人には普通にあいさつされた。

そして穂香は…

「チィちゃんが鬼だぞー!」

「まてー!」

「逃げろー」

楽しそうに同年代であろう子供たちと遊んでいた。

穂香が家族以外で同年代と出会つたのはこれが初めて。

接し方が分からないのでは?と思つていたのだが問題ないようだった。

「あつ、正影さん！」

穂香が気付いき正影に近づく。

「楽しんでるみたいだな」

「うん。ここみんな優しくていい人たちばかりだよ」

「そうか。ここ泊まることになったから心ゆくまで楽しめ。出発は明日だからな」

「泊まれるの？ やったあ！」

子供の嬉しそうな顔は何度見ても癒される。

「…、正影さん。それ何？」

「あ、ああ。これか？ お前見てなかったのか？ ほら」

バスケットを指摘され中身を見せる。

子犬が3匹、顔をのぞかせる。

「かわいい！ みんな、かわいい犬がいるよ！」

その呼びかけに子供たちが集まり、みんなも同じような反応をする。

「ほんとだー」

「私初めて見た！」

「触ってみたい！」

「おう、いいぞ。ほら」

子供たちに犬を預けると子供たちのテンションがさらに上がる。

「正影さん、この犬つて犬種は？」

「千葉犬か秋田犬だろ。犬については詳しくないから俺もよくは知らない」

「へえ、かわいいね」

「ここで飼ってもらえないものかと出してみたが結果は上々？」

「しばらくは預けても大丈夫だろう。」

「穂香、俺は長老に用があるから犬は帰るときに全部持つて来いよ？」

「わかったー！」

「家はあの木の家だ。分からなかったら長老の家に行け。誰でも長老の家なら知ってる

はずだから」

「はい」

その場を離れながら正影は思った。

穂香はここに置いていくべきではないかと。

「ここは自由だ。」

おそらくあの子が戦うことになるとしてもまだ先の話。

それにいい友達もたくさんいるようだ。

それに比べて政府の拠点に行けば待っているのはおそらく訓練ばつかりの地獄。

いや、訓練だけならまだましだ。

プロトでありながら専用の武器が出せたとなればおそらく実験や解剖に使われる。

ここ以上の安定した生活が貰えるのは間違いないだろうが、子供にとつてそこはいい環境とは言えない。

彼女の幸せはどつちなのだろうかと思っていた。

群れ

「ん〜…、これ！」

穂香が友達の手持っているカードを一枚抜き取る。

取ったカードは「JOKER」。

「ああ！嘘お!？」

「また穂香ちゃんが引いた〜」

「弱いね、穂香ちゃん」

「何言ってるのよ！まだまだこれから！」

穂香は今、仮宿で友達とトランプ中だ。

10日間、同年代の子と遊べなかつたのでその反動が来ている。

しかし、少しはしゃぎすぎだった。

「お前ら、もう9時だぞ？いい子は寝る時間だろ？」

そう、9時なのだ。

子供たちは今日ここに泊まるらしく、すでに寝間着だ。

穂香のテンションが高いだけでなく、友達とお泊り、さらに木の家になんてことにな

れば他の子どもたちもテンションが上がる。

親たちは、正影を信頼しているのかそこに関しては一切何も言わなかった。

正影としては「親がそれでいいの!？」とツツコみを入れたところだった。

「私たちは悪い子だからいいの!ね〜」

『ね〜』

「お前らなあ…。まあ今日くらいは見逃してやるけどよ」

「やったあ!」

今日くらいはいいかと妥協する。

自分だってまだ寝るわけではないし、11時くらいまでなら黙っていることにした。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

く長老に会いに行つたとき

「せっかくゆつくりしてくれと言つたのに、何の用じゃ?」

「俺は政府の拠点を目指している」

その言葉に周りの空気が少しだが悪くなる。

それは正影にも予想できた。

「…そこに、おぬしの妹が?」

「ああ。あんたらがこいつらをよく思っていないのは分かる。だが俺は妹に会わなければならぬ」

ここに集落を構えているということは、おそらく見捨てられた人たちなのだろう。それに対して政府は何もしない。

食料を渡すわけでもない、快適な環境を与えているわけでもない。

プロトがいるところは少し気になるが。

「詳細は省くが実は俺はこいつに10年ほど会っていない」

「10年？お主、年はいくつじや？」

「…25だ。妹とは首都にオウシステムが攻めてきたときにはぐれた。だから、俺は会いたくない」

25歳と言ったのは、説明が面倒だったのもあるが、変に怪しまれないようにするためだ。

タイムスリップなんて言ってしまうえば、人によつては危険人物ととらえられかねない。

正影自身、未だに納得できていないのだ。

「そうか。なら行き方を教えよう。家族は大事にするもんじやからな」

「すまない」

「じゃが…、お主はここがどういう所か分かってるのか？」

長老が地図の何か所を中心として、広い範囲を指し示す。

オウステムが必ず出現するとレアに忠告された場所だ。

「それくらいは分かっている」

「それでも行くと言うのか？あの子と」

「俺はそのつもりだ。だが、あの子がここに残りたいというのなら、俺は1人で行く」

「お主たちがどれほど強いかは知らんが…、この場所は危険すぎじゃ。40m級が普通に出現するんじゃぞ？しかも沢山」

「それくらい突破してみせる」

「無理じゃ。政府の助けがあればもしかすれば可能性はあるかもしれないが、あやつらとして自分たちの戦力を削りたくはないはずじゃ。お主にそれだけの価値はあるのか？」

価値は…、おそらくある。

レアの話が本場で、行方不明者が1人も出てきていないのなら政府はのどから手が出るくらい正影がほしいはずだ。

それに穂香もいればなおさらだ。

だが、ここでそれをこの人たちに教えるのはあまりよくない。

「妹に会いたがってるただの旅人だぜ、俺は。価値なんてないな」

「ならやめておけ。犬死じゃ。もし行く当てがなければここに残っても構わんのだぞ？」

「長老。心配してくれるのはありがたいが、俺はもう決めてるんだ」

「…そうか。お主が行きたいというのなら行けばよい。ワシらにお主を止める権利はないからの」

「分かってくれて助かる。じゃあ、早速だが道を教えてもらえるか？」

「出来る限り力はおそう。お主には生きていてほしいからの」

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

道は聞いた。

「だいたいこれまで通りのペース通りに歩けば3日で例の危険地帯に、そこを抜けた後、4日で政府の拠点に着く。」

しかし、それは本当に今まで通りのペースで歩けたらの場合だ。

オウステムをいかに避けながら進むのかにかかっている。

頭の中ではイメージはできている。

だが、正影は知っている。

イメージ通りに行くことなんてあるわけがないということ。

ただでさえ、どんな型の敵が来るか分からない。

最悪の状況を考えればそれよりひどいことはないが、最悪の状況は死。

これでは考えようがない。

これだけ重要なことを悩んでいるときに限り、時間は速く進むように感じる。

「正影さん、私たちもう寝たいんだけど…」

「ん？お前ら、もういいの？」

「だって11時なるよ？もつと遊びたいけどやっぱり睡魔には勝てないや」

「11時？」

穂香の腕時計を見て初めて気づく。

11時になる5分前だった。

「もうそんな時間か。ベッドはお前らが使え。俺は寝袋使うからよ」

「ベット2つしかないよ？」

「男子と女子にでも分かれて全員で使え。無駄にでかいんだから大丈夫だろ」

『はい』

全員ベットに上っていく。

いつもはベットじゃないからなのか盛り上がっていた。

が、まだ子供。

10分もしないうちに全員が眠ってしまった。

穂香も友達と一緒に寝れたことで、安心して寝ている。

正影もすぐ寝袋に入った。

地面が木の板で整備されていたので思ったよりは寝心地がいい。

正影もすぐに眠りにつく。

その眠りは2時間で終わってしまうということも知らずに。

押火は集落の中で一番見晴らしがいいところに立っている。
見張りだ。

オウステムの襲撃にいち早く気づくためだ。

夜現れるオウステムは少ないが決していないわけではない。

「なあ、俺寝てていいか？」

ペアの男が尋ねてきた。

「馬鹿言うな。おれだつて寝たいのを我慢してゐるんだぞ」

「そうはいつても俺、暗闇は何にも見えないんだけど」

「なら音を警戒しろ。寝ないでな」

「分かった。なら俺は静かに聞き耳を立てるから、黙つてろよ？」

「いや、5分ごとに話しかける。寝てるだろうからな」

「マジで眠いんだよ。少しぐらい気を使って——」

突然やる気のない顔をしていた男が立ち上がる。

「どうした、突然？」

「何か…聞こえないか？」

それを言われ周りを見渡す。

見張り中にそんな冗談を言うやつはいないのだから緊張が走る。

何かが走ってくる音がした。

双眼鏡を使い、あたりを見渡す。

「何の音だ？」

「イノシシの群れなら大歓迎なんだが…」

押火が鐘をたたたく棒を持ち出す。

「オウステムか!？」

「長老の家とは真反対のほうだ。あの数はやべえぞ！」
けたたましい鐘が鳴り始める。

「なんだ!？」

鐘が鳴り始めて5秒、正影が目覚める。

はじめは夜中にまた子供が起きたのかと思っただが違う。

確実に警報の類だ。

子供たちを寝かせたままにし、仮宿を抜け出す。

音がするほうに行くですでに何人か集まっている。

「敵集か!？」

「要塞《アルツエ》の方角からだ! オウSTEMの群れ、型は蟻だ」

「群れ!？」

「異常な数だ! ざっと見た感じは50。どれも小型だがあれだけの数を――」

「私に行きますよ?！」

静かに口を開いた。

その人の名前は那倉。

長老の付き添いの人だ。

「しかし、あの数を1人では……！」

「長老、心配するな。俺も行く！」

「何を言っておる！プロトでもないお主が言ったって犬死じや」

「だけど、那倉1人で行ったって勝てるわけない！それなら俺は少しでもみんなが生き残れる可能性がある方を取る！」

「時間がありません、私は行きます！」

制止する暇も与えず、柵をこえていく那倉。

正影は柵の隙間から群れの様子を見る。

距離はおよそ300m。

あまり時間はない。

「くそ！あと1人でも戦えるやつがいれば……！」

「俺が行く」

正影が話し合いに参加する。

「俺にだって戦う力はある。これでも戦闘訓練を受けていた身だ」

「だが、お主にこれ以上迷惑をかけるわけには……」

「ここで無駄な言い争いをして、被害が出てしまったほうが迷惑だ。俺は行く」
「じゃが、お主を含めてもプロトは2人。あともう1人とは言ったが死ぬことだってあるやもしれん」

「俺はこの集落の人間じゃない。だから好きにやらせてもらおうぜ」
それを言うのと正影は柵を飛び越え敵陣に突っ込んで行った。

~~~~~

「ふんー」

蟻の体が破裂したかの如く、弾けどぶ。

だが、それはたった一匹。

約50の大軍をもつ4、5mの蟻（オウステム）の前ではほとんど意味をなさない。  
こちらに攻撃してくる敵が5匹、後は出来る限り那倉を避け集落へ向かっている。

「このままじゃ……」

焦りを感じたそんな時、救世主はやってくる。

集落に向かっていくオスたちの足が一斉に止まる。

那倉が異変に気づき集落のほうを見ると1人、人が刀を持って立っている。

「正影さん！あなた、プロトだったんですか？」

「那倉さん、だったな。それは動物持ってきた時点で気づいてたろ？」

「はい。です…が！」

話しながら那倉はオスを一匹倒す。

正影を相手にしているオスは一匹も動こうとしない。

「あなたは一体何者なんですか？」

「俺は——」

一歩踏み込み、オスを真つ二つにする。

計3体同時だ。

「正影、ロストチルドレンの1人だ！」

それと同時にオスも再び侵攻を始める。

しかし、一匹として正影を狙ってくるやつらはいなかった。

「俺を…狙わない？」

2020年、オスは人を見ればどんな対象を相手いたとしても必ず最初に人を殺していた。

力の差が大きく、勝てないと分かっていたもだ。

だが、このオスの群れは正影に勝てないと理解したのか集落のを標的にした。奇妙だ。

「やっぱり成長していたのか…。だが！」

正影は群れの真ん中に入り込む。

そして斬る。

「強さは変わらず…だな」

正影が一振りすれば相手は死ぬ。

ロスがこんな雑魚相手に駆り出されることはまずない。

理由は簡単すぎるからだ。

今回は50匹に対してプロト1人ではきつかったから正影は出た。

相手も1体だったら正影は今頃寝袋の中だ。

那倉が5匹を倒し、正影に加勢する。

「加勢します！」

「別に必要ないぞ？これくらい雑魚も同然だ」

「ですが、あつ！」

群れから外れ集落に近づいてるオスがまばらに見える。

那倉がそれを行こうとする。

「待て」

オスを斬りながら正影が止める。

「なんで!? 集落に今戦える人はいません!」

「いるよ。1人な」

「えっ?」

「プロトでもロスでもない一般市民だけだな。ただ今練習中だから近づくと当たるかもだぞ?」

「どういう——」

言いかけたところで銃声が聞こえる。

~~~~~

「当たった!」

「なんだ、坊主。やるじゃねえか!」

「坊主じゃない! 私は女の子」

「分かった分かった。ほら、早くしないと、次が来るぞ?」

「分かっている!」

構えて再び撃つ。

当たった、が、動きを止めない。

「ちゃんと核を狙え！でないと意味が——」

「大丈夫。さっきのもまぐれだと思っただの？」

動いていたオスが突然倒れた。

「おお？何したんだ？」

「これには毒がついてるの。もともと銃は痛みをものもしないオスには意味ないから使われにくい。スナイパーだつてコアを遠くから狙えるって言う利点はあるけどコアが見えてなきや、何発撃つたらいいんだか分からないしね」

「つまりあいつは生きてるのか？」

「10分もすれば動き始めると思う。あくまで即効性に優れた毒だから」

「ずいぶんよく知ってるな？本当に一般市民か？」

「全部正影さんから教えてもらったことだから。私なんてまだまだ」

~~~~~

「…あの子もロスなの？」

那倉は驚いている。

無理もない。

ロス是全滅したとかなり前に知らされたはずなのだから。

「残念ながら違うな。あいつは俺の仲介者《メディアートル》だ、しかも一般人」  
「ロスのメディアートルになるとあそこまで強くなれるのね…」

正影が武器を持っているところを見て、ロスというのは信じたようだ。

正影の周りにはオスの死体が沢山転がっていた。

生きているのは毒で動けなくなっているのを含めても残り10匹いるかいなか。

「残り8!」

正影が集落に向かうオスを同時に2体斬る。

今回は逃げるオスはいないようだった。

「7!」

「6!」

いつの間にか那倉もカウントしている。

「5!」

「4!」

そこまで斬って気づいた。

他に動いているオスがいない。

「…やっちまった」

「3！つてどうしたの？」

「いや、俺の予定だと最後の一匹だけが動けない状態でサクツと刺して終わりだったんだが。なのに…」

「全部止まってますね？」

プロトだからなのか生きているオスの見分けはつくようだ。

「2！じゃ、私がラスト一匹残すのでそれを刺すのは？」

「…その案を採用」

「じゃあー！」

オスがはじけ飛ぶ。

正影は残った最後の一匹の前まで来た。

そしてただ刺した。

真つ二つにするのではなくただ刺した。

「0」

「…。あの、正か——」

「お願い、ツッコまないで」

かっこよく決まった…はずだった。

しかし、正影は刺した瞬間に間違いを犯したと気づいた。

(コアの場所…、わかんねえ)

しかし、時すでに遅し。

刺してみたが神様は微笑まず、結局コアを売るために取り出すということに頑張つて解剖をしたという、残念な最後を迎えたのだった。



## 呼び方

オスの群れを退けたその日の朝、正影は集落の出口にいた。

穂香も一緒にいる。

「…本当に行つてしまうのか？」

「ああ。世話になつたな」

何人か見送りに来ている人がいる中、長老と話す。

長老としては正影に残つてもらいたいようだ。

「世話になつたなんてとんでもない。お主らがいなかったら今頃ここは全滅してた」

「あんたらはここに残り続けるのか？」

「もちろんじゃ。ここ以外に行く当てもないからの」

|||||

く群れ撃退後く

「お主ら、ロスだったのか？」

「俺だけだ。あいつはロスでもプロトでもないよ」

外にはオスの残骸が転がっており、ところどころで人がコアを取り出そうとしている。

撃退後、専用の武器を使っていたことはバレバレだったので正体がばれた。

「以前、全滅したと聞いたのじゃが…」

「俺もそれはつい1週間前に聞いた。だけどまあ…」

「なんじゃ?」

「いや、何でも無い。それより1つ聞く。何でここに残る?」

最初はたいして疑問に思っただけでいかなかったのだがやはり聞きたい。

このあたりに他の集落はない。

理由は簡単。

近くにオスが発生しやすい地帯があるからだ。

そんな場所に集落を構えている。

はじめは歩いて3日もかかるから離れているのかと思っていたが、今回のやはり疑問が膨らんだ。

「どういう意味だよ?」

「押火、お前なら特にわかってるはずだ。ここは危険すぎる」

「…」

「ここから歩けばオスが頻繁に出現する地帯まで3日。はじめは3日もかかると思っていたが、たった3日だ。オウステムからすれば1日かからない奴もいる。なぜ、もつと離れたところにしない？」

「…」

「プロトが沢山いるならわかる。だが、今は那倉さんたった一人。危険だ」

「すまねえ、俺の口からは…」

長老のほうを見る。

言いたいことがあるようだが、話そうとしない。

「いや、言いたくないならいいんだ。あくまで忠告に過ぎないからな」

「申し訳ないの」

「だが、もう一つ疑問がある。那倉さん」

話を振られ顔を正影のほうにむける。

顔にはオウステムの返り血がついており、見る人からみれば恐怖を感じさせた。

ちなみに、オウステムには血が通つてるといえないものがある。

通つていないものが生きていうことはわざわざ血を作らなくてもいいはずなのに、血が通っている奴がいる。

理由は不明だ。

「なんですか？」

「あなたはプロト。言っちゃ悪いがここに残る意味はないはずだ。今でこそおそらく政府の拠点には帰れないだろうが、はじめのうちは帰れたはずだ。違うか？」

「…ええ。確かに以前なら帰れました」

「なら、なぜ？」

「長老は…私の父です」

これを聞いて正影はだいたいの理由を理解した。

しかし、ここで疑問が浮かぶ。

「…あなた失礼ですが、年齢は？」

「私は20です。父は93です」

長老が93歳。

とてもそういう風には見えなかった。

間違いなく見た目は80歳は過ぎているように見える。

しかし、それはおかしい話だ。

アクリス細胞に感染した人は25歳前後で体の成長（老化）が止まる。

それ以上の年齢だったらその時点で止まる。

長老は見た目が80で、甘く見積もっても70はいってる。

アクリス細胞によって身体能力が向上したとはいえ、寿命はほとんど変わっていない。

普通に考えれば130は軽く超えている。

ギネスは間違いない年齢になっているだろう。

「ありえないと思っっていますね。ちなみに私は養子です」

「それは大した問題じゃない。その見た目、どう見ても80は過ぎてる。実年齢が計り知れないことになってるぞ」

「そういう病気なんです」

「なに?」

「いえ、病気というより普通だったというべきでしょうか。父はアクリス細胞が体にあるにもかかわらず、老化が進みました。結局80過ぎあたりから老化は止まりましたが」

レアに続きアクリス細胞による欠陥だ。

はじめこそ万能と言われた細胞だったが、完全な物はこの世に存在しない。

地球上すべてのアクリス細胞にかかった生物の身体能力は上がったが、このように特例もあった。

「そうか。気の毒だったな」

「正影さん、もしかして私がここに残った理由とこの現象、関係ないと思ってます?」  
「あるのか?」

「…父はこの病気のせいで研究機関に呼ばれてたんです。私は嫌でしたが、父はその機関に行こうとしていた。そんな時に、首都が攻撃されました」

そこからは予想できるでしょ?と言つて話さなかつた。

おそらく、そのあと彼女たちは政府の拠点に逃げようとした。

しかし、その時の長老の年齢は80過ぎ。

体の老化がようやく止まったところで、筋肉等はアクリス細胞で強化されているといつても無理があつた。

それでも必死に目指した。

だが、その途中で危険地帯の壁にぶつかったのだ。

「私は父が大好きです。ですから私一人だけ逃げるなんて絶対しない」

「そんな決意があつたのか…」

「ワシとしては、この子だけでも幸せになってほしかつたのじゃが」

「父さん、私は今でも十分幸せです」

「そうかの…」

この時の那倉の顔からは恐怖は一切感じられなかった。感じられたのは父に対する愛情と、優しき。

長老がやりきれない顔をする。

責任を感じているのだろう。

自分をもっと早く動ければ今頃政府の拠点にいて、那倉は平和に暮らせていたはずだと。

正影がその場を離れる。

「どこに行く?」

「俺はこういう空気、家族愛的なものがどうも苦手だね。疲れたし休ませてもらうよ」

「そうか。なら止めないが…:明日本当に発つのか?」

押火としても正影には残ってほしいようだ。

当たり前だ。

こんな人材、世界中どこを探してもおそろくない。

「ああ。そのつもりだ」

「考え直してはくれないか?」

「…妹が待っている。悪いが無理な話だ」

それを聞くと押火はそれ以上何も言わなかった。

「妹さんに会えることを願ってるよ」

「どうも。穂香、行くぞ」

子供たちと感動の別れを済ませた穂香が正影に近寄る。

せつかくできた友達と一日も一緒にいられないなんてやつぱり酷な話だ。

正影は思っていたことを尋ねる。

「穂香、本当にいいの？残りたいならお前だけでもここに…」

「何馬鹿言ってるの、正影さん。家族が離れ離れなんて笑えない冗談だよ？」

「家族？俺がか？」

「当たり前。正影さんはどう思ってるか分からないけど私からみれば大切な家族だよ」

正影はやれやれとため息をついた。

しかし、その顔は笑っていた。

「どうしたの？」

「いや、お前もつくづくアホな野郎だなと思ってな」



「なんでよ？ おかしいこと言った？」

「危険な道に自分から進んだんだ。十分アホだよ」

「そこは『ありがとう』って感動するところでしょ！」

跳ねながら講義する穂香をなだめながら長老の方を向く。

「じゃ、行くよ」

「気をつけてな」

「また会えるさ」

「お主は危険地帯を往復する気か？」

「いや、あんたたちがこっちに来るだろうよ」

驚きの顔をする長老。

自分たちのここに残る真意が読まれたのかと気づいた。

おそらく、正影が政府の拠点についていた場合それは実現するだろう。

「それまで頑張れよ」

「期待して待つとするよ」

「おう。じゃあな」

正影は再び政府の拠点を目指すため、歩き始めた。

歩き始めてすぐ、正影が口を開いた。

「…穂香」

「なに？」

「ありがとうな」

一瞬、驚いた顔をした穂香だったがすぐに笑顔に変わる。

「どういたしまして」

何にもない砂地と平原が広がり続ける。

その地を歩き続けた。

~~~~~

「今日はここまでだな」

日が落ち始めたころ、正影は足を止めた。

長老から教えてもらった道のおかげでなんの障害もなく、進めた。

結果は予想以上だ。

「お腹すいた〜」

「どれがいい？」

「カレー！」

「お前は本当にカレーが好きだな…。だが諦めろ」

「分かっているよ。でも正影さんの行きたいところにつけば食べられるんですよ？」

「そうだな。それまでは我慢だ」

「はい」

しゃべりながらテントの設置を進める。

1日建てなかったからといってできなくなることはない。

スムーズに済ませて火をたく。

今日のメニューは栄養補助食品と干し肉だ。

「干し肉なんて持ってたっけ？」

「貰ったんだよ、長老から。野菜とかもくれると言ったので貰ったが…」

あいにく、正影に料理のスキルなんて皆無だった。

肉は焼けば食べれるからと、多少は知っていたのだが野菜なんて料理したことない。

「ていうか、鍋とかそういう類のグッズも持ってないしな」

「それはそこらへんの岩砕いて作れば？」

「熱の通しやすさとかいろいろ問題あるだろ。まあ、いくつか生で食べれるものもある

けどな」

そういいながらきゅうりを取り出した。

穂香は不思議そうにそれを眺める。

「それ何？」

「見たことないのか？」

「私、都市が襲撃に会った後生まれたから野菜とはあまり見たことないの」

「きゅうりっていうんだ。野菜は食べてこなかったのか？」

頷く穂香。

まあ、確かに都市があんな状態で野菜なんて手に入るはずがない。

アクリス細胞がなければ栄養失調で死んでいただろう。

アクリス細胞がなければオウステムもおそらく存在しなかったはずだが。

「食べてみろよ」

「どうやって？」

「どこでもいいから噛り付け」

不思議そうに眺めた後、噛り付いた。

シャキシャキといい音が鳴る。

大した設備もないはずなのにあの集落は大したものだ。

「どうだ？」

「…あじうすーい」

「栄養補助食品とかそういう類をよく食べてきたからだろ。それが野菜の生の味だ」

「ふーん」

味が薄いといいながらも食べ続ける穂香。

さりげなくおいしいと思っていたのかもしれない。

「ならこれでも食べてみる。味がちゃんとするぞ」

そういいながらピーマンを取り出した。

「また緑？」

「ほら」

手でちぎり一口サイズにしたピーマンを渡す。

穂香は何にも考えずそれを口に入れる。

最初は普通に口に含んでいた穂香だが、顔がしかめっつらになる。

「にがーい…」

「だろうな。普通、それは生で食べないぞ」

「ひどいよ、正影さん」

「味はあつたら？ほらまだあるぞ？」

「食べないよ！」

ふいっとそっぽを向いてしまった。

それでもきゆうりは手放さないのでが。

「悪かったよ。ほら、代わりにこれやるから」

リンゴを取り出す。

おいしそうには見えるが残念ながら甘い香りはしない。

さすがにそこまでうまくは作れないようだ。

「さっきの今で信じると思う？」

「なら、俺が食うぞ？」

「いいよ、別に。私にはこれあるもん」

「じゃ、お言葉に甘えて…」

リンゴにいかじり。

正影自身、リンゴを食べるのは久しぶりだったがやはりうまい。

リンゴのこのちようどよい甘さが何とも言えない。

匂いがしなかったのでもずいのかかと思っていたが十分な甘さを持っていた。

「いや、うまいな。リンゴは」

中が見えたせいか、甘い匂いが少し漂う。

穂香がチラチラとそれを見る。

しかし、ほしいとは言わない。

さつき自分が断つたので、言いづらいのだ。

「これなら全部食べられちゃいそうだなあ」

「そんな……！」

食べたいという意思を表に出してしまったことに気づき、穂香が顔を赤くする。

「まったく、お前は会った時と全く変わってないな」

「会った時？」

「イノシシの肉をお前との交渉に使ってた時だよ。今のセリフ、全く同じだったぜ？」

初めて会った時を懐かしむ。

まだ1か月もたつてないのだがそれ以上に前に会ったような気がする。

本当に濃い10日ほどだったのだ。

「ほら」

リングを投げて渡す。

きゅうりを口にくわえたままリングを手でキャッチした。

甘い匂いがしていたからか、何の迷いもなくリングにかぶりつく。

「…おいしいー！」

「だろ。あともう一つしかないからかみしめて…」

正影の言葉を聞くことなくどんどん食べ進める。

アツと今に芯のみになってしまった。

「おかわり！」

「食料が勿体ねえよ。また明日だ」

「え〜…」

「きゅうり一本にリンゴ。それに栄養補助食品だぞ？十分だろ」

「はい」

「よし。食べ終わったら寝るぞ。明日からは寝れないかもしれないからな」

「どういうこと？」

実は今の正影としては今日からでも寝ないで過ごすべきだと思っている。

危険地帯に近づいているのだ。

人が通れば必ずオスが現れるという危険地帯に。

だが、今日はあいにく昨日の夜戦のせいで、眠い。

ならば今日は寝て、明日からに備えるのが一番だろう。

2人いれば交代で見張りを立てるのだが、穂香は子供。

そんなことはさせたくない。

「私も交代で見張るよ？」

「馬鹿言うな。昨日、睡魔には勝てないって言ったばかりだろ？」
「う……」

「子供に夜の見張りなんてさせねえよ。3日くらい寝なくても行けるさ」
「でも……」

穂香としても自分がお荷物になるのは嫌なようだ。

何かの役に立ちたいらしい。

「…分かった。ならお前は明日から10時まで見張りをしてくれるか？」
「10時まで？」

「1時間も仮眠できれば俺もかなり楽になる。だから、な？」

「わかった！」

明るい顔をして返事をする。

役に立ててうれしいようだ。

「さっ、もう寝よう。明日からは眠るのが遅くなるしな」
火を消し、テントに入る。

「ベッド、寝心地よかったなあ……」

「それもあつちにつけば叶うぞ」

「本当？」

「ああ。だから後になれば寝袋もよかったなあつて思えるかもな」
「それはないと思うけど…」

穂香は寝袋に入った。

正影のだが。

「お前は自分の寝袋を広げることすらしなくなったな」

「結局こうなるんだもん。いいでしょ？」

「俺は構わないけどよ」

正影も入り、眠る準備をする。

最近狭いこの空間にも慣れた。

「正影さん、おやすみ」

「おやすみ」

…。

「ねえ、正影さん」

「お前からおやすみって言っただはずなのに、まだ10秒も経ってないぞ？」

「お願いがあるの」

「なんだ？」

珍しいわけではない。

穂香がお願いをするのは。

別に無理難題を押し付けてくるわけじゃないのだからたいいは聞ける。

「…その、パパって呼んじやダメかな？」

「唐突だな。なんでだ？」

「昨晩の那倉さんを見て、羨ましくなって…」

穂香は自分の父親の顔も名前も知らない。

記憶があるころにはレアが保護者だった。

そんな子が親をほしがる。

「レアさんのいたころはレアさんを母親として接していた。でも、父親の変わりはいなかったの」

「…」

「別にそのことを何とも思ってたわけじゃなかったけど、那倉さんを見て…こみあげてくるものがあって」

「…」

「ダメかな？」

父親代わりになる。

別にそんなたいそうなものじゃないだろう。

穂香はもしかしたらただ、呼んでみたいだけなのかもしれない。

「…俺は15だぞ?」

「年齢なんて関係ないよ。それに正影さんは十分私の親といってもいいほどのことをやってる」

「した覚えはないぞ」

「いや、私のことをとても気にかけてくれてる。私は正影さんならパパでも構わない。むしろ嬉しい」

正影として当然のことをしてきただけだった。

だが、穂香にとっては違ったようだ。

「…分かった」

「いいの?」

「好きにしろ。パパでもお父さんでも何でもいい」

「ありがとう!」

穂香の笑顔。

何度見たかは分からないが、何度見ても軽いものとは感じられることはなかった。

「じゃ、さつそく。おやすみ…パパ」

「おやすみ」

2人は寝た。

最初に寝たのはもちろん穂香だった。

正影がふと見たその時の穂香の寝顔はとても嬉しそうだった。

強敵襲来

正影たちは歩き続けている。

永遠と続くのではないかと考えられるようなこの砂漠地帯を。

生物はこの2人以外見当たらない。

オウステムもだ。

「…。パ、パ、暑いよ」

「知ってる。だがどうすることもできねえよ」

ここがもともと暑い場所なのか、はたまた運悪く今日が暑いのかは分からない。

太陽がじりじりと照りつけているとはこのことを言うのだろう。

服は汗びっしょりでどこかで水浴びがしたいところだ。

「ここってどこら辺？」

「レアさんが言ってた、危険地帯まであと20キロつてところかな。このままのペースで歩き続ければおそらく今日中にそこまで行けると思うが…」

「私水が飲みたい」

「同感だな。どこかに飲み水はないものか」

アクリス細胞によって強化されていてものの渴きはある。

もともと大半の生物とは水なしに生きていけない。

それが人間となればなおさらだ。

もともと日本にこんな場所はなかったのだが、オウSTEMに荒らされて人が住めずになつてしまった。

しかし、いくらなんでも草一つ生えてないのはおかしいのではないかと正影は思う。

「見た感じは…何も見えないよ」

「そりや危険地帯の近くだ。住んでいる奴のほうがおかしいさ」

「お水もしばらくおあずけ？」

「いや、調達できないこともないんだが」

「本当？」

「お前はおしっこをろ過したものを飲めるか？」

「ぜつつつたい無理！」

命の危険となればこれを飲むのは仕方ないことなのだが、今はそれほどまでじゃない。
正影自身も言つてはみたものの、ろ過してきれいになつたからといって確かに飲みたくはない。

「なら、辛抱だな。あの地帯を越えるのは明日だ。我慢するしかないだろ」

「はあ…。こんなことなら水をたくさん持つてくるべきだったなあ」

「重いから沢山は無理だったろうよ。まあ、きゆうりとかの野菜でも食べて水分補給するしかないな」

「じゃあ今食べる」

「一本しかないぞ?」

「喉乾いたの!」

ねだつてきたので上げることにした。

夜食べたほうがいいのにとおもうがおそらく穂香はそんなことは聞かないだろう。

貰ったとたん、すごい勢いで食べ始める。

あつという間になくなった。

「はあ、少し生き返った…」

「なら歩くぞ。さすがにここで止まると明日面倒だからな」

「はあい。じゃあパパ、おんぶして」

「お前、パパと呼ぶようになってから図々しくなっていないか?」

「だつて甘えたいじゃん」

正影としてはしてあげたいのはやまやまだが、ここでそんなことをしてはオスに備え

られない。

突然の強襲があれば命を落としかねないのだ。

「ダメだ。ここじゃ危険すぎる」

「ぶ〜…」

「それもあつちについたらやってやる」

「本当？」

「ああ」

「じゃあ早く行こうよ！」

穂香が走り始める。

よほどうれしいことなのか体がうずいているのだろう。

「そんな走ると喉乾くぞ？」

「大丈夫だよ！早く早く！」

穂香は今は仲介者《メディアートル》だ。

メディアートルになれば肉体強化ができる。

それぞれが強ければ強いほど上がる能力値も高い。

ただの一般市民だった穂香もこれのおかげで身体能力が上がっている。

しかも、相手がロスである正影なのだから能力の上り具合が半端ない。

1が100以上に一気に上がったようなものだ。

穂香の身体能力の上昇具合は本当に極端だった。

だが、正影の身体能力の上昇値は微々たるものだった。

100が101になったようなものだ。

確実に上がってはいるがほとんど変わりがないのも事実。

だから穂香が走り始めると正影も捕まえるのが一苦労なのだ。

無視するというわけにもいかず毎回追っかけて捕まえる。

「後が大変だぞ、頼むから走るのをやめてく…れ？」

しかし、今は違った。

疑問が浮き上がるほど穂香の走るスピードが遅い。

簡単に捕まえられた。

「きゃー！パ。パ。速くなったね？」

「…お前、加減してたんじゃないのか？」

しかし、穂香はそんなわけないじゃんと言う。

顔からしておそらく嘘はついていない。

ならなぜ足が遅くなったのか？

穂香自身はまだ気づいていないようだ。

「穂香、お前——」

突然、正影の言葉を遮るかのように地響きが起きる。

地面がズシンと下がったかのような錯覚に襲われる。

「なっ、なんだ？」

あたりを見渡すが何も見当たらない。

しかし、何か地面を走ってきているような地響きはする。

なのに何も見当たらない。

（カメレオン型のオスでもたつていうのか？でも足跡のような何かも見当たらない。いったい何が？）

「ま、正影さん。これは一体……？」

「黙ってる。敵がいるのは間違いない」

穂香も何が起きているのか分からず、正影をパパと言わないで正影さんと言っている。

音ではなく地響きであるため、どこが発生源なのか分かりづらい。

だが、地響きはだんだん大きくなりつつあるのは分かる。

確実に敵が近づきつつある。

（くそ！だめだ、全然分らない！）

1秒が1分にも1時間にも感じる。

地響きはする。

だが、相手は見えない。

絶体絶命と言っても過言ではない。

と、地響きがぴたりと止まる。

奇妙な静けさが砂漠に漂う。

「正影さん、これは…?」

「いなくなっただと思いたいが、警戒し——」

ドドドドドドドツ！と直線的にすごいスピードで動く音がする。

真下から。

その瞬間正影は敵の場所を理解する。

「穂香！」

「えっ?」

穂香の手を引っ張り、正影がその場を離れる。

すると1秒という間も空けず、地面が盛り上がる。

そこからワーム型のオウシステムが出現する。

口には牙が生えており、どこかのゲームや漫画で見たことあるような姿。

ワームは宙に上り5秒ほど空中でうねる。

大きさ：いや、長さは30mほど。

それほどの巨体が宙を舞ったのだ。

身体能力が計り知れない。

「穂香！逃げるぞ！走れ！」

「う、うん！」

おそらくこの砂漠に生命が一つも芽生えない原因がこいつだと理解する。

地上に現れる生き物をむさぼりつくしているのだ。

正影は草を食べるオスなんて聞いたこともないのだが、雑食ならありなのだろう。

いつもなら全速力で逃げるところなのだがここで問題が発生する。

穂香の足の速さが遅いのだ。

「穂香！もつと速く走れ！」

「分かってるけど、なんでか、これが限界で……！」

正影は穂香をおんぶする。

この状態では満足に戦うことはできないが、穂香に合わせるより速く走れる。

オスはすでに地上にはいなくて地響きが聞こえる。

少なくとも諦めてくれたわけではないようだ。

正影はただ走るしかなかった。

穂香をおんぶした状態で無敵時間がある敵に勝つのは不可能だ。

しかし、相手の方が速度が速かった。

5mほど離れたところから飛び出て正影たちを食べようとする。

「うおおおおお！」

前に飛び込む形で何とか相手の攻撃をよける。

その攻撃はかわすことはできたがこれではいくつ命があっても足りない。

型はおそらくミミズ。

しかし、ミミズにあれほど危ない牙なんて存在しない。

進化していく過程で狂暴になったのだろう。

(たいてい目が退化してる場合、音で判別するはず…)

正影はジェスチャーで穂香にしゃべらないよう合図をする。

そしてカバンの中からきゅうりを取り出し地面に音が鳴るように投げる。

正影の腕でなら結構な音が鳴る。

黙って待っているとすぐにきゅうりがあったところにワームが垂直に飛び跳ねる。

まじまじとオスを見る。

そして驚いた。

色は茶色。

見た感じはワームのくせにかたそうな皮膚をしている。

足や羽が生えてるわけではなく、普通に見えた。

一つのことを除けば。

それは目。

ワームの体に一定距離ごとに点在する大人の握りこぶしほどある大きな目。

体中に存在し、それぞれが違う方向を向いている。

正影は攻撃するつもりだったがその目に驚かされ出遅れてしまった。

一つの目が正影たちをとらえる。

すると無数に点在する目がすべて、正影たちの方を向く。

正影が再び逃げに転じようとする。

「穂香、逃げ——」

銃声が響き、跳んでいるワームを的にする。

バチユツと弾ける音がし、オスの目が一つ潰れる。

それと同時にオスがバランスを崩した。

「ギイイイイ、チチチチツチイチチチ！」

叫び声を上げた後、体中から声のような音を鳴らす。

正影は逃げるのをやめ、地面に落ちた無防備なオスを見逃さず追撃する。刀を取り出し、オスに一太刀入れる。

「ギユウウ、ギギギイイギイギギギ!!」
痛みに悶え、オスが体をうねる。

正影が入れた一太刀は、オスを切り落とすことはできず途中で止まっていたため投げ出される。

うねるだけで、そこらじゅうの砂が飛び散り、軽い砂嵐が起こる。

正影はすぐに体制を立て直し、刀を構える。

穂香は依然、銃を構え撃ち続ける。

的が大きいこともあり、1つも外すことなくオスに命中する。

再びオスが地中に身を隠す。

こうなつては正影たちに攻撃する手段はない。

「穂香!逃げるぞ!」

「なんで!?!音を出さなきゃあいつは私たちの場所が分からないはずでしょ!?!」

「目があったの見たろ?あれがあるのに使わないはずはない!おそらくここにいれば食われる。音を出さずに移動できれば簡単に逃げ切れるが今は無理だ!」

地中にいるくせに目があった。

つまり外に跳びあがった瞬間に相手の位置を確認しているのだ。オスには知能があるものもいる。

相手の位置を確認するということは記憶能力があるということ。

そんな奴が行き当たりばったりで攻撃するはずがない。

きゆうりはおそらく一回目だったからうまくいったのだ。

2回目はない。

正影は再び穂香をおんぶする。

身体能力は下がっているが、専用の武器は出せるようだ。

穂香を乗せ、走り続ける。

まだ地響きはする。

近くにいるのだ。

警戒しているのか、傷をいやすため逃げようとしているのかは分からない。

ただ、正影は走り続けた。

逃げるために、生き残るために、妹に会うために。

~~~~~

1時間ほど走り、正影はようやく足を止めた。体から汗が吹き出し、体は水を求めている。

「ハッ、ハッ……」

「正影さん、大丈夫!？」

「ああ……。なんとかな」

座り込み、体を休める。

適当に走ってしまったため、今どこにいるのか分からない。

穂香に地図を預け、場所の確認をさせる。

しかし、正影としては想定外だった。

たった30m級。

正影なら、穂香の身体能力が下がっていても一体なら余裕な相手だったはずだ。

だが、今回の相手は確実に分が悪かった。

少なくとも2020年までに、あんな形のオスの出現報告はない。

「オスも、進化しているのか…」

正直絶望していた。

あんな風に進化できるのならどこにも安全地帯はないのではないかと。

正影の感想としては今まで戦ったオスの中で一番強かった。

地中にもぐることでほとんどの攻撃を無効化する。

初めて敗北を実感した。

あいつを2体同時に相手すれば勝てないのではなく、死ぬのが明白だ。

もし危険地帯であのタイプが沢山出現したら…

「ぱぱあー場所分かったよー」

穂香が戻ってきた。

なんだか焦っているように見える。

「どこだった？」

「それが…、ここあたりに」

穂香が地図のある一か所を指す。

正影は信じられずしばらく時間が止まったように感じた。

「…嘘だろ？」

「ううん。あそこの小さい砂丘を登ればすべてわかるよ」

穂香が指さした方の砂丘に向かって歩く。

体は悲鳴を上げていた。

だが、それ以上に確認しなければならぬと脳が言っていた。

砂丘を登り、愕然とする。

「…」

そこから見えたのはある建物。

いや、乗り物。

大きな豪華客船だ。

どうやって運ばれたかは不明だが、豪華客船は意味する。

「ここから先は危険地帯だ」と。

正影はオスが必ず出現する危険地帯まで走ってきていたのだ。

逃げるために使った火事場の馬鹿力は悪い方向にも働いていた。

## 発見

「冗談だろ……」

正影は立ち尽くしていた。

彼らは今危険地帯の手前に立っているのだ。

つまり、いつ敵が現れてもおかしくない。

たいていの敵なら、この状態でもなんとかなるがもし、さっきのようなタイプが来たら……。

「パ。パ……。どうする？」

穂香の疑問は最もだ。

だが、正影はどうすればいいか分からない。

ここで立ち止まっていれば敵が来ないと分かっている。間違いない。

だが、その保証はない。

もしかするとあと10秒後に、1秒後に、または既に出現しているのかもしれないのだ。

あまりに危険すぎる。

「…穂香、調子はどうか？」

「えっ？…体は変わらないけど、武器はちやんと出るよ」

試しに拳銃を取り出す。

武器は出るが身体能力があつた時と同じようになっていたのだ。

これはどういうことか？

メデイアトールの効果が切れたのか。

「…穂香、腕を出せ」

「うん」

腕を出す。

意図は分かっているらしく、袖をまくった。

サバイバルナイフを取り出し、以前と同じことをする。

穂香から血を取り出し、正影はなめる。

自分の腕をつねり、血を取り出し穂香に飲ませる。

前と同じく苦い顔をした。

「どうだ？」

「…地面叩いてみても大丈夫？」

「ああ。多分あいつはいないはずだ」  
深呼吸をする。

ただ地面をたたくだけ。

それだけのことなのに今までにない緊張。

力が戻っていれば間違いなく、結構な音がし砂煙が上がる。

「…えい！」

拳を振り下ろした。

聞こえたのはぼすつという音。

砂煙も上がらない。

「…」

ここで正影は選択を迫られた。

このまま突っ切るか、体力を戻してから進むか、死ぬか。

集落に帰るといふ選択肢はない。

理由はあのワーム型のオス。

おそらく、今戻って戦った場合正影は死ぬだろう。

あいつと穂香を守りながら戦うのは不可能。

でも、進む場合は急がなければならぬ。

いつ穂香が専用武器も使えなくなるか分かったもんじやないからだ。

ただの一般人となった場合、この場合も正影は助かるかもしれないが穂香は死ぬ。

つまり、2人とも助かるには今行くしかない。

「…穂香」

「大丈夫だよ、パパ。私はいつでも行ける」

身体能力が下がった穂香は今、かなり死に近づいている。

それを知りながら、穂香は構わないという。

ここでいつもの正影ならおそらく止めていた。

だが、今彼に選択肢は残されていなかった。

「…すまない」

「何言ってるの。私の能力が下がってる理由は分からないけど今行くのが最善策なんだよ？。パパは何も悪くないよ」

そう。

これが最善策。

死ぬ確率は限りなく高い。

でも最善策だ。



正影は覚悟を決めた。

刀を取り出し、穂香をひもを使って自分の体にくくりつける。  
もちろん集落でもらったものだ。

こんな形で使うとは夢にも思っていなかった。

「穂香、落ちそうじゃないか？」

「大丈夫！これで私は撃つことに専念できるよ」

スナイパーを取り出し笑顔を見せて構える。

しかし、身体能力が下がってしまった穂香。

スナイパーの反動に耐えられるはずはない。

「穂香、ハンドガンの類にしろ」

「えく…、それじゃオスは倒せないし足止めにもならないよ？」

「スナイパーを使ってみる。間違いなく反動に耐えられず照準が定まらないぞ？」

指摘されて穂香も黙る。

穂香自身も分かっているのだ。

「分かったなら頼むぞ」

「…うん」

ハンドガンに持ち物を変える。

人に対しては十分な殺傷能力を誇るがオウSTEM相手ではほとんど意味をなさない。既存の銃よりははるかに高い殺傷能力を誇るがそれでも届かない。

3, 4 m級だつてコアに当たらなければ何十発、何百発という球を要する。

正影は穂香が落ち込んでいるのを感じ取っていた。

だが、何もできない。

だから話しかけなかった。

ただ歩き、危険地帯へと近づいていく。

(すまないな、嬉々…)

死をも覚悟した死闘がはじまろうとしていた。

---

正影が歩き出し、危険地帯へ近づきつつあるときある指令室で動きがあった。規則正しく並べられたコンピュータの前にオペレーターが座っている。

オペレーターたちはあわただしくパソコンも前でキーボードを打ち続けている。

一番奥の壁には大きな画面が1つあり、画面に「Emergency」と赤く、でか

でかと映し出されている。

1人、上官と思われる女が入ってくる。

入ってくるると同時に指揮を執っていたと思われる女が駆け寄る。

「一体何事だ？」

「アクリス菌反応が出ました。場所はペリコラムです」

「あのオス大量発生地帯か……」

上官が難しい顔をする。

アクリス菌は現在人の手にはない。

普通の人はアクリス菌に感染してもすぐ細胞が変わってしまうのだ。

今に至っては生まれてくる子どもははじめから細胞状態で保持しているので持つことはない。

「どの裏切者《プロディター》か調べたか？」

「はい。ですが今まで現れた2件とはどちらとも一致しませんでした」

「……新種か」

「おそろしく」

苦い顔をする。

さつき、「オーロワーム」が出てきたばっかなのに次はプロディター。

責任者である彼女としては問題が起きすぎだ。

「全員、こいつのものを調べろ！もしかすると進化を遂げたオスかもしれない。今まで倒し損ねたオスのデータもすべて照らし合わせろ！」

『はい！』

全員がアクリス菌保持者の特定にあたる。

「まさか、ロスを適合率30%以下で調べてないなんてことはあるまいな？」

「それは一番最初に。ですが一致したものはありませんでした」

話を聞きながらいろいろなパソコンに目を向ける。

すべてのパソコンに「Not Found」と映し出されている。

一致するものが見つからない。

莫大な量の情報があるここでも見つけられないのだ。

「…新種とみて間違いないようだな」

「いかがいたしましたでしょうか？今あちらにはオーロワーム討伐のためαチームを送っております。もしものために退却させるべきではないかと」

「しかし、オーロワームを討伐したいのも事実。あいつが発信機で探知出来る範囲に入ることとは少ない。そして今も範囲内にいる。このタイミングを逃すわけにはいかない」

「しかし——」

上官に対して何か言いかけた時、1つの画面に「Found」という文字が出てくる。

「21番！分かったのか？」

「嘘？そんなわけ…」

21番に座っている人は画面に現れた答えが信じられないのか声が届いていない。

「21番！質問に答えろ！」

もう一度呼びかけ、ようやく反応した。

「は、はい！一致したのはNo. 5の正影です」

一部がざわつくが、ほとんどが理解していない。

「No. 5？何を言っている？そんなオスの報告は聞いたことないぞ」

「いえ、…オスではありません」

「何？」

失礼だとはわかりながらもパソコンから目を離さない。

画面に「95%」と文字が出される。

「…嘘」

「どういうことだ？意味を教えろ」

「No. 5正影は…10年ほど前に行方不明になったはずのロストチルドレンです！」

部屋全体がざわつく。

ありえない話だ。

「ば、馬鹿を言うな！調べなおせ！」

「ですが、3回読み込みなおしました！でも結果は同じです！」

「…なんでお前のパソコンだけに結果が出た？」

「私のパソコンには事情があつてロスのデータが入っています。100%バージョンのデータです。3年前、他のパソコンからは消去されましたが私のには残っていたので…」

「ならデータをすべてのパソコンに転送しろ。それを見て考える」

「はい！」

再びオペレーターたちがキーボードをたたき始める。

「…司令、あり得るのでしょうか？ロスが…」

「分からん。だが、正影？という奴は行方不明者だったのだな？」

「はい。未だに死体が見つかっていない者の1人です」

やがて数々のパソコンで結果が出る。

すべてに同じ結果が出た。

21番のパソコンが壊れているわけではないようだ。

「結果は…なるほど」

司令は決めた。

「これよりロスと思われる生物の回収にαチームの作戦を変更する！オーロワームは無視し、ロスの回収のみに力を注げ！詳細は私が自ら伝える！青羽《あおば》、後は任せる」  
「了解しました」

女上官が指令室を出て行った。

「全員、できる限りの情報を集めて！カメラは近くにないけどどんなルートでも構わないわ！他のオスにも注意しながら情報を——」

「青羽室長！ロスと思われる者の近くにオスが出現！大きさ、型ともに不明です」

「こちらでも確認、敵は増え続けている模様」

「…急いだほうがいいのかもね」

と、21番に座っている真理奈がそわそわしているのが目に入る。

「21番！仕事に集中しろ」

「あつ、はい。すみません…」

近づいていく。

「真理奈、今は押さえて。もしこれで正影じゃなかったり、あるいはそいつが死んで帰ってきたらどうするの?」

「…」

「嬉々を悲しませるだけだよ。だから今は言わないで。安全が確認されて初めて報告するべきだよ」

「…はい、申し訳ありませんでした」

改めて画面に目線を戻す真理奈。

「生きて帰ってもらわなくちゃ困るわよ…!」

真理奈は自分にできることを始める。

---

一方、違う場所にあるモニタールームのようなところでも動きがあった。

「おお? 獲物が来たぞ♪」

スキンヘッドの男が喜びの声をあげる。

フラテッドはいやそうな顔をしている。

「マジか…。今時こんなところに立ち寄る奴がいるとは」



「大型発生装置《ディグネラ》を使うなんて久しぶりだぜ。どんな姿で死ぬのか見ものだ  
な」

キーボードを打ち始める。

起動の準備をしているらしい。

「フラテッド、俺は起動準備するからお前はさつきとりレグ様に報告してこい」

「…面倒だ。俺が起動準備をするからお前が行ってこい、和人《かずと》」

「お前、どうせやんねえだろ？俺にすべてやらせるなんて絶対嫌だからな」

和人はすでにここを離れる様子はない。

しかし、ここで根競べをしてはリレグに何を言われるかわからない。

フラテッドはその部屋を後にした。

「ふんふん♪こんな気分が上がるのは久しぶりだぜ」

笑顔でそうしゃべりながら、彼は起動のスイッチを押した。

## 再確認

「おおおおおおおおおー！」

後ろから爆発音のような音が聞こえる。

1つではない。

5、6つ…、まだ増え続けている。

「いないで……よー！」

さらにそれに対処するための銃の発砲音。

その音はやむことなく、常に聞こえる。

正影と穂香は走り続けていた。

危険地帯の象徴である豪華客船を抜いてすぐ、敵は現れた。

初めに現れたのはクモ型のオス。

大きさは40m級はいつていた。

これくらいなら正影も対処できた。

しかし、すぐに後ろに増援を確認。

ありえないスピードでオスが現れ、あつという間に4体もの40m以上のオスが出

現。

それでもこいつらを倒してあとは楽になるといふのなら、正影は倒していた。決して不可能ではない。

穂香が背中にいるため少しスピードは落ちているが、それだけ。

穂香がいて本気は出せないが、ロスの力を全開で使えば敵ではない。

多少時間はかかるが勝てるのだ。

だが、相手は無限に増えていく。

それでは勝つことなどできはしない。

だから逃げ続ける。

危険地帯を抜けるまで穂香が耐えられる速さでいくのもりだ。

「穂香、後ろの敵の数は!？」

「1, 2, 3…全部で9! 大きさは最低でも40mで最大60はあるよ!」

今のところ、最初を除いて後ろに出現しているのが不幸中の幸い。

足の速さに自信があるわけではないが、正影はロス。

そう簡単には追いつかれない、…はずだった。

「パ・パ! 何か来る!」

そう言われ前を確認した後、後ろを向いた。

何かがあるすごいスピードで近づいてくる。

いや、泳いでくる!?

「トビウオか!？」

それはトビウオの型を取っているオス。

しかし、あくまでトビウオなのは型だけで目は赤く体にうるこは見られない。

さつき出現した、オスと見比べると少し小さいが砂の中を水中を泳ぐようにして進み、時折地面の外に跳びはねている。

「穂香、目を狙えるか!？」

「……めんなさい、この状態であんな動きをされたらスナイパーでも難しい」

当然といえば当然だ。

敵が動いているだけでなく、自分自身も揺れている。

訓練を受けていない穂香にそんな環境下で小さいのを当てるように言うのは無理がある。

正影はすぐに刀を削り出す。

トビウオ型のオスは倒しておくことにした。

「穂香、援護を!」

「任せて!」

穂香から見れば狙うのは難しいはずだが威勢のいい声。

正影はスピードを少し落とし、トビウオが近づいてくるのを狙う。すぐに隣についてきた。

正影は一步でトビウオに近づく。

と、トビウオが地面から出てこなくなる。

これでは攻撃しようがない。

「またこのタイプか!？」

すると20mほど離れたところから相手の姿が見えた。

飛び跳ねず体を半分だけ地上に出し並走している。

「あの野郎……余裕だな」

穂香も応戦するがやはり威力が足りない。

はずれ、あたり、はずれと繰り返し返すがあたって相手は無反応。

「パー！何かしてくるつもりだよ、あいつ！」

相手の目の周りに突如、光が集まり始める。

やがてその光は一つの球体を作り上げる。

そして、そこから光線が放たれる。

正影は跳んでかわす。

光線が当たった地面から砂しぶきが上がる。

「魚のくせにレーザーかよー！」

正影は再び接近を試みるが相手はすぐに地面に潜る。

あちらは接近戦で戦うつもりはないようだ。

「あいつ、チキン野郎め……！」

「パパ、後ろの敵が近づいてるよー！」

トビウオに合わせて少しスピードを落としていたため、敵の接近を許してしまった。

再び速度を上げ離れようとするが、穂香が耐えられる速度に合わせるとどうしてもオスたちより遅くなる。

穂香がプロトでもロスでもないが故に招いた結果。

ロスの速度に一般人が合わせようものなら一般人は耐えられず死んでしまうのだ。

「……やるしかないか」

このまま逃げていても近いうちに追いつかれる。

危険地帯を抜けるのは無理だ。

「穂香、やるぞ」

「OK。私はいつでもいけるよ」

「生き延びてみせるぞ……！」

正影が走るのをやめ、オスに向かって跳ぶ。

オスたちはその行動を予測できず、正影の一太刀を許す。

クモ型が体の半分を一刀両断される。

本気は出せないため、お尻のほうはほとんど無傷だ。

それでもそのオスはそれでバランスを崩し、地面に倒れこむ。

「まず一体！」

残り9体、オスを相手にする。

「すげえ、一体切り倒しやがった」

和人はモニタールームで感心していた。

何者かは知らないがオスからしばらく足のみで逃げただけでなく、3, 40 mあるオ

スを半分一刀両断したのだ。

そこらへんのプロトでは不可能だ。

後ろでドビラの開く音がする。

「フラテッドか。見ろよこいつ、かなり面白い…ぜ？」

後ろを向くとフラテッドの他にもう一人いる。

男性のように見えるが、長い髪。

肩のあたりまでである。

「リレグ様…！」

和人は立ち上がり頭を下げる。

彼らの上司にあたる人のようだ。

「そんなことはしなくていい。それより面白いとはどういうことだ？」

「はい。これなのですが…」

モニターを見せる。

一人の男が背中にも女の子を背負いながら戦っているところが映し出されている。

「この状態が面白いのか？」

「いえ、こいつはこの状態で先ほどオスを1体一刀両断にしまして」

画面を変え倒れてなお、動こうとしているクモ型のオスを映し出す。



頭を真つ二つにされてもこれくらいでは死なない。

それがオウステムだ。

「ほう…。こいつの名前は？」

「顔を見てみましたが私は見覚えがありません。新人かと」

「私にも見せてくれ」

顔をアップにする。

どこにあるカメラを使っているのかわからないがかなり鮮明な画像。

正影の顔が映し出される。

「…私は見覚えがあるな」

「本当ですか？」

「ああ…。こいつは支給武器《アルマ》は持っているのか？」

「刀、ですね。種類までは不明ですが」

「刀…」

画面を見る。

正影がまた一体斬り倒していた。

「こいつの詳細を調べておけ。こんな人材をどうやって隠していたんだか…」

「わかりました」

扉にノック音がある。

「リレグ様、報告があります！」

「急用なのか？」

「急を要します！」

「なら入れ」

扉が開き、一人の青年が入ってきた。

「先ほど討伐隊のαチームがオーロワーム討伐のため出撃」

「それくらい知っている」

「ですが、そのαチームの目的が更新されました！」

「なに？」

今、アルツエの最大の討伐対象はオーロワーム。

なかなか発信機が感知できる範囲に入らず、しかし地上で探せば間違いなく死者が出る。

だから上層部は本来この機会を逃したくないはず。

それなのにそれ以上の目的を発見した？

この危険地帯のことを一番知っているのはリレグを筆頭するこの組織。

だが、リレグはオーロワーム以上のオスを聞いた覚えがない。

「目的は？」

「ペリコラムに現れた民間人の救出となっています。表側は」

「裏は？」

「…まだ確実ではありませんが、ロストチルドレンの救出だそうです」

その言葉に3人が反応する。

ありえない話だからだ。

「お前、何馬鹿言ってるんだ？」

「リレグ様の前で冗談を言う度胸があるとは大したやつだな」

「い、いえ！ 冗談などではありません。確実ではありませんが確かに…」

リレグが再びモニターを見る。

男、刀、容貌はおそらく日本人、そしてロストチルドレン…。

ここでリレグがようやく思い出す。

「…No. 5 正影」

「リレグ様？」

「お前、もう下がっていいぞ」

「はっ…！」

男がその部屋を後にする。

「リレグ様……？」

「和人、そいつは殺せ。そして死体は回収しろ」

「ま、まさか本当にこいつは……？」

「間違いない。今思い出した。私に見覚えがあり、お前にもこれ納得がいく  
リレグが部屋の扉の前に行く。

そして出る直前、

「そいつは昔は邪魔だったが今なら利用できる。殺せと言ったができれば半殺しが望ましい。ともかく、そいつは回収しろ」

「はい！承りました」

それを聞くとリレグは足早にその部屋を出て行った。

残った二人はすぐに行動に移る。

ロスが生きているなんて信じられないが、今はそんな疑問を持つている暇はない。  
「俺は随時モニターの状況を報告する。お前は現場に向かえ」

「命令か？私に命令できるのはリレグ様のみだ」

「分かっている。だが今はそんなこと言っている場合じゃねえ。頼む」

「……いいだろう。準備に5分、あちらには15分で着く。それまでに準備してろ」  
フラテッドもそこを後にする。

残った和人は無駄口をたたかず、急いでモニターの調整を始める。

「4体目……!」

正影がカブトムシ型のオスを斬り殺す。

残っているオスは5体。

「これなら、いけるか!?!」

トカゲ型のオスが舌を伸ばしてくる。

こいつも40mはあり、こんな大きいトカゲは見たことがない。

「気持ち悪い……な!」

かわし、舌を切り落とそうとする。

が、ここで長いものが正影に迫り回避を余儀なくされる。

キリン型のオスが首を振り回してきたのだ。

「チッ！」

一度回避し、距離を取る。

敵は関係プレーを見せているわけではない。

自分たちが攻撃したときに攻撃しているのだ。

だから仲間内で攻撃が当たったりする。

だが、オスはそんなこと気にしない。

あまりに威力が高いものに当たれば悶えたりはする。

だが、それだけ。

痛みがとれてくると正影を狙う。

敵は距離をとつても走ってくる。

正影に考えている暇はない。

迎え撃とうとする。

が、突如地響きが起こる。

向かってきていたオスたちがバランスを崩し倒れる。

「なんだ!？」

「パ・パ！後ろ！」

後ろに砂柱が上がっている。

砂柱の中に見える自分より大きな物体。

影と2つの赤い光が見える。

「……そー！」

その数は増え続け、やがて10以上もの砂柱が立つ。

柱からして40mと大きすぎるものはないがそれでも数が多い。

「……」

正影は考える。

いくらロスといえども本気が出せなければ無理がある。

しかし、本気を出すということは――

「パパ、なに迷ってるの?」

穂香にはすぐに分かった。

自分が足手まといだということ。

「どうやってお前を生きて帰らせるか考えてる」

「もういいよ、パパ。ううん。正影さん、ありがとう。ここまででいいよ」

言葉から諦めが掴むように読み取れる。

「何言ってる?俺がお前を見捨てると思うか?」

「でも、私、足手まといだよ……。このままじゃ私たち死んじゃう。正影さん、妹に会えなくなっちゃう。それより私が犠牲になって正影さんが助かるなら……」

「馬鹿言うな！」

怒鳴る。

それと同時に2，30mと弱い敵が多いほうに跳ぶ。

「お前自分で言ったな、俺を家族だつて！パパだつて！」

オスの上に降り、頭と体を斬り分ける。

頭は動きを止め、体はただじたばたする。

「家族を簡単に見捨てられるかよ。お前はもう俺のかけがえのない家族だ。そしてお前の立ち位置は俺の娘。娘を見捨てる父親がどこにいる!？」

正影は体だけになったオスを掴む。

するとなんとそれを持ち上げる。

「おおおおおお、らあー！」

それを他のオスに向かって投げつける。

「でも……このままじゃ」

「そんなことはどうでもいい！ただ一つ言えるのは俺は絶対にお前を見捨てない！」

今、穂香と正影はお互いの表情を確認できない。



だが、正影には穂香が震えているのだけは分かった。

「生きて帰るぞ」

「…うん」

穂香の震えが止まり、声に覇気が戻る。

「でもパパ。私たち、帰るわけじゃないよね？」

「…そこはツツコむなよ。せつかくいいセリフ言ったんだから」

「以後気を付けまーす」

「頼むぞ…」

正影は改めて刀を構える。

敵は数を増やし20弱。

後から出てくる敵はなぜか小さい物の傾向が多いような気がするが正影にとってそ

れは好都合。

後ろから40m級の敵が3，4体。

前には20m級が1，20体。

正影が選んだのは20m級の群れ。

敵が走ってくる。

そんな中、正影は深呼吸をする。

そして相手に向かって走り始める。

「おお——」

叫びながら走り始めたとき奥のほうで20 m級の敵が倒れた。

## 絶対強者

突然奥のほうの敵が次々と倒れる。

「パパ、あれは？」

「分からない。が、今は好都合だ！」

敵が減っていくのに悪いことなんてありはしない。

正影も敵陣に突っ込む。

敵は大きくても30m級。

これくらいなら余裕もいところだ。

「はあああ！」

力を籠め一振り。

敵はそれだけで真つ二つになり倒れる。

まだ生きてはいるが今の目標は討伐ではない。

すぐにそいつの横を通り過ぎ、前に進む。

後ろから化け物級の敵が接近している以上時間はない。

「パパ、急がないと！」

「分かってるー！」

正影はできる限り敵をかわしながら進む。

かわせなくても一刀両断。

奥のほうでもいまだにオスが倒れ続けている。

「これなら……！」

しかし、物事はそうそうよく運んだりはしない。

真横から熱気を感じ反射的に回避する。

さつきまで正影がいた場所にレーザーのような光線が走る。

これを放った正影は分かっている。

20mほど離れたところから遠距離射撃を行うトビウオ型のオスがいた。

ここで倒しておきたい気もするが手が無い。

正影がどんな速さで近づいても避けられる距離を保っているのだ。

近距離戦にのみ特化している正影のような存在から見ると、あいつは厄介どころではない。

穂香を降ろせばおそらくあのオスにも反応できないようなスピードで攻撃できるが今ここで穂香を降ろすということは穂香を殺すのと何ら変わらない。

それだけではできないのだ。

「どうする？」

「無視しかない！あいつにかまっていれば後ろに追いつかれる！」

「分かった！」

すぐに前進を開始する。

だが、あのオスも逃がす気がないらしくレーザーを3秒おきには放ってくる。

当たっても正影ならしばらくはいけるだろうが、今の穂香ではおそらく灰になってしまおう。

ここで正影は刀を手に持ったまま足で攻撃を始めた。

うまく体を回転をさせながらトビウオ型のオスがいる方に敵を蹴り飛ばす。

手で攻撃したい気もするがそれでは刀をしまわなければならず、もしもの時に備えられない。

正影の蹴りによりオスが次々とトビウオの方に跳ばされ、あちらも回避を余儀なくされる。

攻撃回数がかかり減り、正影もかなり楽になる。

「いけるー！」

次の対象を蹴り飛ばそうする。

が、その対象が突如真つ二つになる。

正影は蹴りを止められず、頭のみを蹴り飛ばす。軽くなつてしまつたため20mを軽く超えていく。

正影は斬り飛ばした後、地面に着地してすぐに目の前を見る。

そこには大きな鎌を構えた女の人が立っていた。

---

明かりが少なく薄暗いある武器庫の中でフラテッドは出撃の準備をしていた。目標はもちろん、ロスの可能性がある謎の人物。

これをアルツェに渡すわけにはいかない。

「…ロストチルドレン、か」

今でも信じられない。

ロスは何年も前に全滅したはずだからだ。

しかも行つたのは自分の組織のトップであるリレグ本人の指示。信頼している自分の上司だ。

「…」

準備を終え、出撃しようとしたとき通信機が鳴った。

「なんだ？」

『俺だ、和人だ』

通信機は探知されにくいよう、今ではめつたに使われない旧式の物を使っている。この場合、どうしても雑音が混じってしまうため未だにこれには慣れない。

「それくらい分かっている。朗報か？」

『残念ながらそうじゃねえ。出撃は中止だ』

「…なに？」

リレグ本人が出した命令。

それを破るなんてよほどの理由が必要である。

それ以上にフラテッドはリレグを尊敬している。

そんな人の命令を遂行しないなんて冗談じゃない。

『お前が嫌な気持ちは分かる。だが無理だ』

「なぜ？」

『アルツェの討伐部隊がもうすでに到着している。お前が今からどんなに急いだって10分はかかる。絶対無理だ』

初めの目的はオーロワームの討伐だった精鋭部隊。

おそらく強いのは間違いないだろう。

「そんなの知ったことか。オスを大量に出現させて殺せばいいだろう」

『馬鹿言うな。大量発生装置《ディグネラ》の性能はお前もよく知っているだろ。今でももう20m級が限界になり始めつつあるんだぞ』

20m級でも十分強いのだがもしロスがいれば敵ではないし、プロトも選り抜かれた精鋭隊。

一人ならともかく大勢いけば20m級では勝つのは難しい。

「…失態だ」

『俺は一応やり続けてみるが無理だろ。リレグ様には悪いが作戦は失敗だ。以上だ』

和人の回線が切れる。

フラテッドはぶつけようのない怒りを拳にこめる。

おそらく人が近くにいればそいつを殴り、殺していただろう。

だが、リレグは物にあたるという行動をかなり嫌っている。

ここで壁をへこませようものなら処罰が下る。



「アルツェめ……！」

フラテッドは装備した道具を放り投げ、その部屋を後にした。

オスの片割れの上に一人の女が立っている。

鎌を持ったその姿は少なくとも正義の味方の類には見えない。

ロングヘアの髪が風に吹かれて横にたなびいている。

「単刀直入に訊く。お前はロストチルドレンか？」

正影にそいつがどの組織に属しているかはわからない。

だから、あまり答えたくなかったが今オスの数が減りつつあるのはこいつ、或いはこいつらのおかげ。

「……そうだ。No. 5 正影だ」

「……私は明季だ。ならばついてこい。助けてやる」

そういうと明季は耳に手を当て何か話している。

仲間と連絡を取っているのだろう。

正影は警戒しながらも明季に近づく。

が、突然明季は正影の首元に鎌を向けようとする。

正影は回避してすぐに明季を見る。

「なんのつもりだ？」

「…お前がロスか確認しただけ。反応速度はいいよね」

信用していないのか試してきたようだ。

しかし、今そんなことをしている時間はない。

「そんなことしている場合か！俺の後ろを見る、あの巨大なオスの数を！」

「なぜだ？」

「何？」

「なんで、お前はあいつらを殺らない？ロスであるお前ならできないこともないだろ」

再び周りで砂柱が立つ。

オスが増えつつあるのだ。

「うわあああああ！」

どこかで叫び声が聞こえる。

やられたとみて間違いないだろう。

「隊長！」

横に男がやってきた。

「もうこれ以上はもちません！いくら敵一体一体が弱いといつても数が多すぎます！」

「悪いけど恭二《きようじ》、私たちの目的はこいつがロスならば救出という命令。まず

こいつがロスという確たる証拠をつかまなければならぬの！」

「お前……仲間が死んでるのに！」

「で、どっちなのかしら？嘘か、真か？」

この明季という女は本気だ。

おそらく仲間がいなくなっても確認が取れるまで何もしようとしなない。

正影もどちらかといえば効率主義（今は別）だったがここまでひどくはなかった。

「…俺がロスだと分かればいいんだな？」

「ええ」

「ならこいつを預かっていてくれ」

穂香を降ろす。

「その子に何か？」

「俺はこいつを守らなくちゃならない。だが俺が本気を出せば近くにこの子は体が耐えられない」

「お守りをしていると？」

「確認したいならな。時間はないぞ」

すでに周りはおスの群れに囲まれている。

プロト達がどのくらい強いかわからないが、まずいのは確かだろう。

「分かったわ。恭二、あの子を守りなさい」

「はい」

正影が穂香の頭をなでる。

穂香は今にも泣きだしそうだ。

「パパ…」

「もう大丈夫だ。すぐに終わるからあいつの言うことを聞いて待ってろ」

「死なないよね？」

「お前にもロスである俺の力を見せてやるよ。パパを信頼しろ」

「…うん」

恭二に穂香を託す。

「言っておくが…」

「分かっていきます。俺も民間人を見殺しにするような腐ったことはしません。ご安心ください」

「…そうか。3分、頼むぞ」

「3分？」

周りには小さいのも含めるとものすごい数。

砂煙が上がり視界不良は絶好調。

その状態で3分ですべて片付けるなんてプロトにはとてもできない。

と、横から熱気が迫ってきた。

また、トビウオ型のオスだ。

恭二は全神経を集中させる。

「はああー！」

手を広げレーザーに手を向ける。

手がレーザーを受け止めた。

「ああー！」

手で受け止めたレーザーの軌道を変え見事に振り払う。

手は焼け焦げギリギリまだ動くらしいが痛々しい。

しかし、オスだって諦めない。

また、チャージを始める。

「くそっ……！」

恭二にそのレーザーを何度も受け止める力はない。

隊長は助ける気もない。

移動しようとしたその時、隣にいた正影がいなくなる。

「？」

次の瞬間にはトビウオ型のオスの真上にいた。

あまりの速さに目がついていかなかった。

オスも気づいたようだが時すでに遅し。

オスがみじん切りのごとくバラバラにされる。

それを見て明季は「おおお」と感嘆の声を上げる。

そしてまた正影は恭二達の視界から消える。

どこにいいのかと周りを見渡すと見えたのは相手が駒切になっていくという状況のみ。

正影の姿は見えず、突然オスがバラバラになったように見えるのだ。

「隊長……！」

「決まりね。私でもあんな簡単に敵を斬ったり、速く移動したりは無理よ」

正影は決して速くはない、足は。

だが、腕の力がロスの中でもずば抜けており、これが手数に影響している。

20m級など、余裕で殺せるのだ。

1分ほどで周りの敵が大方片づく。

大型の敵は…、恐怖を覚えたのか接近するのをやめていた。

「すごいわね。あれだけ大きなオスに恐怖を…」

正影はそんなオスたちにも容赦はなかった。

大型なので少しは時間がかかったとはいえ、圧倒的な力。

誰も手を出すことも反撃をすることもできなかった。

オスはただ悲痛な叫びをあげ、倒れていく。

「これが、…ロストチルドレン」

きっかり3分後、周りにいた敵は全滅し、オスはすべてが亡骸となっていた。

正影は傷一つ負うことなく、体にはオスの返り血がたくさんついていた。

## 帰還

## 再会

「…」

へりの轟音のみが聞こえてくる。

正影は今、へりに乗り帰還中だった。

穂香は疲れ果てて正影の膝の上で寝ている。

周りにはプロトと思われる人々がいるが…あまり活気がない。

数は見た限り6人。

仲間が死んで憔悴しているであろう人もいるが、何か違う感じもする。

「正影…だったわね」

明季が話しかけてきた。

「なんだ？」

「あつちに着いたら…分かってるわね？」

「忙しくなるって話だろ。そんなの前からだ、問題ないさ」

「そう…。ならいいんだけど」



再び黙り込んだ。

仕事のこと以外の会話は無いのか、と疑問に思う。

外見は黒いロングヘアーに白い肌。

基本、外にプロトは戦うためにいるため肌は黒とまではいわないが少しは褐色になる。

だが、彼女のはきれいな白い肌。

外見は結構いいのに仕事ばかりするタイプなのかと、勝手な考えを持つ。

「今はただ話す気がないだけだから」

「……説明どうも」

エスパーのごとく、間違いを訂正してきた。

「あんたがこの部隊の隊長とみていいんだな？」

「そうね。肩書はそうなってるわ」

「……一つ、頼みがある」

「物にもよる、といたいところだけどおそらく私には無理だから言わないで」

「隊長なんだろう？」

「民間人の救出を私に言っても上層部が良しとしなければ動けないわ」

「……アクリス細胞はそこまで進化したんだな」

勿論アクリス細胞にそんな力はあるわけない。

アクリス細胞はもともと身体能力を上げる。

他の人に干渉力を手に入れたりした事例はない。

「あんた」

違うところから声をかけられた。

「こちらも女子だ。」

「正影でいいんだね？」

「お前は？」

「美姫《みひめ》」

「何の用だ？」

「あたしを仲介者《メデイアツール》に指名してくれない？」

初対面ですごくいいお願いだ。

その子は今いる6人の中でもあるところがすごかった。

それは服装。

完全武装といわんばかりに支給されているであろう武器をすべて身に着けている。

これではスピードが損なわれるのは間違いない。

「お前、タイプは？」

「Bだよ。正影はAでしょ?」

初対面で呼び捨てか。

別に構わないのだが、かなり馴れ馴れしい。

「美姫さん。突然図々しくはなくて?」

また違う人がしゃべる。

やけに特徴的なしゃべり方だ。

「なによ、鈴《りん》。何か問題でも?」

「正影さんがロスと分かった瞬間から虎視眈々と狙うあなたの目、見るに耐えられませ  
んわ」

「どういう意味よ?」

「下品だと申し上げているのです。もっと品良く振る舞えないのかしら、ケチ姫?」

「なんですって…?」

静かだったヘリの中が騒がしくなる。

しかし、周りは止める気が全くない。

全員流している。

部下の躰ぐらいちゃんとしろよな。

「悪いわね。部下の躰がちゃんとなってなくて」

「…お前、本当にエスパーなのか？」

「好きに考えなさい。あと、あの子たちは見ての通り仲がいいから」

「あれは喧嘩するほどじゃなくて犬猿の仲だろ？」

「あなたの解釈に任せるわ」

すると明季は通信を始めた。

帰還中とでもいうのだろうか？

それにしても報告が遅すぎるだろう。

1分足らずで通信を終える。

未だにさっきの2人は口喧嘩中。

手が出てないのは羨がなつてると言えるのだろうか。

「恭二」

「はい、隊長」

突然声をかけられたにもかかわらず、1秒と時間を空けない返答。

「あつちに着いたら私は指令に言いたいことがあるから報告等はお願ひね」

「了解しました」

「それと…、別にいいわよ。連絡しても」

「…隊長はすべてお見通しですね」

「恋人は大切にしなければ。このご時世、いつ死んでもおかしくないんだから。それに…」  
正影の方を見る。

正影も気づくがなぜ見てきたのかわからない。

「他の子も喜ぶわ」

「分かりました。では少し失礼します」

恭二は通信を始めた。

さつきの話からして相手はおそらく恋人。

恭二の顔が笑顔になるのも当然だ。

「寝ておきなさい、正影」

「今は眠くない」

「これから忙しくなるわよ?」

「それは俺の体をいじくる研究者共の話だ。どうせ俺は眠らされる。だが、一つお願いがある」

「…さつきも言ったわ。私にお願いしても意味は——」

「この子は俺のメディアアトルだ」

話を遮られて顔をムスツとしたが正影は話を進める。

「武器だって創り出せる」

「それで？」

「こいつを研究機関に回すのはやめてほしい」

「史上初のロスのメディアツールよ。そんなこと出来ると思ってるの？」

「だからお前から伝えておいてくれ。もし、こいつに何かするなら俺はお前らには協力  
はしない、と」

「…あなた一人の意見で上の人間が答えを変えようと思う？」

「もしそんなことすれば、殺す。とも伝えておいてくれ」

明らか脅し。

そんなことを言えばどんな結果になるかは予想できない。

だが、正影はこの世界で生存する唯一のロストチルドレンだ。

そんな正影を簡単に殺すはずがない。

正影にとって最悪の展開は殺されること。

それ以外ならばどうとでもなる。

「…分かったわ。あなたの気持ち、理解できないわけじゃないしね」

「助かる」

「でも、どんな扱いになるか分かったものじゃないわよ？」

「知っている」

「妹に会えないほどになるかもよ？」

「嬉々を知っているのか!？」

「名前だけね、この部隊に入れないんだから目に止めてないわ」

「あいつの今の状況は？」

「知らないって言うてるでしょ。自分の目で確認しなさい。見えてきたから」

窓に目をやると遠くに何やら建物が見えた。

城…、ではない。

要塞、だろうか。

その周りに何層も分厚い壁が並ぶ。

「ごつつい建物だな」

「そのごつつい建物の中にあなたの妹はいるのよ」

「嬉々…」

---

真理奈は廊下を走っている。

もともとオペレーターなので足はそんなに速くない。

息だつてすぐに上がる。

だが、これだけの朗報。

「リム、嬉々はいる？」

受付まで来たが見当たらない。

「嬉々なら10分程前に帰還してるよ。今は…、部屋に戻ったのかなあ。今日の任務は

もうないし…」

「分かった！ありがとう」

場所は分かっている。

エレベーターに乗ればすぐだ。

すぐに走っていく。

友の喜びの顔を見れるのは嬉しい話だ。

エレベーター前にいる嬉々を見つける。

「嬉々い…い…」

息が上がっている。

「真理奈。どうしたの？」



「ちよ…待つて…」

久しぶりに走ったもんだから顔も真っ赤。

20秒ほどしてようやく息が整い始める。

「嬉々…、朗報よ」

「朗報？」

「正影さんが…、お兄さんが見つかったわ！」

「…えっ？」

「はあ〜、でつかいな」

アルツェに到着した正影は大きな要塞を見上げて驚いている。

自分がいない間にこんなでかい建物が建てられるものかと感嘆する。

「パパ、ここが目的地?」

「そうだな」

「じゃあ、ここにはカレーもふかふかのベッドもある?」

「もちろん!」

「やったー!」

穂香が嬉しそうな顔をする。

「…あなた何歳?」

「15だが」

「それで子持ちですか…。まあ、このご時世だしね」

「あいにく、こいつは養子だよ。それでも2人しかいない俺の大切な家族の1人だがな」

「成程。とりあえずついてきて。まず司令に会わせないと」

へりから降り後、正影と穂香は明季の後についていく。

人目につけないためか、裏道と思われる人影の少ない道を通っていく。

汚れたパイプ管。

錆びた鉄の手すり。

網目状になっており、タンタンと歩きたんびに音がする床。

時間を感じさせる作りだ。

やがてそこを抜けると、突然絨毯が広がる高級感あふれる道に変わる。

温度も先ほどと違って快適だ。

「まさにお偉いさんがいそうなスペースだな」

「いつの時代もこんなものでしょ。偉い奴は表でなんだかんだ言っても結局自分が儲かってる」

「それもそうだな。ところでお前がさっきから言ってる司令ってのは？」

「先に言っておくけどあなたの知ってる司令じゃないと思う。まず女よ」

「なら違うな」

「指図をするつもりはないけど、あまり逆らわないほうがいいわよ。ここで暮らすなら」  
「ご忠告どうも。で、ここというわけだな」

目の前に大きな扉が立ちふさがる。

特に門番的な人はいない。

しかし、なぜこんな大きな扉を作るのだろうか？

小さかろうが大きかろうが一緒だと思うのは俺だけだろうか？

「私もそう思うわ」

「…これからお前をエスパーと呼ぶよ。仮に上司になったとしても」

「さっさと入って用事を済ませなさい。妹に会いたいんでしょ？私はここまだから」

「そうか、ありがとうな」

「これも仕事よ」

そういうとその場を去っていった。

穂香と正影が扉の前に残る。

「穂香、準備はいいか？」

「なんで準備するの？」

「一応お偉いさんだからな？失礼のないようにするんだぞ」

「はい」

ノックをする。

「入れ」

すぐに返事がしたので「失礼します」といいながら扉を開ける。

部屋はかなり広かった。

床じゅうきれいな絨毯。

なのに、あるのは奥にある机が一つ。

豪華な机だが、これもどんな趣味をしていたらこんな配置にできるのかと疑問に持つ。

「お前が、正影か？」

いたのは女。

オレンジ色の髪をした女。

「そうです」

「私はここで働いている、ラグフィットだ。ちなみに日本人だからな」

上の人間は基本名前が豪華だ。

なぜだろう？

「その子供は？」

「穂香です」

「穂香：：な。覚えておこう。早速だが、これからの話に移らせてもらう」

「そのことだが：：」

「なんだ？」

明季に伝えておいたこととまったく同じことを伝える。

穂香をいじりまわすな。

最悪殺す、と。

ラグフィットはそれを聞くと紙を一枚取り出した。

「お前の言いたいことは分かった。だが、それは難しいことだ」

「百も承知だ。だが、お前らの事情など知ったことじゃない」

「ここに住むなら従ってほしいものだが…、実は研究体になるのを回避する方法がある」

「…それは？」

紙を渡してきた。

大きく「誓約書」と書かれている。

「お前らにはここで働いてもらい、私直属の兵士になつてもらおう」

「…それだけか？」

「それだけだ。ただし、私が出した指令には従つてもらおう。もちろん、人を殺せだの無謀な戦場に行けだのとは言わない。だが、普通の指令を受けながら私からの特別な指令も受けてもらう」

悪い話ではない。

人を殺せと言わないということは犯罪者にはならないということ。

無謀な戦場といったがオーロワームを1人で相手しろとも言われない限り、正影にとつて無謀な戦場などない。

「もし断つたら？」

「普通の待遇だ。毎日研究室で実験だな。勿論最低限の人権は残すが最悪の状況もあり得る。その子もな」

穂香も対象になる。

それならばこの話を受けたほうがはるかにいい。

自分もわざわざいじくられずに済むのだから。

「…他の条件は本当じゃないんだな？」

「ええ。本当にそれだけよ。何にでも誓ってあげる」

「ならいい。その条件、のんでやる」

それを聞くとラグフィットは紙を正影から取り上げる。

破いたと思ったら暖炉に投げ捨てた。

「…いいのか？」

「もともと私は証拠を残す気はない。口約束だけで十分。お前は今の約束を破れないだろうしな」

「そうだな」

「それだけだ。帰ってくれて構わない。他に言いたいこともあるかもしれないがまた後でにしてくれ。外に出れば明季がいる」

「でもあいつはさつき帰ったぞ？」

「エスパーだからな。いるはずだ」

「…こいつもそう思っているのか。」

以前の集落について言っておきたいが今は穂香が疲れ切っている。休ませてあげたい。

「では言葉に甘えて…」

「まず、3日間は休んでくれ。それからだ」

それを聞くと部屋を出る。

扉を開けると明季がいた。

「…エスパー」

「こつちよ、あなたたちの部屋は」

「部屋、1つしかないのか？」

「あるけど…、その子は一緒に居たがってるわよ？」

穂香がうなずいている。

「お前も年頃の女の子だろうに…」

「せっかくふかふかのベッドに寝れるんだからパパと寝たい！」

「お前がそう言うなら構わないが」

「なら決まりね。すぐに着くから」

正規のルートであろう道を通る。

明季が通ると言っている人は「お疲れ様です」と声をかけた。



精鋭部隊の隊長なのだからそうなのだろうがいまいちそう思えない。  
ちようどエレベーターが開いたところで前に着いた。

そして、再開した。

「…正兄？」

## 無反応

目の前にいるのは自分より少し身長が小さいくらいの女子。

特徴が何かあるわけではなく、普通の女子。

それでも、雰囲気とその言葉があれば十分だった。

「嬉々…なんだな？」

「本当に、正兄？」

おそらくあちらから見ればいなくなったあの日と全く変わらない兄が立っているの  
だろう。

ペタペタと一歩一歩を踏みしめるかのように近づく。

正影からすれば嬉々の外見は別人。

ちようど成長期を通ったのだから無理もない。

「あ、…ああ」

やがて2人はあと一歩というところまで近づく。

嬉々は何か言いたいのだろうか、口のみを動かしている。

「嬉々…、ただいま」

それを聞いて嬉々は止まる。

そのあとは正影の胸に飛び込み泣き出す。

10年以上待つていた人が帰ってきたのだ。

無理もないだろう。

「本当に…、正兄なんだね？」

「悪かったな、10年以上帰ってやれなくて」

「う、うう…」

再び泣き出す。

兄妹の再会という感動のシーンだ。

だが

「正影、取り込み中悪いが案内をさせてほしい。私は時間が押してるの」

「あ、ああ。悪い。ほら嬉々、泣き止んでくれ」

「う…うん」

明季の顔に遠慮という文字は書かれていなかった。

本来ならこんなところで時間だからなんて理由で中断させる奴は少ない。

まあ、これもエスパー？である彼女だから出来ることだ。

「感動の再会は部屋に案内した後にして頂戴。この餓鬼に教えてもいいんだけど心配だ

から」

「餓鬼じゃない！私は穂香！」

「……ともかく、案内するわ。嬉々といったわね？あなたも来なさい」

嬉々は正影にぴったりとくっつきついていく。

穂香は場所を取られたと、少し不機嫌だったがここは空気をよんでくれた。

エレベーターに乗り、降りるとすぐに正影の部屋に着く。

「あなたの部屋はここよ。それといま、ここの施設の部屋の鍵は指紋認証になってるから」

明季が指さす方向に指をあてる部分であろう機械的な部分が見える。

外からの見た目はただの強固な軍事要塞だったというのに少しは発展しているようだ。

「そこに指をあてて頂戴。だいたい5秒」

「こうか？」

指をあてると5秒後

『登録を確認しました。ごゆっくり』

そう聞くと、部屋の扉が開く。

「穂香、あなたの指紋認証はまた後でにして。ここはもともと1人用の部屋だから2人

分の登録をするにはシステムを少し変更しないとイケないの」

「分かった」

「じゃ、また後で来るわ」

「ああ。ありがとな」

明季はエレベータに戻り、そこを離れる。

正影は部屋に入っていった。

これといった荷物はないため別に荷物を置いたりはしない（以前あったかばんはペリコラムに放置）。

部屋にはそれなりの家具がそろっていた。

6畳と2人で住むには少々狭いような気もするが屋根もあり、壁もある。

風呂やトイレだってあるし、これなら文句は言うまい。

そして：

「ベッドだあ！」

ふかふかのベッド。

走っていく穂香を正影が止める。

「パパ、なんで？」

「俺たちどのくらい体洗ってないか知ってるか？」

「集落で水浴びくらいはしたよ?」

「それを含めてもあの危険地帯を走ってきた。それに汗もかなりかいたし体は砂だらけ。そんな状態でベッドに寝せるわけないだろう」

「えええ…。じゃあどうするの?」

「まず風呂に入ってこい」

「はい」

穂香が風呂場に入り部屋に2人、嬉々と正影が残る。

「…」

「…」

いぎ、こう2人にされると気恥ずかしい。

「正兄」

「ん?なんだ?」

「結婚したの?」

「…会って早々、なかなかすごい質問だな」

だが、これくらいはじけたほうが話しやすい。

「だってあの子、パパって」

「養子だよ。正式じゃないけどな」

「相変わらずのロリコンだね」

「お前は俺のこと、ロリコンだと思ってたのか？」

「5年前から」

「…俺がいない間に？」

妹にいぎロリコンといわれると少しへこむ。

もはやシスコンでもないのか。

しかも、正影がいない間にその結論に達するって…。

「でも大丈夫。私もブラコンって言われたから」

「なんでだ？」

「…ずっと、生きてるって信じて、みんなに話し続けたからだと思う」

「…すまなかった」

嬉々の暗い顔。

今でも鮮明に覚えている。

正影からすれば1ヶ月たっていないのだから当然だ。

「ううん。別に正兄が悪いわけじゃないんだから。それに、本当に帰ってきてくれた。

嘘をつかなかった」

「覚えているのか？」

「あの日の言葉を信じたから生きてると思ったの。もし何も言ってなかったら死んでる  
と思ってたかもね」

「…つまり、そんな長い間俺はお前を縛り付けていたのか」

ロリコンとは言ったが、別に欲情している変態ではない。

妹思いなだけなのだ。

「何言ってるの！縛りつけてなんかない。その言葉があつたから私は生きてこれたんだ  
よ。その言葉がなきや…」

「…そうか。ともかく元気でいてくれてよかつた、しっかりと成長しているみたいだしな」  
「そりゃ私だつて10年もあればこれくらいになるもん。いつまでも子供ってわけじゃ  
ないんだから」

先ほどは普通で特徴がないといったが胸。

Dはあるだろう。

「…本当に成長したな」

「この10年の間に本当にロリコンになったの？」

「いや、今のセリフはこの場を笑いで盛り上げようと…」

「女子に男子がその話題を振るのはよくないと思うけど」

「そうか？以後「パパあ！これ何？」」



突然、びしょ濡れの穂香が風呂場から出てくる。

片手にボディースープを持っている。

「どうした？」

「これ押したら何か出てきたの！で、体中につけたんだけど髪の毛がガチガチになったのー！」

「…そりやそうなるだろ。シャンプーはなかったのか？」

「似たような入れ物はあったよ？」

「…お前シャンプーとかリンスって知ってるか？」

「なにそれ？」

知らないらしい。

仕方ないといえよそうなのだが油断していた。

「知らないのか…。仕方ない、俺も入ろう」

「わーい！」

喜ぶ。

普通の家庭の事情は知らないが、9歳の女の子となればそろそろ父との風呂は嫌がる年ごろではないだろうか、と正影は思う。

「嬉々、悪いが話はまた今度に…って何脱いでるんだ？」

「正兄お風呂入るんでしょ？私も久しぶりに」

こっちは16。

もう完璧に離れている年だと思うが…。

「穂香、3人入れるか？」

「ちよつと狭いけど何とかなると思う。パパの妹だよね？」

「初めまして、私は嬉々」

「穂香っていうよ。よろしく」

「よろしくね。さあ、早く入りましょ。正兄は今日はラッキーだね」

「まあ、帰ってこれたしそうなのかもな」

「…そつちじゃないんだけど。っていうか全然恥ずかしがらないし」

3人は風呂に入る。

---

「やっぱりいいな。体が洗えるってのは」

「…」

「布団ふかふか！」

風呂から上がり、ゆっくりしている。

1人用の部屋だったので、椅子もベッドも1つずつしかない。

正影は椅子に、穂香と嬉々はベッドに座っている。

穂香はテンション高めなのだが、嬉々は少し落ち込んでいる。

「嬉々、どうした？」

「いや、…なんかちよつと自信なくした」

「何のだ？」

「自分の体の」

風呂に入ったとき、嬉々は体をタオル等で隠すことはなかった。

少し、正影を試すという意味も含めてだ。

自分の体には自信があった。

肌だって結構きれいなほうだし、スタイルもいい、そして胸。

ナルシストとは言われたくないが、少なくともブサイクなんかではない。

良いほうのはずだ。

しかし…

正影は全く無反応だった。

はじめ、脱ぎ始めた時も全く動じなかったので少し危険視していたがまさかここまでとは…。

目はいやらしくないし、恥じらうようなしぐさもない。

いくら妹だといってもこれはないだろう。

普通に体を洗って、風呂を上がった。

「いや、スタイルは良かったじゃないか。十分女らしいよ」

「あの反応でそう言われても…」

「妹に欲情するほど腐ってないということだ」

「だからって…、少しくらい何かあってもいいじゃない」

「考えておくとよ。…それより、1つ話がある」

簡単に話をすり替えられた。

嬉々にとつてはかなり重要な話だったのだが正影からすればそれ以上の話らしい。

「何？」

「…お前、年は？」

「16歳」

「俺は15だ」

「…どういふこと？」

嬉々にはまだ事情を話していないので理解できない。

ここで、正影は今までであったことを話す。

タイムスリップ。

集落。

レアさんたち。

すべてのことだ。

「…だから全然変わってないのね」

「本来なら26だが残念ながら俺はまだ15だ。で、ここで問題がある」

「何？」

「今の年から考えればお前は俺の妹ではなく、姉だ」

妹と姉では接し方が変わる。

少なくとも正影の中では。

「どういう立場で接するべきかと思つてな」

「成程。私が今では正兄の姉なのね。そしたら正兄はおかしいかな？正…弟？」

「いろいろと変わる必要があるかもしれないからな。どうするべきかと思つてな」  
嬉々は少し難しい顔をしたがすぐにやめる。

「私は変わらずいつも通りがいいな」

「そうか、お前がそういうならいいんだが」

「今までお兄ちゃんとして接してきたのに弟に代わるのは変な感じだし。それに正兄は  
雰囲氣的にも私より大人だよ」

確かに雰囲気は正影の方が年上。

いや、ちゃんとした弟にす少しはつちやけた姉だっている。

…漫画の世界には。

「あっ!」

「ここで嬉々が何か思い出したらしい。」

「どうした?」

「ちよつと待つてて!」

部屋を出てどこかへ行つてしまった。

「嬉々さん、どうしたの?」

「さあ?」

く5分後く

「ただいまあ！」

元氣よく声がし、扉が開く。

「鍵はどうした？」

「ちよつと開けて出ていきました」

「…で、なにを持ってきたんだ？」

「これ！」

手にココアの元になる粉を持っている。

「あの時の…！」

「今作るからね、穂香ちゃんも待ってて」

作ると言ってもお湯を沸かしてただ混ぜるだけなのだが…。

「パパ、あれ何？」

「ココアっていう飲み物だ」

「おいしい？」

「甘くておいしいぞ」

すぐにココアが出来上がる。

正影からすれば2週間ほどかかなかったただけの匂いなのだがとても懐かしい。

「穂香ちゃん、熱いから気をつけてね」

甘い香り。

まず一口。

甘さが体に染み渡る。

「…うまいな」

「相変わらずコーヒーはダメなの？」

「さつきも言った通り、おれタイムスリップみたいなことしたんだぞ？あんな苦いもの無理だ」

「そこだけは子供だね」

穂香も一口飲む。

「…甘いー！」

荒廃した土地で生活してきたのだ。

チヨコレートだって手に入るのは苦労しただろうし、もしかすると食べたこともないかもしれない。

「私これ好きー！」

「なら今度。パパに買ってもらいなよ。売ってるから」



「パパ！」

「…ココアくらいだったら構わない」

「わーい！」

夢中で飲み始める。

「これからお金かかりそうだな。つていうか俺一文無しだぞ？」

「働けばいいよ。仕事のことなら教えてあげるよ。正兄なら遠慮なく仕事を選べるだろうし」

「ここは自分で仕事を選べるのか？」

「そうなんだけど…、詳しいことはまたその時に教える。仕事がしたくなったら言つて」  
「分かった」

ココアを飲みながら談笑。

ペリコラム付近をさまよっていたころでは考えられないことだ。

「おかわりある？」

穂香がココアを飲み終わり、おかわりを要求。

「あるけど…、夕飯食べられなくなっちゃうよ？」

「夕飯…カレーー！」

…ここで穂香はカレーのことを思い出す。

「ここカレーあるよね!？」

「あ、あるよ」

「パパ、私カレー食べたい!」

穂香のもつとも願っていたことだ。

「今何時だ？」

「6時。ちよつと早いけど…穂香ちゃんは食べたいみたいね」

「かねてからの願いだっただからな」

「パパ、早く行こうよ!」

すでにベッドを降り、正影の服の裾をつかみ引つ張っている。

「…金はかかるか？」

「私が払うわ。せっかくだし場所も教えるわ」

「妹に払わせるわけには…と言いたるところだが、ここは頼もう」

「ならついてきて。案内するわ」

「カレーだあ!」

穂香のテンションが高い中、3人は部屋を後にした。

## 変質者

### 食堂

それは名の通り飯を食べる場所。

「…設備良いな？」

「そう？前からこうじゃなかったっけ？」

なんていうかここだけすごい。

部屋の設備がちやつちく見える。

完璧に管理された部屋の温度。

数々のメニュー。

机一つ事には何やら機械のようなものが置いてあり、人がそこから飲み物をもらっている。

「いや、俺のころはまず机がこんなにきれいじゃなかった」

ピッカピカの机たち。

絶対に誰かこぼすことはあると思うのだが、どういいうわけかそんな汚れは見当たらない。

ここにベッドがあれば完璧だ。

「パパ、カレー!」

感慨に浸っていたいが穂香は早くカレーが食べたい。

今まで我慢してきたのだ、当然だろう。

「分かったよ。じゃ、頼みに行きたいんだが…」

入り口には看板があり、メニューが豊富なのは分かる。

だが、不思議なことに売っている店が一つも見当たらない。

あるのは立ち食い蕎麦屋などにありそうな自販機だ。

メニューを押すとチケットらしきものが出てきてそれを店の人にあげて初めて作り

始めてくれるはずなのだが…。

「正兄もカレーにする?」

「あ、ああ。そうする」

「じゃ、ここは空気を読んで私もカレーっ」と

自販機の前で3人分のカレーを購入する。

勿論そこからカレーが出てくるわけではない。

3枚のカードが出てきた。

それを持ったまま、席に着く。

「嬉々、注文はどうすれば？」

「ここにカードを読み込ませるの」

テーブルの下にカードを差し込む部分が見える。

「ここか？」

「そう、入れてみて」

カードを入れると奥にのみこまれていった。

赤くついていたランプが緑色に変わる。

「あとは待てばいいの」

「…何でここだけこんなに発展してるんだ？」

「さあ？それは気になってたけど誰も理由は知らないの」

「へえ…」

「カレーまだ？」

「穂香ちゃん…、まだ一分経ってないよ？」

ここにきて、穂香の子供らしさがさらに発揮されているような気がする。

外にいた頃が少し大人すぎたのだ。

「ようやく子供らしくなってきたな」

「ん？」

「外にいた頃は寝る時以外、もう少し大人に見えていたが…、やはりその年ならそれくらい甘えるべきだな」

「褒めてるの？」

「好きにとれ」

「えへへ…」

褒めてるととつたようだ。

無邪気に笑う。

この顔を見るたんびに正影は頭をなでたくなる。

いや、なでる。

「…昔はこうされてたんだね」

「またやってやろうか？」

「いいよ。さすがにこんな年に、しかも公衆の面前じゃ恥ずかしい」

人が少ない（今6時過ぎ）とはいえ、無人ではない。

まあこれが普通だろう。

「風呂は普通に入ったのにそれは嫌なのか」

「人の目があると無いとではわけが違うの」

まあ、そういうもんだらう。

確かに人の目は怖い。

何を言われるかわかったもんじやないし誤解を招く恐れもある。

「カレ、3つ、持ってきたよ？」

「ああ、美嘉《みか》ちゃん。ありがとう」

「…この2人誰？見覚えな〜い…」

ゆつくりとした喋り。

身長はどちらかといえば高い。

そしてロングヘア―。

「…お前、本当にここで働いてるのか？」

「嬉々、このしつれーな人、彼氏〜？」

「お兄ちゃんよ。前から言ってたでしょ？正兄よ」

それを聞いてふわつとしていた美嘉の雰囲気ピタツと止まる。

理解できてないようだ。

「…へ？」

「だから、10年ぐらい前にいなくなった私のお兄ちゃんだよ」

怪訝な顔をして正影を見る。

まあ、嬉々が言っていることが合っているならロスということになるから無理もな

い。

ありえないと思っっているに違いない。

「…嬉々、冗談が過ぎるよ？この人困ってるんじゃない？」

「正兄、何か言っただけで」

「初めまして。嬉々の兄をやってます、正影です」

「…」

目をぱちぱちと繰り返し返す。

頭の中は今ごっちゃごちゃになっているのだろう。

「証拠」

「は？」

「ロスである証拠。何かないの？」

「…これでどうだ？」

手に刀を出現させる。

ロストチルドレンにしかできないはずの特権だ。

「これはロスにしかできないでしょ、美嘉」

「…」

「美嘉？」



「これは驚き〜」

口調が元に戻っている。

「信じてくれた？」

「信じるも何も〜、これ見せられたら反論なくし。でも、なんで〜誰も騒いでないの？」

「教えてないからじゃないかな？まだ明季さんとか司令にしか会ってないでしょ？」

「そうだな。確かに話した人は少ないな」

「パパ！カレー、食べていい？」

。パパという言葉に反応して美嘉の視線が穂香の方に移る。

「…子持ち」

「養子だからな」

「つまらなーい…」

「お前は会って早々の俺に何を期待したんだ？」

「生々しいはなし〜」

「そんな話はない。仮にあったとしてもこの子の前では話せないな」

穂香の頭に手を置く。

最近、これが普通になり始めた。

「パパ、これおいしい!」

「そうか、たくさん食べろよ」

「うん!」

と、正影が気づく。

美嘉がじーつと穂香を見ている。

「…どうした?」

「はっ! つい、かわいいー幼女を見ると涎が」

「…変なだけでなく、変態だったのか」

「とりあえず、じこしよーかいする。私、美嘉く、よろしく」

「改めて正影だ。こいつは穂香。よろしくな」

「よぼしぐ! (よろしく!)」

「ああ…、その口にたくさん食べ物を含んでる姿もかわいい!」

もう、こいつの方向性が見えない。

ゆっくりな話し方がなくなっただけだと思っただけなら、次は穂香に対する変な愛情。

正影も穂香と同じくカレーを食べ始める。

「美嘉、とりあえずゆっくりなしゃべり方やめたら? また、元に戻ってるわよ?」

「え、ええ!? …また失敗かあ…。これはやりやすいと思っただけだなあ」

作ってたのか、そのキャラ。

「もう変態でいいじゃない。十分強いキャラだと思うけど」

「なっ！私は変態じゃないよ！」

「穂香ちゃん、こつち向いて」

「ん？」

口の周りにカレーをつけた穂香が顔を向ける。

この年なら普通は食べ方もきれいなはずだが、環境が環境だったので箸もいまいちうまく使えない。

「人生最大の幸福ー!!!」

「(こいつは穂香と2人きりにはしないようにしよう) 穂香顔中カレーだらけじゃないか。どうやったらこうなるんだ？」

「こうやったら！」

スプーンをほとんど使わず、口を皿に近づける。

いわゆる犬食いだ。

「スプーン使えよ」

「こつちの方が早く食べれるもん」

確かに早い。

正影や嬉々は話していたとはいえ、まだ結構残っている。

穂香のはもう残ってないのと変わりない。

「ごちそうさま！」

「とりあえず顔ふけ、ほら」

ティッシュを渡され顔を拭き始める。

…。

「なんでお前、まだいるんだ？」

美嘉が話も終わったのにまだ近くにいる。

目線は勿論、穂香に行っている。

「目の保養を…」

「お前は穂香から半径3m離れろ」

「なんで!？」

「保護者としてお前が危険だと感じた。ただそれだけだ。ごちそうさま」

正影もさつきまでであったはずの多量の飯を平らげ立ち上がる。

「嬉々、俺は穂香と部屋に戻るぞ」

「疲れてるでしょ？正兄は少し休まないと」

「ああ。今日は帰ったら早いがたぶん寝る」

「分かった。じゃ、正兄また明日」

「ああ」

正影が穂香を連れてその場を後にする。

「…嬉々、いいの？」

「なにが？」

「10年ぶりなんでしょ？積もる話だつてあるんじゃないの？」

美嘉は嬉々の心情をなんとなく察していた。

ここで働いていると求めなくてもいろいろな人の情報が入ってくる。

そんな中、嬉々は基本正影について話していた。

だから正影に対する思い入れは強いはずなのだ。

「…話したいことはあるよ。でも、いざ話すととなるとなんか難しくて」

「難しい？」

「今までで嬉しかったこと、苦労したこと、悲しかったこと、そして友達のこと、今の環境のこと、他にもまだまだある。でも、いざ話すととなるとなんかごっちゃまぜになっちゃって…」

「…」

言いたいことは分かる。

今までの出来事を厳選して話したくてもそれでもかなり膨大。

支離滅裂になりかねない。

「嬉々は、それでいいの？」

「うん。話したいことはある。でも、今は正兄が帰ってきてくれた。一緒にいてくれる。それだけで十分」

「…そう。嬉々がいいっていうなら良いんだけど。じゃ、私仕事に戻るから」  
仕事場に戻ろうとして

「美嘉」

嬉々に呼び止められる。

「…心配してくれてありがとう」

それを聞くと、美嘉は何事もなかったかのように仕事場に戻っていった。

ある人が走っている。

きれいに赤い絨毯がしかれた廊下を。

その先にあるのは

「司令！」

「なんだ、青羽。廊下は歩けと言っているだろう」

ラグフィートの職場だ。

広い部屋の中に高そうな机が1つ。

「プロディターが、出現しました！」

「そうか」

青羽がこんなに焦っているのに、ラグフィートはいたって冷静だった。

「放置で構わん。こっちはアクリス菌保有者を手に入れた。適当にプロトでも向かわせ

ておけ。わざわざ危険を冒して手に入れようとしなくても——」

「違います！そういうことではないんです！」

青羽が叫ぶ。

近くにいるのだから叫ばなくてもと思う。

「だったらなんだ？」

「エリア57のアルツェがやられました！」

「何!？」

その言葉を聞いてラグフィートが立ち上がる。

以前、日本と呼ばれていたこの土地には多数アルツエが存在する（今も民間人は日本と呼ぶ）。

今までつぶされたアルツエは2つ。

どちらも敵の数が多く、救援要請をしてきたが間に合わなかったのだ。

基本は防げる。

そんなアルツエがプロデーターという規格外相手とはいえ、1体に落とされたのだ。

驚くのも無理はない。

「間違いないのか?」

「今、確認のため、ヘリを向かわせていますが信頼できるスジからの情報です。間違いないかと」

要塞《アルツエ》にも勿論、設備上耐久度に違いはある。

だが、それでも要塞といわれるほど強固な壁を保有していることに変わりはない。

その壁が破られたのだ。

「現在、プロデーターの状況は?」

「エリア57のアルツエを崩壊させた後、消滅。現在は所在をつかめていません」



「リレグめ……。もう動き始めたのか」

「は？」

「いや、なんでもない。こちらの話だ」

ラグフィットはモニタールームに向かう。

青羽が後ろに着きながら現状報告する。

「でも……。なんでエリア57のアルツェなんだ？」

「私たちも調べていますがそれは全く……」

「あそこに何か重要なものは？」

「いえ……。いたって普通のアルツェでした。特にこれといった噂もなく」

圧倒的に情報が足りなかった。

ただでさえ説明されてない、謎のオスだ。

そして消えたり現れたり出来る規格外な力を持つ。

「……まだ来ないことを祈るしかない」

「何か策が？」

「確実ではないがな」

## 大切な繋がり

「呼び出し？」

「ああ。司令が呼び出してきたそうだな」

正影は穂香とふかふかの絨毯の上を歩いている。

この赤い絨毯とても高く見え、汚れた靴で歩いていた自分を考えると身が縮まる思いだ。

会話の内容からわかる通り、今司令のところに向かっている。

「休みを3日間もらったんじゃないの？」

「そのはずなんだが…、まあ昨日休めたし俺としては文句はない」

もし仕事してもらえらるなら早くほしいしな、と思う。

ここにきて分かったことだが、ここは何かと金を使う。

以前も使っていた分には使ったが、生活にかかわる最低限のことは全部タダだったの  
でそこが予想外だった。

今回は穂香のことも考えると、いろいろかかりそうなので仕事について早く教えてほしい。

だが、そんなことならわざわざ早く呼ぶことはないだろう。嫌な予感を感じながら正影は部屋の前に着く。

相変わらず大きな扉。

無駄な経費がかかっているんだろうな、と思いながらノックをする。

「入れ」

返事があつたので扉を開け、中に入る。

1人、ラグフィートが部屋にいた。

「ご用件は？」

「…3日間の休みについては文句なしか？」

「こちらもいろいろお願いしたいことがあつたので」

「その件はどうなるかわからないが、では話を進める」

机の上にあるパソコンをラグフィートが操作する。

「これを見てくれ」

映し出されたのは見るも無残な建物の光景。

穂香たちがいたところとは全然違い、本当に倒壊している。

「これはっ？」

「これをやったオスがこいつだ」

1つの画像が出される。

監視カメラでとられたであろう映像は少しぶれているが、何かを確認するには十分だった。

移っているのは人の形をした何か。

体は全部光っていて目も顔も口も髪も何にもない。

「こいつについて知ってることは？」

「…俺が目覚めた町はこいつにやられたと聞いた」

「距離からしてラフネシムだな。あそこは一番最初にこいつが現れた場所だからな」

「こいつの名称は？」

「裏切者『プロデーター』だ。言っておくがこいつについて分かっていることは少ない」「残念ながらな」と付け加えながら机の上をあさる。

「こいつについて私から言いたいことは1つ。絶対に関わるな。見つけても戦いに行つてはならん。そしてできる限り見つかるな」

「そこまで強いんですか？」

「お前とやりあえばおそらく互角といったところだ。だが、私は勝ち負けを考えて言っているのではない」

「とことうとつ」

「…悪いがそれは教えられん。今はな、つとあつたあつた」

探し物を見つけたのか、一枚の紙を手取る。

紙には仕事について書かれていた。

「お前、一文無しだろう。仕事について私は説明するのは面倒くさい。だからそれを見ろ」

「行動が早いな」

「お前、さつきから敬語を使わず…。私は上司だぞ？」

「俺は尊敬した相手にしか敬語は使わない。使つてほしければ伊島《いしま》さんみたいになれ」

何か言いたげだったがラグフイートはそれを言うのをやめ、ため息をつく。

「…とりあえず、話は以上だ。もう下がっていい」

「いや、俺にはあるんだが」

「ものを頼むならその時くらいは敬語を使え。相手の機嫌をとることも覚えろ」

「ここに来る前、1つ集落を見つけた」

相手の話は無視して、自分の話を進める。

「そこの人たちを救出してほしい」

「…それをした場合のメリットは？」

「プロトが1人増える」

「…それだけか」

興味をなくし、正影から目を離す。

自分の仕事であろう書類の山に目を通し始めた。

「悪いがそんなことに駆り出せる人材はない」

「そんなことつて！あそこの人はみんないい人なんだよ!？」

「穂香、そいつらは私の戦力になるのか？」

「…なんですつて？」

「私はこのアルツェに何かしらの恩恵を与えてくれるというのならそこに救護部隊でも討伐部隊向かわせよう。だが、そこに行つて後に見えるのはデメリットだ。プロトを踏まえても人が増えるというデメリットが多すぎる」

「あなた…それでも司令官なの!？」

「穂香、よせ!」

穂香が手を上げようとしたので正影が抑える。

今はタダの子供と何ら変わらないので簡単だ。

「パパ!」

「分かつてる、けど暴力はだめだ。だが司令、俺も納得いかないぞ」

「そんなの知ったことか。食料が減り、場所も取られる。それで受け入れるなんて無理だ。今はそんな余裕はない」

「…よくそんなんでここの司令を任されたな」

「何とでも言え。だが、もう時間だ。青羽！」

扉が開き、パタパタとあわただしく入ってくる1人の人。

「は、はい！」

「扉の前で待たなくてもいいと言ったはずだが？」

「で、ですが話のお邪魔になるかと思ひまして…」

「まあいい。その2人を前言ったところに連れていけ」

「分かりました。行きますよ、2人とも」

「話が終わっていない」

もちろん2人はそんなの納得するはずない。

メリットデメリットで切り捨てられるなんて御免だ。

「それについても話しますから」

「お前に話したって意味はない。権限はこいつが持つてるんだからな」

「…」

ため息をつく青羽。

懐から銃を取り出した。

「―!」

「言うことを聞いてください。でなければ研究機関に差し出します」

「お前は俺がロスだということは知ってるんだな?」

「当然です。ですがあなたでもここまで近い銃弾は避けられない」

「やってみるか?」

「私は構いませんが」

緊迫した空気が漂う。

穂香もすっかりおびえてしまった。

10秒ほど睨み合った後、正影が折れた。

「…また来るからな」

「直談判など意味を成さん。好きにしろ」

正影はそれを言うとその部屋を出た。

それと同時に一緒に出た青羽も緊張の糸を解く。

「はあ…、悪かったね。でもああしないと君たちは動いてくれないんじゃないかと思つて」

「そうだな。動かなかったかもしれん」



「それじゃ困るんだよ。私はこれから君たちを選ばせなくちゃいけないんだから」  
「何をだ？」

「…生きるか死ぬか、かな。大げさに言えば。とりあえずついてきて」  
絨毯の上を歩き進む。

裏道を通っているのか、再び景色が豪華なものから床が網目状の鉄でできたものに変わり、周りにはパイプが見える。

「…説明の前に1つ。司令を許してくれないかな」

「あんなこと言われて許すなんてできるわけないでしょ！」

「穂香…だったね？君の言いたいことは分かる。でも司令だつてつらいんだ」

「話した感じからすればそうは見えなかったが？」

「…司令が助けに行かない本当の理由、君は分かっているんじゃないか？」

正影は話を振られて黙る。

確かになんとなく予想はできていた。

「ペリコラム、ようはオスが大量発生する危険地帯を通らなくちゃいけないからね。もちろんその人の命も大切だけど、ここのプロトがどうでもいいってわけじゃない」

「だが、あれは言いすぎだ」

「ああやって突き離さないとペースを持っていかれちゃうんだよ、司令は。司令自身が

「一番わかっている。だからああいう言い方になってしまいうやがて1つの扉の前についた。」

「ここはカード認証らしく隣にカードを読み取るであろう装置が付いている。」

「カードを読み込ませるとロックが解除し、扉が開く。」

「まあ、その話はここまでにして…。君たちにはさつきも言った通り選択してもらおう」「どんな?」

「正影、君の場合は仲介者《メディアアトル》を、穂香の場合はプロトになるか一般人になるか」

「プロトになる!」

「…もつと悩むべきじゃないかな?」

穂香の早い決断。

「君はプロトがどんだけ過酷な仕事を強いられているのか分かってるのかい?」

「そんなの私が知るわけないよ」

「…プロトっていうのは——」

「でもそんなの関係ない」

穂香は青羽の説明を聞く前にそれを打ち切る。

「パパが戦ってる。なのに私が戦わないで見てるだけなんて嫌」

「…こちらとしては嬉しいけど、後で文句言わないでよ?」

「むしろ私を省いたら文句言うよ」

「分かった。じゃあ穂香、君はその人について行って。そこで始まるから」

穂香が部屋を移動する。

「じゃ正影、君の番だ」

近くにあつた液晶画面に人の顔がいくつも映し出される。

「これは?」

「君はタイプAだったね?今から調べる予定だけどその間にこの中から相手を選んでおいてほしいんだ」

「…だがこれじゃ顔で選ぶのと何ら変わらないじゃないか?」

「そんなもんだよ。力に差があるのは精鋭部隊と普通のプロトがそろった時だけ。そこに移ってるのは全員普通のプロトだから大差はないよ」

「こいつらはこれでいいのか? Aはともかく、BはAが死んだら一緒に死ぬんだろ?」

「君はロスでしょ? 選ばれて嫌がる人なんていないよ。ものによつてはBの人が拒否することもできるしね」

どういふ原理でつながるのかは分からない。

だが、Bにとっては悩むところだろう。

強くなれる代わりに、殺させてはいけない人が増える。

「そうか」

「じゃ、血液検査するから腕出してくれる？」

「ああ」

腕を出す。

すぐに注射が刺さりちよつとした痛みがした。

「青羽といったな？」

「なに？」

「これを見せてもらってすぐに悪いんだが…実はもう決まっている。メディアツールは」

「…穂香だね？」

「ああ」

正影は約束していた。

レアと穂香を守るという。

はつきりとそういつたわけではない。

だが、今の彼は少なくともそう取っている。

「彼女もプロトになる意思があるようだから構わないけど…、訓練すらしていない以上

あまり最初は強きは望めないよ？」

「かまわない。俺はロスだ。俺は自分が強くなりたいわけじゃない。あの子を守りたい」

「かつこいいね。嬉々が君に惚れている理由がわかるよ」

「嬉々を知っているのか？」

「面白い子だからね、私的には。それに、あの前向きな笑顔は力をくれるよ」

「いつ死ぬかわからないこの時代。」

笑顔が力をくれるとはよほどのことだ。

家族でも、小さい子供でもないのにそんな立場に立てる。

「さて、これで終わり」

採血が終わり注射が抜かれる。

「穂香を少し待つてあげてよ。終わり次第すぐにメデイアツールにしてあげるから」

「そんな急ぐことか？」

「君がロスだということはおそらく広まつてるよ。そんな人がまだ一人身なんて聞かれたらどうなると思う？」

間違いない、他の奴がお願いに来るだろう。

しかもさつき見た感じだとかなり数が多い。

青羽が血を機械に注入し、調べ物をし始める。

「メデイアツールは1人が限度なのか？」

「大抵はね。まれに2, 3人いける人がいるよ。ただ、普通はAの体が耐え切れず出血死するね」

「そうか。ならこと「パパあ！」」

穂香が戻ってきた。

めっちゃ泣いている。

「どうした？」

「注射、5回も打たれたあ！」

「両腕、両足、背中。5回必要だからね。むしろかなり楽になったと感謝してもいいんだけどなあ」

「地獄の痛みだったよ！」

「昔は細胞の強化は薬を直接埋め込むから手術しなくちゃいけなかったし、25%の確率で死んでただけど？」

「ほら、よしよし」

とりあえず背中を撫でてあげる。

ようやく泣き止んできた。

調べるのが終わったのか機械から長い紙が出てくる。

その結果を見て青羽は満足そうな顔をした。

「じゃ、次はメデイアツールとして繋げたいんだけど…どのコースがいい？」

「コースがあるのか？」

そう言っただけで思いついた。

レアのメモ帳にはいろいろ書かれていた。

「痛くないのがいい！」

「となると…こんな感じ？」

1 薬品を使用した後性交。

2 なし

「これだけか？」

「痛くないのはこれだけだね。だって普段の生活では切れることがない繋がりだよ？キ

スや血を交換したくらいじゃ無理だよ」

「パパ、私痛くないなら構わないよ？」

「俺がだめだ。娘相手にそんなことする親がどこにいる？」

青羽が「養子だよな？」と聞いてくるがそこは無視。

「養子だから、血が繋がってないからとかそういう問題じゃない。」

「一番主流なのは細胞の交換だよ」

「どのくらい痛いんだ？」

「寝てる間にやるから実際は痛くない。ただ明日までぐっすり寝てもらおうけど」

穂香を見ると頷いている。

痛くなければなんでもいいようだ。

「じゃあそれで頼む」

「分かった。じゃこっちの部屋に入って台に寝てもらえる？」

部屋に入るとある2つの台。

周りにはほかに何も見当たらない。

ほのかに配慮しているのだろうか。

「じゃあこれ飲んでもらうけどその前に1つ」

「？」

「目覚めたらおそらく明日。そして君たちは君たちの部屋のベッドに寝てると思う。1

1時にむかえがいくからそれまで部屋からは出ないでね？」

「何の用でくるんだ？」

「司令が働いてもらうだってさ。おそらく何かの討伐任務だと思うよ」

「分かった」



渡された錠剤をのむ。

麻酔は注射や点滴が主流だったのではと思う。

「それじゃ、おや——」

最後まで聞き取ることなく意識が落ちた。

## 初任務

朝10時。

正影は起床する。

「ん……？」

隣に置いてある時計が10時を指していた。

いつもはこんなに遅くない。

昨日の麻酔のせいであろう。

眠気が無く、すつきりとした目覚めだ。

「……これだけ深い眠いにつかせる麻酔って……」

昨日、あつちに呼び出されたのは午後1時ごろ。

甘く見積もつても2時にはすでに麻酔をかけられていたはず。

そこから今までぐつつする眠るなんてどれだけ強力な麻酔なんだと少し怖くなる。

隣を見れば穂香が寝ている。

安心した子供の寝顔。

思わず撫でたくなる。

頭を撫でる。

すると起きた。

「パ。パ？」

「すまん。起こしてしまつたか」

「ううん。なんだかい目覚めのような気がする」

目をこすりながら起き上がる。

布団から出た穂香は裸だった。

「…何で裸なんだ？」

「パ。パも人のこと言えないよ？」

言われて気づいた。

正影も裸だ。

「あの女…」と、心の中で舌を打つ。

「穂香、とりあえず服を着るぞ。ここで嬉々が来ようものならどんな濡れ衣」正兄おは

よー！」

タイミングを計つたがのごとく、嬉々が入ってくる。

鍵がかかっているはずなのだがどういふことなのか？

「今日は初の討伐任務なんだってね？私、一緒に行きた…」

裸でベットの脇に立っている穂香とベッドの中にいる正影を見て思考が止まる。

元気に穂香が「おはよー」と手を振っているが嬉々はそのような関係ない。

「正兄…」

「そんな目をするな。確実に誤解だ」

嬉々が考えていることは分かる。

ロリコンだと変な確信を持たれてしまっただけで後は後で困る。

しかし、ここで焦らないのが正影だ。

彼が焦ったり、感情の起伏を激しくできる相手はただ一人だ。

「じゃ、じゃあ正兄は穂香ちゃんを裸で毎日寝かせてるの？」

「…俺がそんな変態行為をする理由を聞かせてもらいたいな」

「ロリコンだから？」

「俺のロリコンは何度も言うが欲情などの変態の類ではない。守りたいという意志だ」

「…っっていうか正兄も裸…」

「青羽に尋ねればすべてわかる」

その言葉を聞いて嬉々の顔が疑っている顔から、納得した顔に変わる。

「ああ、青羽さんが関わってるのね？それなら納得」

「…話が早くて助かるが、青羽と聞いてそう簡単に信じるのか？」

「あの人は面白いこと好きだもん。私のことを狙ったんだと思うよ」  
。。。

青羽はおそらくラグフイート直属の部下。

そんな人がこんなんでよくここが成り立ってるなと疑問を持つ。

「嬉々、とりあえず俺はこれから服を着る。話はそのあとでいいか？」

「分かった。じゃ、外で待ってるから着替えたら教えてね」

嬉々が外に出て行った。

「ねえ。パパ」

「なんだ？」

「嬉々さんは何を考えてさっきまでパパのこと悪く言ってたの？」

「お前が知ることはない。とりあえず今は服を着ろ」

「はーい」

---

「——つていう話を聞いたから、私も同行したいなって」

正影たちの着替えが終わり、本題に戻る。

今日嬉々がここに来た理由は正影のアルツエの討伐任務に同行したいということだ  
そうだ。

「構わないが、お前の仕事はいいのか？」

「正兄、仕事の内容知ってるの？」

「紙はもらったけどまだ読んでない」

ラグフィートからもらった紙をひらひら見せる。

「かみ砕いて言えば、同行できる人数は最大6人。討伐対象は自分で選べるの。もちろん強い相手を相手にするほど報酬は多くなるよ」

「働いた分だけもらえる金額が大きくなるのか」

「もつとも、それで死んだら元も子もないから慎重に、と言いたいところだけど正兄には  
いらぬ心配だよ」

「…そうでもないさ」

「ここに来る途中で会った巨大なイモムシを思い出す。」

正影はその名称は知らないが、姿形が完璧に頭に焼き付いている。

「そう？まあ正兄が心配するならそれに越したことはないけど」

「今回の討伐対象は分かるか？」

「最初だから指定されてると思うけど…私は知ら「それは私が答えよう」」

扉の方から明季が堂々と入ってきた。

確かこの部屋の鍵は指紋認証で俺以外まだ登録されてないはずなのだが…。

「私は以上のクラスになると基本はこの施設のどの部屋も入れるのよ。その2人は親族ということで既に登録済み」

「…おはようエスパ。で、今日の討伐任務の対象は？」

「いつつよ」

紙を見せてくる。

紙には「ブロググニモヌス」と書いてあり、隣に画像がある。

「○型のオス、じゃなくて名前がついているのか？」

「こいつはそこらへんのプロトでは倒せないと判断されたランク5の敵よ。オスにはランクがあつて、1〜8まである内の1〜4は基本プロトが、5、6は私たち討伐部隊が、7以上は手を出してはならないということになっているのよ。それで、5以上のオスには名称が与えられるの」

「…つまり俺は初戦から普通のプロトが相手できないような相手とやりあえと？」

「あれだけのオスを瞬殺してよくそんなこと言えるわね。これはあくまでウォーミングアップよ」

明季が言ったのはペリコラムでの敵との戦闘。

穂香を降ろした正影は無双した。

「あれはあくまで俺が本気を出した時の話だ。あれをした後は反動が強くて滅多に使わない」

「何はともあれ、あなたのおかげで少しは私たちの出番も減りそうに助かるわ」

明季が話し終えたところでピピピ！、と音がした。

明季が腕時計を確認する。

「時間だ。後聞きたければヘリの中で聞いてあげるわ」

「まだ10時30分だが？」

「できる限り早くに行動するに越したことはないわ」

「そうか。まあ構わないが」

「あ、あの！」

正影が立ち上がり、行こうとして嬉々が呼び止める。

「嬉々…、だったわね。来たいなら来て構わないわ。好きにしてください」



「また、質問する前に答えやがった…」

「あ、ありがとうございます！」

「行くわよ」

へりの搭乗して「ブロッグニモヌス」のいる場所へ向かっている。

乗っているのは明季、恭二、穂香、正影、嬉々の5人だ。

いくら相手がランク5のプロトでは倒せない強敵とはいえ、このメンツではおそろく歯が立たない（オスが）。

これから狩られるこのオスのことを思うと少し心が痛いほどだ。

「隊長、目的地到着まであと5分切りました」

「そうか」

このへり、今回乗るときはじめて気づいたのだがガトリングやミサイルなど武装して

いた。

一応、対オウステム仕様になってはいるらしく、これでも戦えないこともない。いや、戦える。

ただ知つての通りガトリングやミサイルは消耗品だ。

接近戦用の武器ならば欠けても補強するだけで済むのでアルツエとしてはこれをあまり使いたくないらしい。

「正影」

明季が正影に呼びかける。

「なんだ？」

「今回の戦闘はお前1人に任せる。我々は後ろから後方支援を行う。それでいいな？」  
「構わないさ。あれくらい問題ない」

先ほど見せてもらったデータによれば相手は20m級のオス。

型はウミウシ、あるいはナメクジ？だそうだ。

「ただ、1つ質問だ」

「相手はそこらへんのオスと違って分裂するの。死の間際にね」

なんでたかが20m級がプロトに倒せないんだ？と質問しようとして先に答えられる。

「分裂？」

「倒す方法はおそらくコアの破壊のみ。ただ…、こいつのコア未だに見つかっていないの」  
「コアが？」

「戦闘能力自体は低いからプロトでも倒せるの。でも不死身を相手じゃ無理な話。そこでああなたの出番ってわけよ」

「丁寧な解説どうも、エスパーさん」

へりの高度が下がり始める。

「そろそろ着くわね…。みんな準備しなさい」

それぞれが自分の武器を持つ。

へりが建物の屋上に降りる。

「降りるわよ」

明季を先頭にして正影たちが降りていく。

「ここも、ラフネシム？とかいうところと似てるな」

「ここももともとは建物がたくさん立つ予定だったらしいからね。さっ、とつとと敵を倒して帰るわよ」

「だけど、どうやって探すんだ？」

そう。

何を隠そう、ここは広い。

いくら相手が20mはあるとはいえ建物の陰で見えなければ探すのは一苦勞。レーダーでもこのあたりということしか分かってない。

建物を降りながら話す。

降りると言っても正規のルート（階段）ではなく建物の壁をワイヤーを使って降りているのだが。

「今回の敵はわざわざ痕跡を残してくれるの。こういうね」

降りたところで地面に大量の粘液がついているのが見えた。

その粘液はずつと遠くまで続いている。

「まだ固まってない。近いわね」

そこからは足で索敵を行う。

建物が並ぶここは身を隠すにはうってつけだ。

こちらにとつてもあちらにとつても。

建物を曲がったところで敵を見つける。

「敵発見。討伐対象ではない。10m未満のアリ型の模様」

『了解しました。皆さんなら問題ないですね。撃破をお願いします』

「了解」

耳に付けていた通信機からオペレーターと明季の声が聞き取れた。

『正影さん、聞こえますか？』

「ああ、聞こえる」

『今回の作戦のオペレーターです、リムといます。よろしくお願いします』

「よろしくな」

『僕は状況を客観的に見て判断する立場にいます。もし、戦況等で悩みが出たときは連絡すればすぐにできますので』

ようはストッパーみたいなものだ。

仲間が死んで逆上したりすると、人は周りが見えなくなる。

そんな時にオペレーターが状況を見直して、助言をするのだ。

「助かる」

『それでは武運を』

回線が切れ、正影の意識が戦場に戻る。

陰から見えるのはアリ型のオス。

あれくらいなら全然穂香でも余裕だろう。

「私もそう思うわ」

「…もはや疑問以外でも読み取れるのか」

「穂香、あなたの力が見たいわ。あいつをお願いできるかしら？」

「任せて！」

「恭二、嬉々、手は出さないでもしもの時に穂香を助けられるようにして頂戴」

「はい」

恭二の装備はおそらく手についてるグローブのようなものだろう。

どういう構造かは知らないが、那倉のようにして戦うんだらうなと思う。

そして嬉々が持っていたのは…

「嬉々、それは…」

「うん。正兄とおそろいだよ」

太刀だ。

嬉々の身長より少し小さいぐらいで見た感じは長い。

「じゃ、パパ。行ってくる！」

穂香がオスの視界に入った。

嬉々と恭二もすぐにでれるように構える。

穂香が距離が50mも離れていないのにスナイパーを取り出す。

「本当にロスのように武器を取り出すのね」

初めて見た明季が感心する。

「なんでスナイパー？」

嬉々はそのちに目が行っている。

確かに50mも離れていれば撃てばスナイパーでも対応できる。

だがそれは本来動かない相手を相手にした場合だ。

オスとなれば50mなんて距離、すぐに縮めてくる。

使うならマシンガンか、ショットガンあたりが妥当なところだ。

「ぎゅうううううう!!？」

オスが迫ってくる。

しかし、穂香は焦らない。

一度、何体もの40m以上に追いかけられたのだ。

たかだか2, 3mなど恐怖するにあたいしない。

1発、銃弾がオスに撃ち込まれる。

が、オスは歩みを止めない。

しかし、穂香はもう銃を構えていない。

「穂香ちゃん!？」

出ていこうとする嬉々を正影が止める。

「やめろ」

「なんで!?あのままじゃ!」

「もう勝負はついた。穂香の手柄を横取りする気か?」

「え?」

嬉々が穂香のほうを見る。

するとオスは歩みを止めかけていた。

動きたくても動けない、といった感じのようだ。

やがて完全に停止する。

「コアを壊したの?」

「いや、あいつのスナイパーの付属効果だ。即効性の毒がついていて10分ほど動けなくさせられる」

「…それならどんな敵も余裕じゃないですか?」

「生憎、あいつの毒は大きくて20mが限度なんだ。しかも大きくなればなるほど効果時間が短くなり最短1分だな」

「パパー!やったよ!」

穂香が元氣よく手を振りこちらを見ている。

「ああ。頑張ったな」

褒められると嬉しそうに顔を笑顔にする。



そのあとナイフを取り出し解剖を始めた。

「あれなら安全にコアを探せるということですね」

「ああ。なかなかいいのうりよ」「パパ、見て！」

走ってくる穂香。

今回のオスに血は通ってなかったらしく血はついていない。

手には水晶のような玉がある。

「これなら売れるんじゃないか？」

「…だいたい2〜3万たりね」

「穂香ちゃんすごいね」

「えへへ…」

穂香が大事に玉を抱える。

「とりあえず、その子の力は分かったわ。じゃ、正影、次はあなたの番よ」

「ああ、期待に応えられるよう、善処しよう」

## 才能

「あれよ、正影」

「…なんかでかくないか、あいつ？」

正影たちが建物の陰から今回の討伐対象である「ブロッグニモヌス」を見ている。見た目通り行動は遅い。

通ったところに滑った粘液がへばりつく。

だが、正影にとつてそんなことはどうでもいい。

少し問題なのは目の前の討伐対象がでかいということだ。

30m級なのは間違いないだろう。

「そうね…、食べたりなんかしたりして大きくなったんじゃないかしら？」

「あの資料の画像ならそんなに大きくなかったぞ？」

「あれ、半年前の画像だもの」

敵を倒しに行く時、最新のできる限り完璧な情報を教えるのが普通だ。

古い情報に興味などない。

だが、今回は討伐しに行くのがロスということもあつて仕事が増えたのだらう。

いくら倒せるからといってもこの扱いはひどい。

「いや、そういうわけじゃないわ」

「じゃあなんでだよ？」

「私が古い資料を持ってきただけ」

「エスパーのくせに天然かよ…」

「いや、故意よ」

「(…いつ…!)」

言いたいことはいろいろできたが今はやめておくことにした。

目の前の敵に集中する。

大きさは30m級と少しめんどくさくなってしまったがやることは変わらない。

あいつをぶっ潰す。

一応不死身ということらしいがそれはあくまでも現状での話だ。

人は不死不老を求めるといだが、それはオウステムも例外ではないようだ。

もつとも、オウステムに老いるという概念があるのかは不明だが。

「とりあえず俺は行ってみていいか？」

「ええ。今回はあなたの力を司令が確認するために依頼した任務だから。あなたが好き

なように戦えばいいわ」

「じゃ、行ってくる」

正影は跳び出していく。

敵の背後に跳び出したので相手はまだ気づいていない。

とりあえず、近づいて一太刀入れてみる。

「ツラア！」

背中から斬りつけた。

予想外なことに、ツ大した力を入れてなのに体の2分の1あたりまで刃が通る。

「オオオオオオオオオオオオ…」

痛いのか叫び声というよりは悲しみが込められた声を張り上げる。

ここで1つ問題が発生する。

刃が刺さったまま抜けないのだ。

いや、とてつもなく抜けにくいのだ。

ネバネバの粘液のせいか、刃だけでなく足も動かすにくい。

「ぬぎぎぎぎぎぎ…」

正影はまだ本気を出していない。

いつでも出せるのだが、できればこれは使いたくない。

後で体がひどく気だるくなり、制限時間いっぱい使えばその後しばらく身体能力も下

がるからだ。

もつとも、こんなやつ相手に制限時間いっぱい本気で戦うなんてことはないと思うが、仮にもあいつは不死身と呼ばれている。

えたいが知れないのだ。

少しずつ刀が抜けていく中、ブロッグニモヌスの体から触手のようなものが生えはじめる。

「邪魔だ」

正影は左手で刀を抜きながらそこらへんに生えた触手を千切っては投げを繰り返す。

しかし、数が減らない。

「まだ……かー」

疑問を持ち始めたところで刀が抜けた。

ぐつちよぐちよの粘液がついていて刀の切れ味が間違ひなく落ちている。

いったん離れて刀から粘液を振り払う。

『ロストチルドレンの力はそんなもの？』

通信機から明季の声がした。

間違ひなく嘲笑っている。

「まだこれからだ」

『なぜ本気を出さないのかしら?』

「制限解除した後は気だるくなる。できれば使いたくなかったが…」

『使うのかしら?』

「状況が変わった。さっさと終わらせるため、少しは本気を出す」

そう言うのと正影は刀を握っている手に力を込める。

そして一瞬にして敵に近づく。

敵はそのスピードについていけない。

正影が刀を振り下ろす。

敵は一瞬で真つ二つになる。

しかし、その程度では相手は死なない。

1分もすれば相手は体をくつつけなおしたり、生やしたりしてすぐに立ち上がる。

「…ない」

コアの所在を確認しようとしたが断面には見当たらない。

正影はそう分かると間髪入れずに斬りつけはじめる。

「ない…違う…ない」

斬りつけながらコアさらにいろいろなところを見るが見当たらない。

無心になって探し続けたが発見できなかった。

気づけば相手は細切れになっている。

「…エスパー」

『なにかしら?』

「ここから本当に再生するのか?」

『見てれば分かるわ。もつとも、だれもそこまで小さく斬ったことはないけど』  
ならばこれでもう終わりではないのか?

そう思った正影だった。

が、ここで細切れになったオスに動きが見え始める。

「ん?」

突如、細切れになっていたオスの一部から新しい細胞が生えはじめた。

「!?!」

すぐにその場を離れる。

瞬く間に細胞が大きくなっていく。

膨張する風船のごとく丸く膨らんでいく。

そこで正影を見た。

「あれは!?!」

キラッと輝く水晶のような玉。

しかし、確認した直後敵の形が変わっていく。

それと同時に水晶が埋もれていった。

やがてその形は最初のブロッグニモヌスになる。

「…不死身、か」

確かに相手は再び甦った。

目の前には先ほど細切れにしたはずのオスがいる。

だが…

「違ったな」

正影が再び刀を構える。

「穂香、聞こえるか？」

『はい、パパ。どうしたの？』

通信機、マジで便利だ。

「さっきの俺の戦い見てたな？」

『うん、凄かったよ』

「今からもう一度同じことをする。そうしたらあいつはまた同じく再生するはずだ。その時におそらくコアが見えるはず。スナイパーで狙え」

『分かった』



「チャンスは何度でもある。緊張せずにやれよ」

正影が手に力をこめる。

「帰りはグロッキーしそうだな」

つぶやいた後、すぐに相手に近づく。

横に剣を滑らせる。

少し斬りにくくなっていたので、考えたのかと思ったが本気を出している正影の前では意味を成さない。

相手の体が上と下で真つ二つになる。

「次だ」

今度は上から斬りかかる。

相手に正影はほとんど見えておらず、今何が起きているのか分からない状況だろう。

しかし、相手も黙ってはいない。

上から斬りつけた直後、震え始めた。

少しは危ないと思う正影だったが、後のグロッキー状態を考えるとそつちのほうが面倒だ。

問答無用で斬り続ける。

正影がもう4、5回、斬りつけたあたりでブロッグニモヌスの攻撃が始まった。

ぶつ切りになった部分も含めてねちよねちよの粘液が凄い勢いで跳んできたのだ。

攻撃というより一時的な足止めにしかならないだろう。

あまりの数の多さに正影もそれに被弾する。

「ぐっ！」

そのまま跳んでいき、建物の壁に貼り付け状態になる。

ここでプロトならば他の仲間の助けが必要となる。

だが、正影はロスだ。

「グヌヌ…あ、ああああああア！」

粘液の拘束から腕力だけで逃れる。

明らかに不機嫌になっているのが分かる。

無駄に本気を出してしまったからだろう。

「死ねよ」

ブロッグニモヌスもこんなに早く拘束を解けると思っていなかったのかただ黙って

みているだけ。

そこに最後の一撃を正影が加える。

敵のぶつ切りがぐちよつと、音をたてながら地面に落ちてくる。

そのまま敵は動かなくなる。

「穂香、準備しろ」

『いつでもいっよ』

正影も緊張の手を緩めず、構える。

断片の1つが再び膨張を始める。

瞬く間に膨らんでいく。

「(…さつきは上のほうにあつたな)」

建物をつたい上のほうで待機する。

「さつきとしろよ…デカ物」

長い間、本気を出し続ければその分後で来る反動が強くなる。

ロスの本気を出すというのは例えるならペットボトルの中の水を飲むことだ。

中の飲み水はロスの本気を出す燃料だ。

ペットボトルの中の水を飲むにはキャップを開けて口に含めばいい。

そして飲み終えたらキャップを閉める。

だが、ロスのペットボトルは常に下を向いている。

つまり開けたら永遠に中から水が流れ出るのだ。

正影も待つてる間キャップを閉めればいいのだが、正影はこのキャップを閉めるとい

う行動も面倒くさいと思っていて一回開けたら飲み終わるまで閉めたくないのだ。

「…そろそろか?」

肉塊が大きくなり、膨張を止めた。

この一瞬しか、どういうわけか分からないがコアが確認できない。

同じ場所に再び顔を出してくれればいいが…

「…チツ!」

そううまくはいかなかった。

キラツと光った部分は下のほうに見えた。

知能があるのか、或いはランダムなのかは分からないがこれでは面倒にもほどがある。

下のほうに跳んだがすでにほとんどが埋まりかけ。

すぐに間に合わないかと判断した正影はすぐに再び切り倒す準備をする。

「穂香、今のは確『バン!』!」

通信機から銃声がした。

正影は銃など使うことは滅多にないのでなれない音が耳元でなったため、顔をしかめた。

そしてすぐに下のほうでペキン…と音が鳴る。

気づけば音をたてながら形を整えていたオスの動きが止まっている。

「…」

コアに銃弾が当たっていた。

「…大したやつだな、穂香」

「お疲れ様です、これで任務完了です」

「ああ…」

無事任務を終え、帰還するためのヘリを待っている。

「やけにテンション低いですね？」

「本気出しすぎた…かなり疲れたし気分悪い」

最後の最後まで本気を出せば意識を失うとかしてこういう気分の悪さは出ないのだが、中途半端に使うとこうなる。

別になんでもない風にできないこともないがだるいときはだるい。

無理にやせ我慢するのは初対面の奴の前だけでいい。

「ロスも大変ですね」

「パパ、大丈夫？」

「大丈夫…だ。死ぬわけじゃない」

と、穂香と話してて気づいた。

嬉々がない。

「嬉々はどうした？」

「あれ」

指を指したほうを見ると嬉々が縮こまっていた。

よく見るとなんか濡れた感じだ。

「さっきの跳んできた粘液が見事に当たっておニユウの服が台無しだった」

「…あの距離の粘液が当たったのか」

300mは離れてたはずだ。

災難だなと思うが正影にはどうしようもない。

「はい。はい。…では」

明季が報告を終え、正影たちのほうに向きなおる。

「正影、お疲れ様。今、ヘリが向かってるんだけど…穂香」

「なに?」

「司令があなたの射的の腕を褒めてたわ。もちろん私も同意見」

「パパは?」

「凄かった、としか言いようがないな。あの小さな的をよく当てたな」

「えへへ…」

穂香が照れる。

穂香にとつて司令や明季が褒めてくれたことも少しは嬉しかったが、何よりも嬉しいのは正影が褒めてくれたことだ。

「しかし、俺は上の方で待機していたし俺はお前にどこを狙えとも言ってなかったのにどうしてコアの場所が分かった?」

「私の役目はパパを手助けすること。パパの手が回らない部分を狙えば役目を達成されると思ったの」

「…今日のMVPは穂香だな」

「M…なに?」

「MVP。最も活躍した人ってことだ」

それを聞いて嬉しかったのか喜ぶ。

今回は確かにほとんど穂香のおかげといっても過言ではないだろう。

「…穂香は体の身体能力を上げるよりも射的の腕をより一層鍛えた方がいいかもね」  
「そんな部隊でもあるのか？」

「いえ、後方支援を主にする立場になったらどうって話よ。プロトになっても建物をよじ登るとかは辛いだろうからそれくらいは訓練させるけど、後はすべて射撃の腕を鍛えるのにまわせばさらにすこくなるわ」

正影としてそちらのほうが穂香の危険も減るから有りがたい。

「俺としては賛成だが…」

「穂香は？」

「…それはパパの役に立てる？」

「もちろんだ」

「なら…、私そうする！」

「決まりね。後でする訓練のプラン変更しておかないと」

ちようど話が終わったところでヘリの音がした。

「さっ、帰るか。嬉々、いつまでそうしてるんだ？」

「これ、洗濯しても絶対落ちないよ…。はあ…」

「ならここに残るか？」

「正兄い…、少しは慰めてよお」



討伐対象「ブロッグニモヌス」

作戦参加者 5人

帰還者 5人

作戦成功

## 人ばかり

正影が初任務を終えてから2日が経っていた。

もともと初任務は敵のランクが高かったのもあり、報酬が高かった。

これで2，3週間はとりあえずやっていけるだろう。

そんなこともあり、人目にあまりつかない時間に外にでた。

正影はロストチルドレンだ。

別に人に会ってもよかったのだが何か言われるのは間違いない。

まずは建物の構造を覚えたいと思い、しばらくは人目を避けていた。

だが、それをいつまでもそういうわけにはいかない。

というわけで今日は人が多い時間に晩飯をとることにした。

で、来たわけなのだが：

「あなたがあ、嬉々のお兄さん？」

「すごい！本物だあ！」

「嬉々のお兄さん、イケメンじゃない！」

周りの反応が予想以上だった。

なんか人が集まりすぎて居づらい。

食堂に来たのだから飯を食べたいのだがひっきりなしに話しかけられ、答ええないわけにもいかない。

穂香も初めは喜んだが今は人の多さに少し引き気味だ。

「…すまないが——」

「ねえ、正影さん。メディアツールはもう決まった？まだだよな？」

「いや、それならこい——」

「だったら私にお願いできない？」

「ちよつと、何意味わかんないこと言ってるのよ！ここで話すことじゃないでしょ」

「でもここはアピールしないと！」

「いや、だから——」

「あつ、私は琴菜《ことな》っていいます。よろしく」

「私、エニスって言うよ！」

なんかみんなして自己紹介始めた。

そんなぐちゃぐちゃに言われたら覚えられるものも覚えられないだろう。

っていうか後ろの方、もう聞こえてないから。

「ちよつとみんな！何やってんの!？」

この騒ぎに気づき嬉々がやってきた。  
救いの手だ。

「正兄、この騒ぎは!？」

「俺に聞くな。ここに来たらこうなった」

「あー、正兄言いたこと言わなくちゃだめだよ。黙って話聞いてちや、いつまで経つても終わらない!穂香ちゃん見なよ、怯えてるじゃない」

「すまない…。だが、どうも俺はこういう場面で叫んだりはできなくてな…」

正影を知っている人は誰でもわかる。

正影は基本、冷静な状態で事を進める。

感情をあらわにするのはオスと戦ってる時とある人と話している時だけだ。

「はあ、保護者失格ね…。はいみんな!ここは食堂!食べ物食べる場所だよ!戻った戻った!」

「何よそれー」

「嬉々、まずお兄さんを紹介しなさいよ!」

ブーイングが来る。

なんか女子のブーイングがすごい。

「だーもう!うるさいうるさい!いいからこの騒ぎはとりあえずおしまい!正兄と話し

たいなら任務にでも誘って話しなさい！」

「任務中に私語もどうかと思うがな……」

「正兄は黙ってて。さあ、早く戻って！あんまりうるさいと美嘉に言いつけるわよ？」

それを聞いた瞬間、ほとんどの人がそこを去った。

よくわからないが効果絶大のようだ。

「全く……、みんなして見せ物のように。穂香ちゃん、大丈夫？」

「うん、ありがとう」

「パパは駄目ね。自己主張が弱くて」

「……穂香に強くなってもらうため、訓練を兼ねてただけだ」

「さつきは叫べないとか言ってたくせに……」

「このとんこつラーメンいけるな」

「こういう時は話を逸らすに限る。」

「まったく……」

「おう嬉々、今日はお疲れさん……って誰だ？」

一人の青年が寄ってきた。

「正影に用があるわけではないようだが、妹の知り合いとなれば少しは気になる。

異性ならば。」

「蓮《れん》、この人は私のお兄ちゃん、正影だよ」

「…ああ！嬉々の言ってたロストチルドレンの？」

「ええ。自慢のお兄ちゃんよ！」

それを聞いて正影の方に向きなおる。

「初めまして、正影さん。蓮といます」

「正影だ。こっちは穂香。ところでお前は嬉々の彼氏か？」

「ま、正兄!？」

「…正影さんは初対面で凄いいこと聞いてきますね」

「すまん、どうも10年間も会ってなかったとなると妹の近況が知りたくなってな」

嬉々は今16歳。

恋沙汰があってもおかしくない年頃だ。

兄妹としてはそのことは知りたい。

…いや、親のような目線でのような気がする。

「残念ながらそういう関係じゃありません。ただ…」

「ただ？」

「俺がAで嬉々がBのメディアツールではありますけど」

「なに!？」

恋人以上の反応を示す。

こいつに嬉々の命が懸かってる!?

「…お前、強いのか?」

「その心配だったら大丈夫ですよ。俺、腕には自信があります」

「本当か?」

「正兄、心配し過ぎだよ。私も蓮の実力なら大丈夫だと思ってるから」

「…」

それをはた目から眺める穂香。

「…なんか娘が恋人連れてきた時の父親みたいだよ、パパ?」

「なんでそんな知らない情報を知っている?」

「おままごとでやった!」

…最近のおままごとはハイレベルなんだな。

夫婦の役があるのは普通として、その前段階からあるのか。

「…娘さんを俺にください」「何言ってるのよ!」「イタツ!?!」

嬉々のスリッパによるツツコミが蓮に入る。

テンポがいいように見える。

ご丁寧にもスリッパには「ツツコミ用」と書かれていた。

「蓮さん、ナイスボケ！」

「穂香ちゃん、ナイスぶりだったぜ！」

穂香は知らない人とやっていくのがうまいと思う。

一歩間違えればなんだこいつと思われるが穂香はその駆け引きがうまい。

「と、おふぎはここまでにして。いいですか隣？」

「いいぞ」

「嬉々、悪いけど食券買ってくるついでに俺のお願いできるか？」

「えー、なんでよ」

「こっちは正影さんと少し話したいことがあるんだ。男同士でしかできない話をな」

「…分かったわよ。でもすぐ戻るからね？」

「すぐに終わるからいいよ」

それを聞くと嬉々は食券のほうへ行った。

「…正影さん。少し真剣な話、いいですか？」

「なんだ？」

蓮の顔が真剣になる。

穂香は食事に夢中、正影は飯を食べながら聞いている。

「…嬉々との交際を認めてください！」



「ムグッ!？」

予想だにしなかった言葉に食べていたハンバーグをのどに詰まらせる。

胸をたたき、水を飲んでなんとか窒息死を回避する。

ロスの死因が窒息死なんて笑い話もいいところだ。

「だ、大丈夫ですか？」

「あ、ああ。それより、交際を認めろってどういうことだ？」

「いや、まだ付き合っていないんですけど俺、嬉々のことが好きでして…」

「はあ…、それで？」

「嬉々があれだけ尊敬しているお兄さん。まずこつちに認めてもらうべきかと思いまして」

…まさかこつちがきたか。

嬉々に好きな人がいるのか聞きたかったのに嬉々が好きという男子が来た。

いや、まあ確かに嬉々はスタイルよし、顔よしの美人だけど。

「別に俺は構わないが…」

「本当ですか？」

「嬉々はどう思ってるのか分かるか？」

「うん…、あいつなんていうか天真爛漫っていうんですか？そのせいで正直分かんない」

「いっす」

まあそこがいいところなんですけどね、と付け加える。

そこまで話したところで嬉々が戻ってきた。

「お待たせ、話は終わった？」

「ああ。終わったよ。そういえば何買ってきたんだ？」

「サラダ定食」

「…嫌がらせか？」

「文句言わない。あなたはこうでもしないと野菜を摂取しようとしなないんだから」

「俺がどうしようかと勝手だろ」

「あんたが死ぬと私も道連れなの。冗談じゃないよ」

よほど長い仲なのか親しそうに話す。

少なくとも10年前は嬉々に蓮なんて知り合いはいなかった。

なんか複雑な気持ちだ。

離れて行ってしまったような、親しい人がいてホッとできたような。

10年間、一緒に過ごせなかったのが残念でならない。

「じゃ、俺はもう戻る」

「正兄ごめんね。なんかみんな盛り上がっちゃって…」

「お前が謝ることじゃない。それに悪い奴らじゃないという事は分かった」  
「うん。よかつたら明日からでも任務と一緒に行ってみてね」

「ああ、そうするよ。穂香、お前は どうする？」

「私はもうちよつと食べてから戻る！」

「分かった。道に迷うなよ」

それを言つて食堂を出ていく。

が、食堂を出た瞬間

「正影さん！」

先ほどちりじりになったはず？の女子共の残党（3人）が待つていた。

つていうか、マジで女子しかないのはなぜだ？

「ね、イケメンでしょ？」

「ほんとだ！兄妹どつちとも美形なんだ。羨ましいなあ……」

「…何の用だ？」

「声もいい！」

正影の周りで盛り上がってる。

別に正影は女性が苦手というわけではないのだが、うるさい相手は少し苦手だ。

外の世界はずいぶん静かなのにここは盛り上がりすぎだろう。

さつきは飯を食べるといふ目的があつたのでその場に留まつたが今はそんな理由はない。

正影がその場を去ろうとする。

「正影さん、レディを無視していくのはよくないよ」

服をつかまれ去ることができない。

「じゃあ何の用だ?」

「明日暇?」

「そうだが」

「じゃ、あたしたちと任務行こうよ!」

早速の任務の誘い。

断る理由はないのだが…。

いまいち気乗りしない。

このうるさい奴らとかあ…。

「…」

「なんで悩むの?ハーレムできるのに」

「生憎そんなのに興味はない。男を欲してるなら別を当たれ」

「チョーかつこいい!今の聞いた!?!この男子共からじゃ絶対聞けない言葉だよ!」

「こんな彼氏ほしいなあ……」

食堂の前で話していて気付いた。

男子の数が少ない。

さつきから女子8に男子2くらいの割合でしか食堂に人が来ない。

戦闘ならば確実に男子の方が多くなるはずなのだが…。

「男子が弱い、ということよ」

不意に疑問に答えられ誰がいるのか理解する。

「…エスパー。どういう意味だそれは？」

明季が来ていた。

「簡単なことよ。ここは一応これも激戦区よ。一攫千金を狙ってくる馬鹿どもが多いの、男子に特に。自分は強いと実力を見誤った奴がここにきて死ぬ」

「それでも女子も同じことだろ？」

「ここに来る女子は基本これでもエリートよ。考えて行動する人が多いから無理な戦いはしないの。ここができてほしい5年。はじめこそ少なかったけど死人が少なかったから、ここまで増えたの」

そう言いながら持っている鞆の中をあさる。

出ていたのは一枚の紙。

「…少し前に行ったばっかりだが？」

「司令は断らないって言ってたわ。まあ、今回の敵はランク3だし、気軽に行つてきなさい」

ランク3と聞いて紙の内容を見る気が失せた。

雑魚を俺に当てるのか…。

「正影さん、任務決まったの？」

「私たちも連れてつてよ！」

「お願いできませんか…？」

いまだに気乗りしない。

だがここで断ってしまっても後でしこりが残りそうだ。

実はいいやつなのだろうと思ひ込むことにした。

「ああ、別にいいぞ」

「やったー！」

「ありがとうございます…！」

…最後の奴の語尾の…！はなんだ？

変な気迫を感じるぞ？

「じゃ、明日9時でいい？」

「ああ、それくらいで構わない」

「あと一人誘いたいんだけどいい？」

「構わないが、こつちも穂香を連れていきたいから一人にしてくれよ」

「りよーかい！じゃ、あんたたち、行くわよ！」

「はーい！」

「はい……！」

どこに行くのかは知らないが走って行ってしまった。

あの変な気迫を持つ子も普通に走った。

「パパ、まだいたの？」

3人を見送つてすぐ、穂香が食堂から出てきた。

明季はいつの間にかいなくなっている。

ここに来たということはおそらく食堂に用があつたのだろう。

「何してるの？」

「いや、用事は終わった。帰るぞ」

「じゃあ肩車して！」

「……お前もう9歳だろ」

「今まで甘えられなかった分、パパに甘えたいの！」

穂香は今まで荒れた地でひもじい思いをしてきた。

実の親はすでにいなかった。

…。

「ふん、ほら穂香」

正影がしやがむ。

「パパ大好き！」

喜んで肩に乗る。

「よし、じゃ帰るか」

「うん！」

「…」

1人の男がその様子を遠くから見ていた。

外見に特徴はない。

別に周りとは浮いているわけでもなく自然だったが、確かに敵である男がいた。



「あれが、正影。ロストチルドレン…」

### 3姉妹!

「いや〜…多いわね。これは一体一体こそすぐに倒せるだろうけどこの数はねえ」

「正影さんに任せられた理由が分かるわ」

「私たちにかかれば、問題ない…!」

ある1つの廃ビルから下を眺めしやべる3人。

下にいるのは無数の蜘蛛型のオスの群れ。

大きさはどれも3, 4mぐらいで大きい物でも10m級いくかいかないかくらいだが数が多い。

軽く30以上はいる。

蜘蛛が集団行動するなんて正影は聞いたことがない。

まあ、生まれたてなら分からなくもないが。

「そうね、私たちの力を奴らに見せつけてやりましょ!」

「おー!」

3人が片手に武器が入っているであろう大きなカバンを持ちながら士気を上げる。

あつちは大丈夫そうだなと思ひ、心配な方を見る。

「穂香ちゃんマジ天使。ハアハア…」

「美嘉さん、暑苦しいよう」

美嘉と穂香だ。

いや、心配なのは美嘉だけで穂香は戦闘面では特になんとも思っていないのだが。まさか、あの3人が美嘉を連れてくるとは思ってもみなかった。今でも少し、穂香を連れてきたことを後悔している。

|||||

「きゃー、穂香ちゃホブツ!？」

「なぜおまえがいる?」

ここに来る前、ヘリが来るという集合場所に行ったときから正影はなんでと思ってる。

集合場所に穂香と一緒にいったとき、いたのは3人ではなく美嘉だったからだ。

目の前に変態がいてそれを「はいわかりました」と納得する保護者はいない。

「なんでって、討伐任務あるでしょ?」

「だが俺はお前を呼んだ覚えはない」

「でも呼んでくれたのは「正影さくん、待ちましたあ?」あの子たちよ」

3人が少し遅れてやってきた。

「美嘉はもう来てたのね」

「当たり前。穂香ちゃんとか一緒にできるなんてそれこそ昨日からテンション上がりっぱなしで♪」

「じゃ、そのテンションを保つたまま早く行こうよ」

「エニス、藍《あい》、自己紹介まだだよ…?」

「…ああ!?!」

ここで3人が自己紹介をした。

3人の名前はエニス、藍《あい》、梓《あずさ》というそうだと。

ちなみに「…」が語尾につく人は梓。

藍と梓は黒髪だが、エニスは金髪。

名前からも察することができるように外国人だ。

日本語が達者なのは生まれも育ちもここだからだそうだと。

「よし、自己紹介も終わったことだし早く行きましょ」

「待て」

「何？」

「こいつをなぜ呼んだ？」

自己紹介が終わり、さあいくぞ！という雰囲気の中正影が尋ねる。

なぜこの変態を呼んだのか。

っっていうか…

「こいつは食堂の従業員だろ？戦えるのか？」

「ふふふ…甘いよ正影さん。私がただの従業員だと思ってるの？」

「違うのか？」

「私もプロトよ。そしてこのアルツエの中では最大の情報屋にして唯一の斧使いなの

！」

「…そうか」

それだけ聞くと正影はへりに乗ろうとする。

「分かってくれたみたいね」

「ああ。お前は必要ないな。さっさと帰れ」

「なっ！正影さん、私がどれだけ今日を楽しみにしてきたか知ってますか!？」

「知りたくない」

「知ってください！っっていうか本当に置いていこうとしないでください！っっていうかエニスたちもなんとか言っつてよ！」

「えっ、いや、正影さんが嫌ならやめようかななんて…」

「確かにランク3くらい私たちだけでも余裕だし」

「すみません…」

味方をなくした美嘉がおろおろする。

まあ、そうなるか。

少し可哀想だが変態を乗せるわけにはいかないと言われないと正影も何も言わない。

「パパ、美嘉さんはなんで置いてくの？」

そんな時に穂香に話しかけられた。

理由を説明してもおそろく分からないだろう。

「…大人の事情だ」

「でも今いるのは5人。もう1人いけるよ。乗せようよ」

「しかしだな…」

「パパ、お願い」

「…」

「放したくない」

「おい、それ以上のことをすればあの蜘蛛共にお前の頭から順にすべてくれてやるから覚えておけよ?」

「大丈夫、正影さん。仕事はちゃんとするから。もつとも…」

穂香を抱き寄せながら美嘉が3人の方を見る。

「蜂の巣三姉妹がいる以上、私の…いや、私たちに順番があるかは不明だけど」  
「蜂の巣三姉妹? あいつらは姉妹なのか?」

「いいえ。ただいっつも一緒にいるからみんながそう言うだけ」  
「蜂の巣ってのは?」

「武器よ」

3人が持っているのは大きなカバン。

旅用鞆だろうか？

いや、それよりも少し大きい？

「正影さん、そろそろ始めない？」

「ん……。そうだな、話していても意味ないな」

それを聞くと3人が鞆から武器を取り出した。

3人武器は……

「成程。それで蜂の巣ってわけだな」

ガトリング銃だ。

別に体格がいいわけでもない彼女たちが使えるのはアクリス細胞のおかげだろう。

普通なら照準が定まらないどころか持ち上げることすら不可能だ。

「正影さん、悪いんだけど困りなってもらえる？」

「俺は蜂の巣になる気はないぞ」

「だけど正影さんにしか頼めないの」

「お願いします……」

3人全員が同じくガトリング銃を持っている。

何をする気かは知らないがおそらく全員で撃つのは間違いない。

「……」は絶対に生き残れる方法をとりたいの。そのためには正影さんの力が必要。その



並外れた力がね」

「悪いが通常時では弾丸は見えないぞ？」

「なら本気をだしてよ」

「そんなことをしなくても倒せる。わざわざやる必要はない」

「男見せてよ、正影さん。でないとは…」

エニスが歩いて美嘉と穂香の前まで来た。

そして美嘉の襟首を掴む。

「へ？」

「この子使っちゃうけど？」

「構わない。唯一の斧使い、ぜひ見てみたいしな」

「決定ね、リム」

『既に2人は配置についています』

すでにさつきまでいたはずの2人がいなくなっている。

「じゃ、いくわよお！」

ガトリング地面に置き、美嘉の襟首を持つ手に力をかける。

「おらあああ！」

「いやあああああああ!?!」

悲鳴と同時に美嘉が外に投げ出された。

このまま地面に落ちれば最低でも足の粉碎骨折は免れない。  
だが、プロト。

これくらいじゃ痛いだけで済ませられる。

「おい、武器は?」

「今投げる。ほいつ!」

次いで大きな斧が投げられた。

既に下は騒がしくなりつつある。

オスが気づいて一斉に襲いかかろうとしているのだろう。

銃声が聞こえる。

「早くしてやれ、既に銃声が聞こえるぞ。おそらく穂香だな」

「穂香ちゃん! もうちよつと引きつけてからじゃないとこつちに来る可能性が…!」

言いかけたところで気づく。

穂香がいない。

「…」

黙ったまんま美嘉が落ちたところを見る。

美嘉が斧で敵を蹴散らしている中、その後ろで応戦している穂香がいた。

「…おい」

「ご、ごめん。すぐ助けるから！藍、梓！」

『了解』

『始めます…！』

すぐに掃射が始まった。

「今日は幸か不幸か微妙なところ！」

斧を振り回しながら叫ぶ美嘉。

「美嘉さん！何かいいことあったの？」

「ええ。穂香ちゃんと密——」

その先は言わせないとばかりにオスが糸を一斉に吐き出す。

ネバつとする蜘蛛の糸が美嘉に襲い掛かる。

「おっと！」

それを高く跳ぶことでかわす。

そしてその高さから斧を振り下ろす。

地面に斧が落ちると同時にひびが入っていたコンクリートの地面が盛り上がったたり下がったりしてオスのバランスを崩す。

地面に降りた後は斧の刃先を地面に向けたまま、横殴りに振り回した。

刃に当たったオスたちが斬れることなく壁に叩きつけられる。

「穂香ちゃん、調子はどう?」

「ショットガンで応戦中! 戦況は悪くないよ、今は!」

太い銃声が聞こえ、穂香の前のオスに穴が開く。

穂香の銃に弾倉が尽きるということはない。

穂香が動ける限り、生き続ける限り、永遠に撃ち続けることができる。

普通の銃とは構造が違うらしい。

だが、どんなに弾が無限でも撃つスピードと範囲には制限がある。

このままではいずれ、銃のスピードが敵の攻撃に追いつけなくなる。

「あー! 囮にしたらだからさつきと始めなさいよあの三姉妹!」

通信機に片手をかける。

「ちよつとエニス? 早くはじ」

しゃべりかけようとしてもものすごい銃声に口を止める。

目の前の：いや、穂香と美嘉を囲い込んでいたオスが文字通り蜂の巣になり崩れていく。

減っていくスピードが尋常ではない。

だが、

「きゃあー！」

穂香と美嘉がいる場所はガトリングの対象範囲内だ。

もちろん3人に当てる気はないがガトリングは手に対する反動が強く、照準を完璧にするのは困難を極める。

近くにいる穂香たちは避けるしかない。

だから正影に最初頼んだのだ。

確実に避けられるのは彼しかないから。

「穂香ちゃん！」

「パパあ！後でお願い！一つ聞いてもらおうからね!？」

『すまないな』

穂香は声は焦っているが見た感じは冷静そのものだ。

正影は信じているからなのか、助けるつもりはないらしい。

「美嘉さんー！」

銃弾があらゆる場所に散弾している中、穂香が動く。

美嘉は後になって「危ない！」と思ったのだが、その時はそれを考える暇すらなかった。

穂香は反動が少ないハンドガンに切り替え、撃ち続ける。

自分から動いているにもかかわらず弾は当たらない。

美嘉は動かさず、斧で身を守るので精いっぱいだ。

「穂香ちゃん！危ないから、あの3人に任せればオスは全滅する！だから動かないで！」  
「でも美嘉さん！」

いまだに動きながら撃ち続ける。

「オスはコアを破壊されない限り死なない！止まったら恰好の「穂香ちゃん、後ろ！」  
!？」

話していたのと、目の前の敵に集中していたために相手に後ろを許す。

もともと穂香は遠距離からの攻撃に特化させようと訓練を組み込まれた人材だ。

この戦場にいること自体がおかしい。

そんな人が後ろをとられた。

だが、

「やっぱり、お前は接近戦は向いてないな」

声が聞こえたかと思うと穂香の周りのオスが切り刻まれる。

「パパ遅い」

「お前も俺に本気を出させた。これでおあいこだ、穂香」

「つていうかちよつと本気出すだけでそんなにやれるなら全部パパやってよ」

「何度も言うがこの後はグロッキー確定だ。たまつたもんじやない。だが…」

ひどい弾幕の中、まだ生きているオスを見つて言う。

「娘を殺されそうになって黙っていられるほど、腐っちゃいないんだよ。俺は」

ほどなくして敵は全滅した。

正影が本気を出した後、殺されたオスはすべてがスライスされていた。

「あああ……。 たった1分程度だったのにこれかよ」

帰りのへりの中、正影は気分悪くぐったりしていた。

「…今なら穂香ちゃんに何しても大丈夫かな?」

「美嘉あ、裸で食堂に磔にするぞ?」

「なんていう屈辱的な死に方!?!」

へりにはさつき戦った6人が乗っている。

帰る途中なのだがまともに起きているのは美嘉のみ。

「しかし…、まさか弾を使いまわしにするなんてなあ…」

この3人はなんと戦いが終わった後、使った弾をできる限り拾い集め始めたのだ。

3人が使ってる弾はビービー弾と似たような作りらしく、使いまわしがきくようだ。

もつとも、ビービー弾だって使いまわしはあまりよくないのだが。

「予算削減のためなの!」

そんなこと言って拾ってた。

「いくら要塞と言っても資源が足りてないの。陣地を広げたくてもどこも敵が多く、唯  
一少ないところにはペリコラムや、オーロワームが待っている」

外を眺める。

あるのは廃墟と平野。



「みんな、正影さんに希望を持っているんです。きっと…」

「責任重大だな」

「ええ。でも、みんな正影さんに押し付けたりはしないわ。だから…頼ってね」

この瞬間不覚にも正影は美嘉を普通の人として見てしまった。

「さて、じゃ今回の労を労うため今日は穂香ちゃんと一日一緒に過ごしたいのであります、隊長殿！」

「…さっきいいこと言ってたから磔は勘弁してやる」

「へ？」

「代わりに縛り付けて男子更衣室、またはトイレに投げ捨てる」

「もつとひどい屈辱がありそうな予感!？」

## 子供想い

正影は今、ヘリに乗っている。

この轟音も慣れ始めつつある。

今心配なのはバリバリと響くこの音が空を飛ぶタイプのオスに見つかからないかということぐらいだ。

「正影さん、今回はご同行感謝するぜ」

不意に通路を挟んで向かい合うようにして座っている男に話しかけられる。

「なに、オスを殺すのは俺の仕事でもあります。当然です」

「…」

「どうしました？」

「敬語はやめてくれ。俺は貴方よりも非力なただのプロトだ」

正影は自分が目上と思った人以外には敬語は使わない。

たまにどうしても使わなければならぬときは相手が無能でも歯を食いしばってしゃべるがどこかに皮肉が含まれていることが多々ある。

そんな正影が敬語を使っている。

「ですが、悠斗《はると》さんは年から見ても俺より上ですし…。なにより…」  
正影があまりじろじろと見てはいけなさと分かっているのか、チラチラと悠斗の顔を見る。

「こんなのは名誉の負傷でも何でもないさ。俺がボーつとしてたから不意打ちを食らって負った傷だ」

悠斗の顔には、右目を軸に斬られたかのような傷が残っていた。

そして斬られているその眼は開いていない。

こんな傷が本当にできるものなのかと正影は今も心の中では首をかしげていた。

|||||

悠斗に出会ったのは2日前のことだ。

最近正影はあまり任務をこなしていなかった。

理由は金があったからだ。

金があるのならわざわざヘリに揺られて外に出る必要もない。

それと1週間ほどの任務を境に司令からの特別任務が来なくなったからだ。

もともと正影はロストチルドレン。

以前の正影は任務に出るのがだいたい1週間に1回ぐらいだった。

理由はロスは基本強いオスにしか当てようとしなかったからだ。

だからある意味、これくらいのペースの方が正影の生活リズムに合うのだ。

悠斗に会ったのはそんな時だ。

やることもなかったのでも今では珍しい図書館へ足を運んだ。

正影に読書の趣味などない。

それでも行ったのはこの世界の情報がほしいからだ。

別に困ることはなかったのだが、暇だからといってベッドでゴロゴロしているのは性に合わない。

穂香も訓練を頑張っているのだから行くべきだと思ってきたのだ。

「…にしても量が多いな」

しかし、いざ集めてみるとなかなかの本の量になる。

実はインターネットで見れば部屋でも見れるのだが、紙媒体の方が好きな正影。

ペラペラと本を席に座りページをめくる。  
そんな時、彼は来た。

黙って本を読んでいると自分の向かいの席に座ろうとする人影が見えた。

「(またか…)」

正影には今でも付きまとう女子がいる。

大抵の人は常識人だったらしく引いてくれて、今では普通に接してくれるのだが今でも「彼女になって」だの、「メデイアツールになって」だのほざく野郎がいる。

その類がまた来たのだと思って身構える。

「すまないんだけど…」

声をかけられた。

しかし、声は男性のもの。

なら、少し珍しいが「メデイアツールになって」というお願いだろうと思う。

メデイアツールの条件はタイプA、Bがそろふこと。

性別も年齢もこれを満たせば関係ない。

だが、やはりこれは強いつながりを持つことになる。

だから基本は同性なら仲がいい友達同士、異性なら恋人が多くなる。

正影は本から目を離しながら相手に言う。

「悪いが俺はすでにメデイア…」

そう言いながら顔を上げて驚いた。

目の前には右目に眼帯をつけ、顔に切り傷が入った強そうな顔をした男が座っていた。



「…ならいいんだが」

「それでよし」

いつ見ても驚く。

顔の傷は話からすればプロトになった後でできた傷だ。

それが未だにこんなにはつきりと残っているなんてよほど深い傷を負わされたのだろう。

「だが…改めてお礼を言わなくちゃならないな」

「構わないと言っている。それにあんたと少し境遇も似ていてなんだか手伝ってやりたくなつたしな」

悠斗には妻子がある。

だが、この子供は養子らしい。

人型のオスが出現したとき、あらゆる場所が壊滅的被害を受けた。

それで親を失った、或いは親とはぐれた子供も少なくない。

妻と非難している最中に見つけたそうだ。

それからは子供もいなかったこともあり、その子を引き取り育ててゐるらしい。

その子は女の子だったのだが今では悠斗たちに子供が生まれ、姉と弟の二人の子供を養っている。

そんな娘が5日後誕生日ということでぜひ、プレゼントをしたいらしい。

だが、ここではプレゼントになるようなものはすべてぜいたく品で値段が馬鹿にならない。

その子は「休暇をもらつて父さんが帰ってきてくれたらそれで十分だよ」と言っていたそうだが。父親としてはそれではなんか嫌なのだ。

だから正影にお願ひして少し報酬が高めの任務に來た。

「穂香ちゃん：だったかな？あの子は活発でいいな。うちはどうもおとなしめだね、

まあ怒ると怖いんだよ」

「だって悠斗さんのところはもう15、6だろ？そんなもんだ。むしろこっちはもうちよっとおしとやかになってほしいな」

「いや、正影。活発な方がこっちもいろいろ接しやすんだよ。まあ、うちのアルツエダけ見たらほとんどがうるさい女子ばかりだけどね」

「確かにパワフルだな。まああれくらいないとプロトとしてやってはいけないだろうしな」

彼らが話に花を咲かせているとランプが光る。

そろそろ着くという合図だ。

「お、時間か。じゃ、いっちょやってくるかな」

悠斗が武器を取り出す。

腕に四角い物体をつける。

「か所だけ小さな穴が開いているのが気になる。」

「悠斗さん、それは？」

「ついてからのお楽しみだ。今回の敵は俊敏に動くらしいからな。正影は隙を作るのを頼みたい」

「あ、ああ」



『正影さん、悠斗さん。到着したので任務開始をお願いします』  
リムの言葉を合図に2人がへりを降りた。

今回降りたところは「ノグリテリア」。

ここも建物が並ぶちよつとした都会なのだが、いつも行っているところとは雰囲気  
が圧倒的に違う。

「…いつ来ても嫌なところだな」

悠斗も思わずつぶやく。

並んでいる建物は白いカビのようなものやネバつとした粘液、ところどころ溶けてい  
る床などもう気持ち悪いの領域は軽く超えている。

なぜここがこんな風になったのかは不明だが重要な研究対象になっている。

「さっさと終わらせようぜ。今回の敵はなんだ？」

「確か…アメンボ型のオスだ」

と、しゃべったところで何かの音がする。

建物の屋上に降りていたので下を確認する。

下にいたのは…

「あれだな」

アメンボ型のオスだ。

下は水じやないのに地面の上をすべるように動いている。

大きさは20m級。

まあ、20m級といっても足はさほど太くはなく、体の部分も小さい。

体だけなら10m級にもならないだろう。

「コアはどうする？」

「できればほしいけど…、今回の報酬だけで十分だ」

「悪いな。穂香を連れてこれれば簡単に行けたんだが…」

今回穂香は訓練と重なり同行できなかつた。

「こちらとしてはそつち方がいいよ」

「なぜだ？」

「どうも小さい女の子が戦場に出ると過保護になってしまつてね。戦いに集中できないんだよ」

「そうか」

正影が刀を作り出す。

「俺が先行でいいのか？」

「ああ。正影さんはどうにかしてあいつの動きを3秒でいい。止めてくれあとはどうにでもなるから」

「分かった」

正影が建物から飛び降り、アメンボ型のオスの追尾を始めた。

---

「…どうだ、調子は？」

「問題ない、今のところは」

フラテッドと和人が話している。

部屋はいつものモニタールームだ。

「うまい具合にあのオスの討伐に当たってくれたからな。こいつの調子も含めて確認できらるだろ」

「ああ。だが、あいつがどれだけ自分の力を出せるのか…」

「確かに所詮はオウステムだからな。気づかなければ意味がない」

「だか伝える手段もない」

この2人が何について話しているかは不明だが、オスと人間との対話は未だに確立できていない。

オスは知能を持つ生き物だ。

もしそれならば対話も可能なのではないかと研究も一部で行われているが、未だにうまくいった例はない。

「そういえばお前、もうロスと接触はしたか?」

「いいや、まだだ」

「信頼関係でも気づいておけ。その調子だと直で顔すら見てないようだな」

「分かってるよ。ただどうも気分が乗らなくてな…」

「118は既に確認はしたと言ってたぞ」

「…番号で言うなよ。誰だか分んねえよ」

フラテッドはその質問は無視してキーボードをたたく。

「悪いが今回の作戦は失敗した分の埋め合わせだ。これ以上リレグ様を落胆させるわけにはいかない」

「…そうか」

和人はフラテッドがリレグを心の底から慕っていることは知っている。

理由は知らないが大した忠誠心だと思う。

「じゃ、俺は行ってくるぜ」

「しつかり捕獲してこい。勝てると思ったら表に出ても構わない」

「連れの男は？」

「好きにしろ。ミンチにしても、磔にしても、五体を切り刻んでも構わん」

「それ、全部殺すっていう意味だぜ？」

「そういうことだ」

「了解」

和人がその部屋を後にする。

フラテッドがそれを確認すると通信機を使う。

「リレグ様、フラテッドです」

『準備はできたか?』

「はい。和人が準備でき次第、いつでも行けますが…」

『どうした?』

「相手はペリコラムのオスを一瞬で全滅させた化け物です。今から行っても間に合わないのでは?」

『あの状態は永遠に使えるわけではない。今回はおそらく使わないだろう。ロスが勝つのは間違いないが、時間は多少かかるはずだ』

「…分かりました。くだらないことを聞いて申し訳ありませんでした」

それをいうと通信機を切る。

フラテッドは画面を見る。

画面には右端の方に休んでいるであろうオスがいる。

モニターからは確認できないが先ほど1つのモニターからヘリの音を確認した。

近くにいるのは間違いない。

「…さっさと消えてくれよ、ロストチルドレン」

## 人為強化

悠斗はプロトの中では珍しい人間だ。

いや、妻子を持つこと自体は別に珍しいことではない。

生き残るのが難しいこの時代、結婚していい年齢は下げられた。

男女ともに15歳だ。

悠斗が珍しいといえる理由は年齢だ。

悠斗の年齢は31歳。

プロトであるにも関わらずこの年齢まで生きていられる人は滅多にいない。

実際、日本にいる30歳以上のプロトは10人に満たない。

プロトは平均的に9歳から戦闘に参加し、平均的に19歳で死ぬ。

死人が多いのは、初めての任務か20歳を過ぎて心に余裕ができたときだ。

それでも悠斗が生きているのはひとえに運がいいからだ。

失敗をしない人間なんて存在しない。

失敗する場所がラッキーなのと駆け引きを必要としない場所だったのだ。

悠斗は生きたいと同時に死にたいとも思っている。

今まで幾度となく目の前で同僚が殺されてきた。

人間の死に方がこんなにも豊富にあるのかと今では舌を巻くほどだ。

それでも死なないのは妻子をおいてはいけないから。

ここで死んではみんなに迷惑をかける。

失う辛さは分かっているつもりだ。

悠斗だって、11年前の襲撃で大切な人を失ったのだから。

今でも鮮明に思い出せる。

人々が逃げまどい、あたりには血が散乱し、子供が泣き。

後ろからはあの悪魔がたった一匹で近づいてくる。

プロトであるにも関わらず本能が逃げろと言っていた。

町の外に出た後は、オスの群れが――

「…悠斗さん？」

その一言で現実に戻される。

「すまないな。少し考え事をしていた」

今いるのは白いカビや粘液で覆われた建物が並ぶ街、「ノグリテリア」。

雪崩のように逃げまどう人間も、血も、あの悪魔もない。



道路に出て、対象が目の前に来るのを待っている。

いや、あと2，3分ほどで来る。

「…子供のことか？」

「あながち間違いじゃない。だけど少しずれてるな」

「もし…、あれなら俺だけでも」

「馬鹿言うなよ。そういう甘えは死をもたらすよ」

戦場に出た時点で少なくとも戦わないという選択肢はない。

逃げるという選択肢はあるが、それもせずただ戦場に突っ立っているのは死ぬのと何ら変わらない。

「すまない」

「だけどもあ、正影は思ったより人想いなんだな」

「からかわないでくれ。俺は見た目通りの人間だ。効率主義なのに変わりはない」

『いえ、正影さん。あなた、実は優しい人だっですでにアルツェ内では有名ですよ？』

リムが話に入ってきた。

オペレーターは選べるらしいのだが、正影は初めの任務を担当してくれたリムを担当にしている。

オペレーターの中ではこのアルツェではただ一人の男子だ。

「なんでそんなことに?」

『正影さんはすでに何人かの人と任務に同行していますし。その人たちからの情報と嬉々さんからの情報ですね。娘、妹想いのいい人だと思われてますよ』

「それだけか?」

『といますと?』

「悪い噂はないか?」

『…ロリコン、と』

「……ああ」

今まで嬉々が言っていたのもあるのだろう。

妹想いのロリコンとでも言ったのだろう。

そこに小さな女の子を連れてきたし、結構過保護に見えたのだろう。

『だって正影さん、女性に対して一切の興味を示さないじゃないですか?アプローチすべてさらっと断ってるんですよ?』

「…同じ娘想いの父親だと思っていたのに」

「この任務が終わったらしばらくは誤解を解くのに使うしかないな」

『なら必ず生きて帰ってきてください。そろそろ対象が視界に入るはずですよ』

静かではあるが確かに音がする。

すいすいと進んでいても今は水の上ではなく、コンクリートの上。  
どうしても多少は音が出てしまうのだろう。

『それでは正影さん、悠斗さん。』武運を』

「ああ」

通信が切れる。

ここからは本当の戦闘だ。

笑いなんて存在しない。

楽しみなんて存在しない。

死を覚悟しなければならぬ戦闘。

「…あれだな」

先ほど確認したアメンボ型のオスが視界に入る。

足は細く、とても頼りない。

体の部分に至っても決して大きくはなく、ただ普通のアメンボと違い目が2つ縦についている。

生物は出来る限り広い範囲が見れるように目が横についている。

草食動物なんかはそのおかげで視界が広い。

だがこいつは縦に目が2つ。

「準備はいいか？」

「当たり前だ。足止め頼むぜ？」

「ああ。あれならすぐにでも出来そうだ」

軽快な足取り？で相手は近づいてくる。

こちらに気づいていない。

「…3, 2, 1——」

敵が真横を通り抜けようとした瞬間、正影が動く。

近くの足2本を切り落とした。

細い足だったので切り落とすのは何ということはない。

突然の出来事に対応できずオスがバランスを崩し倒れこむ。

「サンキュー、正影」

バランスを崩したオスに向かって腕についている四角い何かを向ける。

小さな穴から何かが飛び出す。

出てきた何かがオスに突き刺さる。

「ワイヤー？」

足を切り落とした後オスを傍観していた正影が疑問を持つ。

これのために足止めをしろと言っていた？

「終了」

腕についている箱を悠斗が引つ張ったかと思うと眩く。

次の瞬間、オスから無数の針が飛び出してきた。

再生しかけてた足も再生速度が遅くなり始める。

必死に体を動かそうとしているようだがそれは叶わない。

オスがハリセンボンのような外見になり、動きを止める。

思わず正影も口笛を鳴らした。

オスを確実に殺すにはコアを狙えばいい。

ダメージを与えるという手ももちろん間違ではない。

だが、中にはものすごい再生速度を誇るものもいるし体を真つ二つにしても死なない

のがオウステムだ。

もちろん、40m級といえども体を8等分やそれ以上に切り刻めば大抵のものは死

ぬ。

しかし、例外もあるものの大きさ≡強さなのがオウステム。

40m級を8等分出来るのは今では正影ぐらいだ。

だがそれでも結局は体に傷をつけるのがオスを倒す主流になっている。

理由はコアを探し当てるのが一苦労だからだ。

それだったら外皮から攻撃を続け倒したほうがコアも回収できて一石二鳥なのだ。

「正影、お疲れさん」

「いや、特に疲れなかったぞ。一太刀加えたただけだったからな」

しかし、その常識をぶち壊すのがこの武器だ。

内面に何かしらをぶち込みそこから無数の針を突き出す。

どのくらい針が伸びるのかは知らないがこれならかなりの戦闘時間の短縮になる。

「でもあれがなきゃこいつは使えなかった」

「なぜ？」

「一回きりなんだよ、これは。一回使うとあとは一度持ち帰ってから、しまってもらえない。だから外すわけにはいかないんだ」

確かにあれだけ便利な武器。

量産できればかなり戦闘も楽になりそうだが出来ないのだろう。

「さっ、それより早く帰ろう。プレゼント選びにも時間はかかるからね」

「そうだな。俺もたまには穂香になにか買ってやるかな…」

へりに通信を入れ立ち去ろうとする。

「おい、フラテッド」

『なんだ?』

「あのオス、簡単に死んだぞ? かなりあつけなかつたな」

離れたところから和人が状況を報告する。

双眼鏡で正影たちを確認する限り、すでに終わった後だ。

今から走ればおそらく追いつくがあの状態のロスにたった一人で挑むなど自殺願望があるのかと言われても反論は出来ない。

『お前はそこで待機してろ』

「何馬鹿言つてんだよ。お前は見てないからわからないかもしれないがあいつは死んだ。死んだオスは生き返らない。いや、死んだ生物は生き返らない。ここに俺が残つても何も意味をなさないぞ?」

『お前はあのオスの力を知っているのか?』

ああ? と少しイラついた口調でしゃべる。

死んだ奴の話なんて意味はない。

「知らねえよ。強くなったとかそういうことだろ？」

『違うな』

「だったらなんだっていうんだよ？ 死んだ奴の話なんて——」

『お前にはあいつが死んだように映っているのか？』

「…なに？」

改めて確認する。

オスは体の内側から無数の針によって殺されている。

ピクリとも動かない。

これを死んでいるという以外どう表現すればよいのだろうか？

『おおかた、内側から針が出てきているのだろう？ 悠斗がいるからな』

「そっだが」

『なら生きてる。というか対象はダメージ1つ受けていないな』

和人にはわけがわからない。

同じ組織でほとんど変わらない立場にいるのに相手だけ知っているというのは腹が

立つ。

「一体どういうことだよ!? 説明しろ！」

『すぐにわかる。そろそろ視界に入るのではないか？』



そう言われてあたりを確認する。

しかし、周りには何も見えない。

建物の中にいるので屋上に上がり確認しようとして何かの音に気付いた。

ブブツツ！と蠅の羽音のような音が鳴り響く。

屋上に上がるのをやめ、建物の窓から顔を少しだし外を見る。

刹那、建物に影ができ暗くなる。

そのあと通って行ったのは、体が黄色く、お尻の方に針がある生物。

「蜂か!？」

思わず叫ぶ。

小さな声だが。

『ああ。少し改良を加えたのはこいつだ。あの雑魚ではない』

「もはや強化した対象から違ったというわけか。だが…、蜂がなぜ他のオスがやられた時に出てくるんだ？」

『殺されたのが赤の他人ではないからだ』

正影たちがオスに気づいたのか再び臨戦態勢に入っている。

「あのオスと繋がりがあるのか？」

『大抵の親は子供が殺されたらキレるはずだ』

「あのアメンボ型のオスが、蜂と親子？」

『正確にはあのアメンボ型のオスの中にいたオスが、蜂と親子だった』  
「中に？」

『あの蜂に卵を埋め込まれていたんだ。あの蜂は体の中で自分の分身を作り殻に閉じ込める。あとは針を使って産み付ける』

「寄生型…か」

今までにもそういうタイプはいたがただそれだけだった。

他のオスに寄生して共存する。

別に親はいないし、子孫を残したりもしない。

自然発生という形でどこからともなく発生する。

というか、子孫を残そうとするオウSTEM自体かなり珍しいのだ。

「面白い物を作ったもんだな」

『私たちも予期していたわけじゃないがな。さあ、これからが仕事だ』

「ああ。楽しませてもらおうか」

## 雑魚か強敵か

「正影、悠斗に向かうオスの反応有り！」

「残り30秒で接触します！」

指令室があわただしく、状況を報告している。

青羽が情報の整理に動いている。

指令室が慌てている理由はイレギュラーな敵の出現によるものではない。

敵が一直線に正影たちのもとに向かっているからだ。

理由は自分の子供を殺された親が逆上したからなのだがそんなことを考えるはずもない。

「型、大きさともに判明しました！蜂型、20m級！」

「正影たちのもとに向かう理由は？」

「不明です！推測としてはアクリス菌が何か作用しているのではないかと」

「推測はわからないわ。確固たる答えを頂戴」

「はい！」

今までオウSTEMがたった1人の相手に向かって戦いに行つたことはない。

視界に入ればなぶり殺しにはするが、今のオスは1km以上離れたところから場所がわかってきているかのように向かってきている。

原因はロストチルドレンにあると考えるのが当然だろう。

「他にオスは向かってないのね？」

「はい、依然向かってきているオスは一体のみです」

「…なぜ、1体？」

青羽は考えるが答えが出るはずはなかった。

「なんだって？」

『そちらに新たなオスの反応があります。数は1。残り50秒で接触します！』

「型と大きさは？」

『ともに調査中です』

正影はため息をついた。

ようやく帰れると思ったのにこれだ。

決してあり得ない話じゃない。

以前にも乱入してきたオスはよくいた。

「悠斗さん、先に帰ってていいぞ?」

「正影、俺の身を案じているなら心配はいらないぞ。さっきの武器がなくなるとも戦えるからさ」

「そうか…」

『敵情報、届きました!型は蜂、20m級です』

それを聞いて正影が今度は安堵からのため息をつく。

これならおそらく10秒とかからず自分だけで殺せる。

30m級以上が来ると本気を出さなければかなり時間がかかってしまうが20m級なんて敵ではない。

『正影さん、悠斗さん、用心してください』

「ああ、わかってるよ」

『正影さん、貴方は分かかってないです。今、もう一つ情報が入りました』

「それは?」

『対象のオスは正影さんたちに向かって一直線で近づいているそうです』

「…なに?」

疑問を投げかけながら悠斗を見る。

今まで正影は驚かされてきた。

敵を選ぶオス、恐怖を感じるオス、安全圏から攻撃しようとするオス。

どれも本能的に行動しているのではなく、考えているのだ。

そんなオスは正影の時代には存在していなかった。

しかし、悠斗は首を横に振る。

どうやらこんな事例は初めてのようだ。

『敵が何を目当てに向かっているのかは不明ですがおそろく…』

「俺か」

『はい…』

正影はこの世界では、オスが恐怖を覚えたこの世界では軽く化け物扱いだ。

化け物であるオスのほうが怖がるのだから当たり前だろう。

だが、それでも向かってるオス。

単に馬鹿なのかあるいは…

「悠斗さん、もしかするとこいつはやばいかもしれない。貴方は逃げたほうが…」

「だが…」

「気持ちはわかる。だが俺を狙うとなれば最悪、化け物以上が来るということになる。」

そんな戦いをして貴方が死んだら俺は貴方の娘に報告しなければならない」  
「…」

「自分の戦闘で自分のせいで死んだなんて俺は言いたくない」

「…分かった、と言いたいところだが少し遅かったな」

すでに羽音が近い。

おそらく今から逃げても間に合わない。

「…クソ！」

「安心しろ。相手が宙を舞うとなると俺は手が出しづらいからな。逃げる気はないが避けるに徹するでしょう」

「…頼む」

「お前に重荷は負おわせないさ」

「そのセリフはやめてくれ。なんだかフラグが立ちそうな気がする」  
「安心しろ。ラッキーなのが俺の取り柄だからさ」

それを聞くと正影はこれから来る敵に構える。

音がどんどん大きくなっていく。

へりの轟音には慣れたつもりだったが、これはそれ以上だ。

もう鼓膜が破れるんじゃないかと思う。

「こんなのは長く聞くのは体に悪い。

『そ……えば正……さん』

「なんだ？ 周りがうるさくて聞こえないぞ」

『そち……に、……を……し……たので』

「なんだ？ 頼むからもつと大きな声で——」

リムの言葉を理解しようとしたその時、真上に大きな何かが出現する。上を向けばいるのは例の蜂型のオス。

これが飛んでいるというのだからいつ見ても驚きだ。

「先手必勝！」

正影はすぐに相手に飛びつく。

とりあえず真つ二つに出来ればバランスを崩して落ちてくるはずだ。そう思い、一撃腹に加える。

地面に真つ二つになった2つの胴体が落ちてくる。

「グギユギユギユギユウウウウウウ！」

悲痛なのか、快感なのか、困惑なのかわからない叫び声をあげる。建物にぶつかり、崩れてくる。

「正影ええええ！ 少しは考えろおお！」



真下にいた悠斗が全速力で逃げだす。

まあ、あんなデカ物が落ちてきたらそりや逃げる。

つていうか逃げないと死ぬ。

正影はそれに構わず追撃を加える。

さらに縦に一太刀。

それによって体が4等分になる。

斬られてすぐ、地面にオスの体が落ちる。

地響きを上げコンクリートが割れ、白い粘液が飛び散る。

カビが胞子を出し、あたりが視界不良になる。

正影がその状況を建物の屋上から確認する。

「…ただの馬鹿だったか」

デカ物が動く気配はない。

靄のようなものが晴れ初め、状況がよくわかるようになる。

地面に降りて相手の状態を確認する。

「うわ…最悪」

地面に降りたとき地面に血の水たまりができていた。

このオスは血を持っていたようだ。

靴に血が付き、悪臭がする。

つくづく、血がなくても生きられるならなぜ血を作るのかと思う。

「正影、どうだ？」

悠斗が話しかける。

「最悪だ。靴が血まみれ」

「それは良かった」

正影が刀をしまい通信をつなぐ。

「リム、聞こえるか？」

『はい。もしかして終わりました？』

「ああ、ただの雑魚だった。迎えのへりを頼む」

『分かりました。あと3分ほどそちらに着きます』

「早いな？」

『ちようどぞ——』

突如、正影に衝撃が走る。

背中から何かでぶつけられた状態だ。

吹っ飛ばされ、地面に転がる。

「…何が!？」

受け身を取り態勢を立て直す。

そして相手を見る。

「……」

「なんだこいつ？」

そこにいたのは何かの幼虫……らしきオス。

いや、オスが蝶のように幼虫、サナギ、成虫という過程を踏むことはない。

もし新種と言われたらそれでおしまいだが少なくとも聞いたことはない。

だから目の前にいるのは真つ白なイモムシというべきだ。

決して幼虫ではない。

「どこから湧いてきた？」

「ごめん。ちゃんと俺が見てれば……」

「いえ、大丈夫です。俺は無傷。それより今は前の障害を排除する」

「ああ」

目の前のオスは真つ白。

ついているのは牙が見える丸い口。

大きさはせいぜい5，6mといったところ。

「……」

すぐに正影が動く。

外見通りならただの雑魚…のはずだった。

ここで正影の嫌な思い出が掘り起こされる。

オスがなんと地面に潜ったのだ。

あの大ききさで3秒とかからず地面に入り込んだ。

しかもここはコンクリートが張っていたはず。

それをいともたやすく。

「…いっつー！」

これでは正影は攻撃できない。

この世界に来てからこの類の奴をよく見かけるような気がする。

俺は呪われてんのか？と疑問をよく持つ。

「悠斗さん！」

「分かってる、今は自分の心配をしろ！」

この類の敵の対処法はない。

強いて言うなら地面から出てきたところを狙え、ということだろうか。

出来たら苦労しない、と思う。

「クソ、どうする…!?!」

「はああ…、あれはすごいな」

和人が離れたところから感嘆の声を漏らす。

「寄生型って本当に寄生するだけでただの雑魚じゃなかったのか？」

『あいつは別格だ。今までのオスの寄生型とは根本が違う』

「どういう風に？」

『今までの一度寄生すればそこでそいつは一生を過ごしていた。だが、今回の寄生して生まれたらそいつを内側から食い尽くす』

「おお、怖っ」

内側から食べられる感覚なんて味わいたくもない。

和人は真面目に身震いした。

『だが、今戦っているのは寄生もしてないただのオスだ』

「他のに寄生する前に親が死んだもんな。そういう時は普通子も死ぬと思うけど」

『そこまでは知らん。あいつについては全然研究が進んでいなかったからな』

「そんな貴重な材料を…いいいのか？」

『また作り出せばいいだけの話だ』

「…大した奴だよ、お前は」

和人が準備を始める。

あれなら正影を生け捕り、或いは殺して連れて帰れると踏んだのだ。

カバンからスナイパーを取り出す。

「なあ、最悪殺してもいいんだよな？」

『構わん。リレグ様がそうおっしゃっていた。だが…』

「分かっている。生け捕りに出来るよう、善処してやる」

弾を込め構える。

隣に予備弾が並んでいる。

スコープの調子確かめる。

「…よし、後は時が来るのを待つだけだな。なあ、本当にいるのは2人なのか？」

『そうだ。間違いないはずだがなぜだ？』

「釈然としねえんだよ。仮にも貴重なロスだぜ？もしものことがあつたらどうする？警

備が甘すぎやしないか？」

『…』

フラテッドも思っていたのか黙り込む。

確かに、正影はロス。

最強なのだから死ぬことはないと思うがもしものことを普通なら考えるべきだ。最大戦力を失うのは誰もが嫌なはず。

絶対に死なないという保証はない。

最低でも4人はつけるべきではないだろうか？

「これが罫とかいう可能性は？」

『…可能性はなくてもない。だが、それを考えていると何もできん』

「それは分かっているけどよお…、まあいいか。罫ならそれはそれで面白いしな」

『…大した奴だ、お前は』

呆れた、という感情を込めながらフラテッドは言った。

## 驚異

オスはコミュニケーションをとらない。

理由は群れる必要がないからだ。

中には群れをなすものもいるが最近研究で群れを成す場合は実は意識を共有しているという成果が上がりつつあった。

どういう原理かは知らないが要は考えが1つにまとまっているらしい。

だが、彼らの中には例外が存在する。

その例外は話せる。

その例外は強い。

その例外は他のオウステムと共闘できる。

その例外は考えることができる。

だがその例外は、今は自身の意思では動いていない。

「…イナ、イ」

破壊された建物の前でそれは呟いていた。



敵は地中に潜る。

なら出てきたところを斬りつければいい。

だが、相手だってそうそう簡単にはやられない。

知能があるのだから。

死という恐怖を持っているのかは不明だが、本能は間違いなく正影を警戒しているはずだ。

「…」

正影は周りに気を張り巡らせる。

悠斗は今ほぼ無防備と考えてもいい。

一応、あれくらい小さいやつになら力比べでなら張り合えるだろうが不意を突かれれば死ぬ。

正影は誰も死なせないため、ただ時を待っている。

音がした。

いち早くそちらを向く。

すぐにオスが地面から顔を出した。

横に一振りする。

だが、

「……」

オスは地面から顔を出しただけで体を出そうとしない。

口から糸を出した。

腕に絡みつく。

「ちっ！」

地上では不利と判断したのか地面に引きずり込もうとする。

見た目の割には糸の強度が強い。

なかなか引きちぎれない。

だが

「ふん！」

本気を出せば話は別だ。

糸が簡単にちぎれた。

オスはすぐに体を頭も地面の中に隠す。

地面の表面はコンクリート。

音が響きにくく、相手の位置を探し当てるには少し難しい。

「こいつは面倒だな」

「逃げるっていう選択肢はないのか？」

「悠斗さん、正直に言うところこいつはかなり危険です。おいていくわけにはいきません」

地中を移動するだけではなく、敵の力を自分と比べてどう戦うべきか判断できるオス。

しかも小さい。

このタイプは1回逃すと後で厄介になる。

デカければ位置が分かるだろうが、小さいと分かりにくい。

他のオスの討伐中に乱入されたら死人が出るのは間違いないだろう。

「だが、どうする？手の打ちようがないんじゃないのか？」

「…それは、そうだが——」

地面に穴が開く音がした。

「！」

しかし、1つではない。

無数に穴の開いた音がした。

地面から鋭い針が付いた触手がのびてきた。

もうこれは雑魚の類ではない。

安全圏から攻撃をしてくるかなり危険な奴だ。

「はは…、ただのイモムシに見えたんだけどなあ」

「悠斗さん、これはやばいぞ」

触手が正影と悠斗に襲い掛かる。

正影は切り落とす、悠斗は腕力で引きちぎったり殴ったりだ。

しかし、斬ったそばから、ちぎったそばから触手は生えてくる。

「くそー！」

「悠斗さん、そこを動くなー！」

正影が本気を出し、一瞬ですべての触手を切り落とす。

「おおー！」

しかし、感嘆してすぐ触手が生えてくる。

「！」

正影に襲い掛かったのを悠斗がさばく。

「すまないー！」

「いや、どうつてことはない。だが…どうする？」

「…本体をやるしかないと思うが」

「無理な話だな」

襲い掛かってくる中、すべてをさばっていくがいつまでも続くはずはない。

次第に、特に悠斗に疲れが見え始める。

「ぐー」

触手の針が悠斗の体をかする。

プロトは理論上ならば20、30m級のオスなら余裕で倒せる。

しかし、現実では勝ててない。

理由は疲労だ。

疲労は人から力を奪っていく。

もちろんロスにも疲労はあるが、その前に大抵の敵は倒せるしプロトよりも体力もある。

同じ環境下におかれれば先に疲れてくるのは必然的にプロトである悠斗だ。

正影が悠斗が傷ついたのを見るとすぐに本気を出す。

周りの敵が再び一瞬にして消し飛ぶ。

「悠斗さん、逃げるぞー」

「お、おうー！」

ここで逃がすと確実に後が面倒にはなるが、目の前で人が死ぬのを良しとするはずもない。

悠斗を犠牲にしても勝てるとは思えない以上、逃げるのが得策と判断する。

全力で逃げたいところだが悠斗に速度を合わせるしかない。

本気で走れば悠斗は置いてけぼりを食らう。

だが…

「うおっ!？」

それではすぐに例の触手に追いつかれる。

再生しているのか、或いはあの小さな体中から無数に生えているのかは不明だがこれではキリがない。

「悠斗さん走れ！俺はこいつらを切り倒しながら進む！」

「頼む！おい、リム！」

『はいー！』

「へりはどこに着く？」

『すでに待機中です！そこから直線に距離、約1km』

「遠いな!？」

『もともと蜂型のオスがいると想定して配置していたので』  
悠斗が直線に走り続ける。

触手が2人に襲い掛かり続ける。

これを斬りながら正影は疑問を感じていた。

触手が的確に自分たちの位置を当てているのだ。

見た感じでは触手に眼は見当たらない。

音で判断していると考えてもそれならもつと大雑把になつてもいい。

「(いったいどうやって……!)」

『悠斗さん、残り600mです』

リムがしゃべると同時にヘリが見え始める。

そして銃を構える人の影も。

「正影、増援だ!」

プロトの中では見ない顔。

おそらくプロトではない非常時用の戦闘要員だ。

武器はプロトの使うものと同じくらい強いものを扱える。

ただ、戦場の真ん中に放り込まれたら生きては帰ってこれない。

「少しは楽になるな」

『正影さんもあまり悠斗さんから離れないでください。へりが囲まされると厄介です』  
「わかっ——」

敵を斬りつけながら返事をしようとして異変に気付く。

敵の触手に刃が通らない。

突き飛ばされる。

「硬い……」

少しの間に進化した。

異常な速度だ。

だが、正影が驚いたのはそこではない。

自分の本気の刃を受け止めた。

いや、実際切り傷は入っているが1回で斬りおとせなかった。

すぐにもう一撃加えてみる。

しかし、同じ場所に的確に刃を通すなど無理な話だ。

斬りおとせない。

「くそ……」

『正影さん、急いでください！悠斗さんとの距離が離れています』

「…わかつてる」



『悠斗さん、残り100mです。前に見える建物の屋上までお願いします』

「了解！正影！」

「ちっ！分かつ——」

正影も諦めてヘリのもとへ逃げることに専念する。

だが返事をして悠斗の方を見た正影の眼に映ったのは

「悠斗さん！前だ！」

「！」

建物の中から出てくるさっきの5，6mのオス。

距離が離れすぎていてとても間に合わない。

オスの口が開き悠斗を確実にとらえている。

悠斗も正影に呼びかけていたところだったので気づくのが遅かった。

しかし

悠斗はツイているらしい。

オスの口が悠斗をくわえることはなかった。

「はあ…、折角来たのに」

一人、へりの座席でため息をつく者がいた。

「嬢ちゃん、残念だったな。いや、ラツキーというべきか？」

「全然ラツキーじゃないよ！久しぶりにい——」

警報が鳴る。

すぐに新たな敵が正影たちに襲い掛かっていることを知らされる。

「私、行ってくる！」

「でも嬢ちゃん、相手はただのチビー体だけ？ロスがいる以上そんな必要は——」

「もしものために行つてきまーす！」

女の子はへりを降りて建物の屋上をひよひよいと越えて行く。

訓練の成果だろう。

すぐに正影たちを見つけたがその時には悠斗が逃げに徹し、正影が敵を切り倒しているところだった。

建物に入り、様子をうかがう。

「…いいない」

本体が見当たらない。

折角相手が気づいていないのだ。

後ろから刺すのが一番いい方法だろう。

そう思い構える。

客観的に見ている気付いたことが1つ。

正影と悠斗に対する触手の量が違いすぎる。

あれだけの確に狙えるのだからおそらく2人の位置はわれているはず。

それなのに正影に対して触手が行き過ぎている。

焦点を悠斗に絞る。

「パ。パの穴は私が埋める」

案の定、敵が悠斗に向かって飛び出してきた。

建物の中からはちよつと予想外だったが焦らない。

時間はオスが飛び出てから2秒と経つてないはずだったのにスナイパーの焦点に捉えられる。

すぐに引き金が引かれた。

銃声が響き、オスの軌道がずれる。

悠斗は生きていた。

だが、あまりのことに体が動かない。

正影にも何が起きたかは分からない。

増援として来ていた人たちからは確実に死角になっていた場所だった。

誰が撃つたのかと疑問に思うが今はこのチャンス逃すわけにはいかない。

オスの方を向いた正影の視界に奇妙な光景が広がっていた。

敵が頭を地面に突き刺したまま動かない。

かみつくの失敗したとみてオスもすぐに地中に潜ろうと思ったのだろう。

だが地中に入っているのは頭だけ。

お尻の方には触手の根本と思われる長細い形をしたものがいくつも飛び出ている。体を右に左に動かしてはいるが力はなく、だんだん弱っているように見える。

「ここで正影も狙撃した人を理解する。」

『悠斗さん、正影さん、無事ですか？』

「ああ。助けられた」

『青羽さんからの命令です。そのオスのコアを回収してこいとのことですよ』

「分かった。あの状態のオスなら、きれいにコアを取り出して帰ろう」

『帰りをお待ちしています』

通信が切れ、正影が力なくぐったりしているオスの前までくる。

まさに頭隠して尻隠さず状態だ。

悠斗もようやく体が動くようになったのか、座り込み息を荒くしている。

「助かったぞ、穂香」

オスの解体作業を始めた。

「…どうする?」

『そこで出て行って勝算はあるのか?』

「あるならお前に訊いてねえよ」

和人がフラテッドと通信をしている。

悠斗がやられ次第、正影の狙撃に移ろうと思っていたが増援が来た。

さらにオスもやられた。

こんな状況で狙撃をしたって自分の存在を知らせるだけ。

間違いなく、殺されるか捕まる。

『なら俺の考えも変わらん。さっさと退却しろ』

「はあ…、さっさとあいつを送り込めばいいのに」

『無理言うな。あれは簡単な命令しか処理できない。気まぐれなのだから待つしかない』

だろう』

和人は武器を片付け始める。

「にしてもあのオス、思ったよりすごかったな」

『ちゃんと撮影はしてるだろうな? 後で確認させてもらおう』

「してるよ。はあ、結局オスの実験結果を見るだけになっちゃったな」  
『後につながる。決して無駄ではない』

「それは分かかってるけどよお」

折角少しは楽しめると思ってた出てきたのだ。

それなのに結果は残念。

結局劣悪環境な場所にオスの実験を見にただけとなってしまうた。

「次はもっといい仕事回してくれよ」

『…善処しよう』

## 変わった休息

「ふう……」

ため息をつく正影。

最近は何かと大変だったので少し疲れ気味だ。

もつとも、大半は出さなくてもいい本気を出して無駄にグロッキーしただけなのだが。

あまり人がいない時間帯に休憩所でココアを飲んでいる。

食堂でもいいのだが、あそこはあくまでも飯を食べるところ。

休憩所は好きな時に好きなだけ来ていい空間だ。

設備は食堂と比べると少し古っぽいが十分だ。

「お疲れ気味ですか？」

知らない声がしてそちらを振り向く。

1人の男が立っていた。

帽子を深くかぶっており顔はよくは見えない。

「……すまないがどちらさんだ？」



「失敬、初めましてでしたね。凧《なき》といます」  
帽子のつばを少し持ち上げ顔を見せる。

特にこれといった特徴はない普通の顔だ。

強いて言うなら目が細い。

「正影だ」

「やはりそうでしたか。いや、すみません。たいして大きくもない施設なのに挨拶が遅れました」

「そんな謝ることではないだろう」

「いやいや、プロトがロスに挨拶をしないのはおかしい話です。そこ座ってもいいですか?」

正影に許可をもらい、向かい合うようにして座る。

「…このアルツエはどうですか?」

「普通にいい場所だ。ゆつくりできるし、仲間もいる」  
「気に入ってもらえたようですねによりです」

凧は缶コーヒーを取り出し、飲み始める。

よくあんな苦いもの飲めるかと正影は思っていた。

「…つかぬことをお訊きしますがいいでしょうか?」

「なんだ？」

「今の世界をどう感じてますか？」

「え？」

突然意味が捉えにくい質問に疑問を抱く正影。

凧は笑いながら言い直す。

「いや、そんなに難しく考えなくていいですよ。正影さんは10年ほど前の世界から来たんでしよう？」

「そうだが」

「その世界と比べて今はどうかと訊いてるんです」

考えてみたこともない問いに少し思案する正影。

確かに正影は10年ほど前の世界から跳ばされてきた。

だからといってこの世界がどうかなんて考えたことはない。

ただ生き、ただ過ごしてきた。

「…悪くはないと思ってる」

「結衣さんがいないこんな世界でも？」

「知っているのか？」

「あなたのことはあらかた嬉々さんがしゃべっていたもので」

そこまで話すことはないだろうと思う正影。

「別に結衣とはなんでもなかったがな」

「ええ、それも。だからロリコンと呼ばれてるんですよ」

「人の噂も七十五日と言うが…消える気がしないな」

結衣はどうしているのかと思う。

結衣はあの事故で行方不明になった側だ。

死体は発見されず、だが血痕は見つかった。

たいした出血ではなかったらしいが、見つかっていない。

同じくタイムスリップ的なことをしたのでは？と思うがそれではこちらからはどう

しようもない。

「…なんかあまりよくない話題にしてしまいましたね。すみません」

「いや、気にしないでくれ」

ピピピッ！と聞き覚えのある音が鳴る。

それを聞くと風が立ち上がった。

「すみません、時間が来たので」

「ああ、仕事頑張ってくれ」

一礼するとその場を後にする。

凧は部屋を出る前に向きなおって言った。

「もしよければ考えておいてください。あなたがこの世界をどう思っているのか」  
凧がその部屋を後にすると、正影は1人ココアを飲みながら少し考えていた。

「ふう……」

『お疲れ様穂香、今日の訓練は終了よ』

的を相手に銃口を構えていた穂香が銃をしまう。

穂香は1人、訓練をしている。

普通のプログラムと同じことをするのなら他にも人はいるのだが生憎穂香のは少し特別だ。

体を動かすのは最低限のことにとどめ、主に射的の腕を上げる訓練をしている。

部屋を出て、シャワールームに入る。

いくら射的だけをしていても集中していれば汗はかくし、体も汚れる。

「穂香ちゃん！」

美嘉が入ってきた。

個室であるにもかかわらず。

「美嘉さん、隣空いてるよ？」

「何言ってるの。折角のごほう…お互いを分かりあうチャンスなんだから。女同士、別にいいでしょ♪」

「う、うん。別にいいけど…」

少し、狭い空間になってしまいが無理はないので許す。

穂香は美嘉が自分に好意を持っているのは知っている。

だが、まさかそういう方向とは思ってもいない。

「穂香ちゃん、訓練の調子はどう？」

「絶対調だよ！すぐにもパパに追いつかないといけないし」

「この前はパパを助けたんでしょ？」

「うん、パパも褒めてくれたし改めて頑張らないとって思ったよ」

正影と悠斗の一件以来、穂香は少しずつ任務に出始めている。

遠くからの援護射撃というのは新しい立ち位置で最初こそ他のプロトは戸惑ってい

たが、今では引つ張りだこになりつつある。

訓練の関係で任務に多くは出れないが、正影に次いで一緒に任務に行きたい人となっている。

「よかったわねえ。…にしても——」

美嘉が穂香を見る。

「穂香ちゃん、胸大きくなつた?」

「えっ、本当?」

穂香は気づいてないが美嘉の見る目がいやらしい。

正影がいれば間違はなく即、磔にされる。

「ええ、羨ましいいわね。私ももう少しほしいんだけど最近成長が止まっちゃったのよね」

「それだけあればいいんじゃないの?美嘉さん着やせするタイプ?」

「そうよ、あともう少し大きくならないかしら」

少なくとも9歳の女の子が(一般的には)する会話ではないだろう。

しかし、美嘉の狙いはこの会話ではない。

「穂香ちゃん、大きくなつたか確かめるために触らせてくれない?」

「え、恥ずかしいよ」

「女同士なんだからいいじゃない。それに胸は触られれば大きくなるって言うわよ？」  
「え、本当？じゃ、じゃあ…」

「本当？じゃあさっそ「はい、アウト」ガフツ！」

上から長い棒が美嘉の頭に突撃してきた。

美嘉の頭が地面に叩きつけられる。

狭い個室で寝っ転がられると足の踏み場がない。

「な…なにが？」

「あなたも抜け目がないわね」

隣の個室から嬉々が頭をのぞかせている。

手には長い棒を持っている。

「な、なぜ!？」

「訓練一緒にしたでしょ。あと正兄から言われてるのよ」

「あの人…ここにまで範囲を広げていたとは…!」

美嘉が地面に叩きつけられたものの、単純な力勝負では美嘉の方が上。

棒を退けて立ち上がる。

「いいじゃない、胸触るくらい！女子同士ならスキンシップの内に入るでしょ？」

「あなたの胸触るは男子のそれと同等なのよ」

「私って今までそんな扱いだったの!？」

そのあと、美嘉は結局穂香の体に胸はおろか体に触れることさえ叶わなかった。

「たかーい!」

「でしょ? 正影さんほどじゃないけどそれでも女子の中では高いほうよ」

シヤワーを終え、アルツエ内を美嘉が穂香を肩車しながら歩いている。

隣には嬉々というストッパーがついている。

美嘉の穂香に対する異常な愛情は今ではアルツエ内では知らない人の方が少ない。

「正影さんがいるとこんなことさえもやらせてくれないもんね。そこまで警戒されることしたかしら?」

「してるじゃない…」

人影がちらほら見える休憩所に入る。



仕事で半分ほどアルツェ内からいなくなっているが、訓練をさつきまでしていた人が何人か来ている。

そして休憩所ということは…

「…何か視線を感じるわ」

「でしようね。正兄いるもん」

「パパあー！」

今日暇なのかほぼ一日ずっとここにいます。

正影の眼は明らかに美嘉に警戒心を持っていました。

分かつてはいたことだが、いざ向けられると怖い。

「さ、さあ穂香ちゃん。ここを離れま——」

「それはそれで後で怖いと思うわよ？」

「うっ…」

美嘉はこのアルツェ内では情報屋だ。

大体の人は美嘉に大して強いことは言えない。

決してよそよそしく付き合っているというわけではないが、あまり深くはツツコめないので。

だが、そんな美嘉が恐れているのが正影だ。

この人だけには何をしても勝てそうにないような気がしていた。  
っていうか弱みなんてあるのだろうか？

正影に近づいていく。

「正兄、今日は暇なの？」

「ああ。そうなんだが…」

「ど、どもです。正影さん」

「パパあ、美嘉さんって優しいよね。肩車してくれるのパパを含めたら2人だけだもん」

「…そうだな」

正影の目が訴えている。

「今すぐ降ろせ」と。

「ほ、穂香ちゃん。私疲れちゃった、降りてくれる？」

「分かった」

「ありがとう」

少し名残惜しいが、死ぬのはごめんだ。

いや、死ぬよりひどそうな気がする。

「パパ、私トイレ行ってくる」

「ああ、分かった。ゆっくりしてこい」

ゆっくりに込められた意味を理解し、美嘉は背筋を凍らせる。

穂香がいなくなると正影が美嘉のほうを向く。

「俺の目が届かないところで穂香に何かしたか？」

「いえ、なにも……！」

「嬉々」

「……特に何もなかったよ」

「そうか」

引つかかるところがあるらしいが嬉々が言うならと訊くのをやめる。

「……正影さん、過保護すぎませんか？」

「お前に対してはな」

「私だって女なんだからそんな間違いは犯さないのに……」

「十人十色という言葉もある。俺だってお前がただのレスだつていうなら何も気にしない。だが、お前はそれ……いや、幼女好きだ。なんでお前はロリコンとは言われないのに俺は——」

「ねえ、聞いた？今度はエリア3のアルツエだつて」

「聞いた！最近多くなつたよね。アルツエ自体が潰されるだなんて……」

話題は変わってしまうが聞き捨てならない会話が耳に入る。

そして幸い、ここには今情報屋がいる。

「情報屋、お前の情報量を知りたいな」

「…エリア57、29が最近潰されたアルツエ。今回が3だと聞いているわ」

アルツエは別にエリアにつき1つあるわけではない。

エリアなんてもつというならほとんど意味を成さない。

オウステムに潰された順にその地域に番号が付けられていっただけなのだ。

だから実際、1の隣に2があるわけではなく17や68など離れた数字が多い。

「アルツエってそんなに脆いのか？」

「8年前と6年前に1回ずつ潰されたことはあるけど、ここ数年は落とされたことはなかったわ。普通のオスじゃあの防壁を壊しきる前に殺されるもの。以前の2回は数が多かつたけど今回は1体」

「となると原因は…」

「プロデーター」

美嘉も席に座り話し始める。

「毎回ランダムに現れるらしいの。そしてアルツエは何もできずに崩壊していく」

「対抗する手段はないのか？」

「力の差が圧倒的といわれているわ。おそらく正影さんの本気状態で攻めてくるのと同

等だからだと思う。正影さんとプロディターは力が拮抗してるって聞いたことがあるわ」

「……でもそれだったら死ぬはずだろ。後でグロッキーしなかったとしても俺1人でこの要塞を攻略するのは不可能だ」

「正影さん、相手はオウステムだよ。人間じゃない」

オウステムは人間から見れば異常な回復速度を持つ。

もちろん攻撃を受けてからすぐに治るといっのは数が少ないが少なくとも人間よりはるかに丈夫だ。

「他には何かめぼしい情報は？」

「……めんなさい。この情報は上も隠したいらしくて」

肩を落とす美嘉。

自分の情報屋としての血が許していないのだろう。

「この程度か。情報屋も」

「むむ？ 正影さん、それ聞き過ぎせないよ？ なんなら嬉々の情報を上げようか？」

「え？」

「何かあるのか？」

「とりあえずスリーサイズから」

「何で知ってるの!?!」

「それならだいたい知ってる。必要ない」

「知ってるの?」

「こいつとは風呂に入ったからな」

美嘉の目が見開く。

嬉々の方を見て目で訴える。

「お前…まじか!?!」と。

「そ、そそそんなんじゃないわよ!?!」

「え、いや、だって、その年で? 正影さんが誘ったの?」

「俺がそんなことすると思うか?」

「このブラコン! (性的な意味で)」

「ええ、ブラコンよ! (性的な意味は含まれない)」

「否定しろよ…」

「そして正兄はロリコン! (性的な意味を含む)」

「このロリ&シスコン! (性的な意味を含む)」

「もしかして、アルツェ内の誤解はお前らが原因なのか…?」

## 現・最強

## 応援要請

「よし、これで終わりだな」

「みんなお疲れ」

「5回任務の連続はあ、さすがに辛かったけどお、さすが正影さん。助かったあ」

「俺がいなくてもこれくらいなら問題ないだろうに」

「いや、今回は本当にスピーディかつエレガントだったよ！」

随分賑やかなものだと言正影が苦笑する。

正影は今、任務で外に出ている。

敵はランク4のオス5体と正影からすれば物足りないところだったが嬉々の誘いとなれば断るわけにはいかない。

しかし、このパーティメンバーは個性的だなと思う。

このパーティと行動する理由ができたのは2日前。

|||||

「正影さん、こんにちは」

「その声：リムか？」

「はい、顔を合わせるのは初めてでしたね」

任務受け付けのカウンターに男がいるのは初めて見た。

顔つきは中性なのでどちらに捉えるかは人によるだろうが制服が違うのだ。

もしかやと思いをかけてみたら案の定だった。

「で、今日は任務ですか？」

「いや、暇だからブラブラしてただけだ。そしたらお前が目に入ったもんでな」

「正影さん、あなたはロスなんですから任務はジャンジャンこなして欲しいんですけどね…。これなんてどうです？誰も手が出せないランク7の敵『ロップラップトップ』」

「なんだその変な名前のオスは？全然姿形が想像できないぞ」

ランク7の敵はよほどのことが無い限り手を出してはいけない敵。

ロスである正影でさえここで「やります」と言ってもすぐには行けない。

「でも正影さん、ランク4以下相手だと物足りないのでは？」

「それは、行っても敵見つけたらすぐに終わってしまうからな」

「今ランク5の敵はいませんし…6なら一応」



「もしかしてもう行く前提になってるのか？」

「暇は罪ですよ、正影さん」

「…」

「まあ、僕はこの後ポテチをベッドの上で食べながら漫画読みますけど」

「そういう冗談も言えるのか、お前は」

リムが笑顔で応えた。

受け付けやオペレーターをしているだけあってなんか輝いて見えた。

営業スマイルというやつだろうか。

「で、どうします。任務」

「遠慮しとく。今は気分じゃな「あれ、正兄」」

嬉々がいた。

「嬉々か。どうした？」

「私は任務を受けに来ただけけど…、正兄最近ずっとアルツェ内にいるね」

「金はあるからな」

「正兄は向上心が無いからダメだね。なのに無駄に報酬が高い任務を受けちゃって…」

「昔と同じ習慣で生活しているだけだ」

正影は週に2、3回のみ外に出て敵を倒すのが普通だった。

昔はロスの出撃は上からの指示があつて初めて動いた。

だが、今は自由。

ある意味好きな時に好きなだけ出撃できるし、自分と相性がいい敵を選べたりもして言いこと三昧だ。

だが、実力者となつてくると上の人間としては出撃してほしいのだ。

「なら嬉々さん、正影さんを引つ張り出してあげてください。ランク4の任務の消化をお願いしたいんです」

「嬉々の実力があれば俺はいらないだろう?」

「一気に5つほどお願いできますか?」

「自殺志願者でもいるのか?」

「問題ないわ。正兄もいいよね?」

「…」

正影はため息をつきながら頷いた。

|||||

来ているのは正影、嬉々、蓮、心愛《ここな》、太郎の5人だ。

穂香はもう少し、訓練に明け暮れる日々が続くそうだ。

心愛とは語尾によく「くあ」だったり「くう」など小さい文字がついてくる女の子。どちらかというと身長は小さく、緊張する姿は滅多に見せないらしい。

正影にとつてこいつは正直どうでもいい。

嫌でも好きでもない。

だが…

「…太郎。なんでちよくちよく英語を——」

「太郎ではない、ルイーグだ！」

こいつ。

かなり問題児だ。

こいつはキャラが濃すぎてどう接したらいいか分からない。

だいたいなんだよ、ルイーグって。

かつこいつとか思ってたのか？

「でもやつぱり辛いな、5回連続ってのは」

「まだ元気そうじゃん。6回目いつとく？」

「嬉々い、私あとは正影さんに全部お願いしちゃいそうだよお…」

「へばって情けない。僕はノープログラムだよ！」

十人十色とやらを初めて実感したような気がした正影だった。

「正兄は？」

「俺も疲れた。さっさと帰るぞ」

「棒読みで言っても説得力ありませんよ？」

『みんな、迎えのヘリが到着するわよ』

今日のオペレーターはリムではない。

真理奈とかいう、嬉々の友達らしい。

まあ、今日の声の感じを聞く限り悪い人ではないらしい。

「さっ、帰るか」

「正兄、明日は——」

「空いてない」

「何かあるの？」

「ポテチをベッドの上で食べながら漫画読む」

「誰との会話をパクったの？」

「リムだ」

到着したヘリにみんなが乗り込んでいく。

『正影さん、アルツェ到着後ラグフィット指令が呼び出しをしておりますのでお願いし

ます』

「要件は？」

『そこまでは話されていません。ただ呼び出せということでした』

「分かった」

正影の通信が切れると嬉々がにやにやした顔で正影を見ているのに気づく。

「なんだ？」

「正兄、何かやらかしたの？」

「もしかしてえ、穂香ちゃんに手えだしたあ？」

「嬉々、お前の目が届く範囲くらい何とかしておけと言っただろう」

「事実だもん」

女性陣はこういう話題が好きらしい。

正影も何度もあるんな人に言っているのだが、未だに誤解している人もいる。

大半は面白半分になりつつあるが。

「嬉々、そんなこと言うんじゃない。正影さんはロリコンなんかじゃないだろ」

「でも蓮、正兄いじるにはこの会話しかないのよ。それに私ぐらいの女子に一切興味を

示さないし」

「でも穂香は今年で10歳だろ？ここには12歳もいるんだぜ？」

「私はあ、ナイスボデイだよお？」

「心愛よ、それをナイスボデイとは言わ「黙れ」オフ!？」

太郎の喉にラリアットが入りぐったりとする。

いつもなら揺さぶったりするがこいつは寝ていてもらったほうがいい。

「ともかく頼むぞ。お前が焚き付けたようなものだからな」

「本当なのに……」

正影が反論しようとしたとき、変わった音が聞こえた。

へりに内蔵されている音。

「これは……応援要請？」

嬉々がすぐに気分を切り替え、操縦席のほうに向かう。

正影もあとに続いた。

「どこからの応援要請ですか？」

「ここから距離約10キロ」

「10キロ？遠すぎじゃないか」

「場所は？」

「エリア22の……アルツェ付近です」

へりの操縦席にいる人たちの間に緊張が走る。

応援要請。

これが来るということはこれを発信している人がピンチだということ。

だが、これは基本2、3キロ先の誰かに助けを求めるもので、10キロ先なんて聞いたことが無い。

2、3キロ先でも間に合うかどうか分からないのに10キロ先なんてありえないのだ。

それでも出したということは…

「またプロデーターか？」

「おそろく…」

「どうする、嬉々」

「……」

今回のパーティーのリーダーは嬉々だ。

実力でリーダーは決まらない。

討伐部隊の明季のように特別な部隊は話が別だが多くのプロトに部隊など存在しない。

「…今エリア22のアルツェに一番近いのは？」

「このへりです。ほかのへりだと一番近いものでも15キロほどあるかと」

「どうせ後でほかのヘリが行くのよね…」

「いかがでしたでしょうか？」

「…進路変更。エリア22のアルツエに向かって頂戴」

「分かりました」

「連絡は私からしておくから急いで」

嬉々が指示を終えるとすぐにみんなのところへ戻る。

正影はこの時は嬉々が嬉々に見えなかったという。

「おう、嬉々。どうだったんだ？」

「進路変更したわ。行く先はエリア22のアルツエ」

「…嘘だろ？」

蓮が顔を引きつらせる。

意味を理解したようだ。

「じよ、冗談でしょお？嬉々」

「冗談じゃないわ。応援要請を受けた以上、向かうのは当たり前」

「それは司令が許可したのか？」

「今から訊くところ♪真理奈」

『絶対無理！アンタ馬鹿でしょ？正影さんいるんだよ!？』



「尚更OKじゃない？」

『逆よ！他に知られちゃいけないのよ、正影さんの存在は！それにプロデーターは正影さんを狙ってる可能性があるのよ！今すぐ帰還しな——』

「後はよろしくー」

嬉々は真理奈の話の間かず、そこで通信を切る。

しかし、正影がいるアルツエだつて他とかかわりがないわけではない。情報が洩れていないのはラグフィートの情報操作のおかげだろう。

どんな手を使ってるのかは不明だ。

もしかすると美嘉は知っているのかもしれないが、聞きたくもない。

裏の話は表に出すものではない（できる限り）。

「後で懲罰房行きだなお前」

「あんたもメデイアツールである私が罰を受けるんだから連帯責任が課されるわよ」

「3日ぐらいあの冷たい部屋で生活かあ…」

「涼しくていいじゃない」

「とりあえず連帯責任取らされたら胸もませてもらうぞ」

「な、何言つてんのよ！殺すわよ？」

「そしたらお前も死ぬぜ」

「正兄が黙ってないわよ。ねえ正兄？」

「別にいいんじゃないか？」

予想外の返答に嬉々が固まる。

「おお？」と蓮も予想外の返答に少し驚く。

「身内が結婚して嫌なことは無いだろう」

「そこまで見据えて!?! 私たち付き合ってるわけじゃないのよ!?!」

「形から入ればいい」

「穂香ちゃんと私に対する扱い高低差ありすぎじゃない!?!もしかしてロリコンに対するうつぶん晴らし!?!」

「穂香に変な意味で近寄ってくる輩は今のところ美嘉のみだ。あいつに対して警戒心を抱くのは保護者として当然だろう」

「じゃ、正影さんの許可も下りたということだ。懲罰房楽しみだな」

「…」

蓮は嬉々が好きだ。

確かに触りたいとは思いが嫌われるようなこととはしたくない。

冗談で言ったつもりだったのだが、嬉々はマジで受け止めていた。

エリア22のアルツェにつくまで嬉々はずっと顔を真っ赤にしたまま俯いていたと

いう。

「何馬鹿なことやってんだ、お前はあ!!」

罵声と同時に机を叩く音がする。

ラグフィートがブチぎれていた。

青羽は正影達がエリア22のアルツェに向かったことを報告した瞬間、今まで聞いたことのないような罵声で怒鳴られた。

「わ、私たちも説得しようとしたのですが…それつきり通信が——」

「そうじゃない! さつさとヘリを向かわせろ! 連れ戻せ! 私に対する報告は吉報のみにしろ!」

「は、はい!」

何も言い返せず、パタパタと焦りながら青羽が部屋を後にする。

青羽が出ていくと、気持ち落ち着けながら椅子に座る。

「プロデーターとの接触…、それもかなりまずいけどまだそれだけで済めばいい。もし、生き残りに正影の力を知られたら…」

ラグフィートの情報操作が水の泡になる。

ウソの情報を流すということは必ずどこかに穴があるということ。

その穴は小さいが確かに存在する。

もし、正影の存在が噂という形だとしても知られることになれば、必ず調べる輩が現れる。

そうすれば穴が発見されるかもしれない。

すべてがおしまいだ。

「……で、終わるわけにはいかない……」

## それぞれの仕事

「エリア22のアルツエまで残り約4キロ」

操縦席から声が響く。

ヘリの中の雰囲気は暗かった。

正影はなんとも思っていないが、嬉々は懲罰房のことを、後の3人は恐怖に耐えている。

太郎も先ほど起き、状況を知った。

彼でさえも、この状況を知ると口数が減ってしまった。

「…あれか」

正影がふと窓の外を見ると建物が見当たらない中、遠くに1つ建物が見える。

建物というよりは要塞だ。

まあ、アルツエは「要塞」と書くのだからそれもそうだろう。

だが見た感じはひどいものだった。

「…あれ、助かってる人いるのか？」

「正直い…、いないと思う」

正影に言われて窓の外を見て絶望を全員が襲う。

建物はすでに8割がた崩壊し、周りに建ててある壁にも大きな穴が開いておりオスの侵入が許されている。

地上にある民家はアルツエの下敷きになっており、地下の方も助かってないと考えるほうがいい。

「…おかしい」

「どうした、太郎」

「おかしくないか、あれ」

いつもなら名前を訂正する太郎もそんなことは頭にない。

「建物がボロボロだな」

「違う、蓮。残りすぎてる」

「なにが？」

「建物が全壊してない」

「どういう意味だ？」

正影が問いかける。

「僕が聞いた話ではプロデーターにやられたアルツエはすべて全壊してた」

「まだ、中で破壊活動してるんだろ。それにここからじゃ詳しいことは確認できねえよ」

「その割にはやけに静かすぎると思う」

双眼鏡を蓮に渡す。

蓮もそれを覗くが正直分らない。

静かと言われれば確かに破壊活動が起きているようには見えないが、たまたまおとなしく人を殺しているだけなのかもしれない。

「まあ、敵がいらないならそっちのほうがいいんだけど」

「全壊してない以上、いるはずなんだ」

「考えたって答えはでねえよ。どうすすぐに着く」「嬉々さん、こちら操縦席」ん？」  
声かへりの中に響く。

嬉々がすぐに立ち上がり、操縦席のほうに歩く。

「どうしたの？」

「通信が来ています。エリア22のアルツェから」

「繋いで」

へりに相手の画面を映し出せる機能などついていない。

音声のみが繋がる。

『ハロー。聞こえてる？』

「聞こえてるわ」

『そうか、よかった。こっちはエリア22のアルツェからです。俺はリリイだ』  
「女の子かしら？」

『よくそう訊かれるが男だ。プロトのな』

少なくとも全滅は免れたようだが被害はひどいだろう。

証拠に通信をオペレーターではなく、普通のプロトがしている。

「上の人間はいる？」

『残念。生憎、そっちの方は全滅です。今一緒にいるのは全員プロト、しかも6人だけ』

「上層部の人は勇敢に戦った…わけじゃないわよね？」

『強すぎてお偉いさんの誘導が間に合わなくてね。一か所に集まっていたオペレーター』

も任務を全うしてお陀仏です。隣に首なしの死体が転がってるよ』

「わざわざ具体的にどうも」

余裕があるのかりリイの口からは切羽詰まった感じは読み取れない。

「…あなた、余裕があるみたいだけど？」

『そりやな、プロディーターが退いてくれたので』

「退いた？プロディーターが？」

『はい。どういうわけか建物壊しながら一直線に出て行ってしまいました。あれはまるで逃げていてような、あるいは何か見つけたような…』



「なにかを…!?!」

嬉々に嫌な予感が走る。

それは操縦席で聞いている操縦者も同じことだった。

何かに向かって行った。

なら、考え付くのはただ一つ。

「オスの反応は？」

「半径一キロの間には——」

答えようとしたときヘリが大きく揺れた。

「っ……!」

何がきたかなんて訊くまでもない。

「何かがヘリの下方に巻き付いています！」

「一キロ以上先から腕でも伸ばしてきたっていうの!?!」

「あまり長い間この状態だと墜落する恐れがあります！」

嬉々は通信を後にして扉の方に向かう。

正影を除いて軽いパニックになっている。

「おい、嬉々！これはどういうことだ!?!」

「言うならば今、私たちは死の淵に立たされてる」

「こ、こ、こまでくると笑えてくるな…」

「でも立たされてるだけ。墜ちなければいいのよ」

扉を開き、あたりを確認する。

すぐに見つかった。

光る長い長い触手。

遠くまで続いている。

「正兄、お願いできる？」

「リーダーの言うことならやるしかないだろう」

正影が立ち上がり、刀を用意する。

「…これは長いな」

「切り落とせる？」

「これくらい、お前でもできる…さー！」

正影が一振り。

触手はあっけなく切り落とされる。

「…追撃があるかと思っただがな」

「油断しちゃだ——」

嬉々が言おうとした瞬間、再びへりが傾く。

扉の前にいた正影と嬉々が外に放り投げだされそうになるがぎりぎりですがみつく。ふうつ、一息つこうとして正影の事態が悪化する。

突然足が重くなる。

「…」

足を見るとさつき切り落とした触手の先頭部分が正影の足に絡みついていてる。

大した長さは無いし見た感じはそんな重そうには見えない。

だが、重い。

「嬉々、どうやらこいつは俺に用があるらしい」

「え?」

「少し、散歩に行つてくる」

手を放し、ヘリから離れる。

さつきまで引つ張られていたので、高度はそんなにない。

さらにロスなのだから体に自信はある。

「…穂香が撃てばあいつは止まるのか?」

どうでもいいことを考えながら落ちて行つた。

「正影さん！」

嬉々を助けようと引つ張つて最中に、正影が落ちて行つた。

「ここからでは助けたくても手段が無い。

「大丈夫、蓮。正兄はあれくらいじゃ死なないよ」

「でも落ちればプロデーターが……！」

「それも大丈夫だと思つたから手を離れたんだと思う。正兄は無駄に命を投げたりはしない」

嬉々がへりの中に戻る。

すぐに操縦席の方に行き、指示を出す。

指示を出し終わると蓮達の方に戻る。

「さつ、そろそろ仕事を始めるわよ」

「内容はあ？」

「正兄が戦う以上、うちのアルツェ以外に住んでいる人を近づけるわけにはいかない。エリア22から逃げた人の救助と露払いをするわ」

「援護はいいのか？」

「私たちが行ってもおそろくダメ。私たちでは足手まといもいいところ」

「なぜ、そう言い切れるんだい？」

嬉々が窓の外を見る。

すでにヘリの高度は通常通りに戻っており、下の様子はうかがえない。

「…恐怖よ」

「「？」」

「私はさつきあの触手を見た。あの時なんで正兄に任せたかわかる？」

「いや…」

「斬れたと思う、私でも。でも私はあれを見た瞬間、斬ろうなんて考えは浮かばなかった。出てきた言葉は『触らぬ神に祟りなし』。私の頭は本能的にこれを斬ってはならないと言ったの」

嬉々が手を握りしめる。

微かだが震えているのがわかる。

「…最低よね。自分がやりたくないからって、正兄に任せた。いや、押し付けた」

大好きだった自分の兄。

帰ってきてくれた。

本当に良かったと思う。

そんな兄に自分がやりたくないと思っていることをやらせた。

「口で好きだなんだと言つても結局は自分だなんて…嫌になるわ」

「…」

すると3人が集まる。

なにかしやべりあつている。

やがて意見がまとまつたのか嬉々の方を向く。

蓮が目の前まで来た。

「あの…嬉々」

「？」

目の前に来るのはいつものこと。

だから何も思わなかった。

蓮の手が嬉々のほつぺをつまむ。

「ホへ？」

「馬鹿かお前は？」

ほつぺをぐいっと伸ばす。

もちろん嬉々は痛がる。

心愛の顔が心なしか「えゝ…」と言っているように見えた。

「ひよ、ひよっと!」

「次そんな顔したらこれ以上のことやるぞ?」

「ど、どほいふこと?!」

「うるせ、これは命令だ。タイプAの俺からの命令だ。分かったか?」

「わ、分かった!分かったから!」

それを聞くと蓮が手を放す。

ほっぺが元の姿に戻り、嬉々は手をほっぺに充てる。

「本当にやめてくれよ?こっちが鬱になる」

「いい、一体どういうことよ?」

「嬉々はあ、私たちのムードメーカーなの。嬉々が落ち込めばあ、私たちの気持ちもダウンするのよ」

「女性の落ち込んだ顔は紳士である僕にとってはポイズンだ」

嬉々の顔があつけにとられた顔になる。

蓮が少し顔をそらす。

「だからよ…、笑っててくれよ。別にお前を励ますようなことなんて言えないけど、笑顔の方がお前に似合ってるんだから」

「蓮…」

嬉々の口に笑みが浮かぶ。

「そう言われちゃ、仕方がないわね。じゃ、落ち込むのはもうやめておくけど」

「それでいい」

「さ、みんな。準備しましょ。武器を持って、頑張るよ！」

「「「おおー！」」」

それぞれが、自分の武器を持ち始める。

討伐任務ではないとはいえ、オスは外の世界ではどこから現れるか分からない。

救助を任務としている場合でも必要なのだ。

『みなさん、降下ポイント到達まで残り1分を切りました』

「じゃ、いっちょやるわよ！」

---



「本当にあの子を？」

「危険かもしれないけどデータがほしいのも事実。司令も許可を出したわ。それよりさっさとヘリを出せって」

「分かりました！」

青羽が指令を済ませ、指令室に戻る。

人員はさいた。

ヘリの準備もできた。

だが、さっきから正影が乗ったヘリとの通信はつながらない。

心配事はここだけ。

「まったく、嬉々つたら…」

面倒ごとを増やしてくれたとイライラを過ぎて、呆れたになる。

青羽の立場はやることが多い。

言つては悪いがただ戦うだけでいいプロトとは違うのだ。

「青羽室長、ヘリが今発ちました」

「分かったわ。あなたもエリア22のアルツエの情報集めを始めて」

「はい」

正影達との通信が切れてから5分、まあヘリを5機も出したのだから5分で考えるな

ら上々だ。

自分にできることはこれしかない。

あとは情報を集めても通信が繋がらない以上、意味は無い。

そして自分に出撃できるほどの力はない。

後は祈るしかない。

「いっつも、心配するのは待つてるほうなんだよね…」

## 対峙

周りはちよつとした砂漠地帯。

遠くではあるが建物が見えるので範囲はそう広くない。

正影があるオスと対峙している。

目の前にいるのは光り輝く人型のオス。

プロディターだ。

「…ようやくか。呼んでおいて歩かせるとは、礼儀がなっていないな」

オスはその言葉に反応しない。

正影がプロディターと対峙したのはたった今のことだ。

ついさつきまでは歩いてきた。

落ちたところにはもちろんオスはおらず正影が最初どうしようかと悩んだ。

だが、自分を落とした張本人である触手の切れ端が案内してくれたのだ。

斬りおとされたはずなのに自分の主の場所が分かるなんてすごいなと思った。

プロディターは本当に人の形をしていた。

目も口も鼻もない。

呼吸をしているのか、血が通っているのかだつて一切不明のランク8のオス。よくよく考えたらどうやって攻撃してくるのかも知らない。

「……口……」

「ん？」

「ロス……ト、チル……ド、レン……？」

「話せるのか。そうだ、ロストチルドレンの正影だ」

「……」

口がないはずなのにしつかり声が聞こえる。

頭の中に響いてくるとかそういうのじゃない。

しつかり、耳でとらえることができた声。

「口……ス、ロス、トチ……ロスト……」

「……」

正影が構える。

最初から話し合いで解決できるはずなんてないというのは分かっている。

「口、ロロロロロロロス！ロスロスロスロスロス」

ここでプロデューサーに変化が開始する。

顔の下あたりに切れ込みが入り始める。

口ができ始めているのだ。

だが、その口には唇なんて存在しないしてきた口の周りはひび割れている。

「オアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

さつきまでの言葉は消え、ただの雄たけびが響く。

と同時にプロデューターが動いた。

正影に向かってとびかかる。

割れた口が開かれ正影をかみ砕こうとする。

正影は驚いた。

速さや、雄たけびにはない。

その古典的な攻撃方法についてだ。

とびかかってきたプロデューターの首を的確に掴む。

「ゴアア、ギイ?！」

常人なら首を的確につかむなんて不可能だ。

だが、正影にはできる。

相手がプロデューターとあって最初から本気だ。

しかし、実力がこの程度ならば正影は本気を出す必要がない。

だが、相手はいくつものアルツェを崩壊させてきた化け物。

油断は死を招く。

正影は掴んだ首をそのままに頭を斬りおとす。

「ゴアツ、ゴオオオオア!!ギヤイイ?!」

しかし、体だけでなく斬りおとされた頭さえも元気に転げまわっている。これを見て気分が悪くならない人はいないだろう。

正影が体をさらに斬りおとそうとする。

しかし、その時正影が刀を入れる前にプロデーターの体にひびが入る。

そのヒビは1秒かからず広がりすぐにそのヒビが大きな口へと変貌する。

「!？」

近くにいる正影を食い殺そうと正影に噛みつくこうとする。

それに対し正影が体を斬りおとすという最初の行動で対応する。

口は上顎と下顎があって初めて噛みつけるのだ。

下顎がない口で噛みつくなど不可能。

横に力任せに刀を振る。

が、予想外の事態が発生する。

斬りおとせない。

「なっ!？」

すぐに思考を切り替え、体を投げ捨て自分は後ろに後退する。

大きな口は何もかむことなく閉じられ威嚇するかの如く再び開かれる。

さらに離れてすぐ、離れていた頭の根元から触手のようなものが延び始め体と再びくつつく。

振出しに戻ってしまった。

「さすがはオスの親玉？か。一筋縄ではいかないか」

するとプロデーターが縮こまった。

頭をお腹にくつつけ、背中を正影の方に向けている。

背中から触手が延び始める。

だが、これに対応できない正影ではない。

数は5つ。

無数にないのであればこれくらいはどうということはない。

一番最初に近づいてきた触手を斬りおとす。

斬りおとされた触手には痛覚があるのか痛いかのようにはたうち回る。

しかし、残りの4本が残っているのでそいつは後回し。

2本が同時に攻めてくる。

さらにかわすのが難しくなる時間差を交えて1本が攻める準備をしている。

周りから攻めてきた2本を斬りおとす…ことはやめた。

正影といえど一瞬で体を複雑に動かし、触手を2本斬りおとした後よけるのは不可能だ。

何度も言うが正影はロスなので確かに速いが決して足のスピードに特化しているわけではない。

左右から攻撃してきたので後ろに後退することでそれを避ける。

「アアアアアアアア！」

頭をうずくめながらも叫ぶプロデーター。

目がどこについているのかは知らないが感覚でも正影をとらえていないことは分かるはず。

斬りおとされた触手は再生していた。

「…」

一方、正影はこんなものかと少し落胆していた。

相手が弱いことは普通ならば嬉しいことのはずだ。

だが、正影は違った。

少し期待していた。

自分が負けるはずはないと思ってはいたが、ここまでとは思ってもいなかった。



避けに徹すればまず当たらない自信がある。

攻撃は少し面倒かもしれないが相手の攻撃が当たらなければこちらの負けはあり得ない。

別に正影は戦闘狂というわけではない。

だが、強い者は必然的に敵に強さを求めるものだ。

負ける気はない、だが自分を超えるものがあるのではないか。

そうやって心のどこかでは戦いを求める。

正影が動いた。

5本ある触手の間を走って駆け抜ける。

プロデーターは反応できていない。

距離が10mほどまで縮まったところで近づいてきているのを理解する。

が、そこまでくれば相手が頭で理解していようと遅い。

触手を戻そうとするが方向転換するころには正影がプロデーターの目の前に来ていた。

触手では間に合わないとプロデーターの手が正影を捕らえようとする。

正影はそれを見切ると刀ではなく膝蹴りを食らわせる。

それにより、後ろに飛んでいくプロデーターの触手を斬りおとすという追撃を加え

る。

ただの人間なら正影が膝蹴りをした時点で体が痛みにも耐えかね意識が切れてもおかしくない。

だが、相手は人間ではないオスの類だ。

プロデーターは人間らしい受け身を取り体勢を立て直す。

斬りおとされたはずの触手が一瞬で再生し、正影に襲い掛かる。

しかし、すべて真正面からの単調な攻撃。

正影は斜め前に移動してかわすついでに攻撃を加えようとする。

しかし、ここで予想外の事態がおこる。

触手が一瞬で進む向きを変え、正影に襲い掛かっていた。

これは、触手を本当に自由に操れることと、正影の動きにプロデーターの頭がついてきていることを意味している。

油断していたこともあり、回避が少し遅れた。

背中に痛みが走る。

幸い貫いたわけではないが、背中に傷ができる。

この時代に来て初めてまともな傷といえるものを負ったような気がする。

プロデーターは攻撃の手をやめ、正影の血がついた触手をまじまじと見つめる。

いや、本来ならば目がある顔の目の前に触手を持ってきただけかもしれない。さつきまでの攻撃や雄たけびが嘘のように黙り込むプロデーター。その静けさが逆に気味を悪くさせる。

「……アウ……オ……オ……ギイ!?!」

突如プロデーターが悲鳴らしき声を上げた。

「これで全員?」

「間違いないと思いますよ」

嬉々がエリア22のほぼ全壊しているアルツエの中で救助活動を行っている。

本来これは彼女たちの役目ではないのだが今はそんなことを言っている場合ではない。

さつき合流したりリイと生きている人の確認をしている。

確認といつても簡易的なことしかできていないのだが。

「地下がほとんど被害がなかったのが不幸中の幸いなね…」

「何言ってるんですか。不幸そのものだよ」

予想もしない答えに嬉々が「え？」といいながらリイを見る。

一緒にいた連や太郎、心愛も同様に。

「何そんな分からないような顔してるんですか？」

「助かったのが不幸って言ったわよね、あなた」

「間違ったことは言ってます。ここで收容していた民間人は300人弱、少ないほう

とはいえこれを收容してくれるアルツェはそうそうない」

「でも助かった」

「生き地獄です。それにもつと言うなら…」

「言うなら？」

「…すみません。これ以上は言ってもあなた方をイラつかせるだけだと思うので」

こんなことを話して亀裂を生んでいる場合ではないと思いいリイが話を中断する。

しかし、連も嬉々もここにいる全員が言いたいことを何となく理解していた。

「…あなた——」

嬉々が何かを言おうとしたとき、嬉々の通信機が鳴った。

「こちら嬉『嬉々、今まで何やってたの!?!』真理奈?」

いつもは聞くことのない荒げた真理奈の声が嬉々の耳に入る。

「よくこの通信機の周波数が分かったわね?」

『苦労したわよ! 帰ってきたら思いつきりハグするからね、馬鹿野郎!』

「そ、それは勘弁してほしいわね。体の骨が砕けるわ…」

嬉々が苦笑いをしながら友の声を聞く。

もともと心配性なのは知っていた。

それに知り合いを失うと人の何倍も悲しむ人だということも。

「それより、あれから動きは?」

『へりが向かったわよ。もうすぐそつちに着くんじゃないかしら?』

「何台?」

『5台よ』

「足りないわ。ありったけの乗り物持ってきて頂戴。民間人が300人以上生きてる

の」

『…それは奇跡ね』

民間人という言葉聞いて、リリイが一瞬しかめっ面をした。

「急いでお願い、いつここに新しいオスが来るか分からないわ」

『プロデーターはどうしたの?』

「…退いていったわ。何人かが一応搜索している、正兄とか」

『…分かったわ』

真理奈は嬉々の言いたいことを理解したのだろう。

リリイという部外者がいる以上、今は正影がロスだということは知られてはならない。  
い。

『応援はこつちからも送ったから。誰も死なないで帰ってきてよ?』

「こんなところで死ぬるほど私の命は安くないわ。じゃ、また後で」

ちようどへりの音が聞こえ始めた。

「さあ、みんな。まずは女性と子供を優先的に乗せるわよ。誘導お願い」

「分かったあ」

「女性のエスコートなら任せてくれ」

「俺はへりの誘導をする」

全員が自分の役割を確認し、すぐに散らばっていった。

リリイが黙ってがれきの上に座っている。

「あなたと仲間にも手伝ってもらいたいのだけ?」

「…ボランティアは好きじゃないんですけどね」

「プロトでしょう？それに元気な」

「それを言われると、少なくとも今の俺に反論する余地はありませんね」

そう言うとりリイも動き出した。

嬉々は遠くを見つめる。

正影がどこにいるかは分からない。

だが、戦っているのは分かる。

「…」

嬉々も動き始めた。

## 玉響の安心

「なんだ…？」

突然プロデーターが苦しみ始める。

手を頭に当て、フラフラとする。

背中の触手が伸びたり縮んだりと不自然な動きを見せる。

別に見ているだけでもいいのだが、正影は今ラグフィットの下で働いている。

ただでさえ、規則違反的なことをしたのだからこれくらい土産は持つて行かないと本当に懲罰房行きだ。

静かだし、涼しいといわれればそれほどまで嫌とは言わないのだが今の正影はそんなことをするわけにはいかない。

穂香が1人になってしまうのだ。

別に扉越しならいくらでも話せるから寂しいというほどまではいかないだろうが、問題はそこではない。

美嘉だ。

嬉々も懲罰房行きなのだからこれでは監視ができない。



もしものことがあつてはならないのだ。

しかし…、最近は自分も過保護かもしれないなど思い始めていた。

はじめは軽い気持ちというわけではないがそこまで重くもとらえずに引き受けた父親代わり。

今となつてはこちらが「娘になつて」と自分が言つたのではないかと聞かれてもおかしくないような気がする。

別に血がつながつてゐるわけでもないし、正式に養子として引き取つただけでもない。でも、今では本当の娘のように思っている。

「悪いけど…勝たせてもらおう」

その言葉の意味を理解しているかはわからない。

だが、それに反応してプロデクターが正影の方に顔を向けた。

しかし、向けた時にはすでに目の前まで来ていた。

苦しんでいるうえにすでに目の前では何もできるはずがない。

正影が刀を横に振り胴を真つ二つにする。

さつきは斬れなかつたのだが今はそれが嘘かのように容易く斬れた。

胴にあつた口の上顎と下顎が離れ離れになる。

「ギツギツギイイイイイイイイイイ！」

痛いらしく、2つになった胴は両方ともたうち回る。

追撃で正影は下半身の方を切り刻もうとそちらへ間髪入れずに向かう。だが、正影が刀を入れる前に下半身のみが液状化する。

もちろんその状態で正影の刀で攻撃しても斬れるはずがない。

勢いで2、3太刀入れてしまいがダメージを与えられてる気はしない。

液状化したそれは地面に染み込んでいった。

こんな奥の手があるのかと驚きたいところだがすぐに攻撃対象を変える。

上半身は体をこちらに向けながら苦しそうにしている。

正影は刀を構える。

「まだ戻ってこないのか？」

「プロデューサーが抵抗しているからだと思えます」

暗い部屋でリレグとフラテッドが話している。

目の前には機械とカプセルのようなものが4つ。

2つには人が入っているが1つは電気すら通っていないのか暗く、もう1つは空だ。「あいつが意思を見せたのか?」

「理由は不明ですが戦いたいのではないかと」

「そうさせてやりたいのもやまやまなんだがな…、こればかりはどうしようもない」

「あいつにそれが分かる訳ありませんが——」  
1つのランプが点滅した。

通信機を取る。

「なんだ?」

『こっちのアルツェがヘリを向かわせ始めた。数は5』

「それは今からか?」

『いや、15分以上前にはすでにここを発ってる。もう着くころだ』

「応援は?」

『討伐部隊4人と穂香とかいうロスのメデイアツールだ』

それを聞いてフラテッドがリレグを見る。

リレグはただ頷いた。

「分かった。お前は引き続き動きがあれば報告してくれ」

『了解』

通信が切れ、フラテッドが通信機から耳を離す。

「いかがいたしましょう?」

「討伐部隊まで出したとなると…ラグフィートも必死だな。一応のためさつさと連れ戻せ」

「はい。あの、ロスのメディアアトールは?」

「興味がない。プロトが少し強くなつたにすぎん。放っておけ」

「…しづとこ」

正影が呟く。

もう刀を構えたりはしていない。

プロデーターは体こそ下半身も元に戻ったものの、不安定なのか崩れては再生を繰り返している。

どちらが勝てるかなんて明白だった。だが、正影は困っていた。

相手の体にコアが見当たらないのだ。

以前のオスのようにスライズにすれば出てくるのかと思ってやってみたがそれらしいものは見当たらなかった。

あいにく穂香のように相手を麻痺させる類の武器だつて持ち合わせていなしこれでは捕獲すらできない。

「どうしたもの——」

「ウオオオオオオオオオオオオオ！」

力任せにプロディターが突つ込む。

正影は刀で攻撃を受け止める。

次は背中 of 触手が襲い掛かる。

さつきから5本しか使つてこないのだから最大なのだろうと理解する。

ただ、触手の動きは最初よりはるかに滑らかになっている。

手を刀で押しつけ触手を迎え撃とうとした。

刹那、触手の軌道がずれ襲つてきていた触手が遠くへ飛ばされる。

本体も同様だ。

「大丈夫…みたいですわね」

「恭二か」

恭二が近くにいた。

「背中の傷、深そうに見えますけど…」

「見ての通りだ。問題ない」

恭二は頷く。

それ以上追及しないのは、本当に辛そうに見えないからだ。

「お前一人か？」

「そんなわけではないですよ」

「あ、正影！」

遅れて明季がやってくる。

いずれ応援が来るのは分かっていたことだ。

一緒にいるのは…、美姫とかいった最初にメデイアツールをお願いしてきたやつ。

相変わらずの完全武装だ。

「いきようですわ、正影さん」

犬猿の仲だったはずの…鈴だっただろうか。

背中に槍を担いでいる。

「お前らが来たということは…」

「そうね、今頃アルツエでは救助活動を行ってるんじゃないかしら」  
「隊長」

「分かってるわ。あいつは正真正銘の化け物だものね。でも…」

プロデーターが立ち上がっている。

しかし、体が溶け始めていた。

頭からどンドン液状化している。

「もう無理なはずよ」

「…そうみたいですわね」

明季が通信機を取り出し正影に渡す。

「？」

「穂香が話したいって言ってるわよ」

「なるほど」

「すぐ会えると思うけど、子供を心配させるといろいろ大変だから」

「感謝する」

正影が通信機を取り話し始める。

しかし、プロデーターはまだ諦めていなかった。

後ろを向いた正影にとびかかる。

それは鈴によって止められる。

襲い掛かったところを槍で横から一突きにされた。

「ギギイツ!？」

「美姫」

「はい、隊長」

鈴がそれを遠くへ投げ捨てる。

それで同時に美姫が手榴弾を取り出す。

2つ取り出し、口でピンを取る。

そして投げる。

プロデーターは宙にまだ浮いている。

落ちてくるであろう場所を的確に計算して投げた。

ボロボロのプロデーターに避ける手段はない。

「ギイイイイイイイイイ！」

プロデーターは手榴弾を知っているのか最後に断末魔の如く、声を張り上げた。

そして地面に落ちたと同時に、手榴弾が爆発する。

美姫が投げたのは対オウステム仕様になっている。



破壊力だつて上がつているので派手に爆発する。

「やっぱり爆発は素晴らしいアートね」

「爆弾魔みたいなセリフになつていゝるんじやなくて？」

「爆弾魔ほどじやないけど……良さは分かつてるつもりよ」

「これだから野蛮人は……」

「なんですつて？」

2人が言い争いを始める中、恭二が爆発した方を警戒する。

もしものことがないかと心配しているのだ。

「恭二、問題ないわ。行きましよう」

明季が呼びかけて恭二を引き戻す。

「ですけど、もしものことがあつては」

「今ので消えたわ、死んでないけどね。それに、もし襲つてきたとしても今の私たちの敵じやないわ」

正影に襲ひ掛かつたところを鈴は反応してやりで刺したのだ。

しかも横から。

そんな雑魚が襲つてきてもこの5人の敵ではない。

「帰るわよ、へりを呼んで」

「分かりました」

正影たちはそこを後にした。

「——で、無事正影以下4名の回収も終了しました」

「そうか」

ラグフィットが椅子に深く腰掛ける。

聞いた感じでは死人はなし。

さらに部外者にロスの力を見られた様子もない。

完璧だ。

「処罰はどうしましょう?」

「全員懲罰房行きだ。ただし、嬉々は1週間、蓮は5日、後の奴らは3日だ」

「了解しました」

処罰をメモ帳らしきものに書いていく。

「あと、今回生き残ったプロト6名はどうしましょう?」

「…2, 3名くらいなら引き取っても構わないが6名は少し多いな」

「他のアルツェも当たってみます」

「頼む」

このアルツェには十分な数のプロトがいる。

もともとこの住人だった人がプロトになるのは歓迎だが、他からはできる限り増やしたくない。

食糧事情が芳しくないのだ。

プロトになると実力によっては豪華な生活ができるがただの住民はそうはいかない。

さらにプロトになるには遅くても20歳までには訓練等を受けて許可をもらわなければならぬ。

20歳以降になると、ほぼ確実に成功するはずの注射によるプロト化が極端に失敗しやすくなるからだ。

25歳以降では成功するなんて奇跡に近い。

「そういえばお前、はじめはヘリ5台だったのに途中から乗り物を総動員してなかったか?」

「…(汗)」

目が天井を向いている青羽。

口角も少し上がって汗が見え始める。

「私に隠していることはないな？」

「ええと…あの…」

「なんだ、さっさと言葉」

「…300人」

「なに？」

「300人、民間人が生きていました」

「それがいったい…」

言いかけたところでラグフィートの口が止まる。

青羽の言いたいことを理解して思わず笑いたくなる。

「路頭に迷わせるわけにもいかなかったので…その…」

「全員…運んだのか？」

「はい…」

ラグフィートが震え始める。

怒りによるものではない。

恐怖によるものだ。

これから始まる数多くの書類によるものだ。

「ここに…そんな数多くの人を収容できるスペースはないぞ？」

「ですから…その…、他のアルツェに掛け合っていただきたいと思ひまして…」

他のアルツェに掛け合うとなるとさらに仕事が増える。

さらにラグフイート自身が嫌う、能力がなくてに威張っている馬鹿どもと話し合ひ  
もしなければならぬ。

「…」

「司令…」

「…青羽、今月のお前の給料はカットだ」

「それじゃ生活できませんよ!？」

「お前の給料は私の酒代に充てる」

「で、でも!いつもは2, 3割くらいで——」

「黙れ、これは決定事項だ」

ここに努めている人はプロトを除いて全員が月1で給料をもらっている。

青羽が給料をカットされることはよくある。

こういう、先走った行動がたまに見受けられるからだ。

結果的にはそうしたのが最善策というのは誰の目からも明白なのだが。

そういう時に給料の2，3割をカットされる。

だが、今回は全額カット。

つまりそれは生活ができないことを意味する。

寝床はともかく、食料が手に入らないのだ。

「わ、分かりました…（誰のスネかじろう…）」

このアルツエではラグフィットがほとんど実権を握っている。

彼女は独裁政治のようなことは行わないが、他のアルツエでは実際反乱が起こったこともあるらしい。

「そんな悩むことじゃないだろう。金を稼ぐ方法ならある」

「なにかアルバイトでも？でも私も働いてますし、夜は寝ないと…」

「どこか金持ちのところに自分の体でも売り込んで来い。休みの日なら問題ないだろ」

「何口走ってるんですか!?! 平然とした顔で!」

「溜まっているのだろう？安心しろ、ここではそれは取り締まりの範疇には入らないし私も口外するつもりはない」

「溜まってません!それをするくらいなら私はスネかじますよ!」

このアルツエではそういうことは取り締まりの対象にはならない。

理由は貧困だ。

これをしないと生きていけないという人もいるし、そもそもこれを対象にするとおそろく牢獄の数が足りなくなる。

すべて自己責任でアリになっている。

「それでは、私はこれで下がりますよ?」

「ああ、いい金持ち見つけてこい」

「意地でもやりませんからね?」

青羽が部屋を出て行った。

青羽がいなくなるとその部屋には1人。

これからの仕事の多さが頭に浮かぶ。

嫌な顔をしながらラグフィットは目ぼしいアルツェに連絡を始めた。

## お世話になります

正影は今部屋でゴロゴロしている。

先日まで懲罰房に入っていた彼にとつて、ふかふかのベッドはありがたい。

初めはひんやりしたあの空間も悪くないかと思つたが、1日でその考えは変わった。

飯は質素だし、なんかジメジメしてだし、暗い。

あの空間はここでの生活を味わつた後では劣悪環境もいいところだった。

だから今日は穂香も訓練だし1人で部屋でゆつくりする…はずだった。

「ねえこのココア、飲んでもいいかな？」

「…好きにしろ」

なぜか青羽と一緒に部屋にいた。

自分の部屋の如く、自由になっている。

彼女も今日は休日らしいのだが、そんなことはどうでもいい。

懲罰房から正影が出てきたらすぐストーカーをしてきたのだ。

目障りというわけではないが、気になるのでとつ捕まえて理由を聞いたところ「しば

らくお世話になりたい…」と言つた。



理由を聞いてそれは大変だなと思ったが正影は別にいいとは言っていない。

だがこうして懲罰房から出てきて2日間、暇なときは正影にまわりついている。初めに同情して奢ってしまったのが間違いだつたと少し後悔をしている。

それ以来、猫の如く来るのだ。

飯が食べたいだけならその時間に来ればいいだけで今いる意味はないのでは？と思うが訊くのもめんどくさい。

「あなたー、ポットどこだっけ？」

「俺はお前の夫じゃない。ポットは冷蔵庫の上だ」

「いいツツコミだね。でも嬉々ならもう少し面白い反応をしてくれるんだけどなあ」

「あつた」と言いながらポットのコンセントを差し込む。

水を入れて温め始める。

「そういうえば嬉々はどうだ？」

「あと3日もすれば戦線にも復帰できるはずだよ。まったく、意味わかんないケガをするよね」

「まったくくだな」

|||||

プロデーターとの戦いが終わった後、正影たちは嬉々たちと合流し無事帰還した。民間人300人の誘導があり、正直かなり時間がかかった。

ただでさえ収容人数オーバーしているのだからそれも含めて苦勞した。終わったころには全員疲れたオーラ全開だった。

「やつと帰ってこれた…」

「ああ。だけどこの後は懲罰房行きだろ？」

「一日でいいからふかふかのベッドで「嬉々！」」

聞き覚えのある声に振り返る。

オペレーターであるはずの真理奈が走ってきていた。

感動の再開というやつだった。

あることを知らない人たちから見れば。

「ま、真理奈！待っ——」

「心配したんだからね！」

真理奈が嬉々を抱きしめる。



真理奈はオペレーター兼プロトだ。

しかし、変わっている。

彼女は腕に力のみが異常に向上したのだ。

どういいうわけか、足や他の部位には一切プロトとしての手術をしたにも関わらず特徴が見られない。

つまり訓練してもプロトには及ばないのだ。

腕の力を除いて。

腕の力はロスと同等ではないかといわれている。

それくらい強くてもオペレーターとして働いているのは戦闘向きではないからだ。

さつきも書いた通り、腕以外はただの一般人と何ら変わらない。

訓練しても限界値が低いのだ。

そんな中、戦場に投げ出されればオスのいい餌だ。

だから配属されたのがオペレーター。

もしも攻め込まれたときの防衛装置としても働きも考えたらいいことづくめ。

腕の力だって、いつもなら思うように操作ができるので物を壊すことはない。

だが、この子は涙もろいらしい。

すぐに感極まってしまい、嬉々のように友達が危ない戦地から帰ってきたときには思

いつきり抱きしめるといふ。

これで嬉々は4度目だそうだ。

「まあ、俺はそれに感謝しているがな」

「とうとう?」

嬉々の骨が折れたのはあの場にいただれの目から見ても明白だった。

すぐに担架が運ばれてきて連れていかれた。

結局嬉々は1週間を病室で過ごすことになった。

おかげで穂香をそこに預けることができ、美嘉の手からうまく逃れさせられた。

あとで真理奈にお礼でも言っておこうと思っっているくらいである。

「なら恭二にでも言っておきなよ。あの人ならすぐ会えるんじゃないかな?」

「なんで恭二なんだ?」

「真理奈は恭二にとつて彼女であり、タイプAのメデイアツールでもあるんだよ」

「そんな密接な関係なのか?」

「どちらもまだアツアツだよ」

笑いながら青羽が言う。

しかし、面白いと正影は何度も思っていた。

真理奈が彼氏を持っていることではなく、真理奈がタイプAだということだ。

ある意味不完全であるにも関わらず、タイプAと珍しいタイプだ。

これのおかげで恭二は腕の力以外、ほとんど上がっていない。

だから、手を主体にして戦っているのだろう。

「正影には誰かいい人はいないの？」

ココアを入れたコップを差し出してきた。

断る理由なんてないので受け取る。

「付き合っている人ということか？」

「冗談でなら穂香って言いたいところだけど、今は真剣で」

「…」

想っていた人ならいた。

だが、それも昔の話。

「いない…な」

「正影、それは今の話じゃないの？昔も含めなよ」

「よくわかったな。だが、昔のことを話すつもりはない」

「女の勘ってやつだよ。でもなあ…、伴侶作ってもらいたいんだけどなあ」

「こいつは何を言ってるんだ？と思いつながらココアを飲む。」

「…あつ、伴侶じゃなくてもいいか。子供さえできれば」

「子供の体をいじくりまわす気か？」

「生憎、私はそこまで趣味が悪くないんだ。ただ、かわいだろうしロスの子供ってどんな力を持っているのか周りから観察できるしね」

別に青羽は研究員のような役職には就いていない。

だが、このアルツエの中ではかなり高い位置に就いている。

そうなる と必然的にいろいろな責任なりなんだりを押し付けられるのだ。

例えば研究対象の実験許可を最終的に出すのは青羽になっている。

そうなる と研究の風景はよく見るようになるのだ。

穂香をプロトにするとき、青羽が指揮をとっていたから正影は少し警戒した。

だが、彼女はただそういうのに携わっているだけ。

興味も関心もほとんど人並みで、子供が見たいと言ったのは本当に上の2つの理由が

原因である。

「もしやりたくなくなったらいつでも言っつてよ。君ならOKだから」

「前向きに検討しておこう」

「…本当に女性に興味がないんだね。本当はロリコンなんじゃ？」

「違う」

「じゃあ、まさかのホモ!?それだと子供が出来ないから困るんだ——」

「お前らは本当に変なレッテルを俺に貼るのが好きだな」

時間が経ち3日後。

「嬉々さん退院おめでとー」

「ありがとう、穂香ちゃん」

無事、復活した嬉々を穂香が祝いながら歩いている。

他に人はいない。

他の人は4度目にもなつてくると死ぬ瀬戸際に立っていたわけでもない以上、祝いは来ない。

今日は祝いに穂香が嬉々に飯を奢るそうだ。

本当はもつと違ったことがあったようだが、子供であるが故制限がいろいろとかかってしまい1人では難しかった。

それに無駄にやることも豪華にしようとしていたので、美嘉も慌てて止めに入ったと



いう。

「ごめんなさい、こんなことしかできなくて……」

「何言ってるのよ。気持ちだけで十分だったのに奢ってもらえて嬉しいよ」

「本当？」

「本当よ」

それを聞いて笑顔になる穂香。

自然と足取りが早くなった。

食堂に着く。

「嬉々さん、何が食べたい？遠慮しないで言つて」

「じゃあ麺類を貰おうかな。うどん」

「もつと高いものだっていいんだよ？」

「病室だと麺類が出なかったの。だから食べたくてね」

「そう？わかった」

子ども相手に馬鹿みたいに高いものは頼めない（別にそこまで高いものはここにはない）。

麺類が食べたいのも事実だったのでそれで手を打つ。

食券を買ったらあとは席を見つける。

周りを見ると面白いペアの2人がいた。

「あれ…、正兄と一緒にいるのは青羽さん？」

嬉々が困惑する中、穂香は何事もないかのように「パパ！」と言って嬉々の手を引っ張る。

「穂香。おお、嬉々。退院したのか」

「う、うん。そうなんだけど…」

「どうした？」

何の違和感もなく、隣にいる青羽が気になって仕方がない。

正影たちに背を向け、穂香に顔を近づける。

「穂香ちゃん、あれ何？青羽さんと正兄、付き合ってるの？」

「詳しくは知らないけど…、お世話になるとか」

「え？」

「今は私たちの部屋に寝泊まりしちやってるし」

「ウツソ!!ロリコンの正兄が青羽さんに興味を？」

青羽は別にロリ体型ではない。

身長普通、胸も普通にある、顔だって別に童顔というほどではない女性だ。

嬉々にとって衝撃としか言いようがない。

アルツェ内でロリコンと言われている正影。

9割がたが冗談だと思っっているのだが、1割は思っていない。

その1割には嬉々が入っていた。

いや、正確には完璧にロリコンだと思っっているわけではない。

だが、可能性が捨てきれずそうなっているのだ。

「青羽さんと正兄かあ…」

「…勘違いしてるような気がするから言っしておくが、別にこいつとは付き合ってないぞ」

「同じ部屋で寝てるのにな？」

「同じベッドじゃない。こいつはソファだ」

「あれ、狭いからベッドで寝かせてほしいんだけど…」

「なら自分の部屋に戻ればいい」

「そうすると朝早く起きないといけないから私には辛いんだよ」

「朝飯くらい抜けばいいだろう。お前のせいで一部で付き合ってるっていう噂がたつて

るんだぞで」

「私にとっては名譽だね。相手がロスだし」

正影が懲罰房から出て5日目までのうち後の3日間は寝泊まりしている。

穂香は気軽な人が来たと言っている。

「俺にとつては不名誉だ」

「私だつて結構上の人なんだけどな…。それに上はTシャツに下はボクサーパンツつていうサービス付きなのに」

「目に毒だ」

「…ここまで言われたのは初めてだよ」

穂香には甘いくせに、他の女性のアプローチには冷たい。

こんなことだから正影のロリコン疑惑が完璧には消えないということを知らな  
い。

「付き合ってるわけじゃないんですね」

「ごめんね、嬉々。もし正影とやることになったらその時は嬉々も誘うから」

「やること?。…:…な、何口走ってるんですか!?!」

「何のことだと思つたの?」

「え?……………」

「嬉々エツチー。やつぱりイジリがあるなあ」

嬉々は顔を赤くして縮こまってしまった。

穂香が頭を傾けて「何の話?」と訊きた気だが訊いても誰も答えないだろう。

しかし嬉々が縮こまった時、何かを思い出したかのように「あつ!」という一枚紙

を取り出した。

「なんだそれは？」

「ラグファイトさんから次の指令だつて」

紙にはオスが写し出されている。

ランクは4。

見た感じは…

「…羊か？」

体全体が毛のようなものでおおわれているのが分かる。

どういいうわけか顔に目らしきものが4つ、ついているがそこはどうでもいい。

別に珍しいことじゃない。

「あー、それ？」

「知ってるのか？」

「こちらから攻撃しない限り何もしてこない珍しいやつだったよ。なぜか似たようなのが多いから名前もついてるよ。『ミーク』だつて」

自分から攻撃しないオス。

ならば討伐する理由は何か。

「おそらく穂香も参加するでしょ？」

「うん」

「どういう意味だ？」

「簡単に言えば昇格……かな。ここの討伐部隊、明季を隊長にしているあれはどうやって人を選抜してるか知ってる？」

「さあ？」

「戦わせて力を見るんだよ。最初はランク2から始まるんだけど穂香は特別かな。同じレベルの人を集めて敵と戦わせる。勝てば昇格、負ければ死ぬかそのまんま。まあ、昇格しても部隊に入る権利がもらえるだけで何も変わらないんだけどね」

正影には分からない。

あの部隊は確かに強い。

だが、それだけではだめなのだろうか？

強いというだけではだめなのだろうか。

個人が強ければ、部隊なんて作らなくていいはずだ。

それをラグフィート直属の部下である青羽に聞くのはあれなので後で美嘉にでも聞こうと考えておく。

「頑張つてね。1人1人が強ければここのアルツェも安心だから」

「うん、パパも頑張ろうね」

「…俺もやるのか」

「いや、正影は監督じゃないかな。君が戦ったら他の人の実力が分からないよ」  
「監督？」

「いつもは明季がやるんだけど…たぶんめんどくさがってたから」

それは俺も同じだと反論したい。

だが、これは穂香の訓練の成果を見るいい任務でもある。

どこまで強くなったか見ておきたい。

「…はあ」

「初めての授業参観だね、保護者さん」

「そうだな。穂香、楽しみにしてるぞ」

「任せて！」

顔を輝かせて返事をする穂香。

「…で、嬉々。お前はいつまでそうやってるんだ？」

「…あと37分」

「なんだ、その説得力のない具体的な数字は？」

## 辛いこの世

ボロボロになった建物がひしめき合う町。

そこにミークはいる。

体長は20m級とそこそこ。

その周りにプロトが6人、隠れる様子もなく配置に着こうと準備をしている。

いつもなら敵に見つかるとは思わなくて致命傷もいいたくはないところだがこいつはどういうわけか人を目に止めない。

こんな類のオスはミークただ1つだけだそう。

先ほどまではみんな、その話に半信半疑だったので隠れながら準備をしていたのだが、どんなところにもバカの1人はいるらしい（今回は三姉妹のエニス）。

試しに目の前に出て手を振ったそう。

結果、気持ちいいほど無視をされた。

「みんな、準備はいいか？」

『はい』

全員が返事をする。



今回来ているのは穂香、美玲《みれい》、リリイ、蜂の巣三姉妹だ。

監督に正影と恭二が来ている。

美玲とは11歳と穂香に年の近い女子。

性格はおとなしめで穂香と話すことなんてないと思っていたのだが、穂香が一番年が近いということでグイグイ来たのでよく話すようになったお姉さんの人だ。

彼女の武器はのこぎりのような出で立ちをした大剣。

戦い方は、まあそのままだろう。

リリイは以前助け出されたプロトだ。

名前が女みたいだったので集合した時、男がいて少し驚いたがここでそんな顔をしては失礼だと我慢。

集合場所に来て最初にはいた一言が「女ばつかだな」とぼやいていたのが耳に残っている。

嬉々は「あまり好きじゃない」といい印象をもっていなかったようだがその理由がなんとなくわかった。

武器は槍、なのだが先端の攻撃する部分がものすごくでかい。

鈴の場合は先端のところは別に大きくはない。

機動性を重視したのに対し、リリイは一撃が大きくなるようにしたのだろう。

しかし、この人の割り振り方は2人（リリイと美玲）に負担をかけすぎではないかと思う。

穂香は超遠距離射撃をする。

そして蜂の巣三姉妹は遠距離から機関銃をぶつ放す。

相手が20mもあるので仲間にあたるようなことはないと思うが2人は敵の真ん前で攻撃を流しながら攻撃しなければならない。

もともと遠距離攻撃をする味方が半分以上いるということがおかしいのだ。

1人、多くても2人がいいだろう。

三姉妹はすでに3人いるのだがそれなら穂香を外すべきだと思う。

「よし、なら始めてください。戦法は問いません。倒せば昇格、負ければ……まあ、その時はその時で」

「穂香……だったな。リリイだ。準備はいいか？」

『OKだよ。よろしくね、リリイさん』

「ふん。いくぞ」

「始まったか…」

ミークが苦しんでいるのが分かる。

リレイと穂香が目玉を一つずつ潰したのが始まりの合図のようだ。

「リラックスしてください、正影さん。あとは見ているだけですから」

「…そうだな」

「どうです、クツキーでも」

「いくらなんでもリラックスしすぎじゃないか？」

カバンからクツキーを取り出し食し始める恭二。

今回の昇格条件はただ一つ。

ミークを倒すこと。

それさえできればたとえ攻撃を加えていない人がいたとしてもそいつも昇格する  
ことができる。

簡単であり、難しい任務でもある。

「まあ、あの人たちなら問題ないでしょうし。たとえ死んだとしてもその時はその時で

す」

「…割り切っているんだな、案外」

「それでもしないとこの職業はやってられせんよ」

無理な笑顔を作り返事をする恭二。

彼の前でどれだけ人が死んだのか、どれだけ大切な人が失われたのか、正影には分からない。

「そういえば正影さん、噂聞きました？」

「噂？」

「ええ、ロスに関わることなんですけどね。まず、プロデーターってどうして裏切者って書くか分かります？」

「…知らないな」

それについては疑問に思っていた。

オスなど生まれてから1度でも味方として戦ったなど聞いたことがない。

そんな奴に裏切者。

人型だからか…、と思っていた。

「正影さんにはあまり気持ちのいい話じゃないんですけどね…あれはロスの成れの果てじゃないかと言われているんです」

「根拠は？」

「遺伝子の適合率です。実は個体差もありますが20〜30%一致するそうです」

「…たったそれだけか？」

「正影さん、ロスの遺伝子が合致するなんてこと10パーセントでも理論上はあり得ないんですよ」

ロスとチルドレンの遺伝子は正直言つて異常だ。

人という器を残しながらも中身を化け物に変えてしまう。

この変化っぷりはもはや突然変異のレベルの話で済ませることは出来ないらしい。

プロトは言うなれば元に改良を加えたようなもの。

しかし、ロスは外面はプロトと何ら変わらないが内面は改良の域を超えて独自の技術を加えているようなものだ。

「だが…」

「まあその信じる信じないは正影さんの勝手です。でも今から言う噂話はそれを踏まえたくらいでお願いします」

「ああ」

「幼虫…なんだそうです」

「？」を浮かべながら話を聞く正影。

「今現在、正式に確認されたプロディターの数は2体。一部では3体ともいわれていますがそれは確認がありません。でも俺は3体で正しいと思っています。そうすればいろいろ合うので」

「死体が発見されていないロストチルドレンの数とか?」

「はい」

死体が発見されたのは4人。

発見されていないのは3人（正影はカウントに入らないため）。

幸か不幸かその死体の中に結衣は入っていなかった。

「何らかの条件を満たして3人がプロディターとなった。そう考えるのが一番簡単なんですよ」

「…否定はしない。俺たちの体なんてどうなってるか自分自身でさえ分かっていなかったからな」

「プロディターは地球から人間を消し、オウステムの世界を実現させる…出来ると思いますが?」

「無理だな」

即答だった。

正影は考えることなく反射的にその答えを出した。

「何故？」

「正直に言うなら…弱い」

「傷を負わされた人が言うセリフですか？」

「言い訳をするつもりじゃないがあれはダメージのうちに入らない。すでに完治もしている」

正影の負わされた大きな傷はすでに跡形もなく消えていた。

ロスの驚異的な体だからこそできることだ。

プロトなら外からの手助けが必要となる。

「でも相手は3体いるんですよ？」

「確かに同時に相手は無理だが…あいつらは多少の知能があっても所詮は獣だ。いくらでも戦い方はある」

「しかも不死身」

「そんなのは存在しない」

適当な感じで受け答えしていたのに突然正影の声がどこか強くなる。

恭二もクッキーを食べる口を少し止める。

「不死身なんているわけがない。どんな生物にも終わりがある、オウステムといえども生物だ」

「あれは生物といえるでしょうか？」

「考えてた、動いていた、しゃべっていた。生きているのに間違いはない。生きているのなら生物の枠組みに入る」

「…強いですね」

会話が止まり爆音が聞こえる。

しかし、5秒ほどで恭二が口を開く。

「俺はよく思うんですよ、疲れたって」

少し離れたところではまだ爆音が聞こえる。

そんな中、ここにも音は響いているはずなのに不思議と静かに感じた。

「俺、まだ17なんですよ。正影さんよりは確かに年上ですけどそれも正影さんがタイムスリップしたからであって本来なら貴方の方が年上です。でも…、17年なんかじゃなくてすでに30…、50年は生きた気がします」

「…」

「これでも昔は人が死ぬことに対して全く耐性がなくなつて母が死んだときは5日間、泣き通しました。そのあととは弟が、でまあそのあとに父が。でも、人間つてすごいですよ。繰り返ししていると不思議と耐性がついてくるみたいなんです。だんだん泣かなくなり、気持ちの整理も早くなりました」



自嘲するかのように笑った。

「決定的なのがプロデクターの出現でした。周りで知り合いも赤の他人も平等に死んでいく。その時に俺のねじはどこか外れたんだと思います。でもこれが嫌な外れ方をしたらしくてね…疲れはするんです、精神的に」

「…」

「いつそのこと、完璧に壊れてしまつてれば——」

「それは違うだろう」

正影が発した言葉に反応する恭二。

さつきまでずっと話していた恭二の口が嘘のように止まる。

しかし、正影はそれ以降口を開こうとしない。

恭二が口を開く。

「違うと思うのなら…なんで答えを提示してくれないんですか？」

「知っている答えを提示されても嫌なだけだろう」

「…知っている？」

「まあどうしても教えてほしいというのなら…、聞くか？」

耳につけていたスピーカーをとってみせる正影。

意図を理解して恭二が表情を変えず、少し顔を赤くする。

「壊れたらこいつを守れないだろ。それともお前だけ楽になってあいつを苦しめるのか？」

「…ずるいですよ。正影さんに置き換えたなら穂香ちゃんや嬉々を守りたいからと言ってると何ら変わらない」

「俺が生きてる理由なんてそれくらいだ」

「え？」という代わりに正影を見る。

正影はなんでもない顔をしながらスピーカーを耳に付け直す。

「俺の楽しみは穂香と嬉々の成長を見ることくらいだからな。自分で言うのもあれだが、穂香には過保護（美嘉に対して特に）だし、嬉々も本当にかわいい。もちろん、妹としてな」

「自分でしたいこととかは？」

「ないな。2人がいないければ俺は今頃どこかでのたれ死んでるか、ベッドの上で解剖され中だ」

恭二は知らなかったらしいから隠した。

別に言うほどのことでもないし、確かに少し恥ずかしい。

結衣を探すと言うのも。

はあ、とため息をつく恭二。

自分の言い分では正影を言い負けさせられないとすでに気づいたようだ。

「やっぱり年上は違いますね」

「お前は俺を試したんだろ？理由は知らないがさっきの疑問の答え位、気づけないほど馬鹿な人間じゃないはずだ、お前は」

「半分正解で半分不正解です」

自分が心に思っていた答えとまったく同じことを言われたのであえてそう答えた。

別に深い意味なんてなく、たぶん恭二から見ればほぼ正解。

だが、あまりにも正解に近すぎたのでなんか悔しくって言ったのだ。

「なんだそ『パパ、終わったよー』」

なんで不正解なのかと聞こうとして終了の合図が鳴る。

戦闘があつたところを見ると力尽きたミークが倒れ、遠距離で戦っていたはずの穂香も近くにいた。

手にはショットガンがあり、スナイパーでは20m級にはあまり効果がないと思つたのか近くで戦っていたようだ。

正影が見ていたらハラハラドキドキで心臓が悪かつたに違いない。

「分かつた。ご苦労だつたなみんな。そつちに確認しに行くから警戒を怠らないように」

『はい』

「さ、行くぞ」

「ですね。隊長たちの方も終わりましたかね？」

「あっちの方にはあまり知ってる人がいないからな…。分かん」  
「報告ついでに聞いてみますね」

監督とか言っておきながら結局くさい話をするにとどまった。

正影はやはり自分は来なくてもよかったなと少しうなだれる。

穂香の戦闘だって最初以外ほとんど見なかった。

任務もぼんぼんと進んでいたらしく問題なかった。

「(今日は帰ったら穂香に何か——)」

「正影さん、緊急です」

隣で普通になっていた恭二が少し真剣な顔になる。

「どうした？」

「第3班と連絡が取れません。異常です」

「戦闘中だからじゃないのか？」

「監督は基本、任務遂行中のメンバーが死んでもリタイヤしない限り手を出しません。」

そして今回の敵は監督がいれば余裕になるような敵を割り振っています。それでも連絡がないとなると……」

「行きたくないんだが……。どうせ俺たちが一番近いんだろ？」

「はい。リリイさんがなんて言うか……」

めんどくさいと正影と同じことを言うのは間違いないだろう。

「まあ、いい。どうせ行くならさっさとするぞ。こっちは穂香の昇格パーティーでもやりたいんでな」

「次が最後ですから、次をクリアしてからすべきだと思いますけど……。分かりました、じゃあさっさと行きましょう」

## 恐怖再来

「クソクソクソクソクソ！あんな奴いるなんて聞いてないぞ！」

走りながら1人の青年が逃げる。

年は16。

つい最近討伐部隊に配属された新人。

討伐部隊に配属されただけあって彼自身の強さはそこそこある。

だが、今回の敵は無理だ。

彼1人では倒せない。

一緒に監督をしていた人は腕を持っていかれ、あまりのことに気絶。

それがその人にとっては幸だったのか彼は狙われなくなった。

だが青年が狙われた。

今も地響きがある。

数少ない建物をうまく使いたいところだがあれの前では無意味だ。

建物ごと持っていかれる。

つまり彼が振り切ることができなければ残っている選択肢は…死。

「嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！死にたくない！」

彼自身、血のにじむような努力を経てようやくここまでこぎつけた。

まだ16歳。

死ぬなんて御免何は当然だろう。

音のできる限りたてないよう、建物の屋上を跳ぶようにして行動する。

地面から離れただけでかなり音は聞きづらくなつたはず。

地面の中からは間違いなく。

そう考えながら必死に逃げた。

それを繰り返したこと10分。

音が遠のいていくのが分かった。

そして新しい音も聞こえてきた。

へりの飛ぶ音だ。

異変を感じて応援が来たのだろう。

その音を聞いてあいつが標的を変えたのだ。

へりの乗客には申し訳ないが自分が生き残れる。

今はそれで十分だ。

「ほ、報告を……」

さつきまで音を消そうと電源を消していた通信機。

電源を入れようとしたその時、周りが暗くなり彼はこの世を去った。

---

「ここらへんで間違いないのか？」

「ええ。確かに試験があつたのはこの場所です」

へりに乗りながら下を眺める2人。

しかし、そこは見たこともないほど荒れていた。

地面はえぐれ、建物が倒壊し、大きな長い穴さえもある。

とてもここで試験を行つていたとは思えない。

戦闘にはあまりに不向きだ。

オスにとつても、人間にとつても。

「こんな場所じゃなかったはずです…。建物だつてこんなに倒壊してなかったはずだし、そもそも何ですか、この直径20mはありそうな穴…」

「どうする？降りて確かめるか？」



「…正直怖いですね」

「同感だ。だが、ここにいても何もできないんじゃないか？」

「それはそうなのですが…」

人がいない。

1人も。

下の方には血すら見当たらない。

戦闘があつたのならそこらじゅうが血で塗られてもおかしくはない。

なのに上空から確認できるような血痕は一切見当たらない。

おかしいのだ。

まるでその存在ごと持つていかれたような…。

そんな疑問を持つていると通信機が鳴った。

「こちら第2班。なにか——」

『急いでそこを離れてください！』

大きな声で話さなくても聞こえるのに大声が聞こえる。

正影が指定したリムだ。

「も、もう少しポリリウムを…。それにまだ人、1人見つけていませんよ？」

『見つかるわけじゃないんです！相手はオーロワームです！』

「……え？」

恭二が言っている意味を理解できていないその時、少し離れたところで腹に響くような地響きが鳴る。

地に足をつけているわけではないのでバランスは崩さない。

だがその音がした方向を見たとき、だれもが目丸くした。

先ほどまで建物があったと思われる場所から垂直にオーロワームが跳び出ている。

オーロワームは自分のテリトリーを持つオス。

そう位置づけられてきた。

オーロワームは全長が30〜40m級。

そう言われていた。

オーロワームは全身に目がついている。

それは間違いなかった。

だが全員の目に入ったオーロワームはまるで違った。

自分のテリトリーを抜け出し、長さだけでも50mはかたい。

そして体中につたはずの目が多種多様になっている。

以前あったのは人間の眼球を埋め込んだような感じ。

しかし、今は猫のような目、赤い目、黒一色の目など使い分けるかのように数多くの

目が埋め込まれている。

それを見た誰もが感じた感情。

それは恐怖。

正影でさえも背筋に悪寒が走った。

たった5秒ほど。

しつかりオーロワームが見えていたのはそれくらいの時間だった。

たったそれだけの時間で相手に恐怖を植え付けることができる。

やがて、オスが地面の中に戻っていく。

全員が声も発さずただ黙っていた。

だが、恭二が最初に動く。

「し…、至急撤退を！」

「はー！」

ヘリが急旋回するとき、ようやく正影たちの意識がオーロワームから戻る。

しかし、誰も今恭二たちがしていることに反論する者はいない。

生き残っている人がいるかもしれない？

あんなのがいて自分たちだけで助けられるわけがない。

倒していくべきだ？

いったいどうやって。

お前らはそれでもプロトとロスか？

プロトやロスだからって何でもできると思うなよ。

「…正影さん」

恭二が口を開く。

「倒せると思いますか？」

「…分からない」

あんなのを見た後ではプロデーターなどただの雑魚だ。

ロスの成れの果てだとか何とか言っていたがくだらない。

プロデーターがロスの成れの果てならオーロワームは悪魔の使いとでもいうべきだろう。

存在してはならないはずの生物だ。

穂香が恐怖に怯え近くの美鈴に寄りかかって震えてる。

最も死を間近に感じさせた最大の化け物がパワーアップして目の前に現れたのだ。

無理もないだろう。

「あれは…テリトリリーを決めているんじゃないのか？」

「俺はあれをオーロワームと言っているのかさえ分かりません。俺が司令なら新しく名

前を付けます」

以前の状態のままなら本気を出せば倒せる。

そう思っていたのが一瞬にして崩された。

「ですが、名前を付ける時間も大してないはずです」

「なんで？」

「ここからアルツエまでは約20キロ。あの大きさならおそらくあいつがここをテリトリーの中心にした場合、アルツエも範囲内に入ります」

「つまり…、いつ寝首を掻かれてもおかしくないということか？」

頷く恭二。

全員も黙ってそれを聞く。

自分たちの安全地帯が一瞬にしてなくなってしまう瞬間だった。

「…」

「司令……」

あまりの事態に考えが思いつかず、ただ悩むラグファイート。

こうしている間にも自分たちの足元を蠢いているかもしれないと思うと気味が悪い。

今まではそのうち正影と何人か向かわせれば簡単に仕留められると思っていた。

だが、報告によれば相手の体長は一回り大きくなり、外見も変わったという。

確実に強くなったとみていい。

そしてあの正影さえも恐怖した。

「こんなところで死ぬわけにはいかない」

「その願いはみんな同じです。ですが……」

「手段がないというわけではない。そうだろ？」

「私としてはあれは使いたくありません」

「……そう言っている場合か？」

そう言われると何も言い返せず、黙る青羽。

「それにもととの用途はオーロワームを殺すためだった。何の問題もない」

「ですがあれは半径100キロ圏内に人がいないことを想定して作られています。今発

信機でとらえている場所はここから約30キロです。そんなところで使えば……」

「少なからずこちらにも被害が出る……か」

自分たちで作った兵器のデータを出して苦い顔をするラグフィート。

そこには『対オーロワームE-23』と出ている。

文字通り、オーロワームを殺すためにのみ作られた兵器。

この世界では人間が立ち入ることができる場所が限られている。

そのため資源不足はどこも同じ。

そんな中でも作られた兵器。

この世界では飛行機で空を飛んで違う国へレッツゴーなんて自殺行為である。

しかし、オウシステムにも適応しやすい環境としにくい環境があるらしい。

水中にすむオウシステムは数少ない。

そのためオーロワームが現れてすぐ、船を使った運搬で世界から材料を調達した。

資源が足りないのにもかかわらず世界が協力してくれた理由は単に脅威だからである。  
る。

水に住むオウシステムは少ないといったがいないとは言っていない。

もし進化して水に適応した場合、自国が危険になるのだ。

ほかの国が強い兵器を保有するかもしれない確立と比べてもオウシステムのほうが脅威と判断したのだ。

そうやってこの兵器はできた。

「しかし…、日本というのは本当に面倒ごとが集まる国だな」

「司令の権限があれば異動できたはずでは？」

「本来ならそうしているがな。ようやく活路が見えたのだ、ここで逃げ出すのは性に合わない」

「はあ…？」

「いまいちじつじまが合わない話に首をかしげる青羽。」

しかし、ラグフィートはそれを分かっているながらも説明はしない。

「では私の指示があるまで情報はできる限り漏らさないように」

「はい…」

ここで話を打ち切るということは例の兵器を使うということ。

納得はいかないが権限を握っているのはラグフィートだし、なによりそれ以外に策がない。

青羽は顔には出さないが嫌な思いを抱えながらその場を後にした。



「うまくいったようだな」

「はい。オーロワームが攻め込むのも時間の問題です」

リレグが満足げに報告を聞いていた。

「ここまで作戦通り。」

うまく行き過ぎて怖いほどだ。

「118はどうだ？ 正影の監視を任せていたはずだが」

「それが…先ほどから連絡が取れず。こんな時こそ働いてほしいのですが」

「そうか。まあいい、『イリユミタート』はどうなっている？」

「順調です」

その一言で十分だったのか頷くとキーボードをたたく。

出てきたのは『E-23』。

「どうにか排除できそうですね。この大量殺戮兵器」

「ああ…。私が死んではこの作戦は成功しないからな、私の命を狙えるこいつは厄介だった」

「しかし…使うでしょうか？」

「ラグフィートのことだ。すでに決断しているだろう。彼女は何事も即決できるできた

やつだったからな」

フラテッドにラグフィートのことは分からない。

会ったことないし知っているのは性別と顔くらいだ。

だが、そこに疑問を挟むつもりなどない。

リレグが教えないということは彼には必要のない情報なのだ。

「それでは私はこれで」

「ああ。わざわざすまなかつたな」

頭を下げると部屋を後にするフラテッド。

「高みの見物といこうか」

思わずつぶやいたリレグだった。

## 事實は闇に

「正兄、おはよう」

「ああ……」

朝の食堂。

いつも通りの活気。

いつも通りの食事。

いつも通りの会話。

だが、一部の人にはどこことなく元気がないのがわかった。

「正兄…、元氣ないね。風邪？」

「そんなところだ」

余計な心配をさせまいと嘘をつく。

上からも言うなと言われているのでそれもある。

嬉々はいつも通り隣に座る。

当然の判断だったと思う。

迅速な対応により情報は今のところ漏れているように見えない。

だがそれもいつまで続くかなんて分からない。  
知っている人は数多いはずだ。

正影たち6人他、オペレーターの大半が知っている。  
いつ漏れてもおかしくないだろう。

「穂香ちゃんは？」

「…昨日の試験の疲れが出てまだ部屋で休んでる」

「風邪？2人そろって」

「そういうこともある」

穂香は恐怖の象徴ともいえるべき敵を目の前にしてまいってしまった。

自分が未熟だったころとはいえ、本当に正影と死を覚悟したこともある敵。

穂香にとって正影は簡単に言えば正義のヒーロー。

つまり何でもできる最強な味方。

それにさえ恐怖を感じさせる相手だ。

最近は一人でベッドに入って眠っていたのに昨日は正影のベッドに何も言わず入ってきた。

震えているのがよくわかった。

「B定食朝食バージョンおまちどうさま」

美嘉が嬉々がカードを読み込ませてから1分。早い段階で頼んだ物を持つてくる。

美嘉が来ると正影はつい反応してしまう。

だが、今回は穂香が好きな美嘉に対してではない。

このアルツエの中で一番の情報屋である美嘉に対してだ。

たいてい美嘉の持っている情報はどうでもいいものが多い。

アルツエ内の女子のスリーサイズ。

男子も女子も含めた好きな人。

後はまあ、給料制の職員それぞれの給料だったり人それぞれの恥ずかしい経歴だった

り。

だが持つてくる情報の中にはたまに「それは知ってたらやばいだろう」という情報も

あつたりする。

上層部のみが知るパスワード。

秘密裏に運搬している物資。

黒い部分も知っている。

「…あの、正影さん。私の顔に何かついてますか?」

「ん?…ああ、すまない」

「正影さんが私に謝った……」

ちよつとした驚きを覚えながら美嘉が震える。

この様子からすればおそらく知らないのだろう。

もし知っていればこんなことでもよく思うはずだ。

さすがに昨日のことを知ることはできないかとホツとする。

無駄な緊張で乾いた喉をいやそうと水を飲もうとする。

しかし、やはり情報屋だった。

「そういえば正影さん、昨日から上の人たちが騒がしいんだけど……何か知らない？」

思わず口に運ぼうとしていたコップが止まる。

しかし、それは一瞬。

気づかれまいと平常運転を装う。

「俺は昨日昇格試験の監督をしていたんだぞ？しかもそのあとすぐに救援要請に応じた。上のことなんて知るわけないだろ」

「でも知ってるわ。その応援要請は同じ昇格試験の第3班からでしょ？そして全滅してた」

「……そうだ」

「でも入ってきたのはそれだけ。その人たちの遺体が運ばれてないどころか、現場だつ

て今は立ち入り禁止。おかしいと思う」

…確かにそれだけ情報があればおかしいと思うだろう。

だが、今美嘉が言った簡単な情報さえ規制されているはずなのになぜ美嘉は知っているのか？

「…そう言われてもな」

「正影さん、見たんでしょ？」

「凄惨な現場だったよ。血の海とでもいうべきものができてた。遺体がないのは食われたからだろう」

「全員死んでたの？」

「遺体はなかったからな。そこまでは分からない」

「血以外何もなかったの？」

「…ああ」

オウステムは人を食べる。

それは襲われないうり襲ってこないミークでさえ、人を食べる。

だから正影はこの言い訳で通用すると思った。

これ以上話したくないし思い出したくもない。

そう思い、朝食を残し立ち上がる。

「美嘉、悪いが片づけといてもらえるか」

「まだ残ってるけど…」

「今日は気分がすぐれなくてな。悪いな」

誰にでも分かるような作り笑顔をしてその場を去る。

残った嬉々と美嘉。

嬉々は特に異変を感じていた。

正影は人だ。

人は笑う。

でもあそこまであからさまに笑顔を出されると作っているのは明白なのだ。

「嬉々は何があつたと思う？」

「…分からない。ただ恐ろしいことがあつたんじやないかっていうことぐらいしか」

「おそらく死体がないのは食べられたからで間違いないと思う。おそらく敵があれなのかしら？何もなかったなんてありえないこと言つて」

「アルマ《支給武器》がなきやおかしいなんて正兄は知らないよ。正兄の前で死んだプロトはいないんだから」

今の時代では当たり前のように渡される武器。

それがアルマ。



プロトに自分専用の武器を生成する力はないのでアルツェが支給しているのだ。昔はなかった代物。

特徴としてはロスの武器には劣るがオウステムのアクリス細胞に最も有効な成分が含まれているらしい。

そんなオウステムにとって危険なものをオウステムは食べるだろうか？

否、オウステムはそれは食わずに吐き出す。

つまり現場には残っていないければおかしいのだ。

案外わかりそうなことだが見落としがちなこれ。

正影はこの時代に来て目の前で人が殺されたことがない。

だから知らないのだ。

「正兄ならすぐに気づくと思っただけど…、よほど憔悴してるみたい」

「正影さん、プロディター相手に余裕かましてたんだよね？それ以上の敵ってことかな

…」

「あれより上があるの？」

「少し考えにくい話だけど。…ああ、もうなんかモヤモヤする！」

いくら考えても出ない答えに美嘉が頭を搔く。

出るはずがないのだ。

常識だったことが変わってしまったのだから。

「リムなら知ってるはずよね？」

「美嘉、忘れたの？ オペレーターは昨日から全員モニタールームで缶詰め状態よ」

「ぐぬぬぬ…」

だんだん手が潰されていく美嘉。

残っているのは上の情報へのアクセス。

入っているとは限らないし、危険な綱渡りでもある。

でも諦められない。

なぜなら私は情報屋だから！

「思考駄々漏れよ」

「…失礼」

「美嘉あーなにサボってんだ！ 給料減らすぞ!？」

少し離れたところからがたいのいい男が美嘉を呼ぶ。

彼女は今仕事なのだ。

「親父さん、それ困りますよ！ じゃ、嬉々また後で」

そう言う美嘉の返事も待たずにさっさとその場を後にする。

嬉々もそのことに関しては何も思わず食事をとる。

「正兄…、心配だなあ」

美嘉と話したことを思い出す。

彼女の推測は案外あたるものだが、今回は推測すらなかった。

これは違う、という消去だけ。

何か予想外のことが起こっているのかと口にご飯を含みながら考える。

何か調べようにも嬉々にその手段は分らない。

できるのはせいぜい聞き込みぐらいだろう。

「美嘉ってすごいわよね。なんか上の人しか持つていないはずのパスワード持つてるし。まあその分、危険にもさらされてるけど」

さつきも上にアクセスするとか言ってた。

危険って自覚はあるみたいだけど…、時間が経てばいつかは知ることができるとは思えない。危険はあるみたいだけど…、時間が経てばいつかは知ることができるとは思えない。

まあ、後でも言ってたし早く知ることには文句なんてないし…  
ん？

「…後でつてまさか私も一緒に調べるってことじゃないわよね？」

しかし、その考えが当たってしまうということを嬉々は5時間もしないうちに知ることになる。

ラグフィートの指令室に集められた6人。

正影、明季、恭二、鈴、美姫、穂香。

おそらくこのアルツエ内で、最強のメンバーといつてもいいだろう。

正影が朝食を終え帰るとすぐに明季に呼び出された。

このメンバーを見る限り話す内容は決まっている。

「こんな朝早くから済まない。だが、集められた理由は大方察することができるはずだ」

「オーロワームの件ですね？」

「そうだ」

いつになく真剣な顔をするラグフィート。

アイコンタクトで青羽に合図する。

「現在オーロワームはこのアルツエを離れるようにして進行中。距離は約15キロ。3班が全滅した後は静かに移動しています。君たち6人にはこれの討伐をお願いしたい。」

なお、私たちはオーロワームを以後「オクオロス」に名称を変更する」

「…勝算は？」

「あります。君たちの働きぶりによるけど」

そう言うが青羽はあまり気のりしていないのか顔は暗い。

「E-23の使用ですか？」

明季が知っているらしく何か武器の名前のような名称を言う。

青羽は黙ってうなずいた。

「何ですか、それ？」

「私は初めて聞きましたわ」

「E-23、対オーロワーム専用とされている大量殺戮兵器よ」

今はオクオロスって言うみたいだけど、と付け加える。

それを聞いて目をぱちくりさせる2人。

対オクオロスならば大量殺戮兵器と言うのはおかしくないだろうか？

「この兵器には対オウステムになる材料が一切使われてないの。これが作られたのが支給武器《アルマ》が実用化され始めたころ。だからそっちに充てるほど資源に余裕がなくて代わりにあるものを使った」

「あるもの？」

「核兵器なの、E-23は」

それを聞いてより一層落ち込みを見せる青羽。

「まあ、作ったつていうよりはほとんど完成形で運ばれたらしいわ。いくらオウステムでも核兵器をもろで受ければ耐えられないわ」

「…そこまでは情報を流した覚えがないぞ」

「これは私が独自に仕入れた情報です」

青羽が顔を上げ話を続ける。

「これを直接相手の口の中に放り込みます。後は全員の避難が終わり次第、爆発させます。これをして生きているのはプロデューターぐらいのはずです」

「…なあ、俺は核についてよく知らないんだがあれだろ？放射能とかいうのが残るとか何とか」

「ええ。しかもこれは半径100キロ圏内に人がいないことを想定して作られたわ」

「青羽、オクオロスほどのあたりを徘徊しているんだ？」

「…離れてても80キロ、近いときは10キロ圏内」

そんなところでこれを使えばどうなるかなんて誰にでもわかる。

破滅だ。

「そんな近くで使う気か？」

「でも、これ以外に手はないの」

「本末転倒だ。敵を倒しても俺たちがここに住めなくなる」

「ならお前は腕だけであいつを殺れるのか？」

黙っていたラグフィートが口を開く。

「このまま黙ってても私たちは死ぬ。なら打って出るべきだ」

「ふざけるな。最悪10キロ圏内で使いかねないんだろ？穂香のような子供にもそうだが俺たちだってどんな症状が現れるかわかったもんじゃやない」

「なら他の作戦を教えてください。もちろん勝算のあるものをだ」

「…これだけの精鋭がそろった。6人でやればもしかすれば……」

「申し訳ないが今回は明季たちは戦力にならない可能性がある」

「なに？」

明季を見るとすでに悟っているかのようにまっすぐな目を正影に向けている。

恭二や鈴は黙ってうつむく。

「今回の3班の件で異様な点があった」

「オクオロスだとわかれば大きな穴も納得いく」

「アルマが1つも残っていない」

「アルマ？」

「プロトに支給している武器のことだ。対オウステム仕様になってる。仮に作戦で人が死んだとする。そのとき人は食べられる。だがアルマはオウステムにとつて害以外の何物でもない。だから誤って飲み込んだものは吐き出すのだ。絶対に食べない」

「…つまりオクオロスはプロトの武器に耐性があるか？」

「そうだ、だからこの作戦の要はお前になる」

「またもに戦えるものがプロトにはいない。」

「となると必然的にロスが必要となってくる。」

「ロスの出す武器とアルマは全然違うようだ。」

「穂香は遠距離専門。」

「まあ、オクオロス相手に穂香を真正面に立たせるなんて正影は死んでも反対だが。」

「…俺はやらない」

「死ぬぞ、全員」

「E-23を使えばそれも同じだ」

「ならお前ひとりで倒せるのか？あいつが」

「正影だって分かっている。」

「これが一番間違いないって。」

「でも納得いくはずがない。」



「…司令」

明季が口を開く。

「私も正直その作戦にはあまり賛同できません」

「おまえもか」

「理由が違います。あれは私たちにとって力の象徴です。違いますか？」

「…」

「もしあれを失ったことが知れ、オクオロス撃破の情報も流れれば放射能云々とか言いながら近寄ってくる輩が出ます。もしそうなれば正影のことも知られるはずです」

これには少し納得がいったのかラグフィートが黙って聞く。

「理由は存じませんが司令はロスを隠したいようですし…。目立った行動は避けるべきかと」

「ならどうする?」

「…案はあります。確証はありませんしおそらく司令たちが言っている作戦より難しくなると思いますが」

「言ってみろ」

「青羽さん、核兵器の大きさとどれくらいですか?」

「オクオロスの口に入るように直径30cm前後の球体になっているけど」

「…なら可能だと思います。後は正影の技量が問題ですが」

「…なによこれ」

嬉々が思わず眩く。

目の前の画面に映ったのは何枚かの画像。

それは昨日3班が全滅した場所の写真。

そこに映っていたのは大きな穴。

血なんてどこにも見当たらない。

「…美嘉」

「分かっているわ。これは本当に知らないほうが身のためになる情報だったかもしれないわね」

いろいろと文がつづられており嬉々は読む気が失せた。

しかし、その中で色が変わっている部分のみが目に入る。

オクオロスだ。

「…オクオロスって何かしら？」

「待ってて、今文を読んでいるから。頭はこれ以上目を通すなって言ってるけど」  
下に画面を移動させていく。

すると新たに1枚の写真が映し出されていた。

それは誰もが知る敵、「オーロワーム」。

なんでこんなものがと疑問を持つ前にさらい1枚ある写真に気づく。

美嘉が画面をスクロールする。

すると出てきたのはやけにうまく描かれたオーロワームに酷似した謎の生物。

オーロワームと比べてでかいし目が多種多様だ。

絵だけでも化け物だというのが分かる。

「美嘉、どうだった？」

「…」

「美嘉？」

美嘉の顔から血の気が引いていつているのがわかる。

「ど、どうしたの!？」

「…嬉々、落ち着いて聞いてね」

「なによ、急に」

「私たち、知っちゃいけないことを知っちゃったみたい……」

「え？」

「このアルツェに、いつオーロワームが攻めてきても……おかしくないそうよ」  
嬉々も美嘉もしばらくの間言葉が出なかった。

そして理解した。

この気味の悪い絵はオーロワームが進化したものだ。

いつ自分たちが死んでもおかしくない、ここは安息の地ではない。

## 待つ人、行く人

「…本当にそれで影響はなくなるのか？」

「完璧にじゃないわ。でも80キロも離れてればまずここまで被害は来ることはない。それは確かよ」

「…」

「で、どうする？これはあなたの技量にすべてがかかっている。最悪あなたでも死んでしまうのだけど？」

「…構わない。それで穂香と嬉々が助かるのなら」

「分かったわ。じゃ、司令に言ってくる」

明季が部屋を出て、正影が1人部屋の中に残る。

明季が作戦を提示してから集まりはすぐに解散された。

理由は明季の提示した作戦は正直、ラグフィートでもあまり納得のいかないものだったからだ。

ラグフィートの耳元で話した作戦内容は他の人にはわからない。

そのあとラグフィートは「考える時間をくれ」と言っつて、その集まりを解散した。

考えるということは、それなりに筋の通った作戦ではあるのだろう。何を提示したのか聞きに行こうとしたところ、明季から逆に呼び出された。それを聞いて納得した。

確かに自分が死にかねないラグフィートにとっては嫌な作戦だ。

確実性のあるラグフィート自身が提示した作戦の方がいいと彼女は思っているに違いない。

だが、それでは正影は動いてくれない。

動いてくれないければロス确保以前に死んでしまう。

「…」

命を奪われるというのは常に覚悟ができないものだと思っていた。

自分のことだ。

戦場で無理に強い敵と、或は何かしらの不測の事態に遭って死ぬのではと思っ  
た。

実際、オーロワームと遭遇した時もそうだった。

だが、こうして決まったわけではないが死ぬ覚悟ができる。

ある意味幸せ者かもしれないと思った。

本当に生き続けたいと思っっている人から見れば酷い話以外の何物でもない。

でも、正影が生きている理由は穂香と嬉々にある。

2人が守れるのなら生き死になど大した問題ではない。

でも、会えなくなるのは少しつらい。

正影は部屋に戻り始めた。

「パパ、おかえり」

「ああ、ただい——」

部屋に戻ってきた正影。

部屋には穂香しかいないと思っていた（青羽がいてもおかしくはないが）。

しかし、嬉々がいた。

顔はどこか暗い。

「嬉々、穂香と俺は風邪気味だと——」

「オクオロス」

出てきた単語に思わずたじろぐ。

知らないはずの単語だ。

穂香の方を見るが彼女が言うとは思えない。

「穂香ちゃんじゃないよ、美嘉と一緒に調べたの」

「…そうか」

釘をさしておくべきだつと後悔する。

「美嘉は？」

「いつも通り、食堂でバイトしてる。最初こそ青ざめてたけど今ではいつも通りだった」

さすが情報屋とでもいうべきだろう。

シヨッキンクな情報には慣れっこということだ。

ここまでシヨッキンクなものが今までであったのかは不明だが。

「ねえ正兄」

「なんだ？」

「また、いなくなったりしないよね？」

「…なんでそう思う？」

「オクオロスは強いって書いてあった、オーロワームより。となると戦える人は必然的に限られてくる。正兄は戦うんでしょ？」



「俺があいつに負けると思うのか？2度目だ、あいつと戦うことなるのは。多少、強くなっているのかもしれないが、今は穂香とメディアツールで繋がっているし穂香も強くなってる。本気を出せば——」

「知らないとも思ってるの!？」

突然声を荒らげた。

「私は…、私の友達には情報屋がいるんだよ？」

「…」

「E-23の存在くらい知ってる。オーロワームの体内で爆発させるって、最低100キログラムに何もないとところで使うのを想定してるって書いてあった」

「それは放射能とかいう後で出る——」

「またいなくなるの？」

反論できなくなるかもしれない問いにすぐには答えられなかった。

「10年間、寂しかった。もうあんな思いしたくない」

「帰ってくる」

「前もそう言って10年、帰ってこなかった」

「信用ならないか？」

「そういうわけじゃないよ。でも…、正兄は待っている人の気持ちを考えてことはある

？」

あるはずがない。

常に戦ってきた。

そんな人が待つなんてことがあるはずがない。

「怖いんだよ、常に。正兄は強い、それは知ってる。でもそんなのは関係ない。正兄が戦場に出た時点でどれだけ小さくても死ぬ可能性がある。そして今回は進化したオス、E—23、10年間の空白、これだけそろってても怖いとおもっておかしい？」

目の周りを真っ赤にして涙を抑えている嬉々。

「私は、私は……！」

「嬉々」

嬉々を抱きしめる。

「大丈夫だ、俺は死なない」

これくらいしか思いつかない。

人のぬくもりは落ち着く。

「作戦には出る。だけど死なない」

「…本当？」

「穂香もお前もいる。ここにくたばるわけにはいかないだろ」

言っではいるが変わらない。

自分を犠牲にして2人の命が助かるのなら問題ないというのは。

「お前も16だ。もう泣くな」

「絶対に帰ってきてくれる？」

「それでお前が笑顔を見せてくれるのなら」

「…分かった」

言葉で相手を安心させるのは簡単だ。

口だけなんていくらでもできるのだから。

悪いとは思いながらもこれしか言えなかった。

嬉々が涙をぬぐう。

そして笑った。

「お前は笑顔が一番だ」

「…うん！」

「パパが妹を口説いてる…」

「最初から最後まで見ていたはずなのにどうしてそう——」

「ワアオ」

入口の方から声がした。

しまっていたはずのドアが開いていた。

いたのは明季と例の三姉妹。

エニスが口に手を当て驚いている。

「ここ、これが近親相へばっ!？」

「ま、正影さんがそんなことするわけないでしょ! (震え声)」

「私はこの展開、嫌いじゃない…!」

「絶賛誤解され中みたいだな」

「大丈夫よ、司令はそういうのには寛大だから」

「エスパ、お前ならどうしてこうなってるのか読み取れるだろ」

その言葉を見無視しながら部屋へ入る明季。

嬉々顔は顔を赤くして離れてしまった。

申し訳ないことをしたなと頭を掻く。

「正影、作戦の決行日が決まったわ」

「…思った以上に早いな」

「ええ、司令の方でもいろいろあったみたいよ。決行は明日」

「それも急だな」

「覚悟をさせないためじゃないかしら?」

明季は見透かしている。

正影は身を投げてでも止める気だと。

だが、ラグフィットとしてはそれは許せない。

絶対に生かして帰りたい。

そのために、1日という猶予すら与えるつもりがないらしい。

「だけど……美嘉には困ったものね」

「それは……!」

「安心しなさい。あいつには私もたまに世話になつてゐる、今回のことは黙認しましょう」

「1週間ぐらい、懲罰房にぶち込めばいいのに」

「過保護な保護者は黙ってなさい——」

「ただいまー」

そこへ青羽が帰つてき……入り込んできた。

部屋の女子率が高すぎる。

いや、人口密度が高すぎる。

「帰れ」

「えっ?なにその反応?!」

「あ、正影の部屋に同棲しているビッチな青羽さん」

「職権濫用うらやましな」

「泥棒猫……！」

「あんたたち本当に懲罰房に入れるわよ？」

その言葉を見無視して3人が青羽の前に立つ。

自分たちの体と見比べる。

胸、青羽の勝ち。

ウエスト、青羽の勝ち。

ヒップ、青羽の勝ち。

総合評価、青羽の勝ち。

顔は人それぞれだからあえて比べなかったが全体的に青羽の勝ち。

3人が青羽を睨みつける。

「な、なんか理不尽な恨みがかつてる……？」

「うう……、なんか1つも勝ててないような気がする」

「右に同じく」

「右に同じく……！」

さつきまでそこそこシリアスな雰囲気だったのに何をやってるんだと苦笑する正影。

まあ、嫌いな空気じゃない。

和やかなのだ。

なんか勝ち負けがあるらしいがそれでも和やか。

この日常は好きだ。

嬉々だって穂香だって笑ってられるこの雰囲気。

「正影さん」

「なんだ？」

「私たち3人と寝れるのと青羽ビッチと寝れるのどっちがいい？」

「…選択肢はそれしかないのか」

「もはや私たちですら不満…？」

「なら私も混ぜてもらおうかしら」

「「フア!」」

予想もしない場所からの砲撃に思わず変な声が出る。

明季が微笑を浮かべながら壁にもたれかかっている。

「い、今のは明季さん？」

「ええ、面白そうだから入って見たわ」

「…正影さん！」

「……………明季だな」

「「ゴフア!?!」」

3人が床に倒れる。

3対1で負けた。

「あら、嬉しい」

「絶対そう思つてないだろ」

「そうね、一番何事もなく寝れそうだからなんて理由じゃちよつとアレね」

倒れていたエニスがすくつと立ち上がる。

「正影さん!なんでそこまで女性に興味ないの!?!」

「興味がないわけじゃない、ただお前らはタイプじゃない」

「これだけ、女子が、豊富な、アルツエは他にないよ!?!どれだけ理想が高いの!?!」

「仕方ないよエニス、正兄は昔からこうだったから」

「おかしいわよ!1人もなかったの!?!そういう話」

「私は聞いて覚え——」

「隊長!」

突然恭二が部屋の前で叫ぶ。

いつの間に来たのかと驚くがそれ以上に部屋が開けっ放しだった。

叫んだ恭二は部屋の前で少し立ち止まる。



本来ならすぐに話したいところだか女子率の高さに少したじろいだ。だがすぐに部屋に入る。

「…それだけ焦るってことはそれなりのことかしら？ オクオロスが攻めてきた？」

「いいえ、むしろ朗報です」

「へえ？」

「行方不明になっていた、凧が生還しました」

ピタリと行動を止める明季。

この答えは予想できなかつたらしく珍しく驚いている。

第三班の中で監督の役をあずかった凧。

死体は見つかっていなかったが、誰も助かかっていないだろうと考え搜索はしなかった。

「腕が片方なくなっていましたでしたが命に別状はないそうです」

「腕1つで済んだのね。随分と運がいいわ、正影」

「分かってる」

阿吽の呼吸のごとく、正影が動く。

明季たちが部屋を後にする中、正影もわずかばかりの準備をする。

「正兄…？」

「安心しろ、別にもう行くわけじゃない。生還者からの情報を聞きに行くだけだ。すぐ戻る、それまで好きにしてろ」

「うん…」

準備を済ませ、急いで明季たちの後を追う。

しかし、部屋を出る前に

「…青羽、お前はさっさと風呂に入れ」

「君が帰るまで待つてるよ♪」

「鼻は敏感な方なんだ。分かったな」

それを言い残し出ていく。

しばらく止まる青羽。

自分の腕のにおいをかいでみる、が自分の体臭など分かるはずもない。

丸一日、同じ部屋でたくさんの人と仕事したが涼しい環境だったので汗をかくこともなかった。

だから1日くらいならと思っていたのだが、これはショックだった。

「そんなに…臭い？」

全員が首をかしげながら「さあ…？」と言った。

恭二と明季が早歩きで廊下を歩いている。

正影はすぐに追いつくだろう。

「…恭二」

「なんですか？」

不意に明季が口を開く。

「やっぱりあの子を使わせてもらおうわ」

「…大丈夫なのですか？」

「データはそう言ってる。あとは神のみぞ知るってやつね」

「俺は構わないのですが…正影がなんと言うか」

「知らせないわ」

答えに少し驚く。

いや、分かっていた。

こころなるのは。

「正影だけでうまくいけばこんなことしなくてもいいんだけど……」

「ですが、あれだけでオクオロスと渡り合えるようになるでしょうか？」

「なるわ。何せあの子は——」

しゃべろうとして近くに足音を感じた。

走っているのだから正影とみて間違いない。

明季はそこで話を打ち切った。

## 糸口

「準備はできているか？」

「いつでも問題ありません」

リレグの問いにフラテッドが答える。

隣では黙った状態で和人もいる。

「これほどのチャンスもなかなかないはずだ。何としてもロスを捕らえてこい」

「はい」

それだけ聞くとリレグはその場を後にした。

---

病室。

窓はあるが外の光景は決していいものではない。

そんな病室に風は寝ていた。

「申し訳ないです。負けたにもかかわらず、生き長らえるなんて」

「貴方に問題はなかったわ。責めることなんてない」

「未来ある若造が死にました」

「貴方だってまだ19よ。その若造に入ると思うのだけど？」

「こんな悲観的な人を残すよりなら希望ある者を残すべきです」

自嘲気味に話した。

明季と恭二、正影が来ている。

残念ながらお見舞いなんてものではない。

「ならその残された希望ある者を残すためにも貴方の力を貸してちょうだい」

「…そうですね」

左腕のあつた部分を右手で撫でる。

この状態では戦うのは辛いだろう。

腕一本なくなっただけで戦闘力は大きく減少する。

それを分かっているのか少し悲しげな顔をしていた風が話し出す。

「1つ、弱点らしきものができていた」

「それは？」

「響閃爆弾《フラッシュバン》」

「…？」

正影は聞いたことのない武器の名前に「？」を浮かべる。

「閃光爆弾《スタングレネード》の改良版みたいなものよ」

明季が正影の疑問を感じ取ったのか答える。

「光で目をくramsすだけじゃなく、耳も潰すの」

「オーロワームには効かなかったのか？」

「試したけど、目は潰せたけど耳は一切効いてなかったわ。今回はその点はどういうわけか退化してるみたいね」

正影は単体で十分な強さを誇る。

支給される手榴弾などは使わないのだ。

だからこういう武器には疎い。

「腕があいつの牙に引つかかってね、しばらく口の真ん前でぶらぶらしてたんです。それしたら幸運にも…いや、不幸にも響閃爆弾の栓がとれちゃいまして…。それを極端に嫌がっていました。まあ、その時振り回されて左腕と別れてしまったんですけど」

「どのくらいの間反応してたのかしら？」

「…10秒程度です。そのあとの後遺症はどのくらいかはわかりませんが」

「後遺症？」

「腕を持って行かれたんです。黙ってなんていられませんでした。途中で意識が途切れましたけどしばらくのたうち回っていた、にもかかわらずあいつは戻ってきませんでした」

確かにそれなら生きているのも納得がいく。

根こそぎ食い尽くすはずのオーロワーム。

それはオクオロスになったとしても変わらないだろう。

それでも逃がしてしまったのは単に察知できなかつたから。

「意識はどのくらいあつたか覚えてる？」

「…30秒持たなかつたと思います。確実ではありませんが」

「それなら合点はいくかもしれないわね。他には？」

少し黙って考えたが風思い当たる節はなかつた。

首を横に振り「すみません」と言う。

「ありがたい情報ではあるけれど…足りないわね」

「…支給武器《アルマ》は有効でしたか？」

おもむろに恭二が口を開く。

「斬りつけることはできた。けど、食べられたな」



「外からは有効なの？」

「そういうことだと思えます。中はおそらく効かないと思えますが」

「…なら私たちも戦えるかもしれないわね」

そう言いながら正影と恭二を見る。

どちらとも聞きたいことは特にないらしく、首を横に振った。

明季はそれを確認すると一回だけ頭を下げ、その場を後にした。

恭二も黙ってついていき、凧と正影の2人だけになる。

薄情だなと思うところだが、戦える人が増えるというのは戦闘を進める上で手を増や

すことができるチャンスだ。

一刻も早く、作戦を練り直すべきだと思ったのだろう。

それでも挨拶する時間ぐらいあるとは思うのだが。

「久しぶりの顔合わせだというのに見苦しい姿でしたね、すみません」

「いや、生きて帰ってこれたんだ。まずはそれを喜べ」

「…素直には喜び難いですけどね、職も失ったようなものですし」

確かに、腕を一本失ったというのは辛いものがあるだろう。

彼の戦闘復帰はもともとの戦闘力が高くない限り難しい。

監督をやっていたのだからそれなりではあるのだろうが正影は凧が戦っているところ

ろを見たことがない。

「…正影さん、オクオロス？でしたか。それに討伐作戦に参加するんですよね？」

「そうだな」

「かたき討ち、お願いします」

上半身だけとはいえ、頭を下げる。

正影に断る理由なんてない。

「あくまでついでになるがな。任せろ」

なんのついでなのかぐらい風にも分かった。

「さすがロリコン」と思いながら思わず吹いた。

正影はそれを気にせず立ち上がる。

彼とて時間があるわけではない。

明日が決戦の時なのだ。

「じゃ、俺もこれで」

迷わない足取りで出口に向かう。

病室を出る直前、風に言われた。

「正影さん、死を覚悟しないで下さいよ？」

「…」

何も答えることがないまま、正影はその病室を離れていった。

「まったく、このアルツエは面倒ごとが多いな」

「そんなこと言つてないでこれ手伝つてよ」

「はいはい、上官殿よ」

「よしよし」

満足気に穂香が頷く。

面倒だと言つたのはリリイだ。

穂香はよくリリイにかまっている。

理由としてあげられるのは後輩ができたと思つているからだ。

他にも2、3人いるのだが、昇格試験の時に話せたこともあり、リリイのみ話すことがあるようになった。

皮肉は言うし、民間人の命なんてどうでもいいと思つている人なので正影や嬉々はあ

まり好きではないのだが子供だからということもあるのだろう。

穂香はどういうわけかお気に入りの後輩として接している。

リリイは思う。

この子は本当にロスのメディアツールなのかと。

未だにロスが存在するなんて信じがたい話だが目の前で見せつけられた以上、疑う余地などどこにもない。

だが、こんな子供をメディアツールに選ぶなど何を考えているのかわからない問いのが率直な感想だった。

「リリイ、穂香。あとのくくらいで運搬終わりそう？」

上の階から真理奈が話しかける。

両手にはプロトでも無理であろう量の荷物が高く積み上げられている。

それを涼しい顔で運んでいるもんだから大したものである。

「まだかかると思う。真理奈さんはまだ終わらないの？」

「1人だと大変だったけどこれで最後よ。終わったらそっち行くからもうちよつと待つてて」

そう言うとき軽い足取りでその場を後にする真理奈。

「ほらリリイも負けないで！せつせと働いていればもう終わるころなんだよ？」

「人手が足りてないなら使えない民間人でも動員すればいいだろうに」  
「大人の事情って言ってたよ？」

「…そうだな。お子様には分からないことだろうし」

「こらー、私先輩だよ！敬語とか使つてよ」

ピョンピョンと跳ねながら講義するがリリイから見れば周りを飛ぶハエに過ぎない。

少しは面倒であるが無視はできるレベルなのだ。

面倒なのに気に入られたなとため息をつく。

「そんなことやってるから遅くなるんですよ、上官殿」

「あつ、敬語使った！その調子だよ、後輩君」

「ケツ」

これならまだ表向きに「お前嫌い」オーラを出してもらったほうが接しやすい。

いや、接さなくてすむから楽だ。

資料を指定された場所に運ぶ。

あと4、5往復もすれば終わるだろうが、距離が長い。

その間にも穂香は「好きな食べ物は？」とか「どんな武器使ってるの？」などと話しかけてくる。

分らない。

「…なんでお前、そんなに話しかけてくるんだ？」

「だって後輩だよ？先輩は後輩をいじるのが楽しいの——」

「そうじゃない。俺はあからさまに嫌がつてるつもりなんだけどな」

「そうなの？でもいいよ、楽しいもん」

即答された答えに眉を顰める。

お前嫌いと言っている奴相手に話して楽しい？

「お前の経歴はあらかた聞いている。それを聞く限りは俺みたいなメリットデメリットを人の命にまで反映する奴は嫌いだと思うが？」

「…確かにリリイの直すべき点はそこだと思うよ。なら私がそれを直させればいい、そう思ったただけだよ。それに初めての後輩。山あり谷ありは当然！」

「…やっぱりわけわからねえ」

頭を搔きながら慣れないこの感じに対応しようとはする。

「ねえリリイ。肩車してよ」

「嫌だ」

「先輩命令！」

「職権乱用」

「いいじゃん！やってくれる人、パパと美嘉さん以外いないんだよ」

「重いからか」

「疲れるから!」

資材が置いてあるところまで戻ってきたので再び持ち上げる。面倒くさいとは思いつつも運ぶ。

「リリイって女の子みたいな名前なのにデリカシーないの?」

「名前で人は決まらねえよ。覚えとけ、餓鬼」

「だから、私は貴方の先——」

「穂香、ちよつといいかしら?」

運んでいると明季がいつの間にかいた。

少し驚きながらも穂香は動じない。

「明季さん、どうしたの?」

「貴方に用があるの。来てもらえるかしら?」

「パパが関係あるの?」

「大いにね」

「分かった」と言つてすぐにでもついていきたいところだが仕事がある。

え〜と……と悩んだが、特にいい案は浮かばない。

ゴトンと、資材を置きリリイに任せることにした。

「悪いわねリリイ。仕事の人手がただでさえ少ないのに」

「いいえ、問題ありません。力持ちも終わり次第来るとのことですし」

「助かるわ。穂香、行くわよ」

「はい」

2人がその場を離れていく。

リリイも仕事を終わらせようと資材を運び始める。

それと同時に穂香が大声を出して言った。

「次は私にも敬語使つてよー?」

どうせ使う機会なんてなくなるに決まってると思いつつながらそれを聞き流した。

どうせ正影は死ぬ。

そう思っている。

作戦内容は聞いてないがどうせ自殺願望があるキチガイしか参加できないようなものだと分かっている。

現にリリイが運んだ資材はどういうものかは知らないが外に運ばれているようだ。

いつオクオロスに気づかれてもおかしくないというのに。

ここの人間は意味が分からないと幾度となく思った。

自分が助かるために動く、それならわかる。



だがこれでは自分は死に行っているようなものでしかない。  
リリイは資材を置きながら思う。

自分が手伝っているのも死ぬ可能性が極めて低いから。

外に行つてこいなんて言われたらそれを命令した上司を蹴り飛ばしている。

穂香がいなくなったので仕事が増えたな、と面倒に思いながらも資材を運びに戻ろうとする。

「お疲れ様」

後ろに資材を運んでいる真理奈がいた。

その手にはいつ見てもおかしいと思えるほどの量の資材が乗っかっている。

「これで全部よ」

「…ありがとうございます」

ズシン…と音を鳴らしながら資材を置く。

「ふう」と言いながら手を払うその姿は全然疲れていなかった。

オペレーターより現場の方が向いているなど勝手に思う。

「…ねえ、リリイ。なんであなたはそんなに悲観的ななの？」

「突然ですね。…まあ、言うなればそうすることが生きることにつながるからです」

「でも、あそこまで表に出すことないんじゃない？人との関係も大切だと思うけど？」

「本当の自分を知らずについてきた人間なんていずれソリが合わなくなりす。それから最初から共感できる人間といるべきです」

「…否定はしきれないけど」

口に手を当て少し考える真理奈。

その間にもリリイは仕事を終えたので部屋に戻ろうとする。

「それで人生楽しい?」

真理奈が思っていたことだった。

リリイという存在を見た時から。

リリイも足を止める。

「死ぬのが怖い、じゃダメですか?」

「人生楽しくなきや損だと思おうわ」

「…満喫してますよ、ある程度は」

「もし、楽しく過ごしたいって思うなら穂香ちゃんと接してみてよ。もうしばらく」

「なんであんな餓鬼と?」

「子供の力ってやつよ」

「それじゃ」とそれだけ言うと一方的に話を切り、反対方向にいなくなってしまった。

別にリリイもそれを止めることはなかった。

さつきと帰って寝たかった。

だが、真理奈の最後の言葉が頭の中に残った。

さつき、穂香と話をしていた時面倒だとは思っていたがどこか嫌な感じはしなかった  
…のかもしれない。

「何を考えているんだ俺は」と、頭を搔く。

ただの戯言だと言いつ聞かせる。

どうせそれを確認できる機会も二度とないと。

さつき敬語を使う機会がなくなると思った理由は、正影が死ねばあいつはおそらくあの  
感じを保つてられないだろうと思つたからだ。

だがさつきの今ではあるが、それは変わった。

正影以外でもおそろく落ち込むだろう。

知り合いが多く死ぬに決まっている。

だが、そのおかげで俺はおそらく生き残れる。

今、このアルツェは全神経をオクオロスに向けている。

それが故に死人が出るのだろうと思う。

死ぬ可能性を少しでも潰したいリリイだからこそ考え付いたことだ。

「…チツ」

思わず舌を打った。

自分らしくないと思っただからだ。

早足で自分の部屋に戻る。

そして机の引き出しから携帯（通信機）を取り出す。

アルツェ内での通信は禁止されていた。

遠くの人と連絡を取るなら本来は部屋の端末を使うしかない。

なのに通信機を持っていた。

「……おう、俺だ。頼みたいことがある」

# 最凶く外く 始まりの前

音がする。

へりの音。

扉は締まっているが完璧には防音にしきれない。

「よかつたんですか？」

同乗している恭二が尋ねてきた。

「何がだ？」

「穂香にも、嬉々さんにすら何も言わずに出てきて」

今、正影の乗っているこのへりはオクオロス討伐に向かっている。

アルツェから80キロと少し遠め場所に向かっているため、乗っている時間は長い。眠って過ごそうかとも考えたが相手が相手なので眠れなかった。

|||||

「今回の作戦はここで行うわ」

へりに乗り込む数時間前、外はまだ暗い。

ある部屋でミーティングを行っていた。

作戦内容の確認は重要なことだ。

「そこは？」

「使えなくなつた地下都市と言つたところかしら。このアルツエができる前まで使われていた所ね」

「できるまで？その上に要塞を建てればいいんじゃないのか？」

「オスの大量発生地帯に近かつたからよ。できる限り離れたかつたのでしようね」

人が5000〜10000人は住めるであろう思つたよりは大きな都市になっている。

それでも今のアルツエと比べればはるかに小さいのだが。

「まず何故この都市を使つたのか説明するわ。それはこの都市の壁がすべて対オウステム使用になつていているからよ」

「すべて……？」

「無駄に豪華よね。多少はがれているところは昨日のうちに補修したわ」

「仕事が早いな」

「ここは後に使えるだろうということのできる限りきれいにはしていたの。もしもの避

難所としても使えるしやれることは常にやってたの」

避難所としても使えるであろう場所をオクオロス討伐のために使うとはなんとも残念な話である。

「ここにオクオロスを引きずり込む。それからあとは正影に戦ってもらいながらE—23を食べさせる」

「それは使うしかないのか？」

「愚問ね。貴方にオクオロスを倒せるほどの実力があるの？」

「単純な力勝負なら負けない」

「相性があるわ。確かにうまく誘導が成功すれば相手は身を隠すことができなくなる。それを踏まえても貴方の刀一本では無理でしょうね」

「ロストチルドレンの力をなめてもらっては——」

「オクオロスの強度は異常なの。凧の時は斬りつけることができたみたいだけだあの後、このアルツエが何もしないと思う？へりであらゆる手を尽くしたらしいわ、兵器の出し惜しみなしでね」

正影の心配をするということは結果など聞くまでもないのだろう。

すべて失敗。

それに傷1つつけることができなかったに違いない。

「司令は倒せると思っっているみたいだけど…、あの人らしくもないわね。貴方が2人いれば倒せるかもしれないけど」

「…まあ、どちらでも構わない。俺がやられた時はE-23を爆発させるんだろ？」

「オクオロスを殺せばいい…、結果がすべてってことね。嫌いじゃないけど怖くも感じるわ」

「俺の命なんて所詮そんなものだ。俺の命と2人の命、秤にかけるまでもない」

「……………貴方のほうが有効性は遥かにあるのだけども」

「これに関しては議論しても意味はないと明季はすぐに話すのをやめる。

「本当はもつと使い道がない民間人とかを使いたいっていうのが本音なんだけどね。そんなことすれば何を言われたかわかったもんじゃないわ」

「だから可能性があるように見える俺が選ばれたってわけか」

「本当は誘導もやってもらうつもりだったんだけどこつちで何とかかなりそうだから必要なし。となれば貴方に頼むことはあとはないわね。ともかく戦うこと、それくらいよ」

「オクオロスが身を隠せないって言ってたが、壁の硬度はどれくらいなんだ？」

「…ダイアモンド以上」

「サラツとすごいこと言ったな」

「適当なこと言ったのは間違いないがかなりの硬度と考えていいようだ。」



「ほかに聞きたいこと……はないわね」

「ああ、俺はただ戦えばいいんだろ？」

「じゃ、この会議は解散よ。後の数時間、有意義に過ごしなさい」

「……と言うと？」

「穂香と嬉々とあなたで3——」

「黙れ」



「こういうのは言わないで出たほうがいい」

「残された嬉々さんの気持ちはどうなりますか？」

「帰ってくると言った」

「口では何とも言えますからね」

「そう言われると何も言えず顔をそらす正影。」

正影は他の人にはばれていないだろうと思っただが近くにいた明季や恭二な

どにはばれている。

穂香や嬉々だつて同様だ。

「正影、これを渡しておくわ」

明季が1つの球体を渡してきた。

手のひらよりは大きい。

「これが…」

「E—23よ」

見た目はただの鉄球。

だが、中身は正影では理解できないほどの破壊力を持つ兵器。

耳元で振ってみるが音はしない。

「よほど強い衝撃を与えない限りは爆発しないから安心しなさい。口に入れた後はこつ

ちで操作するから問題ないわね?」

「ああ。だが、1つ最後に確認したい」

「核を使った後の放射能等は問題ないわ。爆発させる場所は地下都市、そして対オウスムの壁とはいえ壁があるのに変わりはないわ。十分抑えられる」

「…何度もすまないな」

「あなた、生きてればおそらくいい父親になったでしょうね」

正影と恭二の顔が驚きに包まれる。

明季はそれを見て怪訝な顔をする。

「…これでも世間の目は気にしてるつもりよ」

「それを踏まえてもお前がそんなこと言うとは思わなかった」

「私ってどう思われてるのかしら？」

「エスパーだろ？ 考えくらい見えるに決まってる」

「私が相手の質問を先に理解できるのは言動を注意深く見ているからよ。頭の中は見えないわ」

分かってはいたのだが言われると思わず「へーそうなんだ」と思う。

『みなさん、そろそろです』

リムからの通信が入る。

全員の空気が張り詰める。

「オクオロスの状況は？」

『すでに囲い込みは成功しています。正影さんが到着する5分ほど前には指定位置に誘導完了できるはずですよ』

「分かったわ。何か問題があったらできるだけ早く報告して」

『はい』

「あら、嬉々おはよう。そんなに急いでどう——」

「美嘉、正兄知らない!？」

食堂で美嘉を見つけて掴みかかるようにして尋ねる。

美嘉は少し「おおお!?!」と焦ったが理由が分かれば納得できる。

嬉々が取り乱した理由など明白なのだ。

「知ってるんですよ? 教えてよ!」

「…嬉々、正影さんはもう出て行ったわ」

「…嘘でしょ?」

「ここで嘘をついてなんのメリットがあるの?」

「でも…正兄は私には何も!」

「それでも行ってしまったのは事実よ」

それを聞くと嬉々の手から力が抜ける。

足からも力が抜けたのが座り込んでしまった。

「嬉々、大丈夫!?!」

「…またいなくなつた。今回も…、生きて帰る、つて言つてたけど…きつとあれは」

嬉々の言葉がとぎれとぎれになる。

帰つてきてまだ半年どころか3ヶ月過ぎたばかりだ。

まだ話したいことだつて山ほどある。

まだ一緒にやりたいことだつて山ほどある。

まだ、全然足りていない。

「嬉々、しっかりしなさい! 正影さんはプロデューターを退けたロスなのよ? オクオロスなんてどうつてことないわ」

「…前言つてたの。正兄が特化しているのは刀を振るスピード、力でも体の丈夫さでもない。要は手数なの。以前、正兄はオーロワームと対峙したときに斬りつけたそうよ。結果、斬りおとすことができなかつたどころか相手には逃げる気力すらあつた。相性の問題よ」

「……………」

「それが進化して現れた。これじゃ…本当に正兄は…!」

「進化が正影さんにとっていい方向に向かったっていい可能性も——」  
「奇跡は何度も起きるものじゃない!」

まだ早朝だったというのが幸いして人の影は少なかった。

荒らげた声にその場にいる全員が嬉々を見る。

誰も見たことがない嬉々の困惑と泣きじやくりに驚く。

だが、誰も近づいてこようとはしない。

「タイムスリップなんて未だに信じられない。でもそれで説明がつくし別に構わない、正兄が戻ってきてくれたんだから。けどそんな奇跡は何度も起きるわけがない!美嘉、あなたは作戦内容も知ってるんでしょ?それを聞いた時どう思った?生きて帰れると思っただ?」

「……可能性はあるわ」

「5%?それとも10%?違うでしょ、1%もないと思っただんじゃないの?これで正兄が死んじゃったら…私は!」

「いい加減にして!」

今度は美嘉が声を荒らげる。

「貴方は正影さんの何?妹でしょ!あなたが信じないでどうするの!?!なんでそんな簡単なこともわからないの!」

「信じたい、信じたいわよ。でも心配が勝ってしまうのは当たり前よ！」

「…穂香ちゃんは信じてたわよ？」

「……」

「嬉々、あなたも穂香ちゃんと同じくらい正影さんを大事に想ってるでしょ。黙って待っているのが嫌なのなら、あなたはあなたができることをしなさい」

「できる、こっと？」

今この状況でできることなどないではないはずだった。

正影の手助けをするには圧倒的に力が足りてないし、そもそもそこまで行けない。

「私だって心配よ。でも何もできない、強いて言うならパニックをできる限り避けることが私にできること。だからこうやって普通に過ごしてるわ。でも、黙っているのが嫌でそこまで力になりたいっていうのなら…リリイを探してみなさい」

「…なんでリリイ？」

「私としては普通に過ごすこと、それが手助けにつながるって言いたいところなんだけどね。リリイが何か動いているみたいだから」

「リリイが…」

「ただし、できることをするのよ。それ以上のことは絶対にダメだからね？」

何をしているのかまでは分からないので何とも言えないが嬉々はすぐに決断した。

もう黙って待っているのは嫌だ。

私も何かしたい。

残っていた涙をふき取り顔が赤い中立ち上がる。

「私、行くわ」

「あなたには笑っててもらわなくちゃ私が困るのよ。前以上に」

「？」

「あなたが落ち込んでると正影さんの八つ当たりを受けて殺されるわ」

「私が落ち込んだ原因は正兄が二度と戻ってこなくなるかもしれないからで、戻ってきたら治るんだけど…」

「それに正影さんの機嫌はできる限り損ねるわけにはいかないわ！そして穂香ちゃんの近くに…」

「どうやってでも無理だと思っただけど…、じゃあ私行くわ」

美嘉には感謝してもしきれない。

いつもいい方向に嬉々を助けてくれる。

情報屋は情報がたくさん入る。

無駄な情報だつて数多い。

だが、美嘉はそれを選別し嬉々に合った情報をくれて元気づけてくれる。



変態と思われがちだが、中身は本当にいい人なのだ。

「美嘉」

「？」

「ありがとう、いつも」

嬉々は走ってその場を去った。

## 開戦

「ああ？お前が俺に何の用だ」

「いったい何をしているのか聞きたくてね」

嬉々の言葉にリリイが顔をしかめる。

今、2人がいるのは受付。

オクオロスのことなんて知らない人が任務を受けにきている。

いつも通りに賑わいを見せていたのだ。

「ここに来てるってことは任務を受けに来たってことだ。わざわざお前に手伝ってもら

うような任務は受けていない」

「悪いけど頼れる筋からの情報なの。間違いないわ」

「……誰だ？」

「分かるの？美嘉っていうんだけど」

「あいつか……」

ため息をつく。

嫌な人を思い出したというより、あきらめた感じの顔をしている。

「知ってるの？」

「8歳までは同じアルツェで生活してたからな。あの頃から人の秘密を暴くのが大好きだったよ」

「じゃあ、情報は間違いないのね？」

「お前には関係ない」

「いいえ、大いにあるはずよ」

面倒なのに捉まったなど、頭を悩ませる。

周りは嬉々が自らリリイに話しかけているのを不思議そうに見ている。

「リリイさん、準備ができたようです」

受付の人が唐突にリリイに話しかける。

しかし、顔はリリイを見ておらずできる限り声は小さくされていた。

「悪いな、危険な綱を渡らせて」

「今回限りですからね？」

「ああ、貸し借りかこれだなしだ」

嬉々なんていないかのようにその場を去ろうとする。

しかし、嬉々だつて黙っていない。

進行方向に立ちふさがる。

「邪魔」

「このまま引くと思う?」

「俺たちだけで何とかなる。それにお前に何かあると困るんだよ」

「?……………どういう意味よ?」

「こちらの事情だ」

全然取り合ってくれないリリイ。

しかし、嬉々は食い下がる。

リリイの後ろをついてくるのだ。

「目障りだ。さっさと消えろ」

「嫌、私はもう黙ってみてるのが嫌なの」

「知ったことかよ。お前は前線にいられると困るんだよ」

「前線? 正兄と関係があるの?」

「……………ともかく、お前にやることなんて——」

「いいじゃない、戦力が増えて悪い話じゃないでしょ?」

嬉々の声ではない。

リリイは声を聞いただけで誰かわかったのか嫌そうな顔よりもひどい、忌々しそうな顔をする。

「美嘉か」

「面と向かって話すのは久しぶりね、リリイ。でもここで初めて見たとき雰囲気だけでわかったわ」

「俺もだよ。相変わらず、いい趣味してるみたいだな」

「それほどでも。それより聞いたわよ、武器庫から支給武器デルマを持ち出すなんてなかなか面白そうなことするじゃない」

「なんですって!!」

「……………」

当たっているのか、リリイは黙る。

「あなた、そんなことして何しようとしているの？まさかクーデター!？」

「嬉々、こいつはそんな無謀なことしないわよ。何が理由でこんなことをしたのかまでは分からないけどね」

「…お前は昔から本当にたちの悪い知人だな」

「友人じゃないの?」

「お前の友人には一生なれる気がしないな。もちろんそれ以上も」

「そう、残念。でも私たちを仲間に入れることはしてくれるわよね?」

小さい頃から、知り合った仲だ。

長い間会わなかったとはいえ、2人はそれぞれの出方をなんとなく理解している。

それは2人に「変わり者」という共通点があったからだ。

同じ部分で変わっているわけではないが人が減ったこの時代、この世界からみて変わり者と言われる人は数少ない。

ただの中二病や、しゃべり方に特徴がある人は別に変わり者とは言われず個性と言われるようになった。

「…お前は構わないんだが、嬉々がな」

「なんで私はダメなのよ!」

「……………実力はどれくらいだ?」

「ロスである正兄の遺伝子からできたプロトよ。そこそこの実力はあるわ」

「だけど俺はお前の噂を聞いたことがない。強いなら噂ぐらい流れるだろ?」

「そ、それは私が正兄と同じで面倒くさがり屋だから任務をこなす数が少ないからで…」

「…………」

「…………」

無言の10秒間。

リリースは悩む。

そして大きくため息をつく。

「分かったよ、どうせ何言っても付いてくるだろうしな」

「ようやく分かってくれたようね」

「黙ってついてこい。案内してやる」

---

『正影さん、電波は届いてますか？』

「完璧だ。雑音1つないのが気持ち悪いくらいにな」

『しっかり生きて帰れるようサポートします。死体は受け入れませんので』

「…それは頑張らないといけないな」

地下都市と呼ばれる場所に正影は立っている。

中は存外明るかった。

いや、奥は暗いのだが正影が歩いたところからどんどん明るくなっていく。

「オオオオオオオオオオオオ……」

「！」

奥のほうから雄たけびが聞こえた。

オクオロスの声なんてまともに聞いたことなんてないがここで聞こえたのだから間違いないだろう。

つい緊張してしまう。

別に自分が死ぬかもしれないことに関してはなんとも思っていない。

だが、これはこれからの世界の動きにかかわると言っても過言ではないのだ。

世界が駄目になってしまえば嬉々たちも苦勞する。

それは困る。

死後、上から見るのでできるのであれば幸せそうな顔を見たい。

「じゃありム、最後の指示を頼む」

『たった今、死体は受け入れないって言ったばかりじゃないですか』

「よく考えたら俺が死ぬときは死体なんて残らないと思っただけだから」

『僕はもう御免です。自分が担当した人を絶対死なせたくありません。せつかく収入も

upしたんですから正影さんには死なれると困ります』

「どのくらいだ？」

『ぎつと2倍ほど』

「…おお」



オペレーターもお願いされた回数、生存させて任務を受けた人を帰らせた回数などでもらえる収入が変わってくる。

それを踏まえても2倍とは大したものだ。

正影が受ける任務の難易度が影響したのだろう。

『出口を閉めました。これで次開けるときは正影さんが勝った時のみになります。あ、もう少し進むと左に曲がる場所があるのでお願いします』

「ああ、わかった」

『…そこを曲がればすぐ見えると思います』

「…そうか」

腰に掛けているE-23に手をかける。

正影の役目はこれをオクオロスの口の中に入れること。

これさえできれば失敗しても死のうが生きてようがどっちでもいいのだ。

本当に危険と呼ばれるほど危ない爆弾が入っているのかと心配になるほど軽い。

強度は確かにあるのだがどういいう仕組みなのかと分かるわけもないのに解体してみたくなる。

「なあ、どこを曲がればいいんだ？」

オクオロスが通れるというだけあってとてつもなく大きな廊下だったところから、さ

らに開けた広場のようなところにたどり着く。

柱が並んでいて、ここにたくさんの人がテントでも張っていたのか?と想像する。

『広いですからね、左の壁に沿って歩けば……………』

「どうした?」

『ちよ、ちよ、ちよ、嘘でしょ!?!』

焦ったせいか、いつもとは違う口調が出る。

何が起こったのかは訊く必要がなかった。

「オオ…オオオオオオオオ!」

さつきよりも大きな声と同時に地響きが鳴る。

近づいてきているのは間違いない。

さつきよりも今、確実に近づいている。

『正影さん、とりあえずどこかに隠れてください!』

「どうせやりあうなら不意打ちしたほうがいいってか?」

『当たり前です、まず相手の硬さを確かめたりしてからじゃないと!』

「確かめたって意味はない。あるのは俺の刀だけだ、ここは初めに一太刀入れるんじゃない?」

オクオロスの蠢く音がする廊下から、見えないように柱に隠れる。

どんどん大きくなる地響きと雄たけび。

いや、雄たけびと言うよりは悲鳴のほうが正しいのかもしれない。

オクオロスは基本、地面の中で生活をするのだ。

自分の生活空間に戻れない。

確かに苦痛かもしれない。

だが、正影にはそんな関係ない。

そして時は来る。

オクオロスの姿はぼつちりとらえていた。

正影が歩いた時と同じように何かに反応するレーダーがあるのかオクオロスが通つ

た道に光が点灯する。

正直見たくはなかった。

体中に眼球がついていてそれぞれが動いているのだ。

気持ち悪いとしか言いようがない。

地面に擦りつけられている眼球が何故潰れないのか知りたいとは思ったが。

口が通路から顔を出す。

バカみたいに大きい口。

これほどの大きいとE-23を投げ入れるのは簡単もいいところだ。

柱の陰から飛び出て口の中めがけてE―23を投げる。

E―23は思った通りの軌道を描き口の中へと消えていった。

しかし、オクオロスの目の前に出たことで存在がばれる。

自分の思うように行動ができないオクオロスの機嫌は悪かった。

「オオオオオオオオオ！」

まさに雄叫びと言える大声が地下都市に響き渡る。

正影は刀を創り出す。

「さあ、リベンジマッチといこうか」

正影が構えた。

「始まったみたいね」

明季がへりの中で報告を受け、呟いた。

一応近くに鎌を持ってきてはいるが、あくまで非常時のみにしか使う予定はない。

へりの中で報告を受けたといったがそのへりは飛んではない。

正影を降ろした、地下都市の入り口近くで止まっている。

E—23が爆発してしまえば自分も巻き込まれてしまう。

外では恭二がガードの役目をしている。

しかし、その姿はどこか頼りない。

「…別にいいのよ、緊張しなくても。敵を見つけたら今回は私が出るから」

「いえ、隊長の手を煩わせる必要はありません。それに緊張だつて…」

「それじゃ、今どこか頼りないのは彼女を感じられないからかしら？」

「……頼りないですか？」

「とてもね」

どこか、言われても仕方ないと思っていたのか顔を俯ける。

明季に「頼りない」なんて言われたのはいつ以来だろう。

「でも俺、初めて見ました。2人を受け入れる容量を持つ人間なんて」

「私もよ。AはともかくBでは初めて見たわ。ほんと、うちは宝の宝庫ね」

「でも…、遅いですね」

「そう？こんなもんだと思うわよ。まあ、あんまり遅いと来ても意味ないけど」

2人はある人を待っていた。

これが予想通りなら正影を失わずに済む。

それなら試す価値は大いにある。

「…フフ」

「どうかしました？」

「いや、正影を失いたくないと思っっている自分がいると思うとなんか笑えてきて。これが恋ってやつかしら？」

「でしたらいいペアじゃないですか。最強の女性と男性のペア、俺は応援しますよ」

「あなたにも似たような感情を向けてるつもりよ？」

「…でしたら恋じゃなく仲間意識じゃないですか？」

「仲間？」

「隊長の冗談を受け止めるのは俺と正影さんぐらいですから。それに正影さんにいたっては敬語すら使ってませんし」

「一理あるかもしれないわね」

ともかく、正影がいなくなると明季が残念に思うのは間違いないのだ。

恭二も同じなのだが。

「じゃ、正影が帰ってきたら一つ冗談をかましてあげようかしら」

「どんな冗談です？」

「好きって言った後、キスするのはどうかしら？」  
「……それは俺の許容範囲すら超えています」

## 異変

「ハアツ、ハアツ……あいつは本当にオスの類なんだよな？」

すぐ近くで自分を探しているオクオロスのことを呟く。

今正影はたくさんある柱の陰に隠れている。

敵の強さに正直圧倒されていた。

硬いし、速いし、探查能力が半端ない。

「俺が圧倒される日が来るとは……な!？」

突然近づいてきた音に逸早く反応し、オクオロスの攻撃を避ける。

柱ごと喰いに来た。

正影はよけるだけにはとどまらず、攻撃を加える。

大きな体の一部に一太刀加える。

「チッー」

しかし、斬りおとせない。

目玉一つをつぶすことはできる。

だが、それ以上のことだできない。



体長5、60mある化け物だ。

人のちっぽけな攻撃ではダメージに換算されない。

それに…

「もう回復してるのか…!」

恐ろしい回復力。

刀が離れるとすぐに傷が塞がり始める。

オウステムには痛覚がある。

つまり攻撃が加えられたということは正影の場所が把握されたということだ。

尾部が正影に向かって攻撃を加える。

刀で抑えるが思いつきり飛ばされる。

壁にぶつかりようやく止まるが休んでいる暇はない。

オクオロスの口が正影に向かって跳んでくる。

すぐにその場を離れ回避する。

オクオロスが壁に衝突し壁の一部が崩れる。

だが、奥の壁が顔をのぞかせて完璧には穴が開かない。

それほど強度があるのだ。

『正影さん、状況は?』

「絶好調だ、いくらでも刀を振り下ろす訓練ができそうだ」

『正影さんの頼みなら出口の一時開放もしますよ』

「いや、あそこまで一人で逃げるのは不可能だ。誰も入れるんじゃないぞ」

オクオロスの目はずっと正影を追っている。

幾百もある目に見られると緊張というより気持ち悪いにかわる。

ギョロツとした目は瞬きなんてしない。

しかし、充血することはなくただただ、正影を追いかける。

「オオオオオオオオ!!」

「!？」

突然雄たけびを上げるオクオロス。

その大きな雄たけびに耳がおかしくなる。

自分の声に対しては耐性があるのに響閃爆弾フラッシュユバンにはなんで耐性がないんだよと痛い耳

を抑えながらオクオロスを見る。

オクオロスの口が正影の方に迫ってくる。

攻撃がレーザーだったり遠距離系を持っていいないのが唯一の救いだろう。

すぐに口が正影の目の前までくる。

それを飛び越えるという手段で避ける。

普通の人間ならできるわけがない。  
だが正影ならできる。

無駄だとは分かっているが刀を突き刺す。

刃が根元までしつかり刺さる。

それに反応したオクオロスが正影を突き放そうと右へ左へ体をくねって暴れる。

たまたらず正影も刀を引き抜きオクオロスから離れる。

「…何か手はないものか」

じり貧な戦いの中、正影は逃げずに戦う。

「隊長、来ました！」

「分かっているわよ、音が聞こえるもの」

明季が待機していたへりの中から出てくる。

もしものために鎌を手に持ちながら。

2人が見上げる方向にはもう一基、ヘリが飛んでいた。

いつ爆発させる命令が出るかわからないこんな場所にヘリがきている。

他から見れば異常としか言いようがない。

だが、これは正影を生かすための秘密兵器と言っても過言ではない。

「でも、本当に大丈夫なんですか?」

「…それを聞くのも何度目になるのかしら? まあ何回でも言つてあげる。間違ひなく行けるわ、むしろこつちを使えば正影がいなくてもオーロワームだったら殺れたでしょうね。文字通りちぎつては投げ、ちぎつては投げで」

「そんなにですか?」

「オクオロスの場合はあれ1人だと難しいだろうから、正影を連れて逃げてもらう。それくらいのことなら造作もないでしょう」

「そのあとE-23を爆発させるんですね」

「それは嘘よ」

「……………え?」

自分にすら知らされていなかった事実を聞いて思わず目を点にする。

「E-23、あれほど力を持つ兵器をたかだかオクオロス1体に使うと思うの?」

「で、ですが、あれはもともとオーロワームを殺すために作られたものだ?」

「口実に決まってるじゃない、本当にそれが目的ならとつくの昔に使ってるわ」  
「では、正影に持たせたのは？」

「ちよつとだけ強力な爆弾よ。半径一キロ程度しか焼かないし、核兵器でもない。結局核を壊せばオスは絶命するのだから内側から爆破できれば何でもいいのよ」

「…政治上の話ということですか」

「これを持つアルツエにちよつかい出す奴はいないでしょう。現日本の中ではアルツエの大ききこそ最大ではないけど持っている兵器の中では最強なもの」

アルツエ同士の抗争だつてないわけではない。

それぞれのアルツエは民間人を持っている。

適度な数は必要なのだがどこもかしこもパンク寸前だ。

土地は地下を使っているので時間さえあればどうつてことないのだが、食事ばかりは一向に改善されない。

どこの世界も同じだ。

一部の人間がたらふく食べるが貧しい人がそれ以上にいる。

で、その後上の人間がやることは平等に富の配布をするのではなく他からの奪取。もちろんこれはやる所とやらない所でいがみ合いが続いている。

「自分勝手な都合つてやつですか」

「悪く言わないほうがいいわよ。あなたの生活もそれのおかげで守られてるんだから。それと今その話は関係ないわ」

「…すみません」

へりが地面に足をつける。

強風が吹き荒れ地面にある砂やほこりが宙を舞う。

「やつと来た、つて言いたいところなんだけど…」

明季が耳に手を当てる。

耳には小さな通信機が入っているのだがおかしい。

へりが見える5分ほど前には連絡があってもおかしくないのに目の前に降り立った今でも連絡がない。

ただの通信障害だといいいのだがタイミングが良すぎる。

へりからの呼びかけにも応答しないのだ。

「変よね…、彼女から何かはいつてない？」

「真理奈からどころか何やつても通信できません。何も無いといいのですが…」

「確認のためにもさっさと仕事を終わらせてもらわないと駄目ね」

へりの扉が開く。

見えてくる人影。

「じゃあ、お願いするわよ」

「ゴハ……」

口から血を吐き、体を壁に寄せる。

肩で息をするとはまさにこのことのように体が揺れる。

強者、特に負けたことのない者というのは追い込まれると弱い。

理由は誰にでも想像がつくだろう。

その状況に陥ったことがないから。

誰でも一度でも経験があればそれなりに対応ができる。

対応の仕方がわからない初めてのことはやりたくないし、緊張だつてする。

追い込まれるなんてことは誰も何度経験しても味わいたくなんてないだろうが。

正影自身、ここまで差があるとは思っていなかった。

これが10年後の世界かと自分の弱さを痛感する。

ロストチルドレンが最強だと言われたのは10年以上前の時の話だ。

その頃はオウステムを圧倒していたため自分自身でも過大評価していたのかもしれないがそれでも最強だったのは間違いない。

「…あいつはどここのロスだったか、米か露か。あいつらだったらこいつも余裕なんだろうな」

詳しくは知らないが糸的なものを使ってオスの体の中を貫き、核だけを壊して簡単に終わらせる奴がいた記憶がある。

俺ってロスの中では弱いほうだったのかとこんな状況ながら落胆する。

「オオオオオオオオ……」

せつかく離れたのに5分足らずで近くに来たようだ。

音でなんとなくわかる。

地響きがだんだん近づいてきている。

だが音だけでは詳しく状況なんて理解できない。

「リム、敵が視界に入るまで後何秒だ？」

『……………』

「リム？」



返事がない。

電波の状況が悪くなったのかと考えるが少し考えずらい。

時間が少なかつたとはいえここは非常時のために常に手入れされていたと明季は言っていた。

昨日もフル稼働で何かやっていたようだった。

それなのにこんな場所で電波の状況が悪くなるだろうか。

考えようと思えばいろいろ推測はできるのだが、正影はこの世界に来てまだ日が浅すぎた。

「年貢の納め時ってやつか…、罪を犯した覚えはないが」

あまり長い間戦うことはできない。

本気を出すためのエネルギー的なものは切れかかっている。

それなしで戦うとかなりきつい。

斬りつけることも避けることもできるだろうが、オスをジャンプだけで飛び越えることは無理になるし反応速度も遅くなるだろう。

それ以上に問題なのが副作用だ。

一回使ったら好きな時にエネルギーを使うのをやめることができるがその時の倦怠感は異常だ。

吐き気はもちろん、目まい、体のいたるところに出る激痛、最悪意識混濁などで戦闘どころではなくなる。

「…死は覚悟したつもりだったんだがな」

自分の手がわずかながら震えていることに気づいて思わず呟く。

やはり口だけの奴だったのかと自嘲気味に笑う。

人は死ぬ寸前に、例えば飛び降り自殺をした人は飛び降りた後その行動を後悔するといふ。

人の本能はやはり生きたいとどこか思っているのだ。

正影も例外ではなかった。

「オオオオー」

いつの間にかオクオロスがすぐ近くまで来ていた。

変な考え事のせいで意識がそちに回っていなかったのだろう。

無数にある柱などものともせず正影目がけて突撃してきた。

不格好にはなりながらも床を力の限り蹴り飛ばしそれをギリギリで避ける。

こんなことも本気が出せなくなれば無理だ。

しかし、避けるので精一杯だった正影に容赦ない尾部による体当たりが直撃する。

ミシミシと骨が軋む音がしたがそれについて思考が回る前に壁に叩きつけられる。

体中が痛む。

さつさと帰ってベッドで寝たいと思う。

ポテチを片手に漫画を読みながら。

つまり生きたい。

別にこんな作戦を立てた明季を今更恨むつもりはない。

「おい、リム。聞こえないか？」

『……………』

相変わらず通信は途絶えたまま。

最後までいい、声を聞きたかったなと思う。

だがまあ、聞けないというのなら仕方ない。

ただこれでは自分の生存も確認できないのではないかと少し作戦の変化に疑問を持

つ。

そうしている間にも迫ってくるオクオロス。

壁から抜け出し避けようと構える。

相手の行動の仕方もあらかた掴めてきた。

だからわかる。

ぎりぎりで避けない限り、相手は追い続けてくる。

あのでかい体で思った以上の機動性を初めて見たときは焦った。

だが、慣れればどうということはない。

避けられ…

「ウツ…！」

突然吐き気が正影を襲う。

足に力が入らずその場に崩れる。

エネルギーが切れた。

「しまっ…！」

避ける気力はない。

一瞬とはいえ、方向感覚すらおかしくなった。

ぎりぎりで避けようとしていた正影にとってこれは致命傷だった。

終わりかたでもしない覚悟をする。

だが

「……………う？」

だが、終わりが来ない。

ゆっくりだるい体を持ちながらも顔をオクオロスに向ける。

オクオロスは確かにいる、目の前で大きな口を開けている。

だが進んでは来ない。  
体を動かそうとしている。

だが、進んでは来ない。

「んん……あああああああああ！」

叫び声と同時にオクオロスが宙に浮く。

人生で最も驚いた瞬間だったに違いない。

あのバカでかい巨体なんの予備動作もなく宙に浮かんだのだ。

「パパに……手を出すなあ！」

幻聴かと思った。

いるはずがないのだ。

だが、この世界で自分をパパと呼ぶのはただ一人しかいない。

オクオロスが投げ飛ばされる。

巨体が50 mは跳んだ。

そして正影の目にある1人が目に入った。

「穂……香？」

## 新たな悪魔

「パパ、しっかりとして！」

「大丈夫だ……いつもの副作用が出てるだけで、死んだりはしない」

穂香が正影を持って走っている。

不思議なことにその姿は穂香に疲れを感じさせない。

まるで風船でも持つてるかのようだ。

穂香と正影は今、地下都市の中を逃げている。

広い場所であるが故、なかなか出口が見えず穂香が苦労している。

苦労しているのは走ることに対してであり、正影を抱えることではない。

「オオオオオオオオオオ！」

「しつこいなあ……！」

走って逃げてるとは言ったが、大したスピードは出ていない。

そこらへんのプロトと比べれば多少は良いスピードと言えるだろうが。

いったん正影を降ろす穂香。

そして壁に手をかける。

「ああああああ！」

大声を張り上げると同時に手に力をかけた。

それと同時に壁がきれいに採れる。

高さ70、80mはある壁が力だけできれいに取れたのだ。

そしてそれを投げる。

オクオロスが向かってきている方向に。

「来ないで……よー！」

取れた壁が回転することなく、まっすぐに奥へと飛んでいく。

そして10秒ほどするとオクオロスの叫び声が聞こえた。

悲痛な叫び声であるのは間違いない。

「パ、パ、行こう！」

「あ、ああ」

思わず耳を疑った。

オクオロスが悲痛な叫び声を上げたということは投げたあのでかい壁が10秒先でも跳んでいたということの意味する。

ただ地面に落ちている壁に当たったってダメージは受けないだろう。

正影でもそんなことはできない。

「明季さん、次は？」

『50mほど先にある分かれ道を左』

「ありがとう」

「穂香、お前……？」

「大丈夫だよ。パパ、別に体に悪いことしてるわけじゃないから。ただ、真理奈さんとも今は繋がってるけど」

「……あいつら」

青羽が言っていた。

メデイアツールは1人までの契約が精一杯で、2、3人出来る人は稀だと。

下手すれば耐えられず無駄に多く契約した人が死ぬと。

助けてもらったとはいえ、もしこれがなんの確証もなくやっていたことだったら外に出たら吊るしてやると心に誓う。

今、穂香の体は通常では考えられない状態になっているに違いない。

ロスの力が加わっているだけでもすごいことなのに、腕のみが異常に強力な真理奈の力まで加わっているのだ。

正影としては何か副作用が起きては困ると心配でならない。

『正影、聞こえるかしら？』



「…明季、覚悟は出来てるんだろぅな？」

『告白っていうのなら少しは考えてあげるわ』

「変な副作用は起きないんだろぅな？」

『別に起きても構わないんだけど。穂香の代わりなら沢山いるわ』

「…：喧嘩を売ってるのか？」

『悪いけど、オクオロス1体ごときにロスを消耗するのは勿体ないわ。死ぬならプロダイターを葬ってからにして。それと…：気づいてる？』

「ああ。さつきから、リムと連絡が、取れない」

幾度も襲われる吐き気を抑えながら話す。

穂香の目の前で吐くなど父親としての尊厳を失いそうでなんかこわい。

『こつちも同じよ。ただの電波障害だといんだけど…』

「心当たりが、あるのか？」

『ロスがいない、まあロスのことは口外してないはずなんだけど。そして私と恭二がない、つまり主戦力を削がれた状態なのよ。私たちのアルツェは』

「まだ、鈴や美姫、がいるだろ？」

『いいえ、ここにいるわ』

『ハロー、正か』『ごきげんよう、正影さん』ちよつと！私がいちゃべつてたのよ！』

通信機の奥からいがみ合う声が聞こえる。

『それに、アルツエってというのは緊急事態に対応出来ないのよ』

「…どういう意、…!」

激しい頭痛が正影を襲う。

エネルギーを最後まで使うとどこまでひどいのかと唸る。

『貴方のように自分の武器を常に持っていられたら話は別だけど、緊急事態でも支給武器を使うには手順が必要なの』

「緊急事態、でもか?」

『大抵は壁で時間を稼げるから大丈夫なの。でもこれがプロデューターだったら?』

「…タイミングが、良すぎる」

『杞憂だといいのだけれど』

「明季さん、入り口まで来たよ!」

いつの間にか入り口まで来ていた。

オクオロスが収容できるほど大きな入り口は閉まっていたはずなのに、その口は大きく開いている。

この施設にはこれ以外の出口はない。

理由は小型のオウシステムだ。

昔、ここは人がオウステムから逃げるために作られた。

完璧な壁を築くことができたが、外からの物資搬入は必要。

だが、オウステムの侵入は防ぎたい。

なら入り口を1つにしてその守りを固めればいいという結論に至ったのだ。

何より、地下に作ったこの町。

無駄に出口を多くしては危険を高めるだけでなく、工事している人間が危険なのだ。

「オオオオオオオオオオオオ……」

「急がないとー!」

穂香とて腕の力が異常になり、投げ飛ばすことができるようになったからといって食べられてしまえば意味がない。

真正面きつての勝負は分が悪いのだ。

駆け上がるとヘリがすでに飛ぶ準備を済ませていた。

「穂香さん、正影さん。こっちはです!」

恭二の呼びかけによりヘリに乗り込む。

「もう一基あつたヘリはどうしたの?」

「先に行かせてアルツエの様子を確認させてます」

正影たちが乗るとすぐにヘリの足が地面から離れる。

「穂香、オクオロスは？」

「後ろをついてきてきている様子だったよ。ただ距離はけっこうあったと思——」  
空气中を振動が伝わる。

腹に響いてくるような振動に正影の顔が青くなる。

地面から離れているはずなのに振動が伝わりとは思ってもみなかった。

「…急いで」

「了解しました！」

操縦者の焦りも伝わってくる。

オクオロスの体長は50m以上。

力いっぱい跳ぼうとすれば恐ろしい跳躍力をみせる。

足があるわけでもないのになぜあんなに大きなジャンプが出来るのかと疑問だ。

「恭二、連絡は？」

「依然音信不通、先ほどむかつたへりはつくまでもう少しかかります」

「正影、吐くならこれに吐けば？」

「？」

明季と恭二が真剣な話をする中、美姫が正影の顔色に気づいて袋を渡す。

「す、すまん…」

「なんかこんなボロボロな正影を見るの新鮮ね」

「そうですわね」

「穂香、もしものために、離れてく——」

顔を袋に近づけて気づいた。

なんか硝煙?のような臭いがする。

「…美姫、これに、何を入れてた?」

「これ」

ボン、とたたいた場所には手榴弾が散乱していた。

吐き気も一瞬で収まる。

「むしろ危険がすぐ近くまで来るとわかるとぞわつと、ある意味心地のいい寒気が走った。」

「馬鹿か!?!お前は毎回それを持っていながら…!」

「大丈夫よ、レプリカだから。吐き気は収まった?」

「…助かった」

ずいぶん荒い治療法である。

だが別に正影の体調がよくなったわけではない。

体の倦怠感に残り、意識は未だ途切れそうになったりする。

「私がそんなことするわけないよ。ちゃんと服の裏に入れてるわ」

「…まさに歩行<sup>ストーカー</sup>する爆弾<sup>ボム</sup>ですわ」

「懐かしいの持つてくわね。でも手榴弾は滅多に使ってないんだけ——」

「オオオオオオオオオオオオ！」

はつきりと雄叫びが聞こえた。

オクオロスが這い出てきたのだ。

「おい……！」

「大丈夫よ、この距離なら届かないわ」

「そうじゃ——」

「黙ってみてなさい」

E—23を使っていないことを正影は知らない。

あそこから這い出てしまったら放射能だのよくわからないものが穂香たちの身に襲い掛かると明季を睨みつける。

オクオロスも諦めきれないのかへりに向かって並行してくる。

明季が笑みを浮かべていた。

「あら、思ったより言うこと聞かいい子なのね。美姫、後は任せるわ」

「了解です！」

手にはスイッチらしき物体。

刑事ドラマとかで爆弾を仕掛けた人が持つてそうなやつだ。

美姫はそれを持ち、いつ爆発させようかと楽しみなのかワクワクしているのが伝わる。

「美姫……!」

「隊長、もしかして正影に教えてないんですか?」

「ん?…ああ、そういえばそうだったわね。正影、爆弾の話は嘘よ」

「は、はあ?」

「証明してあげる、美姫」

「ポチッと!」

美姫がスイッチを押した。

その瞬間、再び腹に響くような音が鳴り響く。

爆発したのがオクオオスの体の中だったので、さほど大きな爆音は響かない。  
しかし

「ギイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!!?」

オクオオスの悲痛な叫びが耳を痛くする。

全員が耳をふさぐが、美姫は「それよりも爆発♪」と言わんばかりに輝いた顔でオクオ

ロスを見ている。

叫び声は10秒以上続いた。

しかし、そんな叫び声も消えていく。

「イイイイイイイイ……」

そして、オクオロスの叫び声が聞こえなくなる。

オクオロスを改めてみる正影。

その姿は一見変わっていないかった。

だが、オクオロスの体のところどころから上がっている煙。

そして横たわって息すらしていない。

眼球は黒目の部分が異様なほど収縮し、止まっている。

「半径1キロは焼き切る爆弾だったんだけど…、あの体で押し込めるのね」

「死んだ…のか?」

あっけない終わりに未だに頭がついていかない。

あれほど自分が苦勞した相手が、たった一つのスイッチを押しただけで殺せた。

威力がすごいのは分かる。

だが…

「さっさと戻るわよ。アルツエの方が心配だわ」



「そうですね。そろそろヘリから連絡があってもいいはずなのですが」  
『至急、こちら4番ヘリ!』

「噂をすれば…。こちら恭二」

『たつた今、アルツエに到着! 敵襲にあっている模様』

悪い予感が当たつたと顔をしかめる明季。

ほかの人にも緊張が走る。

「敵は?」

『プロディターです。目視で確認しました』

「分かりました。耐えてください、こちらも向かっている最中です」

『もう1つあります。目視で確認できたのは2体!』

「……………」

言葉に驚き、口が開いたまま動かない。

明季でさえ、目を見開いた。

『どうでしょう?』

「…貴方たちはその場を離脱して。民間人等も無視、急いで他のアルツエに応援要請を」

『了解』

通信が切れると全員黙ってしまった。

第一声に何をしゃべればいいのかわからない。

安堵は出来ない。

恐怖はあおらないほうがいい。

どうすればいいかわからない。

現時点でプロデューサーと戦えるのは正影のみ。

だが、その正影は今戦うことはできない。

明季たちがどんなに頑張っても1体を相手にできるか……いや、無理だろう。

『き……えるか?』

そんな沈黙を破ったのは通信機だった。

『…チャンネル間違ったか?』

「こちら討伐部隊隊員恭二です」

『なんだ合ってたか。こっちはリリイだ』

「どこから発信しているんでしょうか、通信室は生きていますか?」

『生憎、うんともすんともいわない。これは俺個人の通信機だ』

「…違法ですね」

『彼女助けてやったんだから見逃せよ』

「裁くのは俺じゃないので」

近くにプロトがいるというだけでも生存確率は上がる。

口には出さないがそれを聞いてホツとした恭二。

「嬉々は、無事なの、か？」

『おいおい…、勘弁してくれよロストチルドレン。なんか、ずいぶん疲れているように感じるが？』

「答えろ…！」

『生きてるよ。傷心気味だがな』

「なに？」

『今、手に武器を持っているのは俺、美嘉、嬉々、梓とかいう女の計4人だ。この人数で1人も死人が出てないと思うか？』

嬉々が傷心する理由、わかつてはいたが実際聞くと辛いものがある。

しかし明季はやるべきことを行う。

「被害はどのくらい？」

『今すぐあいつらが撤退してくれればここで生活はまだ可能だぜ？』

「司令は？」

『無事だ。ここにいます。他にも50人程な』

「かわってもらえるかしら？」

『仰せのままに、隊長さん』

10秒ほどの雑音の後に通信が再び入る。

『明季か？ オクオロ——』

耳を傾けていた正影の視界が回る。

激しい頭痛も再び襲い掛かる。

「パパ!？」

「…くそ、使え、ない体——」

「パパ？ パパ!？」

「…無理ですわ。意識が切れましたわ」

明季はそれを横目で見ながら通信を切る。

「どうでしたか？」

「正影が使えない以上、私たちに勝ち目はないわ。それでもこのへりは後10分しないうちにアルツェに着く」

「作戦は？」

「決まってるじゃない」

自分の武器を強く握りしめる明季。

顔をうつむけながら静かに笑って言った。

「身を挺して時間稼ぎよ」

最強く内く

逃走と追跡

「プロデーターが攻めてくるう?」

しかめながら嬉々がリリイに聞き返す。

まだ襲撃に合う前、嬉々がリリイにアルマを持ち出した理由を聞いていた。

「断言はできない。けど俺ならそうする」

「…無理無理。リリイ、あなたの話はすべて推測ばかりで正直理解できる人なんていな

いわ。大体誰よ、そのリレグって人は?」

「これだから馬鹿は…。美嘉は知ってるよな?」

「リレグ・アルステッド。10年ぐらい前までオスの研究者たちの中でもかなり上の方だったはずだけど死んだって聞いたわ」

「…1年前にあることがあった」

周りには3人のほかに以前からリリイと知り合いだった人が、少しピリピリしながら警戒している。

といってもここはリリイの部屋であり、他に入ってくる人などいないだろう。

しいて言うなら穂香が訪ねてきてもおかしくないが今はいない。

「俺の元いたアルツエでな、スパイが見つかったんだ」

「スパイ？」

「珍しい話じゃないけどな。でな、文字通り拷問つてやつをしてどこのやつか吐かせようとしたんだよ」

「知ってどうするのよ？」

「なにもしないさ。ただ、一応やっておく。それだけ」

「…表はあんなにきれいなアルツエだったのにな」

「で、いつも通り拷問してたらリレグの下についてるってやつが出てきたもんだ。馬鹿にしてるのかと思つてあの時俺キレたぜ」

「あの時のお前怖かったな」と警戒している人が茶々を入れる。

「でな、俺たちのアルツエが襲われたあの日、またスパイを見つけたんだよ。逃げる直前だったのか荷物まとめてたな。まあ、来ると分かつてたらそりや逃げるか」

「何か言つてたの？」

「逃げるのに必死だったからか簡単に話したよ。ロストチルドレンとか、リレグとかプロデーターとか。詳しく聞こうと思つたところでアルツエがオシヤカだ。スキ突かれで逃げられるし見つけた時にはもう死んでたし踏んだり蹴ったりだったな」

「…仮にそれが本当だとしてもおかしいわ」

黙って聞いていた嬉々が口を開く。

「プロデーターは正兄を狙ってるんでしょ？なら今ここに攻めてきても正兄はいない」

「話ではプロデーターはリレグが操ってるそうだ。で、リレグってのは用心深かったらしい。基本は自分で考えないって聞いたが」

「それが何よ？」

「今この周辺で一番近いアルツエは？」

「33番のアルツエがここから400キロ…あつ！」

「今ここが襲われたら俺たち逃げる場所がないんだよ」

争い合っていることも多々あるが、手をとり合っていることがあるのも事実。

何かあったら近くのアルツエに応援を求めるのが普通。

だが、そのアルツエがいるのははるか先。

たとえ今応援要請をしても来るのは何時間も先。

「ここが潰れれば正影は帰る場所を失う。休む場所がなければいずれ疲弊しきつてるところを煮るなり焼くなりするのは簡単なことだ。時間はかかるがプロデーターがいれば確実だな」

「でも…リレグって人は一体何のために？」



「んなこと俺が知るわけないだろ。だが、俺の日常を奪ったツケを——」  
突如爆発音と主に建物揺れる。

非常ベルが鳴り、危機感を煽らせる。

リリイたちは予想通りの状況だったので動じることはない。

『通達します。現在プロデューターによる襲撃を受けています。戦闘員は指示が出次第戦えるよう、準備をしてください。非戦闘員は地下シエルターへの避難ブツツ』

オペレーターの指示が終わる前に回線が切れる。

すでにそこまで攻め込んできているのだ。

リリイが武器を持ち立ち上がる。

「どうするの?..」

「戦える準備はしたがもともと時間がなかったからな、作戦なんてない」

部屋の扉にノック音が聞こえた。

リリイが立ち上がり迷うことなく扉を開ける。

扉の前にいたのは一人の男。

大きなカバンを持ち運んでいる。

リリイは会話することなくそれを受け取ると美嘉に投げる。

「あれはっ..」

「お前らのアルマだ。お前のは斧型だから持ち出すのは苦労したみたいだぜ」  
鞆の中から出てくる刀と斧。

施設内で武器を持つのは初めてかもしれない。

「後はお前らの好きにしろ、と言いたいところだが美嘉。穂香を知らないか？」

「穂香ちゃんがないの？」

「そうか…知らないか。ならいい」

そう言うのと部屋を出ていく。

残った嬉々と美嘉はどうしたらいいかわからずただ武器を握っている。

力はあるても何に向けて使ったらいいいかわからない。

プロデーター相手では殺される。

でも敵はプロデーターのみ。

先に動いたのは嬉々だった。

「どうするの？」

「私は諦めたくない。まだ、やりたいことがある」

「武器持って逃げるっていうこと？」

「助けに行く、みんなを」

美嘉は驚かなかった。

返ってくる答えがわかっていたから。

あえて意地悪を言ってみたのだ。

「ここで逃げたら後悔する。それに…」

「それに？」

「蓮を助けないと私も死ぬじゃない！」

突然の必死な形相に美嘉が驚く。

美嘉にはいないが嬉々にはメデイアツールである蓮がいる。

しかも蓮がA.

Aが死ぬばBも死ぬ。

「美嘉」

「分かっているわよ。私としてもリイだけに穂香ちゃんを任せておくのは心配だわ」

「じゃあ行くわよ、慎重にね」

---

「しっかりして！」

「う……うう……」

真理奈ががれきをどかして人を助け出している。

他にそんな救助活動をしている人なんていない。

沢山のコンピュータやモニターが並んでたはずのこの部屋。

まだ使えそうなものもいくつかあるがモニターが並んでいた壁の真ん中が大きく抉られそこから一直線に物がすべて消えている。

すでにプロデーターは去った後なのか部屋を出る方向にも穴が見え、見るも無残な死体がいくつも転がっている。

ここには完璧な戦闘員なんておらず、一回がれきに埋もれてしまえば外に一人で出ることが不可能。

真理奈ががれきに一度埋もれた時とかすり傷程度で済んだのは奇跡としか言いようがない。

「誰か生きてますか!？」

そこにプロトを連れたリムがやってくる。

「リム?こつちよー!」

「真理奈さん、無事でしたか」

「早くして、埋まつてる人がいるのよ！」

「す、すみません。みなさん、お願いします」

「<sup>あせき</sup>梓、あなたは見張りを。私と藍<sup>あひ</sup>で他を手伝うわよ」

ガトリングを持った3人がそれぞれの行動に出る。

真理奈が1人でがれきをヒョイヒョイどける中、2人が唸りながら他をどける。

「リム、他はどうなってるの？」

「アルツエ内の職員たちはそれなりに。でも外や地下の民間人は……」

「アルマは行き渡ってるの？」

「この3人はたまたまです。任務に行く直前だったらしくて」

「はあ、プロディターに攻められたアルツエが成すすべなく陥落していく理由がわかる

わ」

やがて埋まつている状態で生きている人がいなくなる。

大抵の人は潰れて血が一面に広がった状態。

崩れたがれき等の臭いのおかげでその生臭いにおいはしない。

「リム、肩を貸してあげて。男見せなさいよ」

「力仕事があれだったからこそここに就職したんですけどね」

リムが2人、真理奈が足が潰れた人を1人、エニスが2人と5人を運ぶ。

シエルターへの道は分かっている。

いつも歩いている廊下を出来る限り早く走りながらそこを目指す。

しかし

「( )も……」

梓を先頭に進む中、廊下は崩れたがれきによつて進めなくなつていたりしている。

ガトリング使えば何とかなるかもしれないが時間がかかる以上、どかすよりなら違う道を選ぶべきだ。

だが時には道の開拓も必要である。

「少し離れてて……」

きれいな壁に向かってガトリングを打ち込む。

使いまわしがきくちやちいものではなく、本物。

きれいな壁に穴が開き、粉々になつた壁屑が宙を舞う。

「急い——」

突如、後ろに熱気が走る。

自分たちのほうに向かって放たれたものではない。

光の柱のごとくそれは垂直に少しの間延びる。

通つてきた道の床に穴が開いている。

そんな攻撃方法を持つている奴はこのアルツエには存在しない。

「嘘……」

光り輝く物体が穴から延びる。

それは手の形をしていた。

次に出てきたのは丸い形をした輝く物体。

つまり頭。

這いつくばるようにして穴から這い出て起き上がる。

体中から噴き出る汗。

「走るわよー！」

真理奈の一喝で全員の止まっていた体が動き出す。

まともに戦っても勝てる敵ではない。

ならば逃げるしかないのだ。

梓を先頭に開けた穴から走り出す。

全員が開けた通路に入った刹那、さつきまでいた通路に熱気が走る。

「梓！」

「分かってる……！」

プロデーターが後ろから追いかけてくる以上、シエルターには向かえない。

一緒に来られてはシエルターの意味がない。  
だがそれ以上の問題を梓が見る。

リムとエニスが肩を貸している4人の存在。

真理奈の場合、1人を抱えるのだから多少スピードは下がるとはいえ走れる。

だが、肩を貸しては走るなんて無理だ。

かといってここで置いていくわけにもいかない。

「藍?」

エニスの呼びかけに全員が止まる。

「先行つてて」

「何言つてんのよ?勝てるわけないでしょ!」

「今戦えるのは私と梓だけ、後ろを任されているのは私なんだから当然よ。それにこのままじゃ逃げ切れない」

「それは…」

「1人なら身軽なんだからうまくやるわ。1分くらいひきつけたらすぐ身を隠すわよ」

「…絶対ですよ?」

「リム!?!」

「藍さんを説得するには時間が足りません。このまま止まって話してはすぐに――」



「  
何が壁に衝突する。

自分たちが通つてきた通路から飛んできた物体。  
ならば正体なんて明白。

「行って！」

「……………絶対帰つてきなさいよ！」

走つてその場を藍以外が後にする。

それを確認すると藍はガトリングを構える。

不用意な攻撃は相手をどう刺激するかわからない。

今はただ構えるだけ。

壁に衝突した物体が壁から剥がれる。

体中が輝く人型の物体。

その物体が腕を使わず仰向けから足の力のみで立ち上がる。  
立ち上がったプロデーターを見て藍が疑問を抱く。

おかしかった。

確かに。

「(なんか——)」

しかし、考える時間なんてない。

プロデーターが突進してきた。

このまま進ませてはもしかするとみんなのほうに行くかもしれない。

つまりよけることは出来ない。

藍はガトリングの引き金を引いた。

## ムリゲー

「穂香ちゃーん！」

「大きな声出すとプロデ<sup>あ</sup>イターに見つかるわよ？」

「その危険を冒してでも探す価値があるのよ！」

「否定はしないけど……」

嬉々と美嘉がアルツエ内を探索している。

探している対象は蓮と穂香。

美嘉としてはこのどさくさにまぎれて穂香を救出したという事実を残してなついてもらいたい。

正影がどれだけ嫌がろうとも穂香自身になついてくれれば妥協せざるを得ないだろう。

後は少しずつ進めていけば……

「……こんな時でも煩惱が働く貴方を尊敬するわ」

「はっ!?! いけない、こんなことしてるときじゃないのに!」

顔から煩惱が働いてると分かるほどだったらしい。

斧を引きずって歩いていられるにもかかわらずそつちに頭が働くとはなかなかである。因みに歩いている風景はどこかバイオ○ザードの某斧を振り回す敵を彷彿させる。

2人はここに来るまでに6人の人に会ったのだが、みんな知らない人ばかり。

「蓮や穂香を知りませんか？」と訊いても容貌を知らないし、説明しようとする「時間がない」と逃げ出す。

後ろから死神が近づいて来ているのだ。

この行動は至極当然のものだ。

「一回シエルターを見てこない？」

「もう少し探したい気持ちもあるけれど……じゃあ遠回りしながら行きましょ？」

「それでいいわ、そしたらこっち——」

刹那、指をさした方角の床から光の柱とでもいうべきものが立ち上る。

熱気がたちこめ近づいてならないというのがすぐに理解できる。

「美嘉——」

「隠れて、早く——」

見つかったら逃げるしかない。

2人の行動は早く、すぐに柱を視界にとらえながらも隠れる。

柱が消えると息をひそめる。

しかし…

「……………」

10秒、20秒待っても敵は来ない。

罨でも張っているのかとアイコンタクトを美嘉ととる。

嬉々がゆつくりと、音をたてないようにしながら開いた穴に近寄る。

目の前まで来て息を整える。

そして覗き込んだ。

「……………」

敵は見当たらない。

頭をより深くのぞかせる。

だが、敵の影はおろか人の姿すらない。

「美嘉、大丈夫よ」

「いないの？」

「適当に撃っただけだと——」

再び音がする。

しかし聞こえたのは銃声。

それも連射して撃っただけでなく豪快な音が鳴るような武器。

嬉々と美嘉が顔を見合わせる。

もしかすると新種のプロディターという可能性もある。

だが、人だった場合そこにいるのは3姉妹の誰か。

たとえ無力であると分かっているから見捨ててて行けるほど合理的な人間ではなかった。

無言で頷くと穴を通り音がするほうへ向かう。

穴を降りることなど、ビルの上を日常茶飯事飛び越えているプロトから見ればどうということはない。

「どの階だと思う?」

「聞いている感じ、ここか1つ下だと思うけど」

プロトになったといえども音を正しく認識してどこから発信されたものか分かるわけではない。

「別れて行動する?」

「いや、通信ができないこの状況でそれは危険よ。上から探さない? もしもの時は床を崩して降りるわ」

「分かった」

嬉々を先頭に2人が音のするほうへ走る。

「こんなのムリゲーじゃない！」

藍がガトリングを撃ちながら叫ぶ。

聞いてくれるのはおそらく目の前にいる敵たちのみだ。

腕はずっと撃ち続けているためだんだん痺れてきた。

それでも集中は切れない。

一瞬でも集中が切れたらおしまいだ。

おそらくエニスたちとはかなり離れた。

ならば後はアルマを置いてでも逃げるべきである。

だが、それは極めて難しい。

「！」

周りが熱くなり始めたのを察知した藍がすぐに移動を開始する。

移動してすぐに元いた場所に高温の熱気が走る。

しかし、休む時間はない。

すぐに目の前に壁を突き破ってプロデーターが現れる。

プロデーターは藍を視界にとらえるとすぐに突進してきた。

決してよけられないスピードではない。

だが、距離があまりに近すぎた。

「ぐう……！」

左腕の一部が抉られた。

まだ機能はするが痛い。

だがのたうち回るほどではない。

アドレナリンだの、腕が痺れているせいだののおかげで多少は緩和されているのだろう。

ガトリングを持ちながらその場を離れる。

「一体ならまだ何とかかなるかもしれないのに……！」

藍は逃げ切れる自信があった。

エニスたちに言ったことも出まかせでいったわけではない。

だが、現実は違った。



相手は2体いたのだ。

身体能力が自分たちよりも高い敵。

それだけなら未だしも殺す方法が解明されていないのだ。

ガトリングを撃つて穴だらけにしてもわずかな時間稼ぎにしかならない。

だから逃げるという選択をする。

プロデーターだつて視界があるかはわからないが少なくとも壁があれば見失うことは間違いないはずだ。

だから通路を利用しようとしたのに1体を足止めすればもう1体が追いついてくるのだ。

このままではいずれ弾が切れるかそれよりも先に追いつかれて死ぬ。

命乞いの余地なんてない。

しゃべることはできるらしいが、会話が成り立ったという話は聞かない。

金は意味をなさない、誓いも意味をなさない、誘惑さえも意味をなさない。

そういう敵なのだ。

「いったいどうしたら…」

刹那、先にある壁が崩れプロデーターが姿を現す。

「先回りは無しでしょー！」

目の前に現れたのは突進してくるタイプのプロディター。

なにやら光線を撃ってくるプロディターはさつきから姿を現してはこない。だが後ろにいるのは間違いないだろう。

どちらを相手にするべきか？

一瞬迷ったがすぐに行動に出る。

「(突進してくるタイプなら一回避ければ…)」

前に走る。

距離は約10 m.

見ながら避けようと考えていては間に合わない。

敵が突進の構えをする。

何回も見ていた藍にはその構えが分かった。

ガトリングを手放し、滑り込むような形で回避をする。

突進中に進行方向を変えられるわけではない。

たとえプロディターであつたとしても。

確証なんてない。

だがそれに賭けるしかなかった。

地面に胸が当たると同時に真上をプロディターが通り過ぎる。

「よし！」

心の中でギリギリとはいえ助かったことにガッツポーズをとる。

しかし、体は行動をやめない。

すぐに態勢を立て直しながらガトリングを手に戻す。

時間にしてわずか2秒。

おそらく次はもう無理だ。

会話が成り立たなくても頭はいい。

これも考慮したうえで突進してくるにきまつてる。

これ以上、あいつを10m圏内に近づけてはならない。

ならないはずだった。

態勢を立て直した藍の目に映ったものが、絶望を煽る。

「……」

目に入ったのはこちらを見るプロデーター。

突進をして奥の壁にぶつかっていると踏んでいたはずのプロデーター。

自分と敵の位置はただ逆転しただけ。

つまり10m圏内である。

「(どうするまた避ける?でも同じ作戦は二度も通用しないさっきの今じやなおのこと



自分を鼓舞するため、大声をあげる。

プロデーターもそれと同時に動く：はずだった。

突如、天井の壁が崩れ落ちる。

藍の真上の天井にもひびが入り始めるのを理解する。

すぐに藍は回避行動をとったがプロデーターは気づくのが遅すぎた。

藍が背中を見せた瞬間、プロデーターの真上の天井が崩れ落ちる。

潰されたプロデーターの姿が見えなくなった。

何が起きたかわからない藍の前に天井を崩した張本人たちが姿を現す。

「藍ー！」

「…嬉々と美嘉？」

「大丈夫？」

2人を見た瞬間、藍がその場に崩れる。

危険であることに変わりはないが、見知った顔が目の前に現れたことに安心を覚えた。

「ちよ、ちよつと！本当に大丈夫!？」

「ええ…大丈夫。少し力が抜けただけだから」

「敵は近くにいないわよね？」

「……そうだ、早くしないと！あなたたちが崩した天井の下敷きになったプロディターがいるの」

「私の攻撃がプロディターに届いたってことね」

「斧をただ地面にたたきつけただけのくせに。なんならここで足止めしてよ」

「私はまだ死ぬわけにはいかないわ、穂香ちゃんのためにも！」

「ためにもっていう点では死ぬべきだと思うんだけど……ん？」

自分の周りの空気が熱きなっていることに気づく嬉々。

時間さえあれば美嘉にも嬉々にも理由が分かっただろうがそんな時間はない。

いち早く藍が何が起こるか理解する。

「2人も避けて！」

T字の通路だったのが幸いし、藍が嬉々と美嘉を横に突き飛ばす。

藍も続いて無我夢中で通路に滑り込む。

アルマを持ち出す暇なんてなかった。

藍が避けてすぐ通路が光に包まれる。

藍のガトリングが一瞬にして消える。

「嬉々、藍。大丈夫!？」

「私たちは平気よ！そっちは？」

「私は…ちよつとやばいわ」

高温の光線が消えていく。

床が消えてそれぞれを分断するがプロトにとって障害になるような距離ではなかった。

だが、障害となるものがいた。

美嘉1人、嬉々と藍2人の状態になった3人。

美嘉の方にはどういうわけかプロデーターがたっている。

距離が近い。

だが、幸いだったのがそこにいたプロデーターは接近戦タイプの方ではないということ。

危険であることに変わりはないが。

「美嘉、今——」

嬉々が助けに向かおうとしたのをもう1体のプロデーターが止めに入る。

「え？」

「プロデーターが…2体？」

「嘘でしょ!？」

「嘘じゃないわ。美嘉、あなたの方にいるのは熱気の光線を出してきた方よ。撒こうと

思えば撒けるはずだわ」

「……分かったわ。嬉々、藍。シエルターで落ち合いましょ」

「美嘉?!」

嬉々の言葉など聞くことなく美嘉はその場を走って後にする。

賢明な判断かは分からないが間違った判断ではないだろう。

「嬉々、大丈夫よ美嘉なら。それより問題はこつちよ」

「……分かった、美嘉のことは信じるわ。で、こいつは?」

「肉弾戦ばっかりよ。主に突進、当たれば肉が容赦なく抉れるわ」

「了解、藍は下がってて」

嬉々は刀を構えた。



## 他を想う

「もうすぐです、しっかりしてください！」

「う……ん」

肩を貸している2人の女性に声をかけながらできる限り早く歩くリム。

藍が囹になった後、リムたちは敵に会うことなくシエルターに進んでいた。

道がふさがっていたことも多々あったが無事、もうすぐのところまで来ていた。

「…」

そんな中、未だに後悔しているのかエニスには浮かない顔をして進んでいた。

絶対帰ってくることを条件に行かせたがやはり間違っていると思う。

藍を信用できないわけではない。

ただ心配なのだ。

「…リリイ」

前を進んでいた梓が口を開く。

奥からリリイが歩いてきた。

その顔はどこか疲れていて、余裕ぶっているように見せているが間違いない。

「なんだ、変わったメンツの集まりだな」

「この状況に決まったメンツが集まるなんてそうそうないと思うわよ？あなただつて一人じゃない、いつも一緒にいた人が見えないけど」

「死んだよ」

つい言ってしまったことに「しまった」と真理奈が思うが遅い。

口走ってしまったことを消すことはできない。

こんな状況で周りにいつもの人がいなければもしものことを考えて言わないようにするべきだった。

「…ごめん」

「気にするな。あいつらの力不足だった、それだけのことだ」

「ということはプロデューサーに？」

「顔も見えないけどな、突然周りの気温が上がったと思つたら避ける間もなく死んだよ。エリア22の教訓を忘れてなくて助かった」

「…冷たいですね」

「そうした方が生き残れる」

仲間が死んで何も思わない人間は存在しない。

もし、何も思わない場合はそいつを仲間とは思っていないかつたということだ。

リリイは死んだ人たちをどう思っていたのか。

「ところでお前ら、穂香を知らないか？」

突然かけられた意外な質問に全員が目丸くする。

「リム、真理奈。お前らオペレーターなら知ってるだろ？」

「いくらオペレーターでも施設内での行動は知りませんよ」

「…このアルツェ内にはいないわ」

リムは知らなかった事実真相に真理奈のほうを向いて驚く。

訊いた本人であるリリイはむしろ「やっぱり」といわんばかりにため息をつく。

だが、真理奈にはそのため息には安心が含まれているのが分かった。

「生きてるのか？」

「もちろん、元気にしてるわ」

「ここにいないということはオクオオスの討伐にでも向かったんだろ？それでも元気だ  
と？」

「リアルタイムである程度なら分かるわよ。保証するわ」

「……なるほど、あの男も哀れだな」

あらかた理解したリリイが恭二に同情する。

もちろん口先のみだが。

少しとんだ話にリムや梓はついていけず疑問符を頭に浮かべている。

「リリイ」

突然口を開いたエニス。

「面識はあるが2人は知り合いというほどでもない。

「なんだ？」

「私の名前はエニス。いきなりだけどこの2人をお願いできる？」

「何故？」

「私は戻らないといけない」

その言葉に顔をしかめるリリイ。

「おそらく彼にとっては理解が及ばないことだからだろう。

「このまま少し進めばシエルターにつくのにわざわざ危険を顧みずに戻る。

「シエルターも危険なのか？」

「藍を助けに戻る」

「…馬鹿の類か」

「何とでもいえばいいわ。でも私は戻って藍を助けたい」

「エニス…！」

「梓、あなたはみんなと一緒に先にシエルターに行つて。藍を見つけたらすぐ戻るから」

「それが死体でもか？」

リリーの言葉にエニスの目つきが鋭くなる。

「ふざけたこと言わないで」

「別にお前がどこに行こうと勝手だ。俺にはその行動が理解できないが勝手だ、だけどもたまにいるんだよ。見つけた時にはすでに死んでいて、そこからすぐにも逃げればよかったにもかかわらず座り込んでいたせいで死ぬってやつがな」

「藍は死んでない」

「みんなそう言う」

「死んでない」

「…好きにしろ」

リリーに決定権なんてない。

だが誰にもエニスを止める権利すらない。

エニスが2人をリリーに預ける。

「エニスさん、藍さんを信じませんか？」

「リム、私は信じてるわ。でもあの子だけに苦労させるわけにはいかない」

「……………」

「私も……！」

「梓、あなたは残って」

「そんな……！」

「今ここをあなたが離れたら瞬時に動ける人がいなくなるわ。それはマズい」

「でも……！」

「お願いね」

それだけ言うとうエニスは来た道に戻っていった。

だれも止める人はいない。

梓でさえ、それは同じことだった。

「さっさと行くぞ」

リリイだけがいつもと変わらず、その時を過ごしていた。

「あああああああ！」

雄たけびともいえる声を上げながら嬉々がプロデーターと競り合う。

便利な体なのか何回か斬りつけているうちに相手の腕が刀の形に変形したのだ。

その刀は腕からそのまま生えているようで鐔も柄すらもありはしない。

もつというなら色すら違いが見当たらず、どれだけの長さなのかすらよくわからない。

しかし、やはり雄たけびだけでは力の差を埋めることは叶わない。

嬉々が上から斬りかかっていたとしても押し返されてしまう。

それだけ身体能力にも差があった。

「藍ー」

嬉々が合図をすると同時に藍が動く。

プロデーターに向かって手のひらサイズの小さな物体を投げる。

プロデーターの視線がそちらに向かう。

それと同時に爆音とともにプロデーターの周辺が爆発に包まれる。

決して広くはない通路での手榴弾の使用。

自殺行為である。

戦っているところは1階ではないため、下手をすれば自分たちのいる地面も崩れ落ちそれに対応できなければ最悪死ぬ。

距離だって決してあるわけではない。

ただの手榴弾ではないのだ。

対オウステム使用になっているため爆発の有効範囲だって広がっている。最低でも距離は20m以上はほしい。

「逃げるわよー！」

敵の足場は崩れた。

手榴弾だって見た感じはかなりの至近距離で爆発した。

だが、プロデーターは死なない。

良くても一時的に霧散したにすぎない。

すぐに体が再構築される。

だが、それでも時間稼ぎにはなる。

プロデーターはこういうわけか時間が経つと消える。

最短で10分、最高で30分以上。

以上となっているのは実際にその場で生き残った人間が存在しないから。

「これなら——」

相手は1体。

美嘉が心配ではあるが少なくともこちらは2人に対してプロデーター1体なのだ。

逃げ切れるはずだった。



砂煙激しい空間からプロディターが姿を現す。

嬉々がいち早く反応し突進を刀で抑える。

「ぐ……！」

刀一本で抑えるとなると腕に対する負担が激しい。

ミシミシと腕の骨が悲鳴を上げるのが分かる。

真理奈とメデアアトルになっておけばよかつたなと思う。

「ゴギイイイイイイイイイ……！」

「再生速度速すぎじゃない？」

「ヴアギ？」

嬉々が競り合っていると後ろから聞こえる音。

すぐに嬉々の顔の真横を小さな何かが通り過ぎる。

プロディターに当たると小さなくぼみができる。

力が弱まったのを確認した嬉々は力いっぱい押し返す。

「ちよつと馬鹿なの?!」

「大丈夫よ、ガトリングの反動と比べたらこんな玩具ハンドガンどうってことないから」

「心臓に悪いから本当にやめて……まだつば競り合っているほうがずっとマシだわ」

「考えとくわ！」

再び懐から手榴弾を取り出し投げつける藍。

いつもはこんな武器を持ち歩くことはない藍だが武器庫でアルマを準備していた時に緊急事態に陥ったのだ。

一応のため手榴弾も持ち歩くことにしていた。

それにプラスして嬉々から貫った手榴弾もあるのだ。

嬉々のはリリイが用意したものの中に入っていたのだ。

数は結構ある。

しかし予想外のことが起こる。

突如、敵の腕が異様な動きを始めたと思ったら投げた手榴弾を跳ね返したのだ。

「ちよ!？」

「わお」

範囲内には入らなかったが敵からも離れた位置で爆発する。

視界が悪くなったという結果のみが残る。

つまり状況は最悪だ。

「藍、下がって」

「でも……!」

「何度も反射的に相手に反応できるとは限らないわ。私が止めるからあなたは先に……」

「……………わかった」

藍に今アルマはない。

他の武器というのはあくまで補助用だ。

これを主体に戦うのは美姫くらいだろう。

全然これに頼つてこなかった藍は扱いだつて慣れてはいない。

手榴弾となれば敵が何かしてきてもすぐに対処ができるわけではない。

それを理解していた藍は嬉々の指示に従う。

残つて戦いたいという気持ちもあつたがこれ以上迷惑はかけられない。

藍が後ろに下がつたのを確認して構える嬉々。

距離があれば藍でも避けることはできる。

自分のことに集中できればかなりやりやすくなるのは間違いない。

だが2人は思い違いをしていた。

相手はプロデーター。

異常な身体能力だけでなく、思考回路も持っているということ。

集中が目の前に向かつていた嬉々たちは出遅れてしまった。

藍の真上の天井にひびが入る。

藍は先に疑問符が浮かび、嬉々に助けを求めるのを忘れてしまった。

天井が崩れてそこからプロデーターが現れる。

「!」

嬉々も天井が崩れた音に反応するが遅い。

距離があまりに離れすぎている。

走って逃げようとする藍だが天井のがれきは避けられても、プロデーターの追撃を免れるには距離があまりに近すぎた。

藍には終わりだと理解する暇もなかった。

だが、その必要はなかった。

藍の視界にはプロデーターしか入っていないなかったに違いない。

しかし、嬉々は違った。

彼女の視界に映ったのは藍とプロデーター、そして…

「ギイ…グ!」

プロデーターの頭にかたい物体が直撃する。

プロデーターは嬉々のさらに後方に跳ばされた。

「藍、遅くなつてごめんね」

「…エニス?」

ガトリングを抱えたエニスが立っていた。

## 1人

シエルター。

中には40、50人ほどの人が身を寄せ合っている。

残念ながらいるのはほとんどがプロトか職員。

一般市民は別のシエルターに入っていることを祈るしかない。

そんな中そわそわと動き回る1人の男性。

名前を蓮という。

彼は心配している。

自分のことではなく、嬉々のことだ。

幸い仲介者ムテイアートルになっていたおかげで生きているということとはわかる。

だが、それだけでそれ以上のことはわからない。

あともう一つ言えることがあるとすれば瀕死の状態ではないということぐらいだろうか。

うか。

「蓮、もう少しスマートになったらどうだい？」

「…そんなにそわそわしてるように見えるか？」

「一目瞭然だよ」

太郎がこらえきれずにとうとう言った。

別に気持ちかわからないわけでもない。

自分のメディアアツールがどういふ状況かわからないのだ。

メディアアツールとは、その人にとって最愛の人であったり大切な家族で会ったり、親友であったりと何かしら意味を持っていることが大半。

彼らはこれを自分の強さを向上させるというより、常にお互いを感じあうために使っていることが多い。

嬉々はどう思つて蓮のメディアアツールになつたかは知らないが、蓮は嬉々が好きはずだ。

しかし、支給武器<sup>マ</sup>すら持たずに外に出たつて何もできることはないだろう。

プロディターに見つかれば即死が免れない上に、蓮が死ねば嬉々も死ぬのだ。

まだここにとどまっているだけよしとでもいうべきかもしれない。

「彼女はアルマを所持しているのだろうか？ならば信用するべきではないか？」

「リリイはそう言つてたが……」

ついさつき、リムたちがシエルターにたどり着いていた。

リリイ曰はく、美嘉と行動しているようだが2人の力をもつてしてもぶつかり合えば

逃げるのが最善策。

というよりそれ以外選択肢はない。

他にも聞きたいことがあつたがリリイは適当に蓮をあしらつてしまった。

今は何を考えているのか少し離れたところで一人座り込んでいる。

「心配するなという方が無理がある」

「それは否定しないが、もつとジエントルマンのように……」

そこに訪問者が現れる。

シエルターの扉がプシツと空気が漏れる音を立てて開く。

全員の目が入り口にくぎ付けになる。

そこから入ってきたのは………美嘉だった。

「ここは……天国？」

「美嘉！」

先に駆け寄つたのは真理奈だった。

美嘉の手から引きずつていた斧が零れ落ちる。

「生きて……ここまで帰つてこれるとはね」

「ボロボロじゃない！一体どうしたの!?それに嬉々は？」

「嬉々は、今は藍と行動してると思う」

「藍、生きてるの…!？」

「でも状況は最悪よ」

ボロボロの体に鞭を打つ。

まだここで休んではいけないと。

「最悪とはどういうことだ？」

「司令…、敵は、プロデーターは2体侵入しています」

「…!」

「そのうちの1体に追い掛け回されて…そのせいで嬉々たちとはぐれてしまいました」

「司令」

「事態は最悪ということだな…。どうにかして外と連絡を取りたいものだが」

シエルターにだってもちろんその設備はある。

だが、こういう時に限って機能しなかった。

外での攻撃で何かがおかしくなったと考えるのが妥当だが最悪だろう。

美嘉の目がある1人に向く。

そうなることを予期していたかのようにリリイは美嘉を見ていた。

あからさまに嫌な顔をしている。



「リリイ、持つてるなら今出せばお咎めなし。もしかすると英雄かもよ？」

「…一体どこからその情報は持つてくるんだ？」

「じゃああるのね？」

しぶしぶ隠していた通信機を取り出す。

青羽は「なんでそんなものを…」と驚いているがラグフィートは驚くというより、いいものを見つけた子供の目になっている。

すぐに電波の周波数を合わせ始めるリリイ。

「私が伝えられる情報はこれくらいです」

「ご苦労だった、とりあえず今は休んでてくれ」

ラグフィートと青羽がその場を離れる。

代わりに梓や蓮が近づいてくる。

「…蓮はシエルターにいたのね。嬉々が探してたわよ」

「嬉々は無事なんだな？」

「最後に見たときは怪我という怪我はしてなかったわ、それに藍も一緒だった」

「藍は…無事…？」

「一応、ただアルマを失ってたわ」

息をのむ梓。

「大丈夫よ、梓。エニスも向かったんだから、きつとすぐに帰ってくるわ」

「もう、失いたくない……」

「……………」

「お母さんも、お父さんも、お兄ちゃんも、みんないなくなったのに……これ以上、いやだ……」

「何言ってるの、一番あの子たちを知っているのはあなたでしょ？あなたが信じないで誰が——」

その時、シエルターの開く音がした。

「エニス、なんで……」

突然の出来事に頭がついていかない藍。

死んだと思う間もなかったのだが、危険だったのはあの一瞬でも理解はできた。

だが確かに逃がしたはずのエニスがいることは理解できない。

「なんでって、あんなに大きな音でドンパチやってたらまずそっちに向かうわよ」

「そうじゃない！みんなとシエルターに逃げたんじゃないの!？」

「みんなもうシエルターに着いてるわ。だから私が助けに来たの」

「だからって…」

「2人とも、話はあとよ！それより逃げるわよ！」

何か言い合っている暇なんてない。

プロデーターはただ頭を強く打っただけ。

そんなの傷でも何でもない。

すでに臨戦態勢に入っているのが伺える。

2人の反応を伺う前に嬉々は手榴弾を構える。

それに反応した藍がすぐにエニスを連れてその場を走り出す。

エニスは突然引っ張ってきた藍の行動に疑問符を浮かべながらも一緒に走る。

と、後ろから爆音が響く。

その行動にエニスがギョツと驚く。

「あの距離であんなことしたら自殺行為よ!？」

「ああでもしなくちゃ私たちはもう生きてないもの！」

「黙って走って！」

走って逃げる3人。

今回は当たり所が良かったのか相手が爆発の後動きを見せない。

距離が離れていけば今戦っている敵は攻撃を行えない。

夢中で走り続ける3人。

どのくらい時間が経ったのかなんてわからない。

だが、後ろに敵の姿はすで見当たらなかった。

「……撒いた？」

「そう……みたいね」

藍がエニスの方に顔を向ける。

エニスは何を言われるのかと思った。

だが、エニスの方を向いた藍の顔は泣いていた。

「なんで……なんで……！」

「……藍」

「私が囮になるって言ったのに、信じてくれるって……」

「……………」

エニスは黙ったまま藍を抱き寄せる。

その行動に抑えがきかなくなったのか藍の目から涙が溢れ出る。

「1人だけ怖い思いさせてごめんね」

「怖かったよお……………」

嬉々ではダメなのだ。

藍にとつて最も大事なのはエニスと梓。

彼女が心から許せる相手はエニスと梓のみ。

嬉々も大事な友人の1人であるが違う。

三姉妹といわれるほどよく一緒に行動する3人。

この代わりは誰にも務めることはできないのだ。

「帰ろう、梓も待つてる」

「うん」

プロデーターは撒いた。

ならばシエルターにいくのを妨害する敵はいない。

崩れてどこだかわからない通路を慎重に歩き、自分たちの居場所を理解しようとする。

「(ハハ)は…」

突如、開けた場所に出た。

自動販売機や、電子掲示板が並ぶ。

そしてその部屋の一番の特徴である広いカウンター。

任務を受注する部屋だと3人は知る。

しばしの間、3人は思わず立ち止まってしまった。

今まで賑わっていたこの部屋。

だが、今は違う。

無残にも壊された自動販売機。

ガラスの破片となった電子掲示板。

カウンターの途中で隠れていたのか3、4体見える死体。

立ち込める悪臭。

自分たちの日常が1時間も経たないうちに簡単に壊されていた。

「…急いそう」

嬉々の呼びかけに我を取り戻す2人。

嬉々の家族は生まれた時から正影のみだ。

初めてプロデーターが現れ人々があらゆる物を失った時、彼女はプロトとしての育成

を受けていた。

一般人と違って失ったものなどほとんどなかった。

今、嬉々の頭の中はシエルターに逃げることに、それしかなかった。他のことを考える容量はすでになく、正直心身ともに参っていた。仕方ないのかもしれない。

だが、それは命取りになるということすら頭から離れていた。いや、おそらく警戒していても結果は変わらなかった。

だが自分を責める。

突如地面が崩れる。

何の前触れもなかった。

「[!:]」

驚く3人の目に入ったのはプロディター。

まだ諦めてなどいなかったのだ。

地面に足が着く前にプロディターが動いていた。

プロディターの刃が腹をきれいに引き裂く。

「ガハッ……」

「エニス！」

完璧に油断していたエニスにそれを止める手立てなどなかった。

地面に足をつけるとエニスがうづくまる。

嬉々はその時、確かに口角が上がっているプロデイターを見た。

「しっかりと！」

「しくじっちゃった…」

腹を抑えても出血は収まらない。

傷が深いのが伺える。

「藍、エニスを連れて——」

プロデイターは休む間など与えない。

3人に跳びかかる、が標的はエニスではなかった。

嬉々が刀で攻撃を防ぐ。

「なん、で…?」

お前は後でいいとでも言わんばかりにエニスを無視する。

藍は嬉々の手助けに入ろうとするがプロデイターと嬉々の距離が離れない。

手榴弾は使えない上にハンドガンでは嬉々に恐怖を与えてしまう。

かといって素手で向かえば即死。

「藍、エニスを連れて逃げて！」

「馬鹿言わないでよ！そんなことできるわけないでしょ!?!」

「最良の選択よ！いいからさっさとこの場を離れて！エニスもいつまで——」



言葉を遮るようにプロディターの刀に力が入る。

だが、そこまで聞ければ十分だった。

藍も理解している。

エニスはこのまま放っておけばあまり長くはもたない。

だが、嬉々を放っていくわけにも…

「どうしたら…!」

「藍…あなた、だけでも…」

「エニスまで何言ってるの!?!絶対に嫌よ!」

「…なら」

「なら?」

「う…」

ゆっくりと起き上がるエニス。

腹から勢いよく出血するが気にしない。

止めようとするエニスをよそにガトリングをがれきを使って固定する。

「藍、言うとおりに…お願い」

「何する気?」

「あいつを、生き埋めに、してやるわ」

「ハの……」

嬉々が力いっぱい押し返そうとするが全然刃がたたない。

嬉々も焦りを感じ始めていた。

エニスたちも逃げずに何かやっついていてイラつきさえ感じる。

そんな時に嬉々の耳に声が聞こえた。

「あああああああああー」

藍がハンドガンを構えて走ってくる。

声にプロデーターも反応する。

これでは殺してくださいと言っているようなものだ。

「避けて！」

そして意味深な発言をする藍。

嬉々には何を言っているかわからない。

プロデーターは標的を藍に変えていた。

避けてと言いたいのは嬉々の方だったのだが…。

藍が突如スライディングの形で姿勢を低くする。

その後ろには引き金に手をかけたエニスがいる。

「ば……」

何をしたいのか理解した嬉々は急いで横へ体を避ける。

プロデーターにも何がしたいのか分かったのだろう。

わずかだが動きが鈍ったのが分かった、が勢いよく飛び出したプロデーターに避ける  
すべはない。

ガトリングが火を噴く。

人が抱えているのではなくがれきに固定されているのが幸いしてかプロデーターの  
体から照準が外れない。

「ギギギギギギツゴゴイイイイイイ!?」

叫び声をあげながら藍を飛び越えエニスに跳びかかる。

いや、エニスのすぐ近くで火を噴いているガトリングに。

危ないと察知したエニスが体を無理に動かしガトリングから離れる。

引き金にはすでに細工がしてあり、手で引く必要性はない。

エニスと避けるとプロデューサーがガトリングを突き飛ばした。

それだけ脅威ということだったのかもしれない。

そして突き飛ばされたガトリングはなおも火を噴き続ける。

宙を舞うガトリングがあらゆるところを誰だろ々と関係なく撃ち続ける。

全員が意味もないにもかかわらずうずくまり頭の上に手をのせる。

そしてガトリングが地面に落ちる。

落ちたガトリングは上を向いていた。

開いた天井のさらに上の天井にそれが直撃する。

崩れてくる天井。

それに気づいたときにはすでに遅かった。

「エニスー」

藍と嬉々、エニスが1人の状態で分断される。

固定されたガトリングは撃つのをやめない。

そうしている間にも完全に分断されてしまった。

まだそれだけなら気を付けながらもがれきを飛び越えればよかったかもしれない。

だが、ガトリングの角度が徐々に変化する。

嬉々たちが立っている位置の真上。

そこにガトリングの弾が直撃する。  
生きるためにも選択の余地はなかった。

「藍、こつちー！」

とどまろうとする藍を嬉々が無理やり引つ張る。

ギリギリのところまで通路に逃げ込んだ。

だが、それと同時に通路の出口も完全にふさがれる。

「エニス、エニス！返事して！」

だが距離が長い。

奥の音など一切聞こえなかった。

「いや…、エニス！エニス！」

「…うまく、いったみたい…ね」

エニスがガトリングの隣に座り込む。

すでに弾は尽きていたため、撃とうとガトリングの回っている音だけしかしない。ガトリングの角度を微調整するため腹に力を入れていたので出血がひどくなっていた。

限界なんて自分がよくわかっている。

少し離れたところで何かが起き上がる。

プロデーターだ。

恨めしそうに崩れたがれきの山のほうを向いている。

目も口も今は見当たらなかつたのにエニスには分かつた。

「ごまあ、みやがれ、ね」

プロデーターがゆっくり歩く。

エニスに手が残ってないことを見透かしているかのように。

「藍、梓……」

走馬燈というやつだろう。

あらゆる物が頭の中をかける。

生きたい、けど不思議と怖くはなかつた。

「楽しかったわよ……」

エニスの視界が暗くなった。

## 押し寄せる悲しみ

「お母さんも、お父さんも、お兄ちゃんも、みんないなくなつたのに……これ以上、いやだ……」

「何言つてるの、一番あの子たちを知つてゐるのはあなたでしょ？あなたが信じないで誰が——」

その時、シエルターの開く音がした。

そこにいたのは皆がよく知る人物。

「嬉々、藍！」

開いたシエルターから入つてきたのは2人。

真理奈が2人に駆け寄る。

「よかつた！」

真理奈が嬉々に抱き着く。

前のように力を入れすぎるなんてことはなく、骨が折れるようなことはない。

遠目から蓮も嬉々の無事を確認できてホツとした。

「リリイ、どうよ……生きて帰つてきたわよ！」

真理奈の言葉に横目で2人を見る。

手は明季たちと連絡を取るため通信機を調整をしていた。

そしてみんなが帰還を喜んでいる中、リリイは確認はないが理解していた。

隣では梓も何も言わず藍に抱き着く。

今の今までずつとまた失うのを心配していた梓。

これほど嬉しいことはないだろう。

しかし、2人の顔は浮かばなかった。

「2人とも、エニスは見なかったの?」

真理奈の問いかけにピクツと反応する。

「さっきあなたたちを探しに行くって言ってどこか行っちゃったのよ」

「2人がここにいるなら、エニスは1人。今度は私たちが…」

「聞こえるか?……………チャンネル間違ったか?」

丁度、リリイが調整を終えて明季たちと連絡を取り始める。

嬉々と藍は黙ったままである。

「真理奈、ちよつといいか?」

そこに横から蓮が入ってくる。

「……………蓮」



「生きててくれて本当によかった」

蓮は活き活きしているが嬉々には相変わらず喜びの感情が見えない。

それほど疲れ切っているのかと、ぼろぼろの姿を見て無力な自分を責める。

「藍、アルマは……?」

梓もおそらく蓮と同じことを思った。

疲れているのだと。

美嘉の話通りならばプロデーターと一戦交えてきたのだ。

それでもおかしくはないだろう。

「アルマ犠牲にして生きて帰ってこれたなら儲けものよ、梓」

「そうだね……でも藍はもう戦えないから私1人で——」

「また命を捨てるのか?」

リリイが近づきながら梓に問いかける。

手にあつた通信機はすでに見当たらず、ラグフィートが明季と話しているのがわか

る。

梓はリリイの問いかけに顔をしかめた。

「藍は帰ってきたわ。エニスも無駄な戦闘は避けてるはず……」

「ああ、帰ってきたな。こればかりは予想外だったよ。だけどお前らこの状況にあてら

れて視野が狭まってるぞ」

「どういう意味よ?」

「そこまで暗い顔した2人がただ疲れているだけなのか?」

その言葉に全員がハツとして改めて嬉々と藍を見る。

誰にでも分かる。

プロデーターから命からがら生還してきたのだ。

それなのに喜びなんて少しも見えない。

ただ疲れているだけではないなんて客観的に見れば一目瞭然。

その場にいる全員が事実から目を背けていたのだ。

「嘘……………でしょ?」

梓の顔から血の気が消えてゆく。

梓に次の問いを投げかける必要などなかった。

藍の足から力が抜け落ち、そのまま地面に崩れる。

そしてただ泣いた。

嬉々もそれにつれられるかのように声を押し殺そうとしながらも嗚咽が出る。

「嘘……………嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘!」

言葉で否定する梓だが藍はそれを否定しない。

ただ泣くだけ。

「腹に一太刀入れられて…後は分からない」

「死んだところを見たわけじゃないんでしょ!?!なら…!」

「分断されたとき、エニスはプロデーターと一緒にだった…」

「…!」

嬉々からの言葉が未だに信じられない。

何か悪い夢でも見ているかのようだ。

梓の体からも力が抜け、その場に崩れ落ちる。

「…あの」

後ろから青羽が話しかけてきた。

遠慮がちなのは言うまでもない。

「10分以内に正影たちが到着するわよ。それまでみんなここで待機、戦える人はプロデーターの襲撃にあってももちこたえられるように各自準備しておいて」

「正兄は?」

「無事だよ、あまり状態は芳しくないみたいだけど」

「ここでもし、エニスも生きていたら彼らは素直に喜んだだろう。」

だが、そんなこと今はできない。

大事な人が死んでしまった。

そんな状況では1人の生存が確認されても素直に喜ぶことはできない。

「梓、つらいことを言うようだけどいつでも動けるように準備して、今戦えるのはあなたを含めて4人なの。しかもそのうち3人が疲労している、万全なのはあなただけよ」

「エニスは…死んでない」

「……………」

青羽が梓に手を伸ばす。

しかし、その手は梓をつかまずただ落ちているだけの彼女のアルマをつかんだ。

一応プロトではあるが訓練をせず、事務仕事に没頭していた青羽にとっては少しばかり重い装備。

それを持ち上げる。

「蓮」

「？」

「ないよりはマシなはずだよ」

蓮にガトリングを渡す。

持ちあげてみた蓮だが、見た目ほど重いものではないらしい（彼にとつては）。

「でも、青羽さん…」

「私たちプロトが使っているのはロストチルドレンとは違って専用の武器じゃないよ、支給された武器」

「……………」

「本当なら藍か梓に使ってもらいたいけどこの状態じゃ無理。使い勝手が違うのは目に見えてると思うけどもしもの時はお願いだよ」

「……………分かった」

蓮には頷くほか選択肢はなかった。

彼の手元にアルマはない。

あるのならばたとえ使い慣れてなくても装備する。

それしかプロディターと戦うすべはない。

嬉々を死なせないためにも1人でも多く戦闘員がほしいのだ。

最も、使い慣れていないせいで力を発揮できず、死んでしまつては本末転倒もいいところだが。

藍と梓を休ませようと真理奈が彼らを移動させる。

「正兄……」

誰にも聞こえないほどの声量。

でも確かに彼女はそう言った。

「助けて、正兄……」

強い風が吹き荒れる中、幾人かの人へりから降りてきていた。

「状況は!？」

「分かりませんが、5分ほど前から音信不通です」

「急いだほうがいいわね……」

目の前で煙を上げるアルツエを見ながら明季は言う。

彼女の手には新品同然とでもいえるほど綺麗な鎌があった。

刃の部分から手で持つ部分まですべてが綺麗に手入れされている。

血なんてどこにもついておらず、損傷も見当たらない。

戦いで使っているのかと問いたくなるほどである。

「美姫、鈴。あなたたちは安全が確認できるまでそこで正影の護衛を、へりは自由に使つ

て。穂香は私たちと来なさい」

「なんで？」

「今のあなたは真理奈と繋がってる、その腕力は必要になるわ。それとね……」  
鎌が上空を指す。

その先に目をやると視界に入ったのは羽をもったオウステム。

大きさからみれば大したものではないが、見た目は蝶だろうか。

足が8本見えるが。

「私の鎌はアルツェ内では扱はずらいのよ、通路が狭いところもあるからね。美姫はスタンバトンを持つてるけど手榴弾を使われちゃたまったものじゃないわ、鈴も槍だから私と同じ。本来なら恭二一人で十分なんだけど今は仲介者《メディアートル》を持っていないただのプロト、正直保険がほしいの」

「アルツェ内にオスの侵入もありえますかね？」

「大型は無理だろうけど小型は油断ならぬわ。1匹2匹なら問題はないけれど」  
「一般市民は？」

「…悪いけど今は手を回せるほど人手はないの。次回しね」

「了解です……」

何か言い返したかった恭二だが、明季の言っていることは正論に他ならない。

勿論一般市民から見れば違うかもしれない。

だが、プロトとして、討伐部隊の隊長としてみれば正論。彼らの役目は人を助けることではなく、敵を倒すこと。

人助けは優先されないのだ。

「行くわよ」

そのあとに言葉はなかった。

3人がアルツエの入口に向かって走ってゆく。

地上にある家は大体5割だろうか。

倒壊、半壊が見当たる。

人が生き埋めになっているのか助けを呼ぶ声がある。

何に殺られたのか胸を貫かれて横たわっている人もいる。

いつもの穂香なら間違いなく助けに行っただろう。

だがすべて明季に止められる。

その時、穂香は納得がいけないといらだちを感じるよりも、明季の意見に同意していた。

彼女にだって守りたいものはある。

人の命を秤にかけるのは嫌いだ。



だが、赤の他人と知り合いまたは家族、助けるならだれを選ぶか。走って1分、ほとんど障害などなく建物の入り口にたどり着く。

いつもなら立っている警備員も当たり前ながらいない。

それどころか入り口にはぼつかりと穴が開き、誰の侵入さえも許していた。

「自分の身は自分で守るように」

「心得てますよ」

「私はパパのためにもまだ死なないもん」

「…なら行くわよ」

3人は戦場へと足を踏み入れた。

## 不安

「人影は5つといつたところ…か」

双眼鏡越しにヘリを眺める和人。

日差しは決して強いわけではないのにサングラス。

一応度が入っているらしい。

『つまり敵は4人か、油断するなよ』

「勘違いするなよ。人は確かに5人いるが敵は1人もいねえよ」

『仲間には思えないが?』

「お前は蟻を見つけたら敵だと識別するのか?」

『……ヘリの操縦者2人はともかく、護衛の2人は討伐部隊の人員だ。これ以上の失敗は避けない』

はいはい、と流す和人。

フラテッドはそれに不満気味だが離れた場所にいる以上、何もすることはできない。

「で、やり方は好きにしていんだよな?」

『成功すれば他の生き死になど一切気にしない。そこで殺しても後で殺しても同じこと』

だ』

「でも後の場合は俺の手では無理なんだよなあ…」

残念そうな顔をする和人。

遠くで何か音がした。

とても小さい、だがここまで聞こえたということはそれなりのもの。

砂地が広がる遠くに目を凝らす。

砂しぶきが遠くで上がっている。

「…雑魚のお出ましにしては早いな」

『もう見えたか、長居は無用だ。早くしろ』

「了解」

アルツエ内は迷路だった。

原型はほとんど留めておらず、外見から想像不可能。

外から見ればあちこち煙が上がってるだの、穴が空いてるだのボロボロではあるが大したことはないだろうと連想する。

だが、内装は通路はあちこち崩れ落ち部屋全体が綺麗に残っている部屋など数えるほどのみ。

なぜこの建物は未だに潰れていないのか疑問である。

「今はどこに向かっているの？」

足場はないが常日頃から鍛えられていたバランス感覚と筋力のおかげでひよいひよいと進むことができる。

そんな中穂香が2人に訊いていた。

「シエルターよ」

「シエルター？そんなのあったっけ？」

「地下の方に1つあります。強度もそれなりですけど見つかった場合、プロディターの前じゃあまり役には立たないでしょう」

「そうね、下手をすればそのまま地下の住民に被害を拡大させるだけになるわ」

穂香は明季の後について走っている。

ただ、穴があれば下に降りる、そしてまた昇るを繰り返しているため正直今どこを

走っているのか分からない。

「あら……」

明季が足を止めた。

その理由は聞くまでもなかった。

目の前の床に大きな穴が空いていたのだ。

どれだけ大きな爆発をしたのかは分からないが3、4階分くらいは一気に突き抜けている。

「この下、何かあったかしら？」

「……危険物を扱うような部屋はなかったはずですが」

「慎重に降りるわよ、ただできるだけ素早く」

見当たらない足場だが無理やりにも見つけて跳ぶ。

明季の後ろをついていっていた穂香だが、途中明季の乗っていた足場に跳んだとたんその足場が崩れる。

「!?!」

後ろをついてきていた恭二に危なかったところを抱えることで救出される。

「ごめんなさい」

「足場は自分で見つけたほうがいいです。所詮がれきが重なってできた即席の足場です

からいつ崩れてもおかしくはない」

とはいっても穂香はこんな状況に遭ったことはないし、訓練でもあまり多い回数こなしていない。

少し遅くはなるが恭二が大丈夫そうな足場を見つながら穂香に合図をする。

明季より10秒ほど遅れて地面に足を付けた。

「10秒隊長を待たせるのはどうかと思うわよ？」

「お言葉ですが正影さんに好意を持ってほしいのなら穂香さんには優しくするべきですよ？」

フツ、と静かに笑う明季。

そんな中、穂香は地面に足をつけて周りを見ていた。

そこはよく見知った場所にあつたものがあつたから。

なぜなら任務を受けるために必ず足を運ぶ必要がある場所であり、物だつたから。

無言で思わず歩ける場所を歩いてみる。

明季も恭二もそれに何も言わなかつた。

未だに実感がわかない。

自分はまた何かを失つたのか？

レアさんの時みたい。

でも目の前から何かが消えたというわけじゃない。  
と、何か割れる音がした。

こんな中でも割れずに残っているガラス類があったのかとそれに興味を持ちそちらを見る。

そこにはカウンターがあった。

半分はがれきに埋まっただけで確認できないが半分は壊れながらも、汚れながらも確かにその形をしていた。

地面にくっついている机だったのか、傾いてはいるが。

上の階から落ちたにもかかわらず原型があることにいつもを思い出す。

しかし、そこにいつもはなかった。

思わず小さな悲鳴を上げる。

ガラスの割れた音がしたカウンターの中、そこには人の死体があった。

原型をほとんど留めておらず、肉塊といっても間違ではない。

だが押しつぶされた服やアクセサリーが見当たらぬ。

そしておびただしい量の血がその周りにこびりついていた。

これ以上は見られないと目を背ける。

しかし、目を背けた先にはまた死体があった。

「……」

今度は小さな悲鳴すら出ない。

自分より上の方にあるその死体は仰向けになっており、下半身はがれきに押しつぶさ  
れている。

目が見開いており、その顔は穂香に恐怖を与えるには十分だった。

さつきの肉塊の方がまだよかったかもしれない。

人と分かるかわからないかなのだから。

だが目の前で死んでいるこの死体は列記とした人。

性別は女性、プロト、まじめな人物だったはずだ。

レアだってここまでひどい死に方をしてはいなかった。

足がすくんで動かなくなる。

「穂香、道を見つけたわ。行くわよ」

明季の呼びかけがきいてもそれは変わらない。

何を止まっているのかと怪訝に思っていた明季だがぶら下がっている死体を見て理  
解する。

「……穂香」

「……みんな、無事だよね？」



「リリースからの無線では少なくとも嬉々の名前は出ていたわ。あと美嘉と——」

「私が言っているのは皆。パパを取り巻くすべての人のこと！」

「それは…難しいでしょうね」

気休めなんて言わない。

穂香だつて理解している。

難しいことだなんて。

「でもまだ生きてる人を助けることができる」

「…」

「ここで立ち止まっていいの？今はあなたの力が必要よ」

「…うん！」

「隊長、穂香さん！急ぎましょう、道がいつ壊れるかわかりません！」

明季と恭二が走る中、穂香は一度だけ足を止める。

後ろは見ない。

「……………」

黙ったまますぐに走り出した。

「いったいいつになったら安全が確保できるんだ!」

罵声が鳴り響く。

おそらく、長い間こうなれば騒ぎ出す奴は現れるだろうと思っていた。

騒ぎ立っているのは1人の非戦闘員。

プロトではなく、研究職の人間だ。

不安と恐怖の負の感情が入り混じって限界が来つつあるのだろう。

気持ちは分からなくもない。

だが、それをプロトに向けるのはいくら彼らが戦闘員であるからといっても無理がある。  
る。

第一彼らがプロトではプロデューサーに敵わないと公言しているのだ。

それを知ってもなお、彼は無理難題を押し付けるらしい。

「いつって…明季さんたちが来たらじゃないのか?」

「それがいつだと訊いているんだ!」

「青羽さんが言ってたろ、5分…いや10分後だったか?」

一番近くにいた蓮が対処する。

彼はこんなことやりたくないのだがそれは周りも然り。

面倒くさいよといわんばかりに全員が背中を向けていた。

「そんな助け期待できるか！もし敵のほうが先にここにたどり着いたらどうする!？」

「その場の状況によるよ、正面が空いてればそっちからアルツェ内の安全圏を走り回るしダメなら申し訳ないけど地下の住民の居住区を使わせてもらう」

「ならさっさと居住区に逃げればいいだろう！」

「そっちだって安全ってわかったわけじゃない。もしアルツェ内からそっちに移動していたらどうするんだ？シエルター入り口から1体来れば少なくとも居住区での戦闘は楽になる。居住区っていうんだから人がいるんだぞ？その人たちに対する被害はできるだけ少なくするべきだ」

「相手の命のことなど考えられるほど余裕はないぞ！」

「悪いけどこれが俺の性分なんでね。それにあんた……」

座って持ち場にいた蓮が立ち上がる。

「明季さんたちが来るかわからないって、つまり来ても戦力にならないって言いたいんだろ?」

「……」

「ならいつそのこと弱いこいつらでもいいから連れて早く逃げよう、てか？」

「そんなことを言った覚えはない。だが私は数少ないオウSTEM研究者の1人だ！その人材をここで捨ててもいいのか!？」

「よく言うよ。数少ない研究者様のくせしてプロデーターに対抗できるような武器は作り出せない」

痛いところを突かれたのか、苦い顔して黙る。

蓮だつて理解している、創れるはずがないと。

情報が少ないどころか、サンプルの鱗片さえ手に入ったことはない。

そのうえ世界各地に神出鬼没。

どうやって、なにを探れというのだろう。

「今はみんな辛いんだ、そこは分かってくれ」

「……済まなかった」

話の分かるやつで助かったと一息つく。

そんな中、シエルターにも異変は起きていた。

だが、それを異変と認知できるものはいなかった。

「？」

異変を見た心菜はその時、嬉々に何を話しかけようか迷っていた。

帰ってきてくれた嬉しきは強い。

だが、失ったものもある以上ただ喜ぶのではおかしい。

嬉々自身がひどく落ち込んでいいる以上、何かしら元気づけなければと思っていた。

そんな時に見つけた異変。

(変わったところに電球がついてるなあ…)

心菜の目の前にはいくつもの電球が点いていた。

ただ、天井に着いている型とは違いとても細く見たことがない。

そして位置にしても天井ではなく壁。

範囲も狭く、何のためにあるのか分からない。

しかし、変だとは思ったが気にも留めなかった。

脅威が迫っているかもしれないのに、そんなことに頭を使っている暇はないのだ

から。

それ故、逃してしまった。

## 人対人

「……………ねえ、鈴」

「なんですの？」

「正影ってルックスはいいわよね？」

「否定はしませんわ」

「でもさあ、……………寝てる時もどこかつかよさを感じさせるってずるいと思うんだけど」  
寝てる正影のすぐ近くでお気楽に話をする2人。

明季たちはおそらく大変な思いをしてるんだろうなあとはわかっていながらも何もできないので正直暇だ。

周りでは未だに鎮火されていない建物が存在するが自分たちのところまで被害が及ぶにはまだ時間が必要。

入り込んだオウシステムの排除でもしようかと思ったのだが、ここで悠人はるとという予想外の人物に鉢合わせた。

このアルツェ内のプロトの中では最年長であり、家族もいる珍しい人。

休暇をもらっており、家族と過ごしていたところひどい目に遭ったらしい。

敵は大きくても10m級まで行かないレベルのものばかり。

加勢の必要はなく、正影のそばを離れられない2人にとってはありがたい話だったはずなのだが暇だ。

「別に、紳士淑女たる者、寝ている間も見られてもいい格好をする。常識ですわ」  
勿論視界に入るのは無機物の被害だけではない。

建物の下敷きになった家族を必死で助け出そうしているであろう人影が見える。

親とはぐれたのか、ただ泣きじやくっているであろう子供の姿が見える。

どこかけがをしたのか、動けずに助けを求めているであろう人が見える。

だが、離れていた。

自分たちがいる場所からはおよそ50m。

近くに建物がいないのはそういう場所を選んで降りたから。

「寝てる間まで気を使うとかありえないわよ。それに正影がそんな人に見える？」

しかし、視界に入ったって助けにはいかない。

彼女たちの今の任務は正影を守ること。

弱り切った正影はおそらくただのオウステムに襲われてもひとたまりもないはずだ。

そのためにも「一瞬で正影に触れる距離」を維持しなければならない。

仮に、正影がただ寝ているだけでただのオウステムにやられる可能性なんてない場合

だったとしても2人の行動は変わらなかつただろうが。

「心から貴方のご両親に同情し、貴方を哀れに思いますわ」

「どこが哀れなのよ？」

彼女たちだつて人間だ。

目の前で起きている悲劇をただ見ているのは、聞いているのは心が痛む。

だから彼女たちはそれを視界に入れないという方法を学んだ。

耳に入れないという方法を身に着けた。

そうでもしないとどうにかなりそうな世界だつた。

「名前は人を作らない、人が歩いた道に名前が残る。名言ですわ。とは言つても親は子にこうなつてありたいと名前を付ける時願望を抱くものですわ。名前の通りに育つていれば、女性でいられたのに」

「アア？」

「失礼。人間でいられたのに、のほうか正しいですわね」

「上等じゃない。ちよつと表出なさいよ」

「あら、まさか正影さんの近くで爆発でも起こす気ですか？」

「あんたみたいなの弱なエセお嬢様なんて素手で十分よ」

「…言つてくれますわね。少なくともあなたよ——」



「あのー！」

男性の声がした。

操縦士が何か用があるのかと思っただがいたのは見覚えのない男性。

見てすぐになにか嫌な感じがした。

あまりに不自然すぎたからだ。

研究職だったりすればわからなくても納得いくかもしれないが、あまりに綺麗だった。

服装が、清潔感が。

外見がとても裕福に見えたのだ。

別にどこぞの貴族のような風貌というわけではない。

だが、着ている服は明らかに動きやすそうである。これがあることを想像できたからとっておきを着ておきましたと言いたげのような。

「…なにかしら？」

「プロトの方ですよね？友人が！」

「申し訳ないのですが私たちはここを離れることができませんわ」

「奥に寝ている人が原因なのですか？でも一人くらいなら…！」

「お引き取り願いますわ」

「そんな…、人の命がかかってるんですよ!？」

「恨んでも構わないわ、でも無理なものは無理なの。どうしても助けが必要だって言うならそこをまつすぐ進んだところで1人、プロトが救助活動をしてるわ。そっちにお願いして」

何か言いたげな顔をしている男性だが、次の言葉が見つからないらしい。

「そこを…なんとか」

「ここにいても時間の無駄よ。他をあたりなさい」

「……………わかりました」

ようやく引き下がってくれるのかと胸をなで下ろす。

変な心配も杞憂だったかと思っていたその時、

何かが地面に落ちた。

一瞬、何が落ちたのか分からなかった。

だが次の瞬間にはそれが何か理解する。

(閃光——!)

あたりに強い光が広がる。

幸いだったのは、常日頃から手榴弾を愛用していた美姫のおかげで2人の理解と行動が早かったということ。

目を閉じて視界がつぶれるのをどうにかするが、耳までは手が回らなかった。すぐに美姫の脇腹に強い衝撃が走る。

目を閉じていた、さらに耳もやられていた美姫にそれに対する防御の行動をとる暇なんてない。

しかし、次の攻撃は鈴の届かなかった。

同じように脇腹に蹴りを入れようとしたのだが鈴は持っていた槍でそれを受け止める。

「…参考までにどこが怪しかったか教えてもらえるか？」

「心配もそうですが、まずはその服装を何とかするべきですわ」

「悪いな、これが一番地味な服なんだよ」

いったん距離を取る男性。

身のこなしはプロトそのものだが見覚えがない。

「どここのアルツェですの？」

「アルツェ？そんなくだらねえ組織の属しちやいねえよ」

「なら殺しても問題なさそうね…！」

美姫が起き上がる。

彼女の手にはさつきまで腰にかけてあったスタンバトンがあった。

勿論、対オウステム使用なので人が食らえば気絶程度では済まされない。

「全く…、黙って1人が俺について来ればそいつは生きていられたのにな」

「私たち2人を前にしてよくそんなことが言えるわね？」

「舐めないでほしいですわ」

「確かに、俺1人でお前ら2人を相手にしてたら勝のは難しいだろう。それに勝ったとしても時間がやばい。でもな…」

1つの缶を取り出す。

だが、手榴弾系ではない。

見たこともない型に訝しそうに見る美姫。

「馬鹿正直に戦えばの話だ」

得体のしれない缶が鈴たちに向かって投げられる。

後ろには飛ぶ準備すら整っていないヘリ。

もし爆発物だった場合、正影の身が危ない。

避けることは許されない。

鈴が投げられた缶に向かって走る。

1秒とないその間。

槍を使いはじき返す。

しかし、その缶は見た目以上に脆かった。

「！」

打ち返したつもりがその缶が粉々になる。

中から出てきたのは透明な液体。

避けることは敵わず液体が降りかかる。

後ろにいた美姫も予想外の展開と正影のカバーのために動けなかった。

僅かながらしみついた液体に顔をしかめる。

「悪趣味ですわね……」

「透けて見えた肌や下着に興味はないんだがな」

「臭いもしないし……何よこれ」

「名前は忘れた。あるお方が創った代物なんだがどうも名前が長くてな。だがまあ、簡

単に言うなら……」

突如鈴の頭上にあるものが飛んでくる。

「フェロモン、だな」

長い槍を使い、頭上の敵を切り裂く。

僅か2 mほどの羽蟻。

真つ二つに割れると地面に崩れ落ちる。

「まあ、フェロモンっていつでも沢山ある。性フェロモン、警告フェロモン、道標フェロモン……。だがオスは基本的に単一、それに生殖行動だつてとる個体はほとんどない。だから正確には違うみたいだが：まあ効果は集合フェロモンとほとんど同じだ」

「：聞いたことないですわ」

「そりやそうだ。信じられないか？まあすぐにわかるさ」

男の発言に疑問を抱く。

そもそも男の言う通り、オスは大半が単一で行動し生殖行動をとるものは1割に満たない。

そんな数少ないオスのサンプルは生きているものの場合、貴重なんではない。生きた状態で確保して初めてわかることは多い。

もし、集合フェロモンのようなものが完成した場合人類は大きく優勢に立てるかもしれないのだ。

そんな代物を自分たちが知らないのはおかしい。

だが、その発言が間違いないということはすぐにわかった。

男の隣をオウステムが歩いている。

その目線は液体がかけられた方を向いている。

隣にいる人間すら無視しているのだ。

「別にこいつは味方つてわけじゃない。ただ臭いのする方向に向かっているだけだ」  
「集合フェロモンより性質が悪いですわね」

「それよりもいいのか？ここにいとオスがどンドン集まってくるぜ。有効範囲は忘れたが、お前を食った後は近くの人間を喰い始めるだろうな」

「…美姫」

「行きなさい、私はあなたと違って強いんだから」

「その減らず口、嘘じゃないことを祈ってますわよ」

それだけ言うと鈴はその場を離れる。

鈴が向かったのはアルツエの方向。

本来なら外に逃げてすべてかたすべきなのだが有効範囲がどれくらいかわからない以上、外から連れてきてしまう可能性も含めて中に逃げる。

オスは鈴しか狙わないみたいなので都合だ。

その場に残った2人が対峙する。

「逃げてもいいいぜ？追わないからよ」

「ここで正影を守ればボーナス出る上に正影から好印象、一石二鳥なの」

「なら久しぶりにやるか。……殺し合いってやつをな」

「走って、速く！」

嬉々が最後尾で刀を構えている。

先に生き残った人が地下の住民区を逃げていた。

地下に住民はすでに彼らの避難所に集合していたため人影はない。

「嬉々、お前も行け！」

「何言ってるの!?!あなたが死んだら私も死ぬのよ?置いていけるわけないでしょ!」

「ほら、これを！」

蓮は嬉々に小さな物体を投げる。

長方形の小さな物体。

「何よこれ?」



「メデイアトールの繋がりを一時的に遮断する薬だ。ここを押せば錠剤が出る」  
「…」

「効果が出るまで1分ほど必要だ。あと使ったら12時間は繋がりは戻らないから俺が死んでも問題な——」

嬉々が説明を聞き終わる前にそれを投げる。

「蓮、私がこれで退くと思つた？」

「…」

「冗談じゃないわ。あなたのその武器、もともとは梓のよ？1人に任せるなんてできるわけないでしょ。見殺しなんてごめんよ」

「……でも俺は——」

「私も同じよ、蓮に死んでほしくはないの！」

嬉々は泣いていた。

エニスの死が響いているのは明白だ。

「生き延びるの！これ以上は嫌！」

「分かつた。ただ…」

「なに？」

「さつき投げた錠剤、使わないなら持つとかないと俺怒られるんだけど」

「……だって雰囲気的にあれは投げたほうがよくなかった？」

「俺は雰囲気を代償に司令に殺されるのか」

「いい経験よ」

「絶対違う」

「イチヤついてるとこ悪いけど時間だぞ、お二人さん」

リリイがため息交じりに呼びかける。

何故この状況で冗談を言ってられるのかわからないようだ。

視界にプロデーターが入る。

「明季さんたちが来るまで頑張るわよ！」

「もちろん！」

「…（いざとなったらこいつら囿に逃げるか）」

## 覚悟

倒れた家屋はとつくに見飽きていた。

物珍しさなんて微塵もない。

「せーのっー」

悠人の掛け声と同時にその場にいる若人ががれきを力いっぱい持ち上げる。

中から赤ん坊の泣き声がしていた。

この赤ん坊、運がよかつたらしくがれきの隙間で生存していたようだ。

大人なら間違いなくつぶされるであろう狭いスペースで。

その子の兄なのか、まだ幼い風貌が隠せない男の子が駆け寄って抱きかかえる。

安全が確保されたところでがれきを元に戻す。

「本当にありがとうございます」

「お礼はいいです。それより急いで避難を」

「って言ってもどこに逃げれば…？」

「……アルツェ内は危険ということしか分かりません」

プロディターが攻めてきた時の避難マニュアルなんて存在しない。

何もかも壊してゆくのだから。

どんなに強固なシエルターでも破壊し、どこに隠れてもいずれば探し当てる。いや、探し当てるのではなく巻き添えを食らって死んでしまおう。

「あと強いて言うなれば隣の区域のシエルターが壊れていなければ…」

「…分かりました、何とか探してみます」

「すみません、プロトという守る立場にいながら何もできず」

「何を言ってるんですか、貴方はこの子の恩人です。それだけで十分です」

誰も文句を垂れる人はいなかった。

深々と頭を下げると悠人以外の人が全員その場を去る。

「…最年長がこの様か」

自嘲気味に笑いながら呟く。

悠人だって分かっている。

全員を救えるわけがないということぐらい。

でもこれはどうか。

目の前の数人すら救えていないではないか。

家族だって避難させた後はほったらかし。

娘の泣きそうな顔を見たときは、そこに残ろうかとも考えた。

だが、やつぱりできない。

外では数多くの人が助けを求めているのだ。

プロトである自分がいかなくて誰が行くのかと鞭を入れた。

「……」

こんな風に余裕をこいていられるのも敵がないから。

さつきまで探せばそれなりに見つけられたオウシステムたちもどういうわけがいなくなっていた。

全部倒し切ったと考えるのは油断になり、あまりよくないのだがそう考えるべきなのかと頭を悩ます。

そうやって考え込んでいたからだろう。

「……っ」

音がする。

火が上がるとか、家屋が倒れるとかそういうのではない。  
もつと多く、こちらに近づいているような…。

それなりに丈夫そうな建物を選び屋根の上に上がる。

住宅街であるが故、見晴らしがあまり良くなかったのだ。

高さに関してさしたる問題はない。

どれも背丈は大差ないのだから。

だからこそすぐに気づいてしまった。

「悠人さん！」

鈴が走りながらも悠人の存在に気づく。

槍を持ち、汗をかきながらもどこか気品が見え隠れするその走り。

しかし、その後ろでは

「…おおお、おお」

それなりの数のオウSTEMが蠢ていた。

事情が呑み込めない悠人はどうするべきかと少し悩む。

本当はもつと悩んでいたかった。

腕を組んだその時、鈴の進行方向が悠人に変わる。

「は、いや、ちよ…」

分かっている。

やらなければならぬのは。

だが、誰にだって土俵がある。

悠人の土俵は1対1になること。

相手が無駄に多ければアルマは使えないし（今は持っていない）、こちらが多くては出

る幕はない。

討伐部隊の人間なのだ。

変わったアルマを持っている悠人のことくらい知っているはず。

っていうか名前を呼んだ。

「……」

悠人が出した答え。

「こっちは来ないでー！」

逃走。

「え、ちよ、なんで逃げるんですのー？」

「貴方なら1人で相手にできるでしょう！こっちに面倒持ってこないでください！」

しかし、追ってきてるのはあくまでも討伐部隊といういわばエリートの間人。

足の速さの差など歴然である。

「1人で相手は面倒なんですの」

「おわ!？」

簡単に隣に付かれてしまった。

悠人に追いつくため速度を早めたせい、オウシステムの群れとそれなりの距離が出て

しまった。

だが、オウSTEMの向かう先は一向に変わらない。

「大の大人が子供を置いていくのはどうかと思えますわよ？」

「よく言う、貴方のほうが強いくせに」

「強さの問題ではありませんわ、年の問題です」

「…まあ、ここまで来たら無視はできないか」

ため息交じりに後ろを見る。

家屋を押し倒しながら、或は飛びながら追ってきている。

今別れても自分も対象に入っているだろうと踏んだ悠人。

逃げるのをやめオウSTEMのほうを向く。

「準備はいいですわね？」

「まだと言っても待つてくれないんでしょう？」

「もちろんですわ」



「鈍い」

和人のかかどが美姫に直撃する。

腕で防御姿勢をとるがビリビリと腕が痺れる。

そこにとどまることは叶わず、蹴り飛ばされる。

ただでは終わらないと離れるその力を利用して手榴弾を投げる美姫。

「単調」

分かり切っていたかのように余裕をもちながらかわす和人。

地面に足をつけ一瞬和人から目を離してしまう美姫。

その一瞬で和人は美姫の予想だにしない攻撃をする。

「脆い」

すぐ近くで聞こえた声に反射的に腕で防御姿勢をとる美姫。

しかし、顔を上げた次の瞬間、和人の攻撃がそれでは防げないと判断する。

とつさに回避行動に出るが間に合わない。

腕に切り傷ができる。

決して深いものではない。

だが、気づくのが後一瞬遅ければもしかすると腕にナイフが刺さっていたかもしれな

い。

周りの気温は決して高いわけではない。

だが、おびただしい量の汗が出てくる。

緊張でここまで汗が出るなど初めての経験だった。

すつかり息も荒れ、深呼吸でもして整えなければと思うが思うようにならない。

距離はある。

深呼吸をしている間、別に目を閉じなければいけないわけではない。

だが、思考がそれを嫌がっていた。

もし深呼吸している間に近づいてくるようならまた距離を取ればいい。

別に和人は目で追えない速さを出しているわけではない。

単純な実力だけで比べるならおそらく2人に然したる差はない。

2人の間にある差、それは人を殺せるか否か。

プロトとはもともとオウステム、謂わば人間の外敵を殺すために存在し、強くなる。

その力を人に向けるのは一部の例外のみである。

美姫はその例外には当てはまらない。

純粹にオウステムを狩るためのみにその力を行使してきた。

「…お前、やる気あるのか？」

「……………」

「ただ置物に用はない。さっさとどけ」

そんなことを言われても退けるわけがない。

任務のこともある、だが私情も含まれている。

「なんでよ…?」

「?」

「なんで簡単に人を殺せるの?」

「怖いのか?」

「少しはね、でもそれ以上にそういう精神を持ったあなたの心情に興味がある」

「そうだな…言うなれば——」

そこまで言ったところで和人が走り出す。

美姫はすぐにアルマを構える。

スタンバトン、それもオウステムを一時行動不能にできるほどの代物。

人が食らえばただで済むものではない。

対して和人が持っているのは先ほど取り出したナイフ一つ。

刃渡り10cmあるかないかの普遍的なナイフ。

もしかすると手榴弾を隠し持っているかもしれないがいざという時すぐに使えるわ

けではない。

何よりそれ単発なら美姫に当たることはまずないだろう。

重さはナイフのほうが軽いが、スタンバトンも動きに問題が出るほどの重さはない。

強度は2つとも十分。

両者ともそれぞれの武器は使い慣れている。

触れるだけで致命傷の武器とそうではない武器。

どちらが有利なのかは一目瞭然のはずだった。

「慣れ、だな」

だが、腕が鈍る。

美姫の腕が。

たとえ敵といえども人である以上、今から自分のしようとしていることは人殺し。

それが頭をよぎり、実力を出し切れない。

「まただ」

その言葉に無理やり腕を振るおうとするが遅い。

あつさりと受け流された。

足を少しばかり細かく動かすだけで何にもあたることなく。

無理に腕を動かした美姫のバランスは崩れている。

その崩れはおそらく1秒なくとも立ちなおせるものだが、2人の間では命とり。

和人のナイフは美姫の目を狙う。

視界に入るのだ、何もしなくても。

下手をすれば即死してしまうその攻撃に対して測るべきダメージなんてない。

スタンバトンを握っていない左手でナイフをつかむ。

手から血が滴り落ちるが相手を捕まえることもでき一石二鳥だ、そう思っていた。

「!？」

激痛と同時に視界が歪む。

視界というよりは頭の中をかき回されたかのような感覚。

軽い脳震盪を起こしているのは間違いないだろう。

痛む頭をおさえながら和人を見ようとすがすでに彼は動いていた。

後手に回ってばかりなのは自覚している。

だが、決心がつかない。

更に今回は頭を揺らされたせいで正常な判断がままならなかった。

形だけの防御姿勢すら許されず腹に強い一撃が入る。

バウンドなしで3mは跳ばされる。

「対人戦の経験がない奴はこれだ。得物を持つてればそつちに集中が行つて素手での攻撃の可能性をほとんど考えない」

激痛とはつきりしない意識のため、何を言っているのか理解するのに数秒要した。

無理やり肺から押し出された空気が胸を締め付ける。

息を吸うと今度は吐き気に襲われ手で口を押える。

ギリギリ抑え込むことはできたが口の中に嫌な味や臭いらしきものが残る。

「悪いが時間がない、だから選べ。これ以上俺の邪魔をせず賢明な判断をして逃げおせるか、勇敢に俺に立ち向かってあの世を見るか」

そう言いながらも和人は正影に歩み寄る。

なぜ時間がないのか、もしかすればそこにこいつを出し抜くためのカギがあるのではないか。

正常になりつつある頭で考えるがおそらくそれも無理な話だろう。

仮にそこにカギがあったとしてどうやって時間を稼ぐのか。

話して？いや、時間がないといった者がそれに乗るとは思えない。

いったん撤退して？いや、そんなことすればそもそもその目的である「正影を守る」を達成できなくなる。

なら戦つて？……………可能性はある。

決して不可能ではない。

実力差はほとんどない。

あるのは人を殺す覚悟のみ。

正影は別に大切な人というわけではない。

おそらく大した好感も持たれてはいないだろう。

そして美姫自身も別に正影に惚れているわけではない。

どちらかというといいルックスを持つているし、性格も悪くない。

付き合えるなら悪くはないだろうという話。

それでもここにとどまる理由の中には私情も含まれているように思えた。

なぜだかわからない、美姫自身も。

実はどこかで今までにないほど惚れているのか、それとも穂香という存在が何かしら関係しているのか、それ以外か。

美姫は立ち上がりスタンバトンを構える。

頭はまだ嫌がつている。

だが、守らなければならぬものがある。

引くことは許されない、いや許せない。

戦意のある美姫を感じ取ったのか、和人が歩みを止める。

「勇敢なバカだったというわけか……」

しかし、その言葉に呆れるような雰囲気はなくなため息すらしない。

和人が振り返ると同時に美姫が動いた。

先手必勝といえるほど距離は狭くなかった。

和人には十分以上に構える時間があった。

距離が一步、また一步と近づいていくうちに美姫に緊張が走る。

自分から近づいているのだから自分がその足を止めればいい話。

だが、止めるつもりはなかった。

「あああああああー！」

雄たけびをあげながら和人に跳びかかった。

しかし、和人は

「単調」

今度の言葉には呆れが入っていた。

軽々とかわした和人のナイフが容赦なく襲い掛かる。

いくら素人といえども同じ手は2度も通用しない。

今度は容赦ないナイフによる攻撃。



跳びかかるといふトチ狂った行動をした美姫に避ける時間はない。即死しないように体をひねるのがやつとだろう。

だが、美姫の顔には明らかな余裕があつた。

もしその顔を和人が見ていたならば攻撃を躊躇していたのかもしれない。

美姫の脇腹に容赦なくナイフが突き刺さる。

心臓を狙つたつもりが狙いを大幅にずらしてしまつたと舌を打つ和人。

こんなにうまく避けられてはまるでその行動を予想していたようでは……

「つ、かまえた」

ナイフを握っている和人の手に美姫の手が掴みかかる。

ヒットアンドアウェイ、これなら和人の予想の範疇内だつた。

だが、自分の体を犠牲にしたこの行動は予測できなかつた。

何より素手で自分の腕を掴んでいるという事実。

ただのナイフならまだしも人なら即死させられるほどの威力を持つスタンバトン。

それで和人を殺つてしまえば美姫も感電死ではないか。

激痛に少しばかり顔を歪めているが、希望が見つかったとそれ以上に笑っている美

姫。

和人の手を握るその力は捕まえるだけならば十分な力が發揮されていた。

けがをしながらどこからそんな力が、と焦る和人に容赦するつもりはない。

「貴様……！」

素手で手をつないでいるのならば自分も死ぬ。

ならば確実に殺る場合、相手に当てる必要はない。

少し、死ぬことにためらいはあるが無様に逃げ帰るよりはましだ。

「じゃ、あの世で」

チエックメイトを宣言した美姫。

自分も死ぬ以上チエックメイトとは言わずらいかもしれない。

だが、自分よりある意味各上の人間に勝ったのだ。

十分だろう。

しかし

突然鳴り響く銃声。

2人は何が起きたかわからなかった。  
ただ分かることはまだ生きているということ。

「ぐ…」

美姫の手から力が抜け、和人が離れる。

和人は腕に空いた風穴を抑えている。

離れながらも周りを警戒しているところから彼の作戦内のことではないということ  
がうかがえる。

一方美姫は…

「…??」

服の中に手を入れ、直に肌を触る。

すべすべしていた肌にヌチャツと何かしら液体がついている。  
生暖かい。

手にその感覚が広がる。

しかし、その手を確認する時間は彼女に残されていなかった。

口の中に血の味が広がった。

それを最後に彼女の意識は途絶えた。

## 意外な発見

目の前に1人の女性が倒れている。

殺ったのは自分ではない。

おそらく死んでいるだろうが…

「…いい加減やばいな」

耳をすませば僅かだがドドドドドドと地響きが聞こえる。

あと5分もしないうちにこちら辺なら気づく者が出始めるだろう。

貫かれた腕を抑えて歩く。

向かう方向はヘリ。

本来なら服を破つてでも止血したいところだが、正影を連れて行くとなるとその猶予はあまりない。

「ひどい様だ」

「…うるせえよ」

後ろからフラテッドが話しかける。

背中にスナイパー、手にはハンドガンが握られている。

服は返り血のせいかな、服が真っ赤に染まっている。

「誰撃った？」

「護衛以外にも人はいた」

銃口を操縦席に向ける。

角度が悪いが窓に血がついているのが分かる。

「その女はまだ生きてるのか？」

「たぶん死んだと思うぜ」

「たぶん……」

倒れている美姫を見るとそばに近寄る。

銃を構えているが発砲するならもっと前からしている。

弾が入っていないのだろう。

うつぶせに転がっている美姫を蹴り飛ばし仰向けにする。

目は開いていて焦点が合っていない。

良くても瀕死なのは間違いない。

その状態に顔をしかめるフラテッド。

「タイプだったか？」

「真逆だ。死に間際にこいつは何やってるんだ」

「自分の胸の感触が好きだったんじゃないかw？」

「…見るべきではなかったな」

さつきよりも強い力で蹴り飛ばす。

よほど嫌なものだったのだろう。

美姫の体が力なく宙を舞う。

その時、美姫の体から何かが離れた。

胸を触っていたと思われた手から2つの球体。

「んっ」

「ちよー」

和人はいち早くその危険を察知する。

フラテッドは一瞬何が起きたかわからずただ止まる。

そして美姫がどういう人間かということを読み出す。

なりふり構わず回避しようとするが少しばかり遅かった。

爆風と同時に地面を3、4回ほどバウンドする。

激痛もいいところだ。

死ぬほどではないが。

「……………」

「悶えてるとこ悪いがさっさとしてくれ、あいつが来るぞ」

「ああ…、そうだな」

痛みが走る背中を抑えながら立ち上がる。

腹に響くような地響きを感じた。

あまり時間がないと理解し足早にへりに乗り込む。

操縦席で息絶えている操縦者2人をへりの外へ放り出し血塗れた窓を拭く。

「操縦は？」

「できるから単身で乗り込んできたのだ。黙って座ってくれて構わん」

「こんな腕にしておいて操縦しろって言われても絶対しないけどな」

「だがそこには座ってる、後ろにいられるともしもの時に対応できん」

「分かってますよ」

半分投げやりのように返事をする和人。

そうしている間にもへりは地面から離れ始める。

ふとフラテッドの目に美姫の姿が目に入る。

「…惜しい人材だった」

「ん？あの女か」

「生きていたのなら軽蔑したのを済まないと謝りたいところだ」



「そんなにか？」

「ああ。美姫…か、覚えておこう」

「や…やっとならぬ」

悠人が地面ふらふらと座り込む。

目の前にはさつきまで戦っていたオウステムたちの死骸が山のように転がっていた。羽織っていた鈴の上着を脱いで自分を仰ぐ。

たった5分ほど前まで一緒に戦っていた鈴はこれを渡すところかへ行ってしまった。しかし、何より驚きだったのがオウステムが上着を羽織ったとたん自分を集中砲火してきたこと。

その前までは自分が全然狙われず、狩りをしている気がしていた。

いったいどんな仕組みがあるんだと上着を恨めしそうに見る。

「…そうだ」

ゆっくり休んでいたところだが家族の顔が脳裏に浮かぶ。

自分に時間はないと重い腰を上げる。

家族が逃げたシエルターに向かおうとして気づいた。

腹に響くような地響き。

途切れることなくさつきよりも今のほうが強いような気もする。

少しばかり面倒ではあるがさつきと同じように屋根の上上がる。

だが、それだけでは外の状態は確認できない。

その程度の高さではオウステムを防げないからだ。

周りを見渡すが生憎外壁の外をのぞけるような建物などアルツエ本体以外には存在しない。

飛んでいるヘリが見えるから、もしかすればあそこから状況を教えてもらえるかもしれない。

こんな状況で飛んでるなんて大した度胸だなと思う。

少しの間、ただ止まっていたが動くことにした。

家族のもとへ。

そしてそれはある意味では最良の判断であった。

また、ある意味では最悪の判断でもあった。

「ぎやあああああああああああー！」

嬉々たちがシエルターで休んでいるとき、外に逃げる数分前にそれは起きた。

シエルターは基本的に一時的な避難所として使われる。

誰もそれに疑問を持つことはない。

だからそこを訪れる人は極めて稀。

整備士くらいが定期的に来る。

だから部屋の構造がおかしいと気づくの者がいなかった。

だからそれが起きるまで誰も何も思わなかったのだ。

女性の隣で男性がハチの巣になっている。

傷口から血はあふれてこない。

幸いだったのはその場にいるのは大半がプロトだったということ。

パニックを起こしてその中で逃げまどって死を待ただけだった。

人が死ぬことにはいい意味でも悪い意味でも慣れている。

「美嘉！」

「分かつてる！」

敵に見つかったシエルターはただの檻。

硬い壁がある以上、普通は籠るのもアリかもしれないが相手は壁をいともたやすく貫く。

傷口から血が出てないところから見ると皮膚が焼けただけだと見ると見る。

つまり相手は…

「いや…ッ！」

プロトではない研究職の女性には死体は目にはきつすぎた。

「は、早く出してっ！」

「焦らないで、すぐ開けるから！」

「ただパスコード入れるだけでしょ!? なら私のほうが早いから代わり——」

まるで自殺するとき銃を使ったかのように女性の頭に光が走る。

脳をやられた人間は即死。

しかし、それだけにとどまらない。

美嘉をどかしパスワードを入れようとしたために手がタッチパネルを押す。

こういう時、タッチパネルというのはめんどい。

「ぎゃあ!!」

「どうしたの?」

「変なパスワード押した…」

「……つまり?」

「開錠に時間がかかる」

「たった一回でしょ!」

「これを開けると通路を通ればすぐ地下の住民区につくの!それだけここの警備は嚴重

なの!」

「それを踏まえてもおかしいわよ!これ創った奴は何考えてるのよ!」

嬉々と美嘉の話は小さなシエルター内全員に響く。

少し離れたところで青羽が小さくなっているのは別の話。

「時間稼いで!」

「了解!」

威勢よく美嘉に返事する嬉々。

しかし、どうやって時間を稼ぐのか。

敵は壁の向こう。

攻撃してくる場所が特定できない。

つまり壁の周りを自由自在に動き回っているのだ。

立体的に動き回るかつ、見えない敵を警戒しろなど無理な話である。

だが、敵だってこちらの様子を完璧には把握できていないはず。

壁の向こうにいるのだから視えないに決まっている。

もつとも、自分たちが顔と思っている部分に目が存在していたらの場合だが。

「ちよつと借りるぜ」

「？」

ふとリリイが美嘉に近寄る。

一瞬、自分の斧を持っていく気なのかと気を疑ったがリリイが手を出したのはそれ以上のもので。

女性の死体だった。

「リリイ、何を——」

「黙って開錠してろ」

するとリリイはその死体をおもむろに投げ捨てる。

いや、天井に向かって放り投げた。

それを見ていた美嘉たちは思わず凍り付く。

天井にぶつかつた死体はただ地面に落ちてきた。

それを見て悩んでいるリリイ。

「な、何やってるのよ!?!」

「実験だ、あいつはどうやって——」

「そういうことを訊いてるんじゃないわ! どうして——」

「嬉々!」

蓮が嬉々を抱き着く形で突き飛ばす。

直後に天井からの熱光線。

一瞬だけ延びた光の柱はその場にあるものをすべて消してゆく。

それを連射できるなんて人間にはできない。

できたとしても実用化するべきではない領域の話だ。

「気をつけろ、気持ちにはわかるけど自分の身を第一に考えろ!」

「い、い、いめん」

「音に反応する…のか?」

それを冷静に分析するリリイ。

嬉々のことなど一切お構いなし。

「でも……いや、そしたらおかし——」

「リリイ、お前何考えてる？」

「何って……ここから生きて脱出する方法だよ」

「開錠に時間はかかってもせいぜい1、2分だ！いくら相手を調べるためだからってそこまで追い詰められていないぞ！」

「俺は俺のやり方でやっていく。もちろん生きている人間をあんな風に扱うつもりはないが死体は物だ。今は有効活用するべきだろう？」

「お前……なんとも思わないのか？」

「生憎、もうそのラインは超えてしまってるよ」

「……」

分からないわけではない。

事実、さつき女性の前に人が死んだときも自分だつてあまり感じるものはなかった。

死んだという事実は理解できても焦りや悲しみはなく、脳は「次に何をすべきか」を考えていた。

だが、分からないわけではなくともここからは人としてのライン。

倫理の問題だ。



慣れとかそんな領域とはわけが違う。

「お前——」

「蓮、上！」

嬉々の叫びに上を見上げる。

本来ならよけるべきだった。

だが、それは攻撃ではないのが幸いしていた。

見えたのは少しずつ広がっている光。

天井の中心から全体に広がっていきこうとしているのか徐々に大きくなっている。

そして、蓮はここで暑さを感じる。

さつきまでは常温を保っていたシエルター。

いくら機能しなくなっただからといっても気温が自然に変化したにしては早すぎる。

中心が液体のように垂れてきた。

「溶かして…!?!」

「みんな、開いたわよ！」

天井、というかこのシエルターはオウステムでも壊せないような代物となっている。

何を使っているかなんて知らない。

だが、その物質はそもそも溶けるようなものなのだろうか？

ドロドロ口と天井が垂れてくる中、美嘉の呼びかけが全員に希望を与える。

「リリイ、貴方は最後まで残って！」

「はあ!？」

そそくさと退散しようとしていたリリイを止める嬉々。

理由は数少ない戦闘に参加できる人だから。

それを重々理解していたリリイは何も言い返せない。

むしろ、これを言われるのがいやだったからさっさとこの場を去ろうとしていたのだ。

名残惜しそうに出口を見るがため息をつくと黙って天井を見据える。

「あれは……」

溶けていた天井の間隙から輝く物体が顔をのぞかせる。

その物体は一見人の頭のような形をしているが目や耳、鼻すら存在しない。

口に見えるような部分もただ割れているだけなのか、その口は普通の人間の3倍ほどの大きさに見える。

ここは地下である以上周りは土でおおわれているはず。

しかし、プロデーターは空洞を作ったのかそこから顔をのぞかせる。

のぞかせた顔は目があるかのようにシエルター内を見渡す。

そして、攻撃。

突如光の雨ともいうべき程の光線がシエルター内を襲う。

「美嘉、先導して！」

「はい！」

青羽の呼びかけに美嘉を先頭にシエルターから人が出ていく。

「はいっ……！」

一方、光の雨が降り注がれたにもかかわらず蓮、嬉々、リリーの3人は防御姿勢すらとっていない。

相手も3人を見てはいない。

逃げる人、特に非戦闘員を的確に攻撃している。

「このやろおおお！」

蓮がガトリングの引き金を引く。

いつも使っている武器は銃系統ではない。

刀のほうはまだ使いやすかつただろう。

だが、距離はさほど離れていない。

訓練を一通り受けている連から見れば余裕だ。

プロデーターの頭に次々と穴が開いていく。

それと同時に外れた弾の跳弾。

そこらじゅうで音が響く。

だが、

「？」

ここでうれしい誤算が起こる。

相手が突然力なく天井から零れ落ちてきた。

突然の出来事に警戒したが、それと同時に相手の雨のような攻撃も止む。

「…やった、の？」

煩かった室内も人がほとんどいなくなり静寂が訪れる。

「違うな」

穴だらけになった相手の頭がボコボコと泡を吹き始める。

ここで嬉々が前に出た。

泡を吹き始めた頭を容赦なく体から切り離す。

離れた頭はしばらく泡を吹いた後液状化して消えていく。

「仮死状態みたいなものか？」

「おそらく…」

頭をなくした体は再び頭を生成しようとしているのか切れた断面から泡が噴き出る。

おそらくここで頭の再生を食い止め続けなければここに相手を幽閉できるかもしれない。だが相手はもう1体いる以上、安心できない。

「3人とも、みんな先に出たわ！あとは貴方たちだけよ！」

「…どうする？」

「持つていききたい気もするがいつ何が起こるかわからない。捨てていくべきだろうな」

「同感だ」

珍しくリリイも2人の意見に賛成した。

「青羽さん先行つててください！20秒後に私たちも移動します！」

「20秒つて…もしかしてプロディターを抑え込んでるの!？」

「一種の仮死状態みたいなの？」

「めっちゃ欲しいんだけど!?!あーもう、2体も入り込んでなければ!」

それだけ言うと先にその場を去る。

プロディターの頭の再生率は大体50%といったところか。

リリイが自分のアルマである槍をプロディターの頭の上にかざす。

「……………いくぞで」

「ええ」「いつでも」

リリイのアルマがプロディターの頭を潰した。

## 予兆

「……静かね」

明季がポツリとつぶやく。

別に周りは静かではない。

今でもがれきが崩れる音や、ショートした電線から電気のはじける音がする。

ただ、明季が言ったのは人の心配がしないということ。

生きている人の心配が。

シエルターを目前にしてつぶやいた明季は我ながら言うべきではなかったなとすぐに後悔する。

口に出すのと出さないのでは不安に思う気持ちが大きく変わってくる。

シエルターの扉が完璧に閉まっているから感じないだけ、そう思い込ませる。  
だが

「……………遅かったわね」

シエルターの眼前に立って確信した。

扉はめちやくちやに壊され、歪んだ壁の隙間から砂が水の様にこぼれてきている。

まさかこんな状態になってまでシエルターに残る人はいない。

「扉を破壊しましょうか？」

「地盤がおかしくなってる、どれが支えになってるかわからない以上危険は冒したくないわ」

「扉にそんな役目はないと思いますが……」

「知識がないからこそ怖いよ。それが分かっていたらすぐにも行動に移れる。それに……この壁は無駄に硬いから時間の無駄になるわね」

「じゃあどうするの？ 嬉々さんや美嘉さんは？」

「……………」

明季だつてこのシエルターのことを知らないわけじゃない。

非常用の出口として地下街につながっていることは承知している。

だが、今からそこに向かうとなると間に合わないだろう。

逃げていたとしても、戦っていたとしても、立っているのはおそらくプロデーターのみ。

わざわざ穂香に死体を見せるようなことは彼女だつてしたくはなかった。

「……正影のところに戻って一度——」

「私は行くよ？」

すべて言い終わる前に穂香が反論をする。

別に明季は驚いた顔を見せない。

わかっていたから、そういう選択をしたがるだろうと。

「通信をしてから10分経ったか経ってないかわからないだもん、走れば間に合うよ」

「……………いいのね？」

「ここで引き下がったら絶対に見たくないものを見ちゃう。でも、今行けばまだ…！」

穂香のことを過小評価していたようだと言判断を見直す。

外見まだ子供だし、正影にべったりだったのが十分成長していた。

久しぶりに180度読みが外れたなど自嘲する。

「別ルートに道があるわ。ここをまつすぐ行くよりは時間がかかるけどそこしかない」

「隊長…」

「恭二、貴方が思っている以上にこの子は大人だったわ。私が思っている以外にも、ね」

「……………わかりました」

「私もまだまだ若輩者ね」

3人は走り出した。



「いったあ！」

壁に叩きつけられた嬉々が悲鳴を上げる。

「チツ……」

舌を打ち、不快感をあらわにするリリイ。

「大丈夫か、嬉々!？」

嬉々を心配する蓮。

「ア……………オオ……………」

言葉ではない何かをどこからか発するプロデイター。

口のようなものは見受けられるが動いていない。

完全に劣勢に立たされた3人。

一撃、何かを頭にぶちかますことができればまた止めることができるかもしれない。

だが相手はそれを許さない。

さっきのはたまたまだったのだ。

なんだかよくわからない熱線を放つのだから接近戦なら勝てるのではないかと思っ

ていたのだが、それでもなかつた。

正直強い。

嬉々も手も足も出ないとまでは言わないがリリイと2人がかりでようやくやりあえるかそれより少しばかり上か。

「リリイ、もういつちよやるわよ！」

「馬鹿かお前!!これだけ押されたら馬鹿でも作戦を考えようとするぞ、それすらしないのか？」

「考えたつて意味ないでしょ？」

「……」

「もう一度奇跡を引くしかないの、そうでしょ！」

何も言い返すことができず、嬉々に同意せざるを得ない。

嬉々の容赦ない斬撃がプロディターに襲い掛かる。

はじめこそ合わなかったものの、リリイもようやく嬉々と息を合わせることに慣れてきた。

それに合わせて棍棒ともいえるほどの大ききがある刃を突き刺すためではなく、叩きつけるために振り回す。

しかし、その攻撃はいともたやすく止められる。

刃と刃がぶつかり合う音。

一瞬、プロデーターに避けられて自分たちの刃がぶつかり合ったのかと錯覚するが違う。

プロデーターの腕に止められていた。

そもそも2人の武器がぶつかり合った場合、棍棒（槍）と刀ではどうあがいても嬉々が押し負けるはずなのだ。

プロデーターはわざとなのか首をかしげる。

しばしば見え隠れするこのような人間的行動は大抵、誰かを馬鹿にする行動であり相手の神経を逆なでする。

意図してやっているのか、それとも無意識なのか。

「オオオオオオオオ！」

硬直は3秒ともたなかつた。

なぜなら全員分かっていたから。

相手が体を硬くしてくるなど予想の範疇内。

蓮が刃を受け止めているプロデーターに襲い掛かる。

銃器をもっているにもかかわらず、それを鈍器として扱いながら。

振り下ろされた鈍器から普段ならしないであろう鈍い音が鳴る。

下手をすれば銃口を曲げてしまい、銃として使えなくなるにもかかわらずその攻撃に

容赦はない。

プロディターはその攻撃をただ避けるという手法で避けた。

抑えていた2人の刃を押し返し、1歩後ろに飛び跳ねる。

それだけで5mは後ろへ後退する。

ガードではなく、避けた。

3人が全く同じことを考える。

頭はどうやつても硬くできないのではないかと。

というよりもつとと言うなら腕以外硬化させたところを彼らは見たことがない。

どこまで硬化できるのか、実は誘っているだけで油断したところをついてくるのでは

ないか。

変に人間らしいところがあるが故に変な考えを想起させる。

蓮は続けざまに壊れなかったかも確認せず、ガトリングを撃ち始める。

照準なんて後回し。

慣れない銃の操作が故に10m離れられると、まず自分の意志で当てることができない。  
い。

じゃじゃ馬のごとく暴れる銃は周りにある民家を破壊しながらその攻撃をプロディターへと向ける。

しかし、

「!?」

プロデーターもそこでただ黙ってみているわけではない。

蓮のガトリングの弾がプロデーターに当たる前に消えてなくなる。

まるで手品でも使ったかのようにプロデーターを中心に弾が消えてなくなる。

「惚れ惚れするな、敵でもここまできると」

「黙って作戦考えて、あれじゃ近づくこともできない!」

「さっきはそんなの必要ないと言ってたくせに」

リリイと嬉々はあたりを見回す。

こう例外的な状況になると案外ゲームの様に何か使えるものが落ちていたりする。

相手は熱線を放つ。

おそらく熱を自分の周りを囲むようにして放っているのだろう。

「リリイ、これどうかしら?」

何かを担いでもつてきた嬉々。

それを見てリリイはギョツとする。

「ばっ…、お前なんてモン持つてきてんだ!」

嬉々が持つてきたもの、それは何か気体が入っているであろうボンベ。

何も書いていないので水素かもしれないし、酸素かも、或はガスかもしれないがどれにしても危険であることに違いはない。

「投げつければ爆発するなんて安易な考えはやめろ、周りの気温が上がり始めてる。下手すれば何もしくなくても勝手に爆発するぞ!？」

「…じゃあその民家にある数十本のこれはどうすれば?」

「レエエエン! 移動するぞ!」

知識の上ではリリイのほうが豊富ならしく、イライラを露わにしながら逃げに移る。

もともと勝ち目なんてほとんどないのだが負けるにしてもガス爆発で死にましたなんて冗談じゃない。

「だがリリイ、こういうのはここら辺たくさん置いてあるぞ?」

「ハア!？」

「俺このあたり出身だからわかるんだよ、あの良くわからない物はいろんな所に置いてあるぜ?」

「~~~~~!」

どうせ置く場所がなかったのだろう。

誰が指示したかは知らないが地下なら外からの変な攻撃もまずないだろうし住宅がひしめき合っている以上、保管庫を作ったって違法でもばれはしない。

ここがシエルターの非常口から繋がっているとはいえそいつらから見ればそんなの関係ない。

「どこか拓けた場所は？」

「あると思うか？」

「聞いてみただけだ！」

分かつてはいながらも聞いてしまった自分に腹を立てる。

そしてどこにでも置いてある可能性があるのならば逃げる意味がないことに気づく。

むしろプロデーターに背中をさらけ出してしまうことになり危険極まりない行為。

足の速さでも勝てるはずがないのに何をやっているのか。

後ろを振り返る。

相手との距離はさほど縮まっていなかった。

だがプロデーターは手を前に掲げている。

相手が何をしたいのか、考えるまでもなく理解する。

「くそっ！」

後ろに気づいていない2人に危険を知らせる時間はない。

この時は自分のやりが大きかったことをありがたく思った。

まっすぐ走っている嬉々と蓮を横なぎに振り払う。

ブン、と空気が唸った。

それだけ力強く、そして速く振ったのだ。

まさかそんな行動を予見できるはずもなく2人はバランスを崩して民家に体当たりする。

「何す——」

刹那、熱気がさつきまで嬉々たちがいたところを襲う。

何の音を立てることもなく、地面がとてつもない高温になる。

光線に直接当たらないだけで自分たちが生きているなんて不自然に思えてくるぐらゐに地面との温度差がある。

しかし、それに驚いている暇などなかった。

近くの民家から謎の爆発音がする。

それはおそらく小さなもの、だがそれが連鎖的に増えていく。

「ヤバ——」

嬉々たち側の民家が突如大爆発を起こす。

家1つ吹き飛んでしまうような、文字通り大爆発。

直撃こそ免れたものの、大きな音で耳とそれによる噴煙で目がやられる。

「嬉々、無事——」



蓮の呼びかけが途絶える。

理由はすぐにわかった。

嬉々は近くでわずかに開けている目の隙間から見えていたのだから。

光る何かが蓮を殴った。

それだけで蓮の姿が視界から消える。

「蓮！」

僅かにしか見えない視界を使いながら無謀にも真正面から1人で斬りかかる。

さらに、無理に立ち上がるものだから足をふらつかせる。

型のなっていない弱弱しい斬撃はいともたやすく止められた。

刃と刃がぶつかり合う音なんてせず、ただ止められた。

プロデーターは刀を掴むと、それごと嬉々を壁に叩きつける。

あまりの激痛に刀を離し、地面に倒れこむ。

リリイはそれを眺めることすらできなかつた。

爆発の後、いち早く噴煙から脱出したがそれと入れ違いにプロデーターが侵入。

リリイの目では中を覗き見ることができない。

とはいえ、何もわからずただつつこめば死ぬだけ。

何もできない。

そんな状況だからこそ気づけた。

「……」

揺れている。

地震とかそういうものではなく、何かを引きずっているかのような地鳴り。

しかも結構大きい。

戦闘に夢中で気づかなかった。

さつきよりも今の方が大きい地鳴り。

「こんな時に何だっつてんだよ……」

## 一瞬

「みひ……め？」

ありえない。

何かの間違いだ。

彼女に限ってそんな…。

目の前には美姫が横たわっている。

動く気配を見せない、それどころか生きてる気配すら見当たらない美姫を前に力が抜ける。

嫌な予感はしていた。

遠目から見たので確信ではなかったが使われた衝撃シヨツケ手榴弾ボム。

ピンを外した後何かしらの衝撃を与えることで爆発する。

ただ、これは複雑な構造をしているが故作るのが難しく支給されない。

買うしかないのだがこれがまた高い。

「買うの苦労したんだから」と愚痴りつつ自慢していたのを覚えている。

別に興味なんてないのに。

そして美姫は支給されたものは使いまくる一方、買った物は使い渋る。だからケチ姫と呼んだこともあった。

そんな人が衝撃手榴弾を使うなんて何かあったのではと、悠人に残りを任せて飛び出した。

軽口をたたくつもりだった。

いつものように言い争いになるはずだった。

だが来てみればへりは消え、操縦士の死体が代わりに転がっている。

結果を知るにはそれだけで十分だった。

見姫の顔に手を触れる。

外見はほとんどダメージが見当たらない。

出血だつて大した量には見えない。

顔にもまだ生気が漂っている……ように見える。

だが、揺らしても反応はない。

呼吸もしていない。

心臓も動いていない。

「嫌……………」

いつもは言えない。

言えるはずがない。

強気でかかっているのに今更言えるはずがない。

だが、お互い理解していた。

だからこそ言い争った。

本当に嫌いな奴なら顔を合わせることもすらしらない。

「嫌……」

目から涙が溢れる。

動かない見姫を抱きしめる。

「ふざけんじゃないですわよ……!」

ただそこで抱きしめ続けた。

---

「まだ着かないの!?!」

「まっすぐ道ができてるわけないわ。それにこんな状況、結構な回り道が必要よ」

「時間がないのに!」

明季たちがアルツエの地下を走り回っている。

地下街に続く道を見つけるために。

思つてた以上に損傷が酷かった地下は住宅街への道を塞いでいた。

すでに行つて戻つてを繰り返して早3度目。

急がば回れとは本当にそうなのかもしれないと少し不安を感じる明季。

「隊長！」

「恭二、焦る気持ちは分かるけど貴方も——」

「違います、何かが近づいています」

「なんですつて？」

プロディターでも近づいているのかと思つた。

だが

「プロディターではないと思われれます」

「どういうことよ？」

「足を止めていただければ分かるかと」

「？」

時間がないとはやる気持ちを抑えつつ、足を止める。

そして気づいた。

揺れている。

しかも思っていた以上に。

どうして気づかなかったのかと笑われても仕方ないほどに。

「地震？」

「不規則すぎるわ。それに恭二の言う通り近づいてきている」

土の中を移動するオウステムは少なからず存在する。

だから地上はもちろん地下のガードも手を抜いてはいない。

だからこの揺れがあとどれくらい距離があるのか示していることにはならない。

頑丈な壁が揺れを最小限に防いでいる。

「行くわ」

「いいのですか？」

「何をどうしろっていうの。音を聞いたって距離もわからなければ止めることもできない。根源すら分かかっていない以上、構っている暇はないわ」

「了解しました」

3人が頷き、再び走り始める。

その時だった。

何か鈍い破壊音と同時に揺れが一層大きくなる。

視界は揺れ、立っていることもままならない。

突然の出来事に3人ともその場に崩れ落ちる。

天井がメキメキと悲鳴を上げいつどこから崩壊が始まってもおかしくない。

「隊長！」

「無理に動こうとしないで、必要最低限の動きだけにしなさい！」

「何が起こってるの!?!」

「分かってたらもつと早く対処——」

明季の口が止まったわけじゃない。

「対処できていたわ」としゃべっていた。

だが声は穂香はおろか恭二にさえ届いていなかった。

それだけ大きな地響きが鳴っていたのだ。

近くにいることは分かっていた。

だがそれが何なのか、どこにいるのか皆目見当がつかなかった。

(モグラ型でもいるっていうの? ふぎけないで——)

しゃべっていたわけじゃない。

だがそれが現れると同時に思考が止まってしまったのだ。

再び起きる破壊音。



それと同時に視界が砂埃によって奪われる。

いつもなら反射的に離れるところだったが動くことができない。

だが、顔を音の方向へ動かす。

目に入ったのは「目」。

いくつもの目が通り過ぎていくのだけが分かる。

一瞬、目が合ったように思えたがそれは分からない。

(まさか……！)

不安がよぎる前に確信を持っていた。

地面の中を移動することができ、いくつもの目を持ち、異常なほど巨大。

オクオロス。

死んだと思っていた。

出し惜しみしてしまったのが失敗だったと思うが時すでに遅し。

プロデーターが彷徨っている空間にオクオロスが入ってきたらどうなるか。

殺しあつてくれる可能性も大いにある。

だが、仮に殺し合いを始めたとして何が残るか。

何も残るはずがない。

それこそ破滅だ。

殺し合いをしてくれようが徒党を組まれようがどちらに転んでも破滅なのだ。

時間にして僅か10秒。

目の前を通り過ぎたのかぼっかりと空いた穴には何も残っておらず土がむき出しになっっている。

それから暫くその場にとどまった3人だったが30秒もしないうちに揺れが収まり始める。

収まるというよりは軽くなるの方が正しいのだが。

明季と恭二はすぐに立ち上がったが、穂香は足に力が入らない。

手が震える。

なぜあいつがまだ生きているのか、確かにパパが殺したはずだと恐怖する。

殺したと思っていたがまだ生きていたのだ。

確かに誰もオクオロスの死を手で触れて確認したわけではない。

遠目から見て止まっているから死んだと判断したのだ。

まさか内側から焼き殺したはずが気絶していただけなんて夢にも思っていなかった。

「隊長、お怪我は？」

「私は大丈夫よ。それよりそっちのほうが問題でしょ？」

「……あ……………」

何か言おうとしたのだが口もうまく動いてくれない。

トラウマなんてものじゃない。

それよりも酷い何か。

それでも自分を落ち着かせ少しずつ、力を入れ始める。

「隊長、もしかしてこの穴…」

「ん？」

「地下街に続いてません？」

「……可能性はあるわね」

大きく拓いており、洞窟と言っても過言ではないほどの穴。

アルツェ内の構造をほとんど把握している人だからこそ分かること。

大きく開いた穴はほぼ間違いなく地下街へ続いている。

だが、ここを通りたいと思うことはまずないだろう。

非常事態だからこそ選択肢に入れてはいるがいつ崩れてもおかしくないはずだ。

どうして崩れず空洞を保つことができているのかがすでに疑問だ。

だが、ここでとどまることすら許されない上に近道。

「穂香、ここを通るけど大丈夫？」

「近道…なの？」

「おそろくね。危険も伴うけど大幅な時間短縮もできるしこの通路だっていつガタが来るかわからない以上、安全とはいいいがたいわ」

「……………分かった」

「恭二、私は少し速く進むから穂香のフォローをお願い」

「了解しました」

明季がオクオロスが開けた通路に降りる。

足場はしつかりしていた。

又チャットと粘液なのかただの水なのかは分からないが足場が気持ち悪いところがあ  
るが大した問題ではない。

土のにおいが鼻につく。

いや、土よりも何かが腐ったにおいのほうが強いのかもかもしれない。

願わくばマスクでもして通りたい通路、というか避けたい通路。

だが、進むしかない。

もし読みが外れて実は地下街に繋がっていなかったらと思う節もあるがやるしかない。  
い。

一抹の不安と一緒に明季は走り始めた。

「……！」

「？……？？」

一方、嬉々は未だプロディーターと対峙していた。

戦況は言うまでもない。

蓮は完全にノックアウトし、リリイは戦力と言うより傍観者のほうが近い。

もちろんリリイだって何の考えもなしにただ見ているわけではない。

そして今、嬉々とプロディーターの両者はともに困惑していた。

原因は揺れ。

命の取り合いでさつきまで、少なくとも嬉々は気づかなかった

気づいた時には結構な揺れになっておりこれにはさすがに足を止めた。

プロディーターもそれに呼応するようにおとなしくなった。

ただ、プロディーターも何が起きているのかわからず困惑しているように見える。

人の姿であるが故、あくまで外に現れている行動から察するにだが。

揺れがだんだん大きくなり、嬉々は立つのもままならなくなる。

「リリイ、何が起きてるの!？」

「知ってたら何か行動をしている!それよりプロディターから目を離すな!」

刹那、黙っていたプロディターが嬉々に向かつて飛びかかる。

反応に遅れた嬉々だったが反応する必要はなかった。

プロディターの攻撃は大きく嬉々を外れ、民家に飛び込んでいったからだ。

プロディターと言えどもバランス感覚はあるらしい。

揺れの大きさにバランスを保つこともままならないこの状況。

それで飛びかかったって狙いなど定まるはずもない。

そしてプロディターが民家にツツコンだのと同時にそれ以上の衝突音が聞こえる。

「なに……が?!」

状況が把握できない嬉々の前にリリイが転がり込む。

必死にバランスを取りながら蓮を背負う。

「リリ——」

「こい、早く!」

「この状況でついて行くなんて無理に決まってるでしょ!」

「何でもいいからさっさとそこを離れろ!」

「そんなこと言われても……!」

離れたくても地面に伏していることしかできない。

むしろこの状況でグダグダとはいえ移動できるリリイを不思議に思う嬉々。

「なら少し我慢しろよ!」

バランスをとることがままならない中、リリイは必至に立ち上がり槍を振りかぶる。

その行動が何を意味しているのか、これはこの状況の危機でも理解できた。

しかし、その行動の意図を理解できない嬉々は慌てて避けようとする。

が、立つことができない以上移動はできない。

這いつくばってでは時すでに遅し。

リリイの槍が勢いよく嬉々を殴り飛ばす。

「がっ!?!」

背中がすべて逝ってしまったのではないかと思うほどの激痛が走る。

しかし、そんな痛みを吹き飛ばすほどのものを嬉々は宙で目撃する。

視界に入ったのは大きな何か。

芋虫のようにも見えたが体中についている目玉がそれではないと訴えている。

虫はあんなに凶悪ではないと。

そして美嘉と一緒に見た資料を思い出す。

(あれが……！)

オクオロス。

オーロワームすら実はまともに見たことがない嬉々にとって初めて見る超巨大型。

その大きさに恐怖よりも先に魅せられてしまった。

しかし、いくつもの目がギョロギョロ動いているのを見ていれば正常な人ならばすぐに「嫌悪」等に思考が切り替わるだろう。

嬉々も同じだった。

「あそ……」

オクオロスはまっすぐ自分たちがいたところに進んでいた。

時間にして3秒。

嬉々の視界に入って3秒後、さつきまで自分がいたところがオクオロスの口に飲み込まれる。

プロデーターも避けていなければ口の中。

宙に浮いている時間が終わり地面に落ち始める。

受け身を取ろうとしたがリリーの攻撃が予想以上に痛く、地面の直前で体勢を崩し今度は胸を痛める。

この時は胸がある程度あってよかったと自分の胸に感謝する。



「無事か？」

「……おかげさまで」

近くに降りてきたリリイはなんの悪びれもない。

まあ、命の恩人と言えばそうなのだが。

「さっさと退くぞ」

「いいの？」

「なにが、と聞きたいところだが折角プロディターあいつから逃れられたんだ。3人全員無事なんて

奇跡の一言でも言い表していいものか……。それにこいつを抱えて戦うのは無理だ」

「……そうね」

オクオロス自分たちに興味がないのか襲ってこない。

むしろオクオロスはそのまま一直線に去ってゆく。

通った道には何も残っていない。

嬉々たちの騒乱は幕を閉じた。

すべてを奪って行くオクオロスの手によって。

## 終息

被害は思ったより少なかった。

地下街は使うには難しい状況かもしれないが中心のアルツエを除けば地上で十分生活ができる。

最もいつ倒れてくるかわからないアルツエの眼前で生活しなければならぬのだが。

「穂香ちゃん、すっかり眠っちゃった」

「まだ10歳未満だったわよね。さっきまでしっかりしてたんだから当然よ」

嬉々が穂香を背負い、恭二が蓮に肩を貸している。

「…隊長さん、少しは——」

「要因1、私の方が格が上。要因2、あなたは男。要因3、小型の通信機を所有していたという罪——」

「俺が悪かった」

全員の支給武器アルマを運んでいるリリイは不満気ではあるが何も言い返せないが故に黙ることにした。

オクオロスの作った道を抜け、うまい具合に鉢合わせた6人は地上に向かっている。

追ってくるプロディターの影もなく、足取りは決して早くはない。

「なんであの力馬鹿女はいないんだ？」

「少なくとも俺がいる前では荷物すべて持たせるなんて狂動、許しませんよ」

「狂動ってなんだ？」

「狂言っていう言葉があるでしょう？あとは察してください」

深いため息をつくりリイ。

そんなのをよそに嬉々々はどうしても聞きたいことがあり、明季に近づく。

「あの…」

「正影なら無事よ。オクオロスには仕留めそこなつたみたいだけど私たちが回収してるわ」

「それなら…、よかった」

「……………」

オクオロスは去った。

プロディターも襲ってこない。

なのになぜこの嫌な感じは取れないのか。

明季は美姬たちは信用している。

彼女たちの身に何かあったとは考えていない。

ならばラグフィットや青羽など上司の身に何かあったのだろうか。それはそれで困る話なのだ。

不安が何なのか、考えながら歩く。

答えは出るはずがない。

「？」

日が自分の体に当たったのが分かる。

地上に出た。

外の光景は決してきれいとは言えない。

だが十分だった。

特に嬉々と蓮、それにリリイ。

彼らは二度と見られなくてもおかしくないと思っていた。

言葉を選ぶべきかもしれないが「助かった」と改めて実感する。

「嬉々、みんな！」

日の光に軽い感動を覚え止まっていると呼ばれる声があった。

真理奈と美嘉が出迎えてくれた。

真理奈は走って嬉々に抱き着こうとしたが直前で嬉々が制止を促す。

ここでまた入院沙汰はご免である。

それに気づいて真理奈も少し留まるがすぐに抱き着く。

加減はしてくれたようだだがそれでも嬉々の笑顔は少し引きつっていた。

微妙な振動を感じた穂香は目をこすりながら目を覚ます。

「穂香ちゃん、元氣してた？」

「ん…、美嘉さん？」

美嘉は穂香に赤ちゃんの誘導を促すかのように手を広げる。

穂香は寝起きではまだ眠いのか何も考えずに美嘉の元に移動する。

今回ばかりは下心なしに生きている喜びを抱きしめる。

無言のまま明季は恭二から蓮を預かる。

その行動に驚いたが、恭二は少し頭を下げると真理奈に歩み寄る。

真理奈は嬉々同様に恭二を抱きしめる。

ただ、真理奈の抱きしめていた腕の力は嬉々の時よりも強いはずなのに顔色一切かえない。

「こういう時、相手がいない人はどうしたらいいと思う？」

「寂しいと思うなら作るべきじゃないですか？」

「思わなかったら？」

「ただ見てればいいかと」

リリイに問いかけた明季は静かに笑う。

「なにか？」

「いえ、やっぱり同類に聞かなきゃだめねと思ってね」

「この場面だけ見ればそうだと思いますが？」

「いるじゃない」

明季の目線の先にリリイも目をやる。

目を覚ましたのか穂香が手を振っている。

満面の笑みとはああいう顔を指すのだろう。

「隅におけないわね」

「勘弁してください。対象外です」

全員のアルマを持っていてるため手はふさがっている。

感情を表には出さなかったがリリイはその時確かにホツとした。

「明季さん、司令が呼んでいます。急いでくれとのことですよ」

「分かったわ。案内して」

十分に思ったのか、真理奈は明季に自分の用事を伝える。

明季は「自分だけ呼ばれてるのだから自由にしなさい」といい、蓮を恭二に預ける。

そのまま明季は真理奈と一緒に、恭二はあとを歩いていくようにその場を去った。

「リリイ、生きてたんだね」

「2回も裏切者から生き残ったなんて、主人公スペックあるんじゃない？」

「それがあつたらお前らは哀れなヒロイン役としてすでに死んでるな」

「何言ってるのよ。プロデーターが攻めてくるま——」

嬉々に向かつて嬉々のアルマが向けられる。

左手でプルプルと震えながらもリリイは他のアルマを持ちながら刀を向ける。

それ以上しゃべるなど言いたいのは一目瞭然。

「…まあいいわ」

「美嘉さん、あとパパ知らない？」

「そうそう、正兄はどこなの？」

「え……………あの……………」

触れてほしくない話題だったかのように口ごもる美嘉。

穂香と嬉々は疑問符を思い浮かべるが、リリイだけはなんとなく最悪の事態を予想する。

話題をそらそうと戸惑っている美嘉を見かねるリリイ。

「とりあえず美嘉、拠点に案内してくれ。重くてかなわん」

「え、ええ。そうね。2人も疲れれてるでしょ？」



「それはまあ、そうだけど」

「じゃあまず戻りましよ、そうしよう！」

「?!」

穂香を抱っこしながら方向を変える美嘉。

それを別に止める人はいなかった。

だが、違う面から見れば問題があった。

「美嘉」

「うん？」

「その手を移動させるか穂香ちゃんを降ろして」

一見は別に何も感じさせない画。

まあ、少しばかり大きな赤ちゃんととらえられるかもしれないが疲れているのだから背負われるなり抱っこされるなりあってもおかしくはないだろう。

だが嬉々が注目したのはそこではなく美嘉の手がある場所。

穂香のお尻に触れていた。

「いや、さすがに今はないわよ!?!体重支えてるだけよ!?!」

「もし正兄が見たら殺意湧きかねないから」

「わ、分かったわよ……」

明らかに名残惜しそうに穂香を降ろす。

この姿を見ると嬉々はどうしても体重を支えるためだけだったのか心配になる。穂香は地面に降りるとリリーの元へと駆け寄る。

「重いんでしょ？持つよ」

「先輩に持たせることはできませんよ」

「後輩は先輩の気持ちに甘えたほうがいいよ？」

「ハッ、知ったことか」

穂香以外の誰かだったら容赦なく渡していただろう。

だが、これに他には渡せなくなつた。

面倒ではあるが黙って運ぶかと心の中でため息をつき歩き始める。

しかし、穂香はここで引き下がらなかつた。

変な意地を張る。

リリーの服の裾を掴んで離さない。

「いいからよこしてよ、疲れてるんでしょ？」

「余計なお世話だ。おとなしく美嘉にでもついていけ」

「先輩の言うこと聞けないの？それから敬語」

「以後気を付けますよ、だから今は——」

「いいからよこしてよー！」

いつもならただ強く引つ張っただけではリリイは持ちこたえることができる。

正影を仲介者メデイートルに持つていてもなんとか持ちこたえる。

だが、それに今は真理奈が加わっている。

どうなるか。

リリイの視界が一瞬にして反転する。

眼前に映るのが青い空。

「？」

次の瞬間、リリイの視界は真つ暗になった。

---

「上出来だ…：ようやく確保できたか」

リレグは素直に感嘆の息を漏らす。

窓越しに正影が眠っているのが分かる。

相当疲れきっているのか、当分起きる様子は見せない。

「プロデューサーの方はどうでした？」

「無事、帰還してくれたよ。最も一体がやられて帰ってきたのは予想外だったが」  
おとなしくカプセルに入った人が目に入る。

2人。

片方は女性で片方は男性。

人種までは定かではない。

曇っているかのように体系は分かっても顔までは見ずらいのだ。

「ただ、こいつが何か感じ取っているようですが…」

「まあ、あつてもおかしくはないだろう。それなりに深い仲だったそうだからな」

「これでは回復に支障が出るかと」

「…それならL O P R ー7を使って休ませろ」

「はい」

フラテッドは指示を受けるとキーボードをたたく。

はた目からは何も変わらない。

カプセルの中は相変わらずの状態。

だが、何かの計器なのか酷く大きかった揺れ幅が突然おとなしくなる。

「1つづつ報告が」

「なんだ？」

「E―23ですが、今回の作戦では使用されなかったようです」

「そうか」

流すように興味を示さないリレグ。

「よろしいのですか？」

「今、あの状態でE―23は使えない。核爆弾は手持ちで運べるほど容易いものではないからな、下手な衝撃一つで自分の身が危ない」

「持ち運べるものだと言ったのですが？」

「面白い話だ。ミサイルを人が持って運ぶのか」

下らないと言いたげに手を振る。

「ここはもういい。イリユミタートの状態を確認し次第、休んでくれ」

「はい。では…」

フラテッドは部屋を後にする。

リレグはガラス越しに正影を眺める。

目の前で見て改めて思った。

全然変わっていない。

正影と直接顔を合わせたことは何度かある。

だがそれを正影は記憶していないだろう。

地位はそこそこだったと自負しているが顔を合わせたのは数えるほど。

戦鬪馬鹿が覚えるほどではない。

こちらとしても10人弱いる中の一人だった以上、正直記憶だけでは鮮明には思い出せなかった。

10年以上前の資料を引っ張り出した今ではよくわかるが。

だが疑問として残るのは一体何がどうなつて正影が年を取ることなく今になつて表れたのか。

自分が渡した機械にタイムスリップのような摩訶不思議な機能を取り付けた覚えはない。

というよりそんなことができればもっと違うことに使っている。

それ以前にそんな話、一科学者としては否定したいところ。

時間はある。

目覚め次第、聞いておこう。

## 決意

嬉々と穂香は明季の言葉が理解できず困惑した。

「あの…明季さん？」

「何度も言わせないで、正影は行方不明。最悪死んだと考えてもいいでしょう」

意気揚々と帰った2人に待っていたのは絶望だった。

オクオロスにやられたとは誰も言っていないかったし、何よりその場に居合わせている穂香の言動もそれは嘘をついていなかった。

だから嬉々はその言葉に納得できなかった。

「パパは死んでなんかいない！現に私が生きてるもの！」

「ええそうね、変なこととしてなければ死んでないと思うわ」

「変な、こと？」

「一時的とはいえ繋がりを遮断する方法はある、それをしていたら？」

「でも私、微かだけどパパを感じるもん！」

「それじゃ確証には繋がらないの」

感じるといってもそれは感覚的なものというより直感のようなもの。

触られているではなく、触られているような気がするのだ。

「美姫さんは？鈴さんは？あの2人は死んだって言ったの!？」

「美姫は死んだわ」

また思いもしなかった言葉に穂香が言葉を失う。

「詳しいことを話していいっていう許可が下りてないからまだ何とも言えないわ。けど

美姫は死んで、正影は行方不明。これは事実よ」

隣にいる青羽がバツが悪そうに顔を下げた。

嬉々も穂香も疲れすぎていて涙が流れないどころか表情すらキョトンとしたまま。

明季は伝えることを伝えるとその場を後にする。

美嘉は何か声をかけようと思ったが何を言えばいいかわからない。

心愛は場を和ませようと案を出そうとするが出せない。

蓮は嬉々が悲しんでいるのに何をしたらいいかわからないと自分を責める。

太郎はただ黙ってその場を見つめる。

太郎のが一番いい選択なのかもしれない。

嬉々にとっては初めて自分の大切な人がいなくなってしまう瞬間なのだ。

そんな相手に向かってかける言葉なんてまずないだろう。

不幸中の幸いなのが死んだかどうかかわからないということ。



場合によつては悪い方向へ進みかねないことかもしれないが、少なくとも嬉々は生きているととらえるだろう。

穂香も同様に。

理由はその場にいる全員が分かる。

死んだかどうかわからない相手を死んだと仮定してしまえばそこまでなのだ。

大切な相手に死んでほしいと願う人はいない。

「……………青羽さん」

「？」

「少し、時間をください」

「でも一刻も早い復旧のためにも人手が——」

「俺たちがやります」

蓮が他の人の意見を聞くまでもなく進み出る。

なんとなくこうなることは予想来ていた青羽。

本来なら駄目だと叱るべきところだが黙って頷いた。

幸いばれてもラグフィットは今の自分に何かペナルティをさせるほど余裕はないだろう。

「少しだからね。みんなも疲れているはずだからそこは分かっておいて」

「は？」

「で、穂香。君はどうする?」

「……………」

「生憎、真理奈との仲介者を断ち切る設備が今はない。つまり今は穂香に働いてもらったほうが進みがいいんじゃないけど?」

「…やります」

消え入るような声でそう言った。

「穂香ちゃん、少しくらい…」

「いいの美嘉さん、気にしないで。今だけだから」

「じゃあ振り分けをするからそれぞれの場所に行ってね。と言ってもばらばらというほどじゃないけど」

嬉々は一人、道を歩いている。

その周りには疲れ切った表情をした人々が座り込んでいる。

ただでさえ、貧民には食料がいきわたつていなかったのだからこの状況はつらいだろう。

ただ、今の嬉々は何もできないので無視するしかない。

幸いアルマを持つてゐるわけではないので見た目は一般人と何ら変わらない。

服もボロボロなので溶け込むことは容易だった。

1つの施設の中に入る。

その中も人はいっばいだった。

だが、彼女が見るのはそこではない。

迷わず奥へ進むとプロトが見えた。

「お前は……」

「嬉々、プロトよ」

「護衛の任の変更は聞いてないが？」

「少しだけ時間をもらったの。奥にいる稗田はいださんに会いたいの」

「……民間人は一切通すなど言われてるんだが」

「プロトは？」

「…………手短に済ませてくれ。報告書を書くのは面倒なんだ」

「ありがとう」

「入ったら2つ目の扉の奥だ、ちなみに右」

通してもらい言っていた部屋の前に立つ。

特に緊張することはない。

扉をノックすると2拍ほど開けて「どうぞ」と声が聞こえる。

開けるとそこにいたのは1人の男性。

若くは見えないがまだそれほど年がいつているわけでもないだろう。

「嬉々か、こんな時にどうした？」

「久しぶりです、稗田さん」

頭を下げる。

「毎回やめてくれ、申し訳なくなる」

そう言われてすぐに頭を上げるが本来ならもつと深く頭を下げたいところだ。

なぜなら彼は育ての親であり――

「正影は一緒じゃないのか？まあこんな時に来ること自体が疑問なんだが」

正影の司令だった人。

正影からすればおそらく久しぶりに会っただけで、いつものように頭を下げるなり敬

礼なりするだろう。

しかし、稗田からすれば失ってしまった自分の部下が10年後に帰ってきたのだ。

顔を見たいに決まっている。

「それと今は伊瀬<sup>いせ</sup>って呼ばれている」

「つい2か月前に変えたばかりじゃないですか？」

「相変わらずの状況だ。少し早く見つかってしまったからな」

「いつもいいですけど私は稗田さんって呼び続けます」

正影と結衣を失ってから彼に不備こそなかったもののダメージが大きかった。

その後、嬉々には分からないが稗田は嬉々を引き取った。

親のように慕っていた正影がいなくなったのだから6歳の嬉々だけでは辛いだろうという理由からだそうだが、大抵の人は実験に使うのではなんて思ったそうだ。

良くて罪悪感からだとか。

初めこそ認めてくれない嬉々だったが誠意が通じたのだろう。

今では本当に良かったと思っているようだ。

そして10年後結衣は相変わらずだが正影が生きていると聞いた。

疑問こそ残るが嬉しいに決まっている。

「で、どうした？こんな時に」

本題に入る。

それを聞かれて自分からもうつもりだったにもかかわらず嬉々はどうしたらいい

かわからず黙る。

相手のペースに任せるつもりなのか稗田は急かさない。

嬉々は少しづつ言葉を紡ぐ。

正直最後のほうは文章とは言い難いものとなっていた。

思ったことを言葉に出している感じ。

思い出したことを時間軸など関係なく出している。

黙って稗田は聞いていた。

泣き出して何を言っているのかわからなくてもただ聞いていた。

「正影が……」

「私、どうしたらいいかな？ 助けに行きたいけどそんなのできないことくらいわかってる。正兄ならできるところからやれとでも言いそうだけど……何をしたらいいかもわからない」

「……」

「今度は本当にいなくなっちゃいそうで……。やっと会えたのに……」

「……覚悟はあるのか？」

「え？」

慰めの言葉が来ると思っていた。

それが普通のなのだから。

だが、それはあまりに突拍子過ぎて予想なんてできない、選択肢を与える言葉。

「正影が連れていかれた場所は…なんとなく想像がつく」

「…！」

「だが、嬉々。お前がただそうやって伏しているだけではいけないだろう」

「居場所と…行き方を知っているの!？」

「あくまでも予想だ。そして合っていたとしても俺の力だけではそこには行けない」

かつてないほどの喜び。

いや、喜びというのはいささか語弊があるだろう。

正影が無事でなければ意味がないのだから。

だが見えた一筋の希望。

「それでも…、正兄を助けられるなら！」

「ただし、絶対生きて帰ってくることだ。お前を犠牲にして正影だけ助かってみる、今度

こそ俺の命はないからな」

「分かった！分かったから…」

餌を目の前にして我慢の限界に近い犬のように体をぐいっと出してくる。

さつきまでとは大違いの態度に「相変わらず単純だな」と思ってしまった。

「まず、リレグって知ってるか？」

「名前くらいなら…あとオスの研究者だったとか」

「それだけで十分だ。俺からもラグフィートに言っておこう」

「ここでもその人の名前かと首をかしげる。

聞いたのはリレイからだったか。

あいまいな記憶になりつつはあるが確か消息不明じゃなかったつけとある限りの記憶を戻そうとする。

「さて、表に出るか」

「え、外に出るの？」

「こんな状況だ。俺を特定するのは難しいだろうし、最強の護衛がついてきてくれるんだろ？」

「…！もちろん！」



「……………」

「……………」

資材を持ち上げながら頬を搔くリリイ。

穂香の様子がおかしいのだ。

静かすぎる。

理由は分かっている、だからこそ何もできないことが分かる。

美嘉には励ましてあげて的なることを長々と回りくどく言われたがお分かりの通り、そういうのが苦手なリリイ。

それは美嘉も理解しているはずなのだが…。

こうなってくればと思っていた状態だ。

静かに何もしやべらず作業に没頭できる。

なのにいざそうなると調子がくるって違和感がものすごい。

もともと、子供という生物はうるさくて避けてきた道。

何をどう接したらいいのかわからない。

「ねえ、リリイ」

「あ？」

穂香が口を開いた。

なんとなく嫌な予感がしていたリリイ。

「私、どうしたらいいのかな？」

喉元までこみ上げた「俺に聞くなよ」という言葉を飲み込む。

なんで飲み込んだのか、いつもならいうはずなのになど後になって思ったりリリイ。

「何もするなつて言うう？」

「……生きてるか分からない奴を助けに行くのは得策じゃないからな」

「そう……だよね」

「慰めてほしいつて言うなら俺には聞くな。分かつてるだろ？」

「……私、ここに来る前にも大切な人たちとお別れしたの」

「全員そうだ」

「なんでオウステムつて生まれちゃったのかな？」

「俺が知りたいな」

突き放すこともできた。

だが、何故か言葉はそうしなかった。

「リリイは、大切な人がいなくなった時……どうした？」

「……親が死んじまったのは俺の記憶がない頃だ。だから失つたとはいえ、正直なんとも思わなかった」

「でも、大切な人って家族だけじゃないでしょ？」

「付き合い方の問題だ。これ以上は踏み入れさせないっていう境界線を作る」

「なんで？」

「俺にもわからない。でもそうやって生きてきた」

初めからそう生きてきたのだ。

自分がどうしてそう決めたのかなんて分からない。

「でもそれは俺の生き方だ」

「……？」

「お前の生き方にケチをつけるつもりはない。批判をすることはあるかもしれないが、それでもお前の人生だ。やりたいようにやれ」

「……………」

「なんだ？」

「私、そこまで質問した覚えはないよ？」

「……」

「もしかして…励まして——」

リリイはその場を立ち去る。

何も言わなかった。

おそらく、彼自身もおかしいことに気づいたのだろう。

残った穂香は一人考える。

自分のやりたいようにやれ……。

リリーの励ましは大きかった。

「……うん、私頑張ってみる」

穂香は黙ったまま作業を再開した。

## 妹の努力

「ん…」

体はだるい。

まだ寝ていたい気分だ。

記憶はすっかり残っている。

へりの中で意識を失ったはずだ。

つまり今は医務室にでもいるのか。

「??」

手を動かそうとして気づいた。

つながれている。

「これは…」

だるい体に鞭を入れ、辺りを確認する。

手術室のように計器が並び、器具が置いてある。

清潔感があふれている部屋。

ただ、こういう部屋に入ると一般人以上に嫌気がさす。

一般人なら体を治すためとはいえ、メスで腹を切り開かれたりするから嫌だと思ってしまうだろう。

だが、ロストチルドレンの正影の場合は治すためではなく研究のためのモルモットとしてよく入った。

だが、ラグフィートとはそんなことはしないと決めたはずだ。

寝ている間ならともかく、今は起きた。

あからさまに「何かします」といつているような場所に置いていくのはおかしい。

『ようやく起きたか。あまり長いからどうしようか処遇を決めかねていたところだ』

ガンガンと痛む頭に響くように声が聞こえる。

スピーカーを通しているのかこもったその声は今の正影にとっては毒である。

「…誰だ?」

『フラテッドという。リレグ様の下で働いている者だ』

「……目的は?」

『イリユミタートの完成』

「??」

『知るはずがない。そしてそれを教えるか教えないか決めるのは私ではない』

「なにを言っている?」

『…話しすぎた。これで失礼する』

スピーカーから聞こえていた声がなくなった。

顔は分からなかったが、顔がなくなったのだろうか。

或いは黙って観察を続けているのか。

どちらにしても正影に選択肢はない。

今は黙って伏しているときだろう。

正影は体力の回復に努めることにした。

---

非常用の設備しか整っていない。

アルツエの時ほど豪華絢爛な見た目もない。

クーラーはきいていない。

防音対策もなっていない。

ただ部屋はきれいだった。

「……………」

きれいな部屋の中で黙って書類に目を通すラグフィート。

豪華絢爛な見栄えはいらなと思うが防音は大事だなと改めて思っていた。

あらかた遠くのアルツエへの連絡は済ませた。

望んでいたほどの結果ではなかったが援助はあるだろう。

何よりあふれかえった民間人を受け取ってもらえる所が少数とはいえあるだけましなものだ。

正影の件はとりあえず行方不明で片づけることができ、少しは楽だった。

もし、いなくなっていなかったらどう処理しようか悩んでいただろう。

それでもやはりいてほしかったことに変わりはないのだが。

(また、してやられたか)

焦っても意味はない。

今は為すべきことをするまでである。

といつても、それが書類に目を通すということだけは納得がいかないのだが。

「司令、いらつしやいますか?」

ドア越しに声でした。

青羽の声。



う。ノックすればいいのを知っているはずなのだが、おそらく自分が聞き漏らしたのだらう。

「なんだ？」

「ご客人がお見えになってます」

「客？こんな時にか？」

「私としてはご遠慮願いたかったのですが…」

「？」

扉が開く。

外から余計にうるさい人の声がする。

そして扉の前には嬉々と――

「…伊瀬か」

今の名前。

長い間、顔を合わせた覚えはなかったがすぐにわかった。

後ろで遠慮がちに嬉々が立っている。

それを見てあらかたのことに察しがついたラグフィットはため息をつく。

「人選は済んでいる」

「足りてないのだろうか？」

「大勢で乗り込むのはその後だ。今は必要ない」

「正影を連れ帰るという意味では、最も信頼できる人材だと思うが？」

「一応言っておくが今のあなたには何の発言権もない。それは分かっているでしょう」

「だからこそ、直談判しに来た。それにここにこれたということは何の権限もないというわけではないらしい」

権限がないのは事実。

来れた理由は単に以前、お偉いさんだったから。

苛立ちを隠せないラグフィートは、眉間にしわを寄せる。

「逃げるようにして司令の立場を去り、私に押し付けた奴が言うことなど聴くつもりはない」

「推薦してほしいと言っていたじゃないか」

「黙れ。いい加減にしないとその口縫い合わすぞ」

「あの…」

「嬉々、私は親が親なら子も子なんて思わない。だから言うがこいつとはさっさと縁を切れ」

「そ、それはできません！それに今は違うお話があつてここに来たんです」

「美姫を殺つたのは人だ」

論すように、静かな口調でしゃべる。

「オスではなく、人だ。この意味が分かるか？」

「強い……ということですか？」

「そんな簡単な話じゃない。確かに技術の面で劣るところがあるかもしれないがそれ以前にお前は人が殺せるのか？」

「……………」

「美姫にはおそらくその度胸がなかったのだろう。あらゆる点で美姫に劣っているお前にその度胸があるのか？」

「正兄を、正影を助けるためなら……！」

「不合格だ、帰れ」

「なっ、なんでですか!?!」

否定を即答されて嬉々は前に足を踏み出す。

「今回の任務は正影の生死を確認し、生きていた場合連れて帰るということになったいる」

「それがなんですか？」

「その言い方だと、正影が死んでいた場合何をしでかすかわからん」

「それでも、私は！」

「くどくど」

もう話を聞くつもりがないのか、ラグフィートは嬉々たちに背を向ける。手に持っている書類に目を通し始め、ため息を漏らす。

「……………分かりました、失礼します」

いいのか、と声をかけようとした稗田だったが嬉々は顔でそれに返事をする。

黙ったまま、その部屋を出る2人。

少し離れたところにいた青羽がそれを見ると、入れ替わりに部屋に入る。

「諦める、わけじゃなさそうだな？」

「勿論です。ただ手法を変えるだけですから」

「上官の許可なしに…か。正影とは違ってずいぶんやんちゃに育ったな、嬉々は」

「と、いうわけで情報を渡しなさい」

「いやいやいやいや！なに言ってるのよ？どういうわけよ!？」

美嘉は意味わかないと言わんばかりに手を大きく振っている。

周りには人がいないわけではないが、ちよつと大声が出たくらいで「なんだ？」と反応するほど暇ではないし、余裕もない。

「私は正兄を絶対に助けるの、そのためには司令がいつそれを実行し何を使って移動するのか知る必要がある。だから貴女の情報網に頼るのよ！」

「嬉々、いくらなんでもそれは無茶よ」

「なんで？いつも危ない情報持ち歩いてるじゃない？」

「私がどうやって情報を仕入れているか知ってる？歩き回って聞き込みなんてよほどのことがない限りしないわよ。基本的にはインターネットを経由していわゆるハッキング的なことをしてるのよ？」

「だからそれをしてくれって言ってるだけじゃない」

「……いい？正影さんは今普通のプロトとして扱われているの、情報の中では」

「それがどうしたのよ？」

「そんなプロト1人のために動く組織は普通じゃない。司令は間違いなく隠密に事を済ませるはずよ」

プロトの代わりはいくらでもいる。

勿論ただでどぶに投げ捨てるようなことをすることはないだろうが1人失ったくら

いで頭を悩ますことではない。

美嘉の言っていることは正しい。

嬉々の顔から血の気が失せ始める。

「物資の問題だってこんな状況じゃあいくらでも改ざんできるだろうし…、私にはとても無理よ」

「でも、何かあるでしょ!？」

「……………その作戦に関わっている人に聞くってことくらいしか。見当はつくけど…」

「明季さんじゃ無理よね」

「オペレーター…貴女のことを見越して私なら真理奈には役目を負わせない。可能性があるならリムくらいか」

「ええ…ありがとう。少しあたってみるわ」

傷心気味であるのは分かるがそれとは裏腹に、彼女の足は止まっていない。

嬉々がいなくなると、ため息をつき頭を掻く美嘉。

無力だとは思わない。

あくまでも美嘉はただのプロトであり、それが当たり前だから。

だが、力になれないのは悔しかった。

さつき美嘉はネットに情報は載らないと言ったが実はそれは確証ではない。

あくまでも自分の見立てだ。

少し探してみようかと思いつたが、すぐにそれは不可能だと思いつす。

そもそもこんな状態でプロトに支給されるネット端末はない。

探せば無きにしても非ずだろうがいくら嬉々のためとはいえ、あまり違反した行動はとりたくない。

「美嘉」

「ああ、蓮。いたの？」

「少し前からな」

「穂香ちゃんはどうしてる？」

「真理奈の力を生かして仕事に励んでるよ。何があつたのか知らないけど悪い空気はなくなってた」

「……見かけによらずロリコンなのかしら？」

「??」

蓮が首をかしげているが別に共感してもらおうとは思っていない。

「それより嬉々のことだけど……」

「少し前からいたのよね？好きなら出てきて励ますのが男つてもんじゃないの？」

「そうしたかったのはやまやまだけど。俺は何も手助けできない」

「…一体誰が攫っていったのかしらね」

「正影さんをか？」

「そもそもどこから情報が漏れたのやら。オスを操る技術なんて存在しないんだから、この機会に乗じてロスである正影さんを連れ去ったんでしょ？それってあらかじめ誰がロスだか分かってない和无理があるわよね」

「情報なら結構漏れそうな気がするけどなあ」

「案外そうでもないのよ」

アルツェ内の人は正影がロスだと知っている。

ただ、外へ連絡する手段を持っていない。

それを持ち合わせているのは司令であるラグフィートのみ。

頻繁に外と連絡はとることがある人はいるがあらかじめラグフィートの許可が必要で、その会話も録音されている。

ネットを使った場合は外へ漏れるのでは、と思われがちだがそれぞれの施設にメインコンピュータがあり、それが外と中を完全に遮断している。

同じ基盤を持ったコンピュータが全ての施設に配られているため同じ機能や性能を持ち合わせている。

なので基本コンピュータは娯楽に使われることはなく、調べ物を扱うときに使うこと



が大半。

ブログのようなものも上に管理されており、いくら施設内の人しか見ないとはいえ正影のことを載せるのは固く禁じられていた。

一番ラグフィットが気を配っていたのはここだろう。

「はあ…なんか疲れたわ。ちよつと癒されてくる」

「ペットでも買ってるのか？」

「穂香ちゃんに頼ずりしてくるわ♪」

「…変なことほしないでくれよ？」

「大丈夫、それは正影さんと穂香ちゃんの両方に許可貰ってからするから」

（貰えると思ってるのか？）

軽い足取りでその場を去る美嘉。

ただ、今の発言で美嘉も正影が生きていると信じていることが分かった。

蓮自身もその意見にはもちろん賛成だ。

だが、だからこそ美嘉の夢はかなわないだろう。

蓮は気の毒そうな目で美嘉を見送った。

## 幸運

狭い部屋の一室。

2人、ラグフィートと明季の2トップが静かに話している。

急いで用意した部屋だからか、明かりはままならず物が積みあがっている。

即席で用意されたと思われるホワイトボードには3枚のA4サイズの紙とところどころに文字が書かれている。

明季は不意に宙で手を握る。

嫌な音はその手からした。

その手を広げてみると中からカナブンの潰れた死骸が姿を現す。

「…明季、それではルックスが良くてもモテないぞ」

「虫は苦手なんです。明かりを求めて飛ばれると背筋が凍りつきます」

「そんな奴が手で虫を握り潰すわけないだろう。もつといい嘘をつけ」

「これでもカメモムシは殺せませんよ」

「臭くなかったら？」

「いけます」

今そんな話をしていたわけではないのだが思わず頭を抱えてため息をつく。こいつの母親は娘にどんな教育をしたのだろう。

蚊はいい、ハエもまだ強い女性として許容範囲に入れよう。

だがカナブンで…。

甲虫を握り潰すのはどうかしている。

明季はにぎり潰した際に飛び出た体液をそこらの紙でふき取る。

「司令、話を戻したいのですが」

「…ああ、そうだったな」

「明後日というのはいくらなんでも早すぎませんか？」

目上の人間に向かって珍しく怪訝な顔をする明季。

もともと命令に口を出すことも滅多にしないのだが今回は話が違う。

「急ぎたい気持ちはわかります。今すぐにも殺されるかもしれないという危険は孕んでいますか…」

「勿論それなりの特別待遇はとる。1日あれば体力も回復するだろう」

「体力の問題ではありません。今回の作戦は今までとはあらゆる違いがあります。時間をいいたきたいのですが」

明季が改めてホワイトボードに目を通す。

内容は砕いていってしまえば正影の救出作戦。

明季といえども救出をしてこいなんて経験回数は多くない。

そして知らない施設への進入。

道を知るか知らないかで時間は大幅に変わってくる。

そして一番抵抗を覚えたのが相手が人だということ。

どうして正影の存在を知られたのかは分からないがロスと分かっているのならある意味納得はいく。

だが実力行使で奪い合うのは少しばかり予想外だった。

だが、ばれれば起きる可能性はあると予想はできていた。

ラグフィートがどういいうわけか手放そうとしなかったから。

だが早すぎる。

「あいつにあまり時間を与えたくない。癪な話だが頭だけはいいいからな」

「……これから行く場所はアルツェでもない、非公式の場所なんですよね？それを理解したうえでもこの日程で行きますか？」

「決定事項だ」

明季はそれを聞くと頷いた。

少し間があったことからそれでもまだ何か言いたげだったようだが意味がないこと

を理解したのだろう。

歩いて部屋を出ていく。

扉を開けると焦げ臭いにおいは勿論のこと、人の声の他に雨の音がした。

気づけるはずだったが2人はその時はじめて気づいた。

雨が降っているにもかかわらずどこかから腐敗臭もした。

人の声が煩わしくするよりははずっとましだと思った明季だったが腐敗臭があつてはやはり煩いほうかもしれません。

人の死を間際に感じるより、生を感じたいというのは当たり前のことである。

明季は濡れるのもお構いなしに、部屋を出て歩きでその場を離れる。

こんな時に降らなくてもいいだろうといいたくなるくらいに雨脚は強い。

明季はすぐにびしょ濡れになった。

扉を閉めるそのわずかな時間の間でもラグフィットですらそれは認知できた。

このまま恭二に内容を伝えようかと思っていたが、濡れたままでは部下に対してとはいえ失礼がある。

雨によつて濡れた服が体に張り付き女性らしい体つきが露わになっている。

途中、幾人かが明季を見てしばらく止まっていたがお構いなし。

それに関しては羞恥心のかけらもないようだった。

自室に向かつて歩みを進める。

嫌な雨だと思つた。

自分の考えを変えなければならなくなつた原因だから。

まるで他を巻き込むのはよくないとも諭すかのような。

いつもならそんな考えには思い至らなかつただろうが、美姫の件で人の命に少しばかり敏感になつてゐる。

「明季さん？」

不意に声をかけられ足を止める。

後ろには美嘉が傘を差しながら立つていた。

いや、不意にというのは少し語弊がある。

「話があるのならば部屋を出た時に声をかけてほしかったわ。すでにずぶ濡れよ」

「…気づいていたのなら声かけてほしかったです」

「本当に？」

「…分かりません」

「いりますか？と遠慮がちに明季に傘を差しだす。

すでに濡れた状態ではあつたが足りないよりはましだろう。

美嘉から傘を受け取るとそれをさした。

明季に汚いものを上げられないといわんばかりに綺麗な傘である。新品同様といつても過言ではないだろう。

「で、何の用かしら?」

「もうわかつているのでは?」

「貴女の口から直接聞きたい」

「……………ま——」

「あなたには関係ないわ」

美嘉が口を開きかけたところで明季はそれを遮った。

それはないでしょと言わんばかりに不満げな顔を浮かべる美嘉。

「ごめんなさいね、意地悪をしたくなったの」

「私は何も言い返せませんよ、立場的に」

「正影と関わり始めてからかしら? いろいろ変わったのよ、特に口調かしら」

「そういえば…その…」

「わかつてる。もともと女性らしい口調はほとんど使わなかったんだけど、恋ってやつかしらね?」

「正影さんのことが好きなんですか?」

「恭二には否定されてしまったけど」

静かに笑う明季。

以前はこんな笑いでも美嘉は見たことがなかった。

初めて見たときは不気味極まりなかったが今ではそれも普通に思えた。

「で、話は戻るけど今回の作戦は貴女たちには関係ない」

「…嬉々も、ですか？」

「当然。むしろ避けるべきだ」

口調がいつの間にか強くなっていた。

明季はそれに気づいていないが美嘉はそれに思わず縮こまりたくなる。

傘に打ち付ける雨が強くなったような気がした。

「でも、嬉々の気持ちもくみ取ってもらえませんか？」

「…悪いけど私は人の気持ちを理解するのが苦手なの」

「でもいつも…」

「考えと気持ちは違うわ。全然わからないってわけじゃないから今の嬉々くらいならわかるけど。でも作戦のリーダーとして私は不安要素はできる限り取り除く必要がある」

「明季さんも嬉々が何をしでかすかわからないと？」

「嬉々は正影を兄妹以上の存在だと思っている。それこそ恋愛感情も持ち合わせてるんじゃない？つて思うくらいに。愛っていう不確定要素があるの」



「それと嬉々を行かせたくないと、どんな関係が？」

明季の視線が空を仰いだ。

今は雨雲が空を支配していて青空なんて見当たらない。

「初めてプロデーターが出現して都市が壊滅した時のことは覚えてる？」

「…鮮明ではありませんが」

「その時人はただ逃げ惑った。対抗する手段がなかったから仕方ないと思う。その時私はおかしな光景を目にしたの。その場にとどまり何かにはすがっている人をね」

「……………」

「私も記憶は鮮明じゃない。でも人が人のためにそこにとどまっていたのを覚えてる。助けられるわけがないのにとどまるの。私にはそれが理解できない、理解できないものを作戦に加えるわけにはいかない」

「それが美姫さんでも…ですか？」

明季の足が止まった。

言ってからしまったと思った美嘉だったがすでに遅い。

少しばかり感情に任せて口走ってしまった。

しかし、明季は美嘉に顔を向けることなくただ俯いた。

「すみません」

「感心しないな、死人を話し合いに出すのは。…でも、おそらく見捨てるだろうな。美姫でも。残っていても共倒れだ」

足を再び進める。

雨脚が強い中、明季の歩行速度は速くなっていた。

それ以降はなにをいつていいのかもわからず美嘉、明季ともにただ黙っていた。

美嘉は他に明季を動かす言葉が見つからず。

明季は何かを思いつめながら。

やがて明季の足取りが止まった。

一つの建物を目の前にしており、そこで明季は傘をたたむ。

相変わらずの雨脚だったが明季は雨の中建物に入る前から傘をたたんでいたため再

び明季に雨が打ち付ける。

「じゃ、私はいいぞ」

ありがと、と付け加えると傘の取っ手の部分を差し出す。

それを受け取る美嘉。

明季は扉を開けるとどういいうわけか止まった。

「…」

明季に傘をささそうか迷い始めた時、

「美嘉、1ついいかしら？」

ベッドの上。

いつもなら隣にもう1つベッドがあつて最も安心できる対象が存在しているはずだ。だが、隣にはその存在はおろかベッドすらない。

「ハ。ハ…」

外では気丈にふるまっていたが、いざ1人となるとすっかり憔悴してしまった穂香。腕時計に目を向ける。

17:52と表示されていた。

思えば1人になるのはこれが初めてだったかもしれない。

記憶があるころからレアや義兄弟がいた。

1人も欠けなかったわけではない。

正影が来る前にも1人死んでいる。

それでも1人にはならなかった。

嬉々同様、穂香も黙って待つのは嫌だった。

真理奈の力はすでに失ってしまったが正影とのつながりは絶たれていない。

ハンドガンを創り出して掌の上で回す。

嬉々がいつだが見せてくれた銃の凶鑑的な物の中でも目に留まったものだ。

どれが作りたいたいと意識できるわけではない。

ただ酷似していたのだ。

名前は……

「ベレッタ96……」

後には英語が続いていたが穂香は正直覚える気になれなかった。

「BS、SE、A……」

やっぱり思い出そうにも思い出せそうにない。

考えることをやめ弾倉を取り出す。

本来限界があるはずの弾倉の数だがどういいうわけかなくならない。

それ以上に今でも意識すれば現れる銃が未だにありえないとしか言いようがない。

部品を渡されても作ることではない。

パーツの名前も知らない。

銃について知っているのはその名前（うる覚え）、引き金を引けば弾が発射されることくらい。

力はある、正影を助けるための力は。

でも自分でも正影に何かあつたら：何をしでかすかわからない。

呼ばれなくても仕方ないだろう。

レアの時、あれだけ憔悴した自分を知っているが故に諦めがついた。

もしその経験がなければ駄々をこねても行こうとしただろう。

銃を消して天井を見る。

寝ようか考え始めたその時

「穂香ちゃんいる？」

扉のノック同時に美嘉の声がした。

「開いてるよ」

返事をするのと美嘉が入ってきた。

穂香はこの時外が雨だったことに初めて気づいた。

美嘉は傘を2つもっていた。

2つとも濡れているところから誰かが使ったようだが穂香が知る由はない。

「どこか行つてたの?」

「ちよつとね」

2人がいるにはちよつと狭い部屋だった。

美嘉は穂香の隣の部屋に今は在住している。

ただ、美嘉は他に4、5人の人と一緒に部屋を共有しており部屋も広い。

穂香が1人なのはロスが仲介者メテイヤートルだから。

ちよつとした特別扱いである。

「それで、どうしたの?」

「えーつと…その前に1つ」

「?」

「穂香ちゃんは、正影さんを助けない?」

「……………」

穂香は黙つたまま俯いてしまった。

予想していた返事が来なかったからか、美嘉は出鼻をくじかれたかのようにたじろいだ。

「私、足手まといになるかもしれないから」

「…穂香ちゃんは十分な力を持つてるわよ。足手まといなんて——」

「私にとってパパは親以上の存在なの。想いはそこらへんの恋人たち以上」  
慌てて、パパに恋愛感情を持つてるわけじゃないよ。と付け加える。

「もし、パパに何かあつたらどうなるのかわかんない」

「……………」

「大事なものはパパだけじゃないもん。美嘉さんや嬉々さんだって大事。みんなを危険な目には遭わせたくないよ」

「…穂香ちゃん!」

美嘉は突然抱き着くと穂香に頬ずりをする。

突然に事に困惑した穂香だが嫌な気はしなかった。

10秒ほど美嘉は黙ったまま頬ずりを繰り返した。

「そんなに難しいことなんて考えなくていいの!」

「えっ?」

「穂香ちゃんはまだ子供なんだから、難しいことは大人に任せてどうしたいか考えるの!まだわがまま言ってもいい年なんだから」

「でも…」

「何か不手際が起きたら大人が何とかするから。責任は全部取ってくれる。それくらいしてもらわなきゃ私たちと釣り合わないわよ。こっちは命懸けてるんだから」

「責任の問題じゃないよ。私のせいで誰かに——」

「穂香ちゃん」

穂香の肩を優しく抱いた。

「頼つてよ。私を、嬉々を、蓮を、他の人を。穂香ちゃんよりは私たちは大人よ？昔がどうだったかは私は知らないけど今は穂香ちゃんは子供。子供らしくわがまま言つてよ」

「……………」

「ほら」

「……………」

「ん？」

「パパを助けたい。助けに行きたい！」

「よく言えました」

大きな声で確かに主張した。

押し込んでいた本音を一気に出したかのように。

美嘉は笑顔でそれに応えた。

「それじゃあ、本音を言ってくれた穂香ちゃんに私から1つプレゼント」

「？」

「正影さんを助けに行くためのチケットよ」



## 各々

静かな朝方。

日が昇り始めたその時間は肌寒い空気が漂っていた。

本来、アルツェ内なら肌寒いなんて感じることもなかっただろう。

外での活動に少しの違和感と大きな爽快感を持ちながら明季は指示を出す。

「…違う、それは1く3に置き。それはそのままだ」

肌寒いこの空気も悪くないと明季の気分はいつもより高ぶっていた。

しかし、冷静ではあつた。

恭二と鈴、それに藍と梓。

その他2人という少数での荷物の積み込みとなっている。

藍と梓の顔はいまだに暗いが梓は重傷だった。

藍は「いつまでも泣いてられない」と強い一面を見せたが、梓は目がどこか遠くを見

ていた。

2人はもしもの時、ヘリからの援護射撃のみで乗り込むことはない。

その他は戦闘員ではなく、今だけ荷物を運んでいるにすぎない一般人。

それですらごく少数なのだ。

「隊長、今回は俺たちだけなのでしょうか？」

「もう一人いるわ」

時計を確認して、もう来るんじゃないかしらと呟く。

何かを引きずるような音がした。

それなりのスピード。

音のする方を振り向いた恭二の視界には美嘉が映っていた。

彼女特有の大きな斧は地面に引きずられ地面に線を残している。

明季の元に来るとバツが悪そうに縮こまる。

「…もしかして、集合時間間違えてましたか？」

「いえ、私たちがちよつと早く来てただけよ」

「ちよつと…」

美嘉の頭の中では荷物の運搬はプロトがするものではない。

だが現状を見る限りしているのだろう。

そういうことならもつと早く呼んでほしかったと反論したいところだが、その言葉は

飲み込むことにした。

美嘉も急いで手伝おうかと思ったが荷物は残り少ない。

もともと遠出とはいえ泊まってくるつもりはない。

へりの中では藍と梓が作業をしている。

美嘉は藍と梓の元に近寄った。

藍はそれに気づき笑顔を見せた。

「美嘉も行くの？」

「ええ、私としてもあの人には生きていてもらわないと困るしね」

「死んでもメリットありそうだけど？」

「許可ももらわず死なれたら一生視線を感じそうで」

「ごめん、私には分からない」

美嘉は横目で梓を見る。

おとなしいほうだとは思っていたがすっかり無口になってしまった。

「梓は…まだ？」

「ええ。シヨックが大きすぎるみたいで」

「……心配ね」

「大丈夫、梓ならきつと…」

これ以上この話題に触れても得はないと思い美嘉はあたりを見渡す。

話題を探したのだから見張るべき点があった。

それは……………

「ねえ、このへり内装広くない？」

「なにが？」

「乗ろうと思えば20人くらい乗れそうなくらい大きいんだけど」

へりの両端に長椅子が用意されている。

それぞれ10人ずつぐらいなら余裕をもつて座ることができるぐらいのスペースがある。

単純な構造だがその分、へりは大型になっている。

もう一回り位小さいのもあるはずなのに。

「さっきまでは私も分からなかったんだけど今分かったわ」

「？」

「分かっているくせに」

藍は荷物の運搬が終了したのか明季を呼ぶ。

少しの会話の後、全員はへりに乗り込んだ。

へりの羽が回り始め、周りに風が吹き荒れる。

入口近くで美嘉は立ち、中に入ろうとしない。

「美嘉、どうした。早く乗れ」

「あの…あと少し待ってもらえませんか？」

「……………何を言ってる？」

羽の音で美嘉の耳にはよく届かなかつたが、口だけで明季の言葉が理解できる。

威圧のある静かな言葉に足がへりの中に向きそうになるが必死にとどまる。

美嘉としてはこれ耐えられたら、怖いものなんてないんじゃないかと思えるレベル。

余談だが、美嘉は幽霊は会えるものなら会いたいと思つているので彼女が怖いと思うものは、権力を持つている人間ぐらいだ。

「私は貴方に権利は上げたつもりだけどそれは義務ではない。行くのが嫌になつたのなら——」

「違います！そうじゃなくて…、その…」

「——ませーん！」

近くの明季の声はあまりよく聞こえなかつたのに確かに美嘉の耳にその声は届いた。

美嘉の見据えるその先には2人。

女性と少女が走っていた。

へりが飛び去って行く。

それを少し離れたところで眺めていた蓮。

本来ならこんな時間に起きていることはおろか、へりが飛び立つことすら知らない。

だが、嬉々は口が少しだけ軽かった。

暗い面影を残していた嬉々が、突然元に戻っていた。

訳を聞くと詳しいことは言ってくれなかったが、何をするのかはなんとなくわかった。

ただ、自棄になっていた場合を考えて少しの間嬉々を張っていたのだ。

結局自棄になったわけではなく、手が見つかったんだなと胸をなでおろすにとどまつた。

「大丈夫だよお、まだチャンスはあるしい」

肩に手を置かれ慰めの言葉をかけられる。

心愛と太郎がいつの間にか後ろに立っていた。

「なんだよ、ストーカーか？」

「それは、ツツコミ待ちととらえていいのかい？」

いわれてみればこれでは自分もストーカーだなと蓮は何も言い返せなくなつた。

「で、チャンスつてどういう意味だ？」

「女性を押しに弱いからあ、まだまだこれからつて意味」

「俺はフラれたことになつてるのか。あといつ俺が嬉々を好きだといつたんだよ？」

「見ていれば分かるさ。顔にも行動にも嬉々に対するラブが出ているからね」

「……なわけあるか」

「それに僕のような選ばれ——」

ああ、そういうえばこういう性格だったなど久しぶりに聞いて思い出した。

「まあ、そういうことだから諦めずに頑張つてねえ」

「……とりあえずお前らの気持ちだけは受け取つとく」

蓮は再びヘリを見る。

すでに遠くまで行つてしまい、「豆粒ほどの大きさにしか見えない。

どこに向かうかは知らない。

できれば一緒に行きたかつたという気持ちもあるが、そこは嬉々の判断にゆだねた。

それに目的は正影の奪還。

そういう作戦があるらしいことは少し耳にしていたが人数は少ない状態でいくとも聞いていた。

嬉々が入れたこと自体奇跡としか言いようがない。

誰かが手を貸してくれたのだろうが、それは蓮の知るところではなかった。足を動かし、その場を離れる。

「もういいの？」

「今日もまた仕事があるしな。あんまりダラダラしてると遅れちまう」

「まだ早いと思うけどお？」

「やることがやることだからな。オスをぶつ潰すだけならギリギリまで寝ているよ」

「…それもそうだねえ」

肩を落とす心愛。

弁舌をしていた太郎もこれには口を閉ざした。

命を張らなくてもいい仕事とはいえ、これは精神的に来るものがある。

「じゃあな、心愛はまた後で。太郎は頑張れよ」

蓮はとくに手を振ることもなく2人に別れを告げた。

そうやって後ろ振り向いた時、遠くに何かが動くような影があった。

確認できるところから見て人であるのは間違いないだろうがそれしかわからない。

(黙ってられないのは自分たちだけじゃないのか…)

そう思い、それについて考えることは特になかった。



腹に響く羽の音。

はじめこそ嫌であつたが今ではすでに慣れ、眠くなる者も少くはない。

むしろ彼らにとつて車のほうが乗る機会が少なく、嫌な緊張が走つてしまう。

美嘉の隣で穂香が寝ている。

子供だったからか適応能力が高く、ヘリの高さにもすっかり慣れた。

美嘉は高鳴る気持ちを周りに悟られぬよう平然を装っている。

(……思わぬ収穫ね)

正影を助けに行くのだからこれくらい許されるだろうと、正影は見えていないのだから別にいいだろうと言ひ聞かせ頭をなでる。

ただ、美嘉の隣で嬉々は確かにその感情の変化に気づいていた。

ただ今回のことがあるので目をつむろうと思う。

別に正影に告げようが告げまいが結果は同じだろうと思つている。

明季はただ黙って時を待っている。

人となりあわなくてもいいということをただ祈っている。

嬉々のことは特に気にしていない。

恭二にはらしくないと言われたが理由を答えることはできなかった。

恭二は明季と同じだった。

人との戦闘に躊躇いはあるものの、聞いていた話が本当ならば仕掛けてきたのは相手だ。

さらにそれが任務となれば、やることは変わらないか。と踏ん切りをつけている。

ただ、メンバーに一番懸念を示しているのは彼だった。

鈴、嬉々、穂香。

突入メンバーの半数以上が危険分子である。

人数が少ないことも少し心配ではあったが、これでは逆にいないほうがましだった。なんてことにならないことを祈るばかりだ。

鈴はポツケに手を突っ込んでいる。

中には少し小さめの手榴弾が入っていた。

中身はからでピンを外しても爆発することはない。

表に出して大事に持つことなど周りの目が気になってとてもできない。

仇討ち、今回はそれが目的でもある。

勿論任務の上で来ているため、正影の安否の確認が最優先。

だが、もしも相手が見つかった時は……

梓と藍は2人、身を寄せ合っている。

残った1つのアルマ。

今は藍が使っている。

もともと3人のアルマは同じものであり、3人のうち誰が使ってもフィットする。

だから梓はヘリに取り付けた量産型の機関銃を使用。

技量からすれば問題ないだろうが精神的な面に心配が残る。

『明季さん、聞こえますか?』

耳元の通信機から声がする。

「ああ、問題ない」

『通信環境に今は異常が見られません。ですが目的地到着後はどうなるかわかりません、明季さんの判断に委ねられるのでお願いします』

「……分かつている」

『予定通りなら目的地まであと5分切っています。準備、お願いします』

その言葉が最後にブツツと分かりやすく回線が切れた音がした。

妨害があったわけではない。

だが、こうやって分かりやすい音がするのも珍しいものだった。

「目的地到着まで5分切った。それぞれ準備をしろ」

「は、い」

明季のその声に反応したのか、穂香が目をこすりながら起き上がる。

その様子からはとても殺し合いに行くとは思えない。

美嘉が名残惜しそうに少し手を伸ばしたが視線を感じたのでやめた。

『嬉々さん、聞こえますか？』

アルマを強く握りしめていた嬉々の耳に声が入る。

「しっかりと聞こえてるわ、リム」

『作戦に参加するとは驚きましたが、大丈夫ですか？』

「大丈夫じゃなきゃここにいないわよ」

『ならよかった。お得意様の正影さんをお願いしますね』

「言われなくても。正兄は必ず…！」

## 廃船

「……………クリア」

「迷ってる暇はないわ。さっさと進む」

広々とした空間……とはいいたい。

中は蒸し暑く、埃や砂が舞い、ゴーグルがあればつけていたい。

明季たちは今、元豪華客船の中にいる。

オスの大量発生地帯の目印の1つとなっている謎の船。

もつと設備があれば、管理体制が整っていればそれが何なのか、もともとどこを航海していたものなのか分かるはずなのだが、人々にそんな余裕はない。

「この建物って水の上に浮かべるのよね……信じられない」

「嬉々、建物じゃなくて乗り物。あと浮かぶって言ってもこの船を水にただ浮かべたって今じゃ沈没するだけよ」

「船ってなーに？」

抜けたこの雰囲気は明季はため息をつく。

それでも敵が現れば変わってくれるのは知っているから文句はないのだが力が抜

けるというか何とか…。

そもそもさつき、ヘリに乗っていたときはあんなにも緊張していた雰囲気だったのにこの変わりようは何だろうか。

「隊長、こつちもめばしいものはありませんでしたわ」

「…なら次に移動よ。こうも広いと搜索するのも一苦労ね…」

まだ3分の1も搜索していないのかと、たまたま見つけた大まかな地図を見て頭を悩ます明季。

正直明季もこんなところに正影がとらわれているのかと疑問に思っている。

一見見た感じ、ただの廃墟と何ら変わりなくとても人が住めるような環境ではない。

ただ、この場所を捨てきれない理由もある。

なぜ、この船だけオスは手を出していないのか。

オスは基本肉食だ。

というより雑食だ。

確かに好んで建物を食べるという話は聞いたことないが見たところこの船はオスに指一本触れられていないように感じる。

大量発生地帯にあつたにもかかわらず、壊されないというのは話ができすぎているよ  
うな気がしないでもない。

何か、オスを寄せ付けないようなバリア的なものでも張っているのではないだろうか？

「隊長、その…本当にここにいるのでしょうか？」

耐え切れなくなった恭二が疑問を投げかける。

「司令からの指示だ。間違いないはず」

「ですが、船の中には生物一匹見当たらないどころか地面や壁、すべてが砂に覆われている始末。人が長年立ち回っていないのは明らかです」

「……………別れて探す。多少危険は承知だが時間が惜しいのも事実」

恭二の話を珍しく無視して指示を出す明季。

恭二もその行動に驚いたが肩を落としてそれで終わる。

「嬉々は鈴と。美嘉は穂香と、恭二は私ときなさい」

「え、穂香ちゃんど？」

「何か問題でも？」

「いいえ！オールグリーンであります、隊長！」

「???そう？」

美嘉が穂香を異常に気に入っているのは知っているが、明季はそれでも気にするほどではないだろうと捉えている。

「私と恭二はこのまま1階、鈴たちは2階、美嘉たちは3階をお願い」

「地図がないんですか……?」

「ほしければあげるけどこれあっても意味ないと思うぞ?」

明季のところどころ戻りつつある口調に戸惑いながらも嬉々は地図を受け取る。

しかし、内容は明季の言う通りあってもなくても意味ない物。

個室一つ一つのこととは書かれてなく、「ここら辺に○がありまっせ」くらいにしか見ることができない。

誰かが手書きでサラサラと書いたものようだが大雑把にもほどがある。

初めての人がこれを渡されても、船のことを知るのは困難を極めるだろう。

それ以前に、古い紙はすでに風化しはじめておりところどころ消えているところもある。

いったい何の目的で書いたのだろうか。

だが、地図には変わりないからと嬉々は持つておくことにした。

「嬉々さん、早く2階へ行きますわよ」

「あ、はい!」

鈴の呼びかけに嬉々が答え、あとをついていく。

穂香を美嘉に預けるのは後ろ髪を引かれるようで不安になる。



美嘉はそれに気づいたのかいい笑顔を見せながら、別れ際に親指を立てた。

「……………」

ただ時だけが過ぎていく。

正影は暇を持て余していた。

未だに寝かせられたまま、動きは一切ない。

薬物か？解剖か？と身構えていたものの、拍子抜けといふかなんというか…。

別に正影はそういうことをされたいわけではない。

だが、これではあまりに暇なのだ。

未だに本調子ではないものの、ただ歩くだけなら支障は出ないだろうし戦うことだつてできそうである。

腕に力を入れてみる。

つながれているため、動かすずらいのは確かだが障害は壊せばいい。

刀を出現させるとやすりでも使うかのように慎重に削り始める。

手の向きの関係で長い時間やっていると思うのだが、流石にここで待つのも飽きた。

カメラが設置されているのは当り前。

誰か来てくれれば逆に楽かもしれないという希望をもって作業を続ける。

しかし、3分ほどで片手のつなぎが切れ後の部分は簡単に外せてしまった。

(……流石になにか動きがないと不気味だな)

扉の前に来るとスイッチらしきものに手を添える。

プシュツ、と音を立て扉が開いた。

予想外だったのは出てすぐ、門番らしき2人が立っていたことだ。

突然出てきた正影に目を大きく見開く。

慌てて銃を構えようとするが正影のほう動きが速かった。

1人の頭を刀の柄で殴り気絶させる。

残ったもう一人は慌てていたのか、味方を近くに置きながらも射撃を始めた。

慌てた正影は気絶させた人を盾に射撃を防ぐと、それを相手に向かって投げつける。

人が全体重をかけるとするのは体格差がない限りとても危険な行為だ。

それもただ倒れかかるだけではなく、投げつけると言う行幸も含まれている。強い衝撃が敵を戦闘不能にさせるには十分だった。

(逃がす気はなかった、ならなぜ…?)

伸びている敵の服を探る。

何かめぼしいものはあるかと見てみたがカードキーぐらいだった。

随分と進んでいる施設内にいるんだなと頭をかく。

一応のためとアサルトライフルを手に取り調子を確認する。

使い方は問題ない。

銃声を鳴らした以上、ここにあまり長居することはできない。

正影は通路を進み始めた。

「嬉々さん、あにかありましたか？」

「…いえ、これといったものはなにも」

鈴と嬉々が船の中をくまなく探し回っている。

一応、役割を分担したとはいえそれでも広いことに変わりはない。

「あら…この扉」

「？」

「錆びてますわね、力ずくでいけば壊せないこともなさそうですけど…」

「なら壊してしまえばいいじゃないですか」

鈴が扉の前からどき、嬉々にそれを見せる。

扉には小さな窓がついていた。

中の様子をうかがうことができる。

中、というより外の様子だ。

外の風が少し強いのか、砂が吹き荒れあまり外に出たいとは思わない。

「船首甲板…つてやつでしようか？」

「ですわね。せっかく内部があるのに外に何か置くとは私には思えないですわ。それに

…」

「でも、なにか箱みたいなのがいくつか見当たりますよ？」

嬉々が指したのはコンテナのことだ。

吹きさらしの砂を浴び続けたせいか、ところどころこちらもガタが来ているのがうかがえる。

「…行くしかないですわね」

ため息をつくとき、鈴は布を口の周りにまき槍を構える。

「……………ふっ！」

鈴はその刃先を扉に向かって叩き付ける。

ベコンと何かがへこむような音と一緒に扉が外れ、砂が室内まで入ってきた。

鈴は美嘉に右を探そう、ジェスチャーで指示をする。

吹き荒れる砂のなか、目を開けるのはつらい。

もしものためにと暗視スコープは持ってきていたが、ただのゴーグルはない。

風向きを考え、コンテナを盾にしながら広い甲板を歩き回る。

「……………」

コンテナの入り口を見つけた嬉々々。

中を覗いてみるがそこには何にもない。

錆びた鉄のようなにおいが籠っていて、長い間その場にとどまるのははばかられた。

3分ほど探したところでふと思うことがあった。

「鈴さん、1ついいですか？」

「？」

たまたま視界に入った鈴に話しかける。

「この船？つてもともとと娯楽のための施設なんですよね？」

「そのはずですよ。最も、私も見るの初めてですが」

「ならなんでしようね、この箱の意味は？」

「箱の意味……？」

「1階には確かにビリヤードや、数字が書かれた板だつたりゲームらしきものはありました。その点を見れば娯楽かもしれないですが、こんな箱じゃなくてこの場所にも娯楽の施設を置くこと位できると思うんです」

「……………」

言われてみればと考え込む鈴。

この場所（甲板）もかなりの広さがある。

娯楽のために集められた人は、外を味わえるこのスペースに障害物を並べられて嫌な気分にはならないだろうか？

しかし、その時代をほとんど知らない鈴にとってそれ以上考えるには無理があった。

「一応頭の隅には置いておきますわ。今は目の前のことに集中してくださいな」

「はい……」

再びコンテナの調査を始めたが、どれも同じ。

中にあるのは錆びた臭いと砂。

「……………」

地面にびつしりと張られた砂をおもむろに払う。

どかした砂の下から出てきたのはまたコンテナだった。

「……？」

嬉々はふと疑問を持った。

この下のスペースに空きがあっただろうか。

この真下は確か大きな広間になっていて、凹凸のある空間が広がっていた。

カウンターや人が寝っ転がるためにあるようないくつもの椅子。

そしてどこにつながっているのかはわからないが網で仕切られた通気口のようなもの。

それらもろもろが場所を取っているはずなのだ。

地図もらっていたのを思い出し、それを開く。

少し破れてしまったが見たい部分はしっかり残っている。

「……………あれ？」

大雑把で消えかけているインクで書かれた船内図。

そこに書かれた船内図にはあるはずの部屋がなかった。

さっきの広大な遊技場。

あれだけのものにもかかわらず、船内図には何も記されていない。

書き忘れとは考えにくい大ききの部屋である以上、嬉々の疑問が膨らむばかりだった。

そこでもう一つ思うことがあった。

今入っている箱が下にある。

ならその箱の中にはなにか入っているのだろうか。

この箱の床かと思ったが違う。

割れ目から確かに下にも同じものが見えるのだ。

割れ目に手を入れ、力いっぱい……引く必要はなかった。

そこそここの力を入れるだけで、面白いようにべりべりと剥けていく。

ある程度下のが見えるようになると刀を抜く。

新品とまではいかないがやけに綺麗に見えるのは気のせいだろうか。

今度は力いっぱい刀を突きさす。

少しずつ、刀を動かしのこぎりの要領で切り始めた。



「……」

中に何か見える。

確かに物が入っている。

袋だろうか？

何か物が見えるとそれが何なのか早く知りたくなる。

嬉々はいっぱい刀を引き、壁をはがそうとする。

しかし、それがまづかった。

いくら綺麗とはいえ、いつから放置されてたかわからないもの。

いともたやすく刀が通り、余計に切りすぎてしまった。

ベコンツ、と何かがへこむような音がしたかと思うと嬉々の体が傾く。

無駄に切りすぎたせいで嬉々の体重を支えられなくなったのだ。

「嘘で……しょ!？」

そのまま下のコンテナの中に落ちる。

何か袋が山積みになっているため、その上に落ちて終わりなはずだった。

白い砂煙が上がり、嬉々の周りを舞う。

「何よ!？」

再び嬉々の体が傾く。

？を浮かべていると今度は袋と一緒にさらに下へと落とされていく。  
鈴が、嬉々の異変に気付いたのはそれから2分ほどしたあとだった。